「志」つなぎ 伝える
二百年

山口大学創基200周年記念誌

200th Anniversary Yamaguchi University

志
1815年→1949年

繋
1949年→2014年

伝
2014年→

江戸時代の「志」今も。

200th
Anniversary
Yamaguchi University

山口大学の前身は、文化12（1815）年、江戸時代の萩藩士・上田鳳陽によって創設された私塾「山口講堂」までさかのぼる。山口に学問の「灯り」をともそうとの想いから設立された山口講堂は、勉学はもちろん、武芸の稽古場としても整備され、「山口講習堂」と改称して文武の総合学舎として発展していった。その後、時勢に伴う校名の変遷を経ながら歴史を刻んで山口大学となり、平成27（2015）年、創基200周年を迎える。今ここに、先人たちが積み重ねた歴史の数々を振り返る。

発刊にあたって

国立大学法人 山口大学

学長

岡　　正 朗

山口大学は、文化12（1815）年に萩藩士・上田鳳陽（ほうよう）先生によって創設された私塾「山口講堂」を源流とし、平成27（2015）年には創基200周年を迎えます。国立大学法人の中では3番目に古い歴史を持ち、現在では1万人を超える学生を育成する大学へと進化いたしました。

山口講堂は約2カ月で作られ、10mの間口と7mあまりの奥行きの小さな建物ですが、「講堂」と名付けられたのは鳳陽先生の意気込みが感じられます。現在の山口市公設市場跡地にあったことから、同場所が公園になる機会に記念碑を平成26年3月に設置しました。

さて、200年の経緯は本誌並びにホームページで知ることができますし、冊子も作成されています。この200年を振り返ってみますと、明治維新を成し遂げた激動の時代にも山口講堂（山口明倫館）は歴然と存在し、第1次世界大戦、第2次世界大戦、戦後復興から経済隆盛期、そして世界に類を見ない少子高齢化社会を迎える現在に至るまで、山口大学はその形を変えつつ、人材育成及び社会貢献の役割を果たしてきました。まさに、江戸、明治、大正、昭和、平成の5つの時代を駆け抜けてきたのです。

「志 つなぎ（繋）伝える200年」のキャッチコピーは、山口大学のこれまでの歴史だけではなく、未来を見据えたものです。この記念誌は、第1部「志」、第2部「繋」、第3部「伝」の3部構成となっています。これからの真っ白なキャンパスにどの様な歴史が刻まれるのでしょうか。今は迅速な大学改革が求められており、グローバル化、イノベーション、ガバナンス強化などまさに「大学維新」と言える時代となりました。折しもこの時期に山口大学の歴史を振り返り、未来を見つめ直す機会が巡ってきました。「維新のDNA」が呼び起こされ、果敢に挑戦する姿が思い浮かびます。平成27年度には新学部「国際総合科学部」が開設される予定で、これに連鎖して学部改革、大学院改革、組織改革が行われます。「地域と共に、時代と共に、そして世界へ」が目指す方向であり、10年後には留学生の数が3倍に増加し、創基300年は日本人と外国人が半々となるかもしれません。間違いないことは、未来も様々な時代を走り抜け、人材育成及び社会貢献の役割を果たして行くことであり、さらに輝く山口大学として発展することを願っています。

最後になりましたが、本記念誌の発行に当たり、編集委員の皆様を始め、ご協力いただきました学生、教職員、退職教職員、地域の皆様に心より感謝申し上げます。

山口大学
YAMAGUCHI UNIVERSITY

目次

発刊にあたって　国立大学法人 山口大学長　岡 正朗 …… 4

第1部 志 …… 9

1 わが青春のケイセン講堂　古川 薫 …… 10
2 創基200周年、「志」をたどる　～山口講堂から新制大学まで …… 16
3 旧制高校時代の学生生活 …… 62
4 ゆかりの地をたずねて …… 70
5 歴代学長座談会「山口大学の『志』について語り合う」 …… 72

第2部 繋 …… 81

1 写真でつづる山口大学の軌跡 …… 83
　1 草創期(1949-1965) …… 84
　2 統合移転期(1966-1973) …… 92
　3 整備・拡充期(1974-1988) …… 102
　4 変革期(1989-2003) …… 110
　5 飛躍期(2004-2014) …… 122
2 学部・大学院等の発展 …… 135
　1 新制大学以降の学部のあゆみ …… 136
　　1-1 文理学部 …… 136
　　1-2 教養部 …… 137
　　1-3 工業短期大学部 …… 138
　　1-4 医療技術短期大学部 …… 139
　2 各学部等の発展 …… 141
　　2-1 人文学部 …… 141
　　2-2 教育学部 …… 144
　　2-3 経済学部 …… 147
　　2-4 理学部 …… 150
　　2-5-1 医学部 …… 153
　　2-5-2 医学部附属病院 …… 157
　　2-6 工学部 …… 161
　　2-7 農学部 …… 164
　　2-8 共同獣医学部 …… 167
　3 大学院の発展 …… 169
　　3-1 人文科学研究科 …… 169
　　3-2 教育学研究科 …… 170
　　3-3 経済学研究科 …… 171
　　3-4 医学系研究科 …… 172
　　3-5 理工学研究科 …… 175
　　3-6 農学研究科 …… 177
　　3-7 東アジア研究科 …… 178

3-8 技術経営研究科 …… 181
3-9 連合獣医学研究科 …… 183
3-10 連合農学研究科 …… 185
4 全学教育研究施設等 …… 186
4-1 大学教育機構 …… 186
4-2 大学研究推進機構 …… 190
4-3 大学情報機構 …… 193
4-4 時間学研究所 …… 196
4-5 大学評価室 …… 197
4-6 地域連携推進センター …… 198
3 同窓会のあゆみ …… 199
1 鴻文会(人文学部) …… 200
2 教育学部同窓会(教育学部) …… 204
3 鳳陽会(経済学部) …… 210
4 鴻理会(理学部) …… 218
5 霜仁会(医学部医学科) …… 220
6 双樹会(医学部保健学科) …… 225
7 常盤工業会(工学部) …… 228
8 農学部同窓会(農学部・共同獣医学部) …… 232
9 技経会(技術経営研究科) …… 236
4 学生生活 …… 237

第3部 伝 …… 249

1 山口大学のいま、これから …… 250
1 山口大学憲章 …… 250
2 現在の山口大学 …… 252
3 創基200周年に向けて …… 262
4 これからの山口大学 …… 266
2 写真集「山大なう」 …… 272
3 学長インタビュー「山口大学のめざすもの」 …… 280

資料編 …… 287

年表 …… 288
沿革図 …… 294
組織図 …… 296
歴代学長 …… 297
名誉教授 …… 298

山口大学創基200周年記念誌編纂部門委員 …… 302
あとがき …… 303

【第1部】

志心

1815年→1949年

山口大学の原点

創基から山口大学設立までの歩み

特別寄稿

1

わが青春のケイセン講堂

古川 薫

Profile

古川 薫 ふるかわ かおる

1925年、下関市生まれ。作家。1952年、山口大学教育学部第二中等教育科修了。教員、山口新聞（みなと山口合同新聞社）編集局長を経て、文筆活動を始める。1991年に、下関市出身のオペラ歌手藤原義江を描いた『漂泊者のアリア』で、第104回直木賞を受賞。維新史と長州藩に関わる歴史小説のほか現代小説、海外紀行など多数。主な作品は、『正午位置』『幻のザビーネ』（文藝春秋）、『毛利元就』（新潮社）、『斜陽に立つ』（毎日新聞社）、『吉田松陰一留魂録』（講談社学術文庫）など。

ケイセン講堂

かつて天才少女ヴァイオリニストとして、ヨーロッパ人の心を奪った美貌の諏訪根自子が、戦後帰国、山口市のケイセン講堂で演奏したのは、1948年の春だった。ケイセン講堂とは、山口大学経済学部の前身、山口経済専門学校（山口高商）の講堂のことだ。独立した瀟洒なこの建物は、かなり長期にわたり山口市の公会堂の役目をはたした。

戦後、帰国した諏訪根自子が、ナチスのゲッベルスから贈られたと噂されるいわくつきの名器ストラディヴァリウスで奏でたそのときの曲が何であったかを僕は知らない。その演奏会場への入場を拒絶されたからである。

山口市駐屯の占領軍主催によるこのリサイタルの聴衆の大半は碧眼の軍人であった。よれよれになった旧日本軍の軍服をまとってうっそりとあらわれた復員兵の僕が、受付で「駄目だ」と胸を突かれたときの悲哀と敗戦国民の屈辱を忘れ得ないが、ケイセン講堂の入口に整列して出迎える占領軍高級将校たちと鷹揚に握手をかわし、颯爽と中に消えていった若い日本人女性の姿が、僕の脳裏にあざやかに焼きついた。

戦争の世紀初頭の1925年、諏訪根自子より3年遅れて、彼女とは月とスッポン違いの境遇に生まれた僕の運命は、いわば当然のごとく軍国少年としての出発だった。日中戦争が始まったのは小学5年生のときであり、旧制の県立宇部工業学校機械科を卒業して、「赤トンボ」の愛称で知られる海軍93式中間練習機を作っていた東京の日立航空機株式会社羽田工場に入社したのは、太平洋戦争勃発の翌年だった。

ケイセン講堂の内部

東京大空襲で軍需工場が壊滅的被害を受ける直前、兵役に取られ兵庫の航空隊で敗戦を迎えた僕は、職も目的も失った20歳の春秋を無為にすごしていた。おそらくは新しい就職口をもとめて、県庁所在地の山口市に行ったそのとき、占領軍将校に対する諏訪根自子の誇りにみちた姿を目撃したのだった。民族・国境を越えた芸術というものの正体に搏たれたその瞬間、工業専門学校進学を志していた僕の目的は急旋回した。

1950年春、山口大学教育学部に入学した僕は25歳、大学教育を受けてみたいという僕と同じ懸命の気持ちを抱く年嵩の学生がほかに2名いた。T君は小学校教員の経験を持ち、僕より1つ年上、M氏はすでに30歳の元陸軍大尉、南方から復員、士官学校出身の彼は戦犯容疑でいったんは巣鴨拘置所に収容されたが、無罪放免されたのち一念発起して新制の大学に入ってきた。この長身の剣道マンを、僕たちだけでなく教授の一部までが「キャプテン」とよんで親愛した。画家志望のT君はクラシック・ファンで、下宿先にポータブル蓄音機とたくさんのＳＰレコードを持ち込んでいた。僕がベートーヴェンに入れ込んだのは彼の影響である。

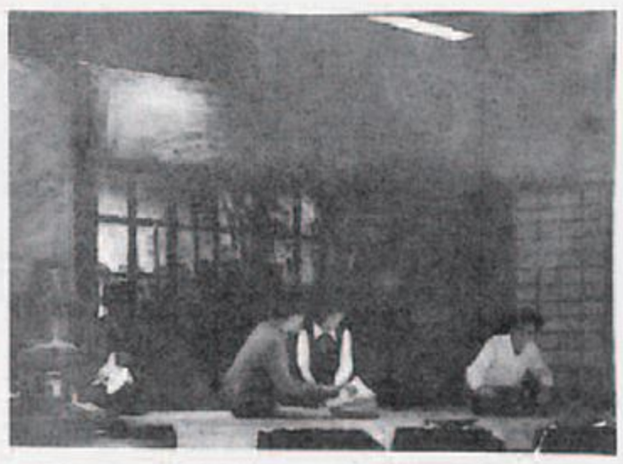
他の学生たちから「年寄り組」などと呼ばれることもあったが、晩学の僕らは戦争で奪われた青春を取り戻した思いで、角帽をかぶり若い人々にまじって精一杯生き生きと活動した。大学祭では演劇の裏方として参加し、合唱団「メンネルコール」の一員にまぎれこんだりもした。

思い出深いのは映画鑑賞会「若葉会」のことである。若葉会については山口大学経済学部第1回卒業生の松野浩二氏が著書『奮発振動の象あり』に詳しく触れておられる。若葉会の創設は

1946年で、当時の山口高等商業学校の学生が、終戦直後の殺伐とした空気の中で始めた文化運動が映画鑑賞の若葉会だった。

映画館にも劣らない映写装置が高商時代からの講堂には残されており、映写技師もまだ庶務課に在職していた。入手困難だったアーク・カーボンを探し出し、フィルムは大阪の配給会社からの提供にこぎつけて、経専のちには山口大学、市内の高校生を中心とする会員制でスタートした。アメリカ映画は貸出しが禁止されていたので、主としてフランス映画と日本映画を上映した。組織も定着して、上映日には講堂が満員になる盛況だった。僕にとってこのケイセン講堂は、入学式の会場、さらにはあの諏訪根自子リサイタル以来、大げさに言えば自分の運命を変えた記念すべき劇場だったのだ。後年に至っても鑑賞の機会がなかったコクトーの『賭けはなされた』や、デュヴィヴィエの『我等の仲間』などフランスの名画を観たのはこの若葉会であった。(その後、僕は映画『我等の仲間』を翻案した同じ題名の短篇を「小説新潮」1998年1月号に書いている)

大学祭の演劇
田中小太郎作『道化の歌』
於経学部講堂(ケイセン講堂)1951年



【■】 道 化 の 歌

STAFF

演出	藤永芳久
舞台監督	古川豊
装置	中嶺敏克
効果	伊村喜久夫
美術	多記英雄
衣裳	時國智津子
扮装	岡道子
照明	武安保

CAST

原田千代(34)	入江清子
弟一郎(28)	上田常雄
弟信吉(26)	杉本周治
妹文江(22)	竹内加代子
脇田彰三(49)	小山悼男
道のぶ子(20)	岡道子
速見ゆき(24)	桑本武子
斉藤喜作(35)	佐々木享

大学祭の演劇パンフレットより(1951年)

僕ら「年寄り組」は教室で教官の講義を聴くことに喜びを感じていた。一言半句も聴きのがすまいと貪婪なまでにノオトした。それが親の仕送りでのんびり“遊学”している者たちとの違いであった。文字通り乾いた砂地に染み入るように講義の内容は僕らの脳髄を充たしていったのだ。物書きを業とするようになって、ソビエト連邦に取材旅行したとき(『不逞の魂』新潮社刊)国土の至るところで幾何学模様の野外彫刻を見て帰ってきた。間もなくソ連崩壊の報に接し、すぐさま僕はK先生から聴いたヴォリンゲルの『抽象と感情移入』にある空間恐怖説を思い出した。崩壊の危機を感知したロシア人の深層心理とあの幾何学模様の野外彫刻をむすびつけたエッセイを新聞に書いたものだった。

「教養とは連想の拡大である」とは、たしか小林秀雄氏のことばだが、僕にとって連想拡大の原

点はまさしく山口大学だった。いつごろからか国立大学を入試の期日によって一期校、二期校と格付けするようになった。旧帝国大学クラスが一期校で、山口大学は二期校だった。官僚として出世したい者は東大に行けばよい。そうでなければ要するに大学はどこでもよいのである。

僕は学歴、門閥を問わぬ文学の道に入って、自分の好きな方向をめざし、あまり励みもせず、怠けもせず、楽しんで刻苦した。そして一応の関門を突破した。直木賞は芥川賞にくらべれば二流だが、「それでいいのだ!」。これは赤塚不二夫のマンガ『天才バカボン』のおやじのセリフだが、Es ist gut! は、カントのダイイング・メッセージだとは『純粋理性批判』を講じたO先生が雑談で教えてくれた出色の名台詞で、僕の第二座右銘である。

ところで「卒業す学の鉄鎖の重かりしよ」とは、中村草田男が詠んだ句だが、僕は草田男の句集にこの作品を見つけたとき、のしかかってくる学業の負担とは別に、なにか学生に覆いかぶさるかび臭い重圧が漂っていて、軽い脅えを感じさせるものが大学にあったことを思い出した。「学の鉄鎖」とは、あるいはそういうものを表現しているのだと理解した。尤も草田男が出たのは旧制の東京帝国大学だから、地方の新制大学とは比ぶべくもない“象牙の塔”の質量があるのだろうが、わが山口大学にも封建時代をふくめた藩学数百年の蛍雪で艶光りするそれなりに重厚な個性を帯びた「学の鉄鎖」は残存し得た。

文久3年(1863)4月藩校明倫館は、萩藩が本拠を幕府に無断で山口に遷す藩政大改革と前後して、事実上山口に移し、教授陣もそれに同行した。山口に早くから教場を拓いた上田鳳陽の山口講習堂(山口講堂改称)と三田尻講習堂を明倫館の直轄としたのは、萩藩主が山口に居館を遷す4年前の1860年11月のことだが、それは大老井伊直弼暗殺後にわかに幕府への対抗姿勢を藩があらわにした時期であった。

5代藩主吉元の改革政策によって享保4年(1719)米沢藩の興譲館と並び、全国にさきがけて創設された伝統の藩校明倫館が、山口の新天地にあらためて文教の中心を据えたのだ。上田鳳陽は藩学中興の祖ということもできる。

さて、僕が入学した当時の学長は地球物理学の泰斗として国際的に名を馳せる松山基範先生だった。教育学部長は岩波書店から大冊『吉田松陰』を出した玖村敏雄先生だったが、この人から吉田松陰の講義を受ける機会はついになかった。残念というほかはない。

当時、文理学部には中国文学の吉川幸次郎先生や中世史の福尾猛市郎先生もおられたがこれも受講は逸した。しかし師とすべき人はかならずしも著名な人物である必要はないのだ。問題は学ぶ側にある。学んでいかに自分のものを創り出し、いかに連想を拡大するかだろう。しかしながらその後、維新発祥の地とされる山口県の山口大学に、維新史乃至は吉田松陰研究の国内最高の権威とされる学者が定着しないのは不思議ともいうべく、これはひとつの課題である。

最後に思い出にのこる先生を2人―。まず国文学のK先生は僕が行き詰まり筆を投げ出そうとしたとき、「無能無才にしてこの一筋につながる」という芭蕉『幻住庵記』の言葉を引用して叱咤、無気力な僕を立ち直らせてくれた恩師である。これが僕の第一座右銘だ。

もう1人はある個性的な教官の思い出である。教育学部の構内に「時雍」の2字を深く彫り込んだ石碑があった。僕らがその前に立って「どういう意味だろう」と話しあっているところへ通りかかった少し頭の禿げた教官らしい人が、「それはねえ、ジヨウと読む。平和ということ。書経にある言葉だ。コレ安ラカナリ、と訓読する。ええかね、分かったかね」と、言い捨てるようにして行ってしまった。

漢文『古文真宝』の講座が始まり、教室で待っていると現れたM助教授がその人だった。僕らは指定された教科書を用意していたが、先生はそれを手にしていない。先秦以後宋までの詩文

時雍碑

山口にて(1950年)

20巻をすべて暗記しているという恐るべき碩学だった。この人からはほかに世阿弥の『風姿花伝』を受けたが、すべて口伝調の講義だった。

M先生の最終学歴は尋常高等小学校という。あとはすべて独学と検定試験で、師範学校の教官となり、横すべりで大学に移った。すでに定年近い年齢だが「万年助教授」なのは、その経歴のせいだという。学歴偏重の理不尽を感じさせることだった。M先生の講義は突然低俗な世間話となり、「あのなあ、世の中でいちばん偉いのは私ら大学の先生ですよ」などと言ったりする。この人の深い学殖に畏敬の念を抱く反面では、僕自身の俗物性を棚にあげ、その知性の香りのなさに辟易して微苦笑させられることしばしばであった。青年時代、大学キャンパスの洗礼を受けていない人、「学の鉄鎖」の権威に脅えた経験のないことからのスノビズムといえるのかもしれない。たといわずかな期間でも「最高学府」の空気に身をひたしておくこと、「学の鉄鎖」の洗礼を受けておくことが大事なのだということを、反面教師として実感させてくれたのはM先生だった。なつかしい恩師のひとりである。

キャンパス生活の収穫は知識の吸収とは別に、この「学の鉄鎖」を体感することだと僕は思っている。大学に入ってろくに勉強もせず、自動車クラブで車の免許をとったり、遊びに夢中の学生を少なからず見たが、「学の鉄鎖」の臭いを嗅いだだけでも、無意識のうちにその人間の形質は影響を受けているのだ。

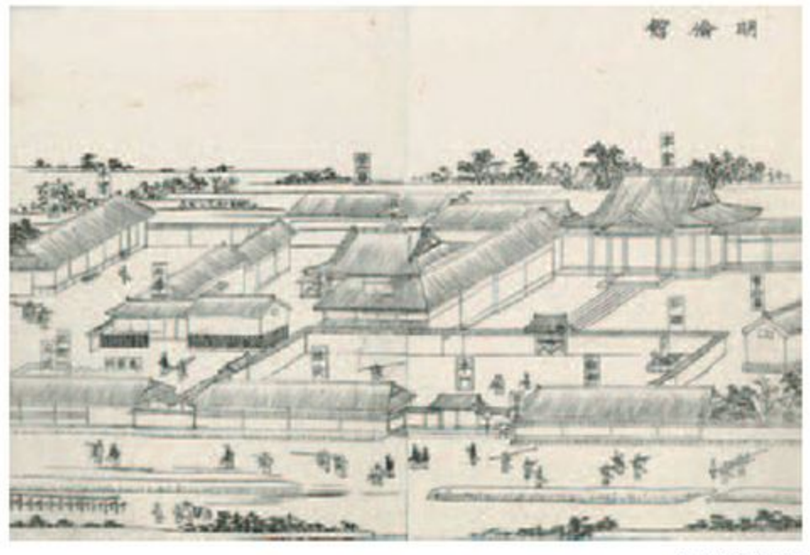
短い期間ではあったが、僕の青春は山口大学のキャンパスの中で全開したのだった。社会人生活を捨てて、冒険心を抱き飛び込んだ学巣に澱むある種の権力臭に脅えもした。僕にとっての「学の鉄鎖」が、自分の運命を強引に折り曲げ、予期せぬ方向に突き放してくれるかもしれないという期待もあったが、それは遂げられたと思っている。

わが青春のケイセン講堂は、キャンパスの吉田移転によっておよそ1世紀の歴史を閉じた。今そのあとには県立美術館の建物が載っている。

2

創基200周年、「志」をたどる

～山口講堂から新制大学まで



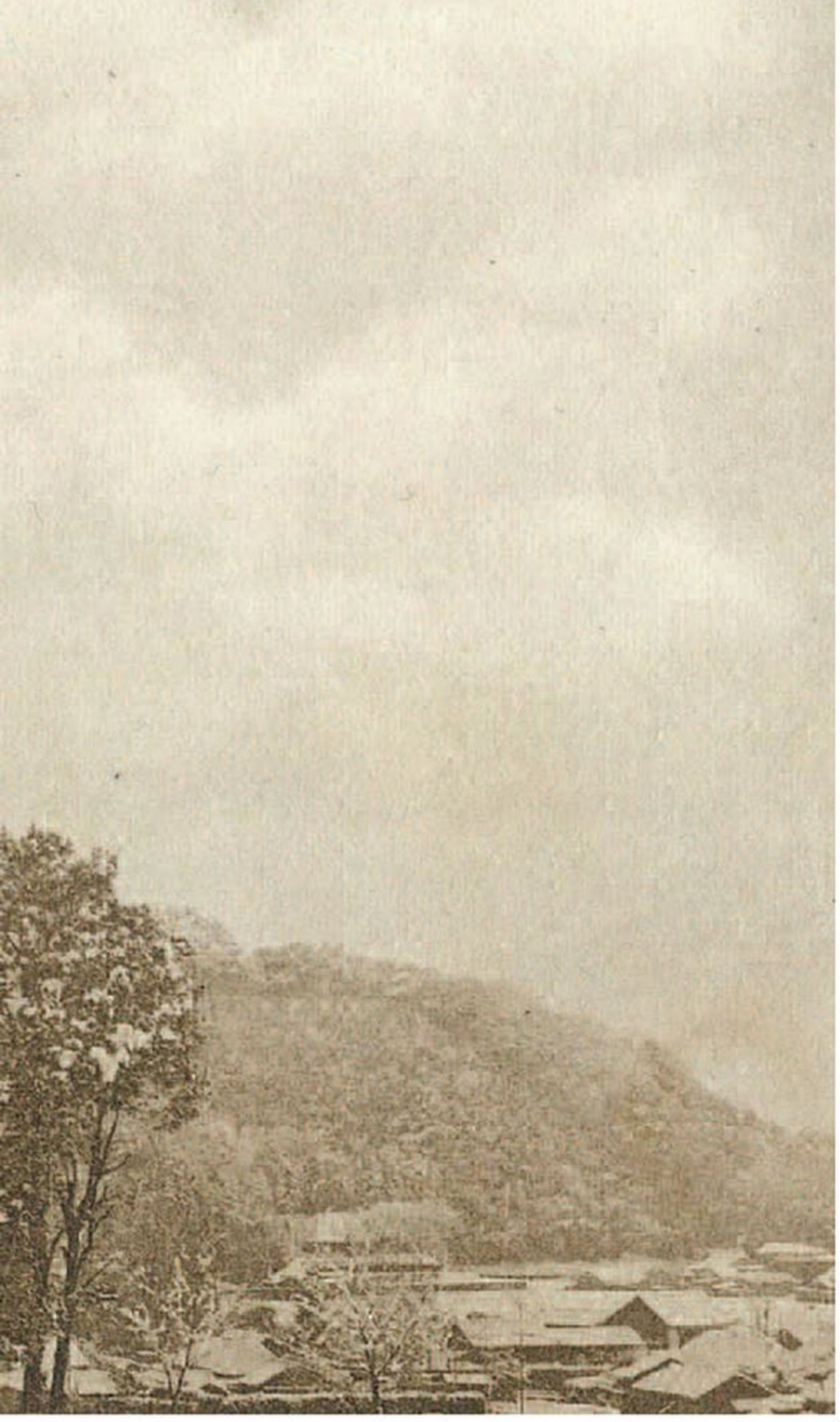
藩校明倫館

江戸時代後期、各藩でおこなわれた藩政改革において、改革の重要な軸のひとつとみなされたのは、教育であった。ゆらぐ幕藩体制のなかで、時代をみすえた政策を進めることができる、有為な人材の育成が期待されたのである。

周防と長門をおさめていた萩藩もまた、教育に力を注ぎ、藩校明倫館を核として、領内に郷校、寺子屋、私塾などをもうけて、明倫館を範に教育をおこなう。

山口大学の淵源にあたる「山口講堂」が設立されたのは、文化12（1815）年。このような時代を象徴する存在として生まれ、以来、発展していく。

山口は、今も文教都市として語られるまちである。室町時代には、京都や大陸の先進文化を積極的に受け入れ、文化人を庇護した大内氏のもとで、「大内文化」が花開いた。毛利氏の時代にも、山口は、萩、三田尻と並び「町方」が置かれた重要な都市であった。その地に、萩の明倫館、三田尻の越氏塾（えっしじゅく）と並ぶ山口講堂がつくられ、修学の道が開かれたのは、必然のこととともいえる。



瑠璃光寺五重塔

「山口講堂跡」記念碑

山口講堂の扁額

山口講堂の蔵書『詩経集註』

山口講堂の講堂蔵書印

1

すべてのはじまり、「山口講堂」

上田鳳陽、学問所を発起

山口に生まれた萩藩士・上田鳳陽（茂右衛門）は、寛政12（1800）年11月、萩に遊学して藩校明倫館に入った。学頭・繁澤規世に師事して、9年の長きにわたり在学し、儒学、国学をおさめる。

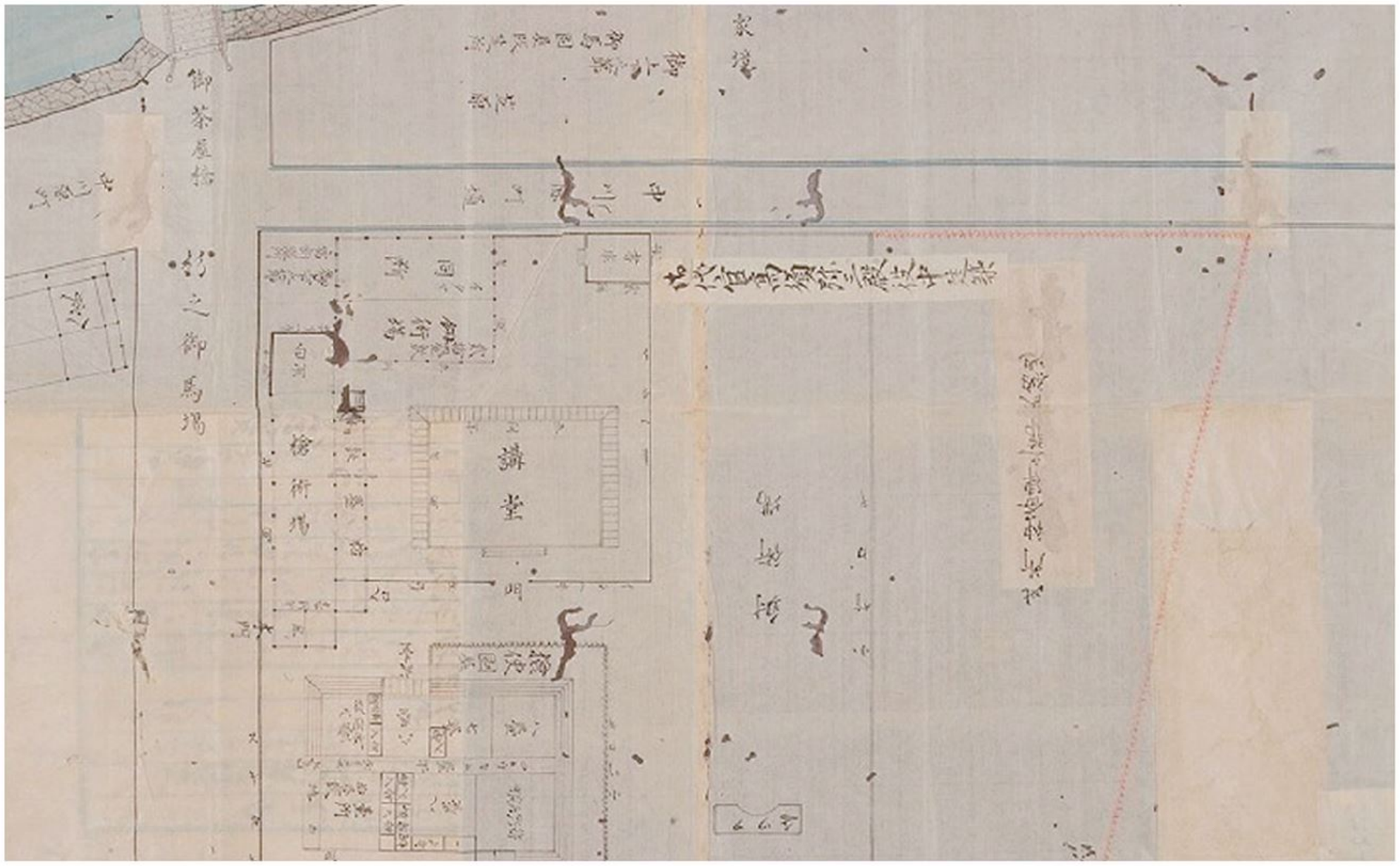
文化6（1809）年11月に明倫館での修学を終えた鳳陽は、山口に帰り諸士の教育にあたったが、当時の山口には学問所がなく、書籍も乏しい。このため、鳳陽は学舎の建設を発起する。

文化12（1815）年2月、鳳陽は藩に対し、申し立てをおこなった。

「山口のまちに武芸の稽古場、馬場はあるものの、いまだに本格的な学問所がないため、自力でも学問所を開設したい」

と、明倫館の学頭・中村九郎兵衛を通じて藩へ願い出たのである。

藩はこれを受け、建築のための用材を藩有林から伐採することを許可し、資銀を給付し、中村九郎兵衛に事業を援助させた。山口の豪商や周辺の豪農らの協力も相次ぎ、4月、山口の中河原に講堂が落成し、「**山口講堂**」と呼ばれることになった。



山口講堂剣鎗射術場并検使固屋共地差図（山口県文書館所蔵）

藩主が勉学視察

当時、山口の中河原には、藩主の参勤や領内巡視、他藩の役人との応接の際に使う公館「山口御茶屋」があった。山口講堂が建てられた場所は、その東南側、今でいうと、山口公設市場（平成24年に解体）があった位置である。

古地図によると、講堂は、藩の「検使固屋」の敷地の一部にあり、正面幅が約10ｍ、奥行きが7.3ｍ、三面に回り縁のついた小規模な平屋だったようだ。

講堂が完成した4月、藩主・毛利齊熙（なりひろ）は、氷上山興隆寺に参詣の途中、山口御茶屋で山口在住諸士の文武諸芸を視察した。鳳陽の門弟18名が「孫子」、「詩経」などの講釈をし、平岡弥三右衛門らの門弟80名が武芸を披露したという。鳳陽の私塾として生まれた山口講堂であるが、藩主もその開設を奨励していたことがうかがわれよう。

以後、山口来訪時や江戸参勤の帰途などに、藩主が山口講堂を観閲することが慣例となり、明倫館、越氏塾とともに書籍を下賜されるようになった。

山口講堂の設立以降、文教施設が充実した山口市（写真は大正時代の山口市中心部）

椹野川

志を現在へ

山口大学の8つの学部のうち、もっとも古い歴史をもつ経済学部。その前身である「山口高等商業学校」の校歌に、次のようにうたわれている。

仰ぐは鳳翩（ほうへん）臨むは椹野（ふしの）　基を文化の遠きにおきて
時世の進みに伴ひ来る　山口高等商業学校

「基を文化の遠きにおきて」の「文化」とは、「文化12年」、すなわち、山口講堂が開設された年を指す。

山口大学の基となった山口講堂から、200年。山口の重要な教育機関として時を刻み、この地における教育のいしずえをつくったその志は、脈々と、現在へと受け継がれている。

上田鳳陽碑（左）と服部東陽碑（右）（山口市宮島町）

2

建学の祖 上田鳳陽

藩校明倫館で国学、儒学を学ぶ

山口講堂開設を発起した上田鳳陽とは、どんな人物だったのか。

明和6（1769）年、萩藩の下級藩士・宮崎猪兵衛在政の三男として生まれ、幼いころ、上田平右衛門清房の養子となる。

寛政12（1800）年11月、32歳で藩校明倫館に入学、文化6（1809）年まで在学し、儒学や国学を学んだ。修学中は、藩費生となり、3年の規定年数をこえて学んだ。

山口講堂を発起するのは、文化12年、鳳陽47歳のときである。藩への願書からは、藩にとって重要な地であった山口に、いまだ学問の環境がととのっていないことを深く憂える心情が読みとれる。

鳳陽は、講堂開設の働きを評価されて下級武士の身分から中級武士へと昇格し、研究に専念できるよう「儒役」という役職に引き上げられた。

晩年まで学問・教育に熱意

講堂開設後は、かねて希望していた明倫館への再入学をはたし、1年間、国学関係の書籍（「大黒屋本」）を研究する。

このように国学に精通し、故事にも詳しかったことから、山口代官から委嘱されて、「山口宰判風土注進案」の編纂にあたった。数ある風土注進案のなかでも、「山口宰判風土注進案」は、その精細さから高く評価されている記録である。

嘉永6（1853）年、鳳陽は85歳でこの世を去った。年を重ねてなお、藩士の教導につとめ、晩年まで藩より昇格や増給を受けたという。鳳陽が、地方の文教開発に大きく貢献し、それを藩が高く評価していたことをあらわすものであろう。

無給通本人
上田茂右衛門
文化十二亥年四月十五日
△一代遠近附被仰付
△一代儒役
右文学抽令出精候段達
上聞候、往々御用ニ相立諸人之
励ニ茂可相成儀ニ付、身柄一代
遠近付ニ被仰付儒役ニ被召仕
学問指南被仰付候、尤二代目より者
最前之身通江被差返平士ニ可
被召仕候事
右之節詮議
前簾明倫館入込文学出精追々上達仕
近年者於山口門弟取立仕候処、只今之身通ニて者
教導筋問茂御座候由学頭役中村九郎兵衛より
内々申立之趣茂有之候、山口ニ而武芸之儀者
稽古場も有之、馬場等も御座候処、学問所
無御座ニ付、近比彼者自力を以家塾をも
取立候由御座候、偏ニ学問一途ニ相傾キ居候
者之由相聞候間、本文之通被仰付候而者
いかゝ可有御座哉と伺之上右之通被仰付候事

「御賞美先例」三篇・二十七（山口県文書館所蔵）
鳳陽の昇格や山口講堂開設の経緯などが分かる

山口宰判風土注進案（山口県文書館所蔵）

※風土注進案…藩命により、防長両国の各村落について、故事来歴や地理などを数十項目にわたって調査しとりまとめた文書。各町村から注進する形式で、一町村ごとに一冊に編纂された。

上田鳳陽の墓（山口市乗福寺）

山口講習堂玄関（山口県鴻城高等学校に現存。鴻城義塾創設にあたり山口中学校より譲り受けた）

3

文武の総合学舎、「山口講習堂」へ

「明倫館」の教育に準拠

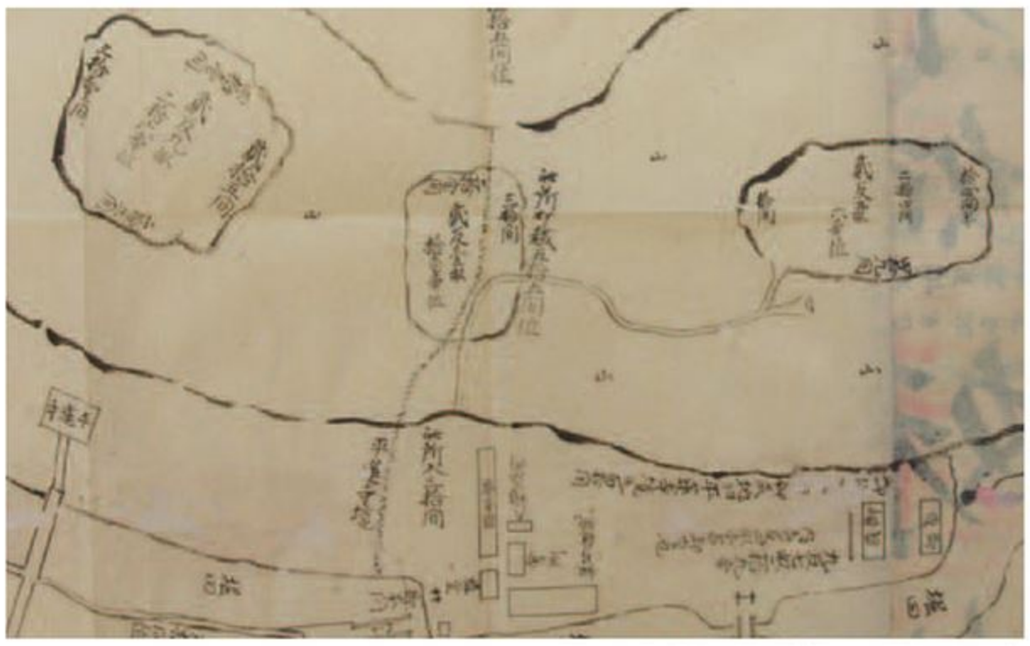
学問所として出発した山口講堂だが、しだいに、剣術、槍術、馬術など、武芸の稽古場としても整備されていった。これは、文武の両面を奨励した萩藩の天保改革にも沿っている。

弘化2（1845）年、鳳陽は藩に願い出て、山口講堂を「**山口講習堂**」と改称し、山口における文武諸芸の稽古場にすることを許された。山口講堂の設立から30年、山口講習堂はここに、文武両道を学ぶ総合学舎へと発展をとげたのである。

山口やその近郊に住む諸士の子弟は、山口講習堂で学び、なかでも成績の優秀なものは萩の明倫館へ進学した。明治維新で活躍した井上馨もそのひとり。このように、山口講習堂は、藩校明倫館の支校的存在となり、藩の人材育成のかなめとして、重要な役割をになうことになった。

安政5（1858）年、明倫館助教の山県半蔵（宍戸璣（たまき））が、学事を監督する「督学」として山口講習堂に派遣された。山県は、課目の改正などをおこなって、教育内容を明倫館に近づけたほか、教科書、書台などをととのえ、畳、壁、屋根を修繕して、施設を整備した。

山口町村図(山口県文書館所蔵)



山口長山稽古場差図(山口県文書館所蔵)

明倫館の直轄に、そして亀山へ移転

万延元(1860)年、山口講習堂と三田尻越氏塾は、明倫館の直轄となった。文学の諸役は、すべて明倫館から派遣され、両校の教授は、明倫館の助教が兼務することになった。

こうして、就学する人数も増加していったが、その一方で、校舎は狭くなり、老朽化がめだつようになった。

万延2(1861)年、亀山のふもとにあった空き地に校舎を移転、改築することが決まる。工事は山口代官にまかされたが、藩からは銀20貫目が支出されたため、これに感激した在住諸士が、すすんで土木工事に従事した。同年9月には新校舎が落成。亀山のふもとのこの地は、以後、学校名の変遷を経つつ、最終的に山口大学が吉田地区へ移転する昭和48(1973)年まで、学舎の敷地として使用されることになる。

4

幕末動乱、「山口明倫館」と改称

文教の中心は萩から山口へ

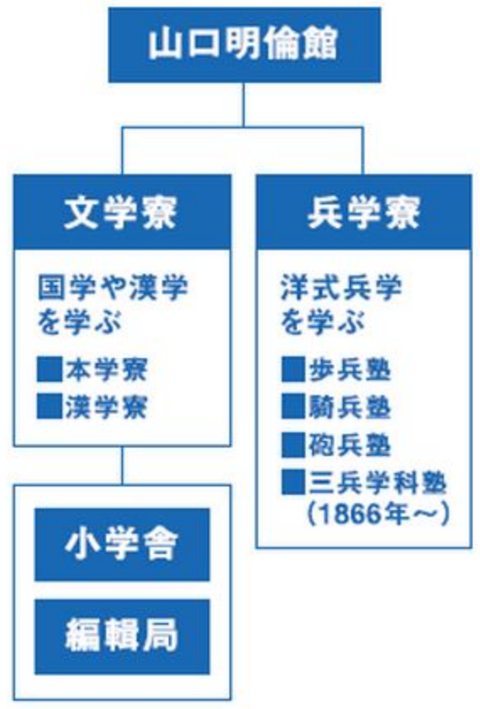
幕末期をむかえ、藩の情勢はしだいに緊迫したものとなってくる。

文久3（1863）年、攘夷決行に備えて藩庁が山口に移され、萩に代わり、山口が政治、軍事の中心になったのである。萩の明倫館の諸生も多くが山口へ移ったため、山口講習堂は、「**山口明倫館**」と改称し、藩の文教の中心となった。

ところが、翌元治元（1864）年、長州征伐のあおりを受け藩の中枢が萩に戻され、山口明倫館はいったん廃止となる。

その3か月後の慶応元（1865）年3月、藩主敬親は山口に戻り、山口明倫館は復興した。山口明倫館は、「文学寮」と「兵学寮」に分かれ、文学寮には、基礎教育を行う「小学舎」と、歴史編纂を行う「編輯局」が附属していた。文においては人材の輩出、武においては有能な士官の養成が第一義とされた。

戊辰戦争での軍事的手腕で知られる大村益次郎は、山口明倫館兵学寮の教授であった。山口の普門寺を宿舎として、諸士に歩・騎・砲の三兵学を教え、藩の軍政指導者としても活躍した。



幕末山口市街図（全体）（山口県文書館所蔵）

5

明倫館から「山口中学」へ

洋学教育に重点

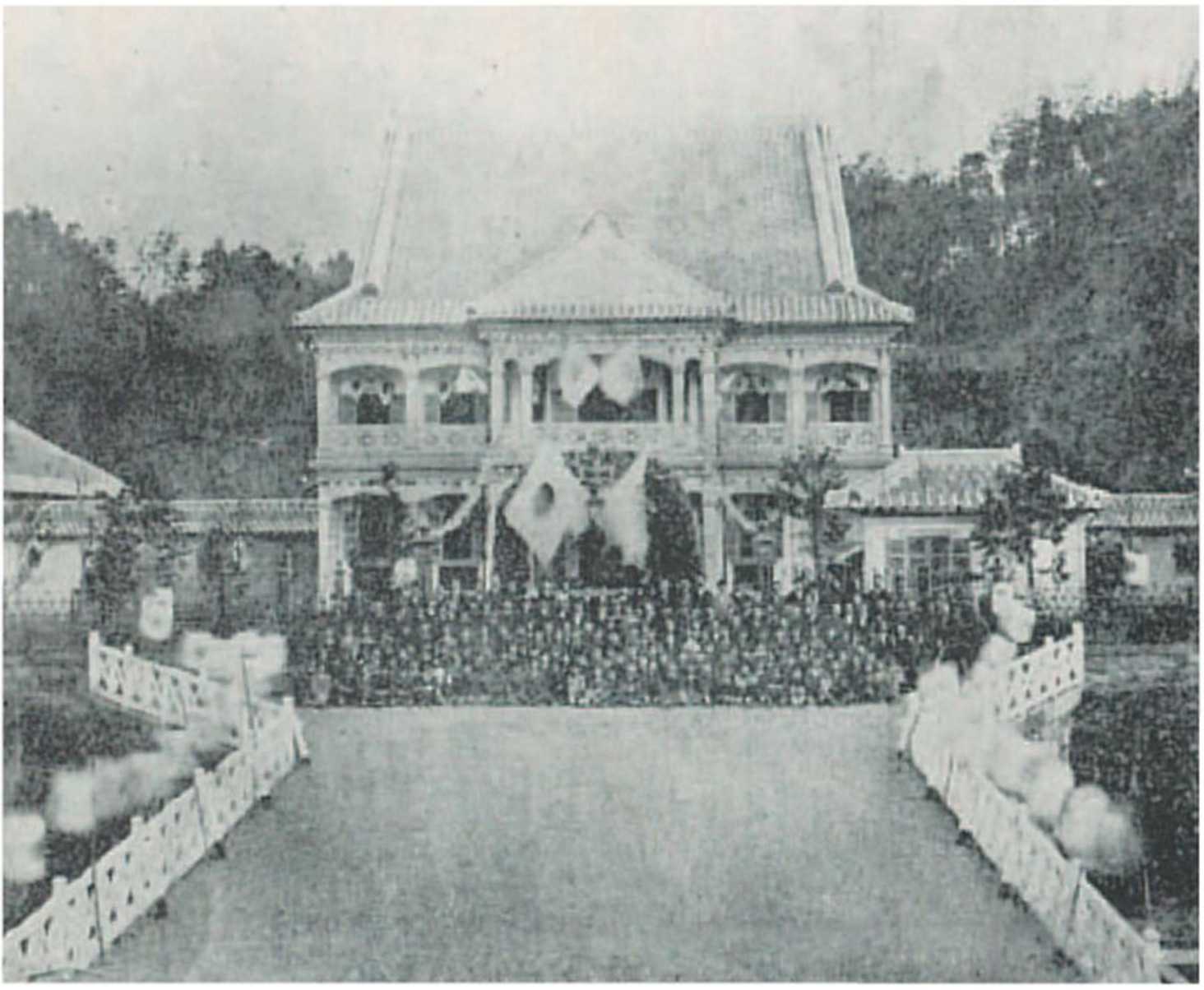
明治維新をむかえ、新政府は欧米風の学校教育の基礎づくりに乗りだした。

まず、明治3（1870）年、「大学規則」、「中小学規則」を定める。学校を大学、中学、小学の3種に分け、中央に大学を1校、各府藩県に中・小学をもうけることとした。

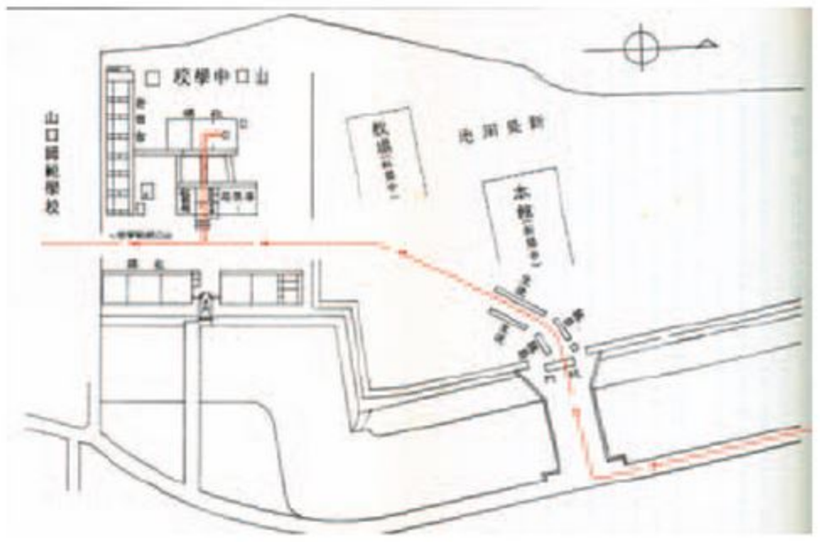
これを受けて、山口・萩の両明倫館はそれぞれ「**山口中学**」「萩中学」と改められ、三田尻講習堂や諸学校、郷校が「小学」となった。

山口・萩中学では、8歳から16歳までのものが、まず文学寮で学んだ。その後、身体の強健なものが選抜されて歩兵講習所で修業後、兵学寮、砲兵講習所のいずれかに進んだ。また、文学寮の終了者のなかから選抜されて、新設された「洋学寮」に進むものもいた。それぞれの修業年限は3年で、優秀なものを大学へと進ませた。

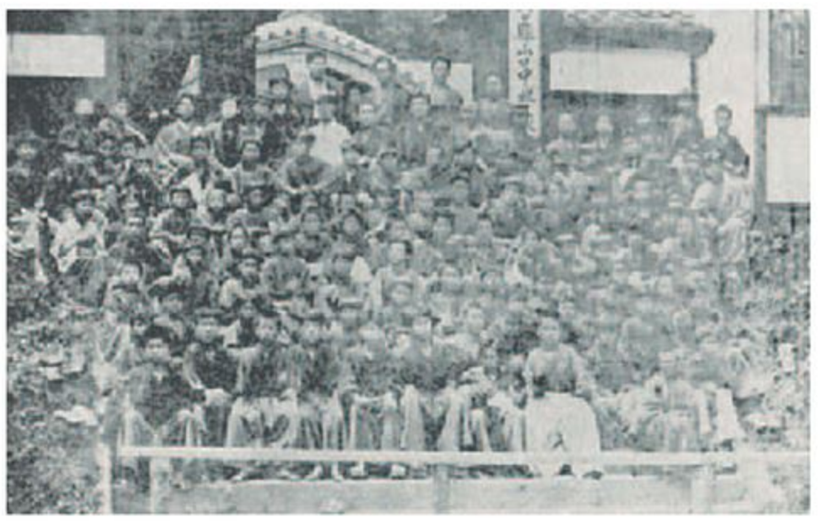
明治4（1871）年、歩兵講習所、兵学寮、砲兵講習所が陸軍局の管轄になり、山口中学には文学寮と洋学寮のみが残ることになった。軍事的色彩がなくなり、中学は普通教育の場に転換したのである。同年、廃藩置県により、山口中学は山口県の管轄になった。



県立山口中学校新校舎落成式（明治19年6月完成）
現山口県立美術館入口付近



当時の県立山口中学校校舎配置図
明治18年7月、明治天皇が山口中学校と山口師範学校を視察された時のもの



県立山口中学校正門にて記念写真（明治18年頃）

6

激流にいどむ防長教育

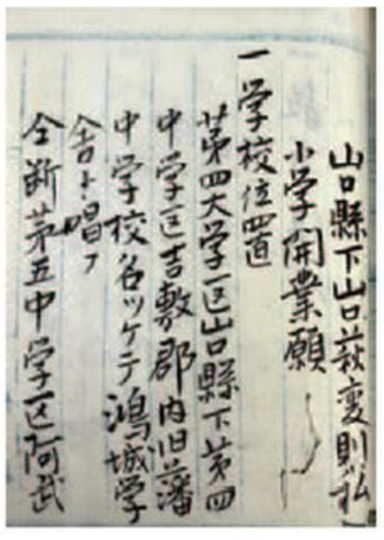
独自の進学体系を模索

明治5（1872）年、「学制」公布。県はこれに対応しつつ、試行錯誤を重ねる。

まず、山口中学を含む県下の学校を廃止して、山口・萩・岩国・豊浦に「**変則中学**」を設立した。しかし、翌年には経営困難によりこれを廃止、山口と萩に「**変則小学**」を設立した。しかし、やはり経済的な問題から、翌年閉鎖され、山口・萩変則小学はそれぞれ**鴻城（こうじょう）学舎（山口上等小学校）**・**巴城（はじょう）**学舎となる。明治8（1875）年、2学舎は資金の大部分を寄付していた毛利家の私立となった。さらに、明治11（1878）年、鴻城学舎は**私立山口中学校**に、巴城学舎は同萩分校になった。

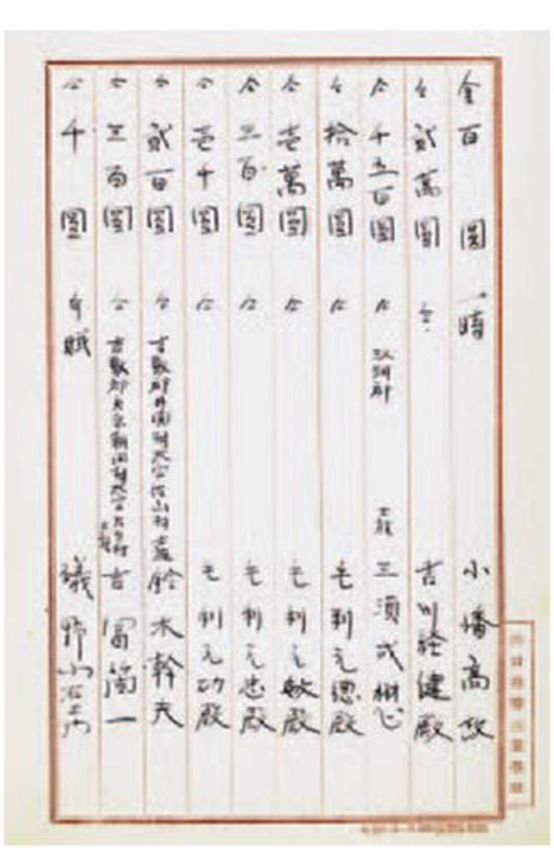
このように、数年にわたり曲折をくり返すなかで、県立の中等教育を振興させようという運動が起こりはじめた。県内外の有志から寄付が集められ、それをもとに、明治13（1880）年、山口・萩・豊浦・岩国・徳山の5学区に**県立中学校**がもうけられた。さらに明治17（1884）年、山口中学校と他の4校は、本・分校という関係になり、山口中学校には県内でただひとつ高等中学科が併設され、萩・豊浦・岩国・徳山の初等中学科を卒業したものを**県立山口中学校高等中学科**に編入させるという体系ができあがる。

「学喩」、「中小学章程」（山口県文書館所蔵）



山口県下山口萩変則私小学開業願
（山口県文書館所蔵）

当時の県立山口中学校校章



出資者の一覧（抜粋）
（「私立防長教育会資本出金名録」より）

校長から在県評議員への依頼文
（『防長教育会貸費生に関する書類綴』より）

毛利元徳（『防長教育会百年史』より）

7

防長教育会の創設
―県教育のバックボーン

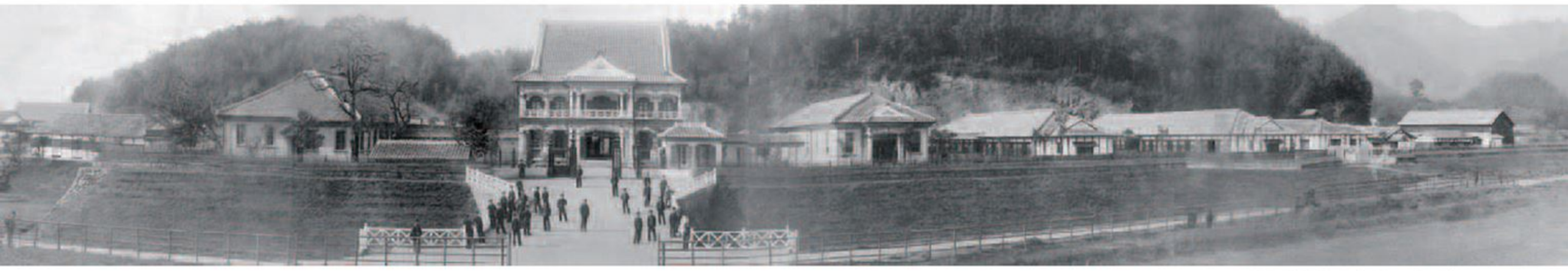
藩主毛利元徳が提唱

この時期の山口県教育史を語るうえで、防長教育会の存在を欠かすことはできない。

明治17（1884）年、山口の学事、特に中等、高等教育の振興をはかることを目的に、長州藩最後の藩主毛利元徳（もとのり）の提唱により、防長教育会は創設された。毛利本家、長府、徳山、清末各家および岩国の吉川家、さらには政官・実業界など県内の有志多数から寄付を募り、明治22年ころには、50万円（現在の金額で50億円をこえると思われる）にも達する基金を集めた。

まず、山口・萩・豊浦・岩国・徳山の五中学校の整備と充実をおこない、その資金を肩代わりし、明治19（1886）年には、県と協議して**官立山口高等中学校**を設立、年額1万9000円のほか、その超過分も含めた運営費を負担した。

もうひとつの事業は、学生に対する貸費留学制度である。防長教育会の奨学事業は現在にいたるまで続いており、会より学資や宿舎の支援を受け、大学や大学院を卒業した学生の総数は、実に2000名をこえる。旧岩国藩士の家に生まれた経済学者・思想家の河上肇も学資を受けたひとりで、月額8円を受けて東京帝国大学で学んだ。



山口高等中学校全景（明治20年頃）

8

熱意実る!
官立山口高等中学校の設置

一貫した中等教育体系、ようやく実現

明治19（1886）年、「中学校令」が公布される。全国が5学区に分けられ、各学区に1校の高等中学校、すなわち、東京、仙台、京都、金沢、熊本の5校が設置された。

このとき、県当局と防長教育会は政府に請願して、山口中学高等科を「**山口高等中学校**」に改めた。ぜひとも、県内に高等教育機関をのこしたいとの思いが強かったからである。

ここに、小学校卒業から大学進学にいたるまで9年一貫制の教育体系がととのうこととなった。すなわち、4年間の尋常小学校卒業後、山口高等中学校予備門と呼ばれる5学校（山口・萩・豊浦・徳山・岩国）で4年、そのあと山口高等中学校に進み、予科3年、本科2年の勉強を終えて、大学へ進むという道筋である。

本科には一部（法・文系）、二部（理・工系）の学科を設置し、定員は各部40名（本科全体で80名）、予科が280名であった。

設立当時の職員は、校長以下教官13名と事務関係5名であった。生徒との師弟関係は親密で、昼食を同じ食堂でとり、食後にともに球技に興じる姿もみられた。

亀山公園から運動場を望む

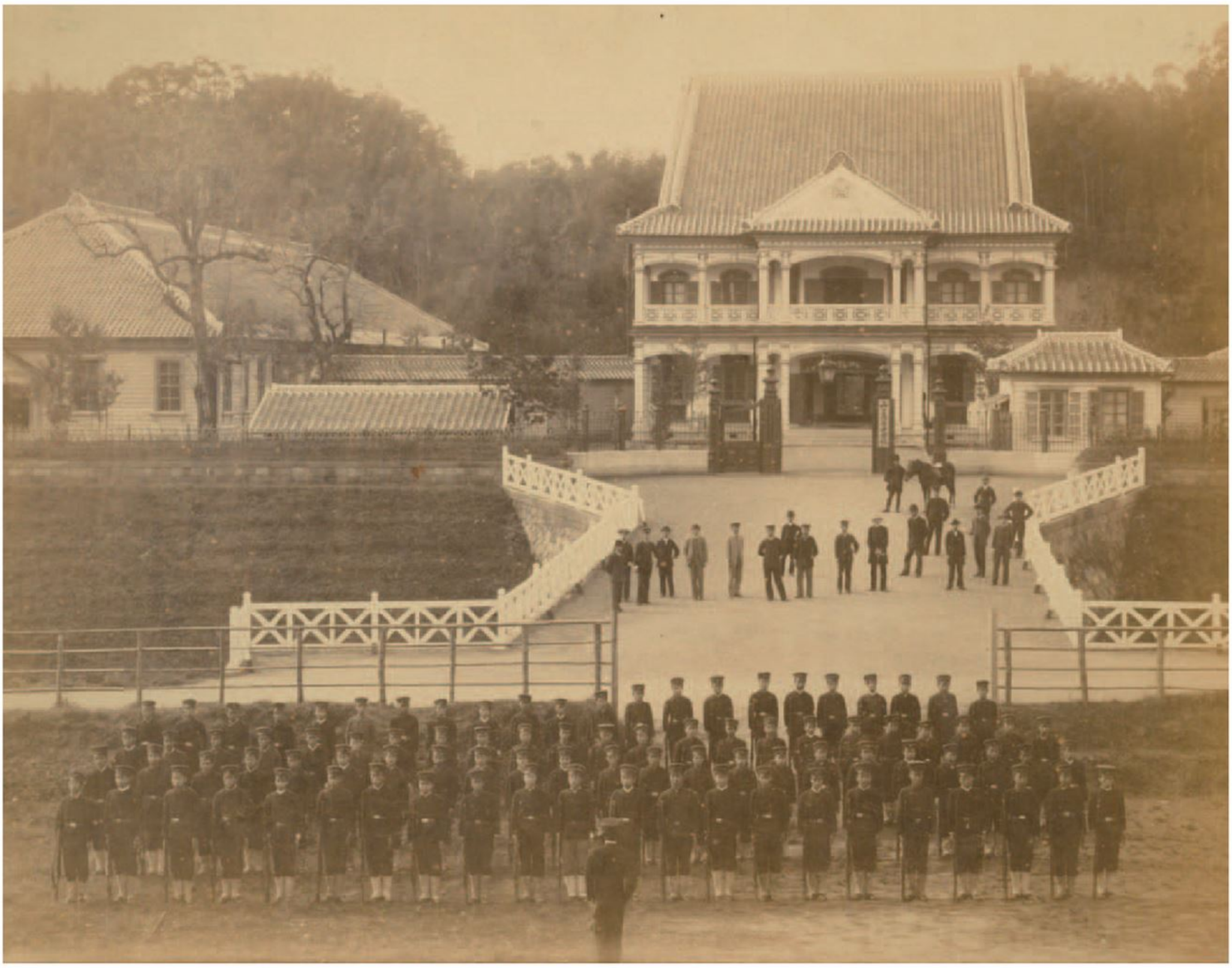
ハウスクネヒトの意見書

さて、山口高等中学校の教育制度をみるうえで、興味深いひとつの資料がある。

当時、帝国大学の教育学教師であったドイツ人エミール・ハウスクネヒトがまとめた意見書「山口高等学校教則説明書・同附録」である。

井上馨と品川弥二郎に請われ、明治22（1889）年、山口高等中学校を視察したハウスクネヒトは、この意見書のなかで、ドイツのギムナジウム（大学準備のための9年制の中等学校）の制度にならうことを提言する。防長教育会もこれを信頼し、明治23（1890）年には、帝国大学でハウスクネヒトの教えを受けた谷本富（とめり）を教授に任命し、理論の実施にそなえた。以後、山口高等中学校の経営は、ギムナジウムの制度をとりいれたものとして発展していった。

『山口高等学校教則説明書』



明治20年11月3日天長節記念写真（正門前の体操場にて）

COLUMN

山口高等中学校全景の乾板写真（山口大学図書館所蔵）

乾板とは、ガラス板に写真乳剤を塗って乾燥させた感光材料で、暗箱カメラによる撮影に用いた。明治15年頃から日本にも輸入されはじめたようで、明治20年頃に撮影されたこの乾板はかなり貴重である。校舎全景は4枚のガラス板に分割して撮影されているが、現在では画像処理技術の発展により、あたかも1枚のパノラマ写真のように再構成することが可能となった。（左上の画像処理は工学部知能情報工学科教員による）

原画を単純接続した場合

山口高等中学校予科第1回卒業生と教師たち（明治22年7月）

優秀なる教師陣

校長をはじめとして教官には熱意あふれる人物がむかえられた。

初代校長、河内信朝（こうち のぶとも）

萩に生まれ、萩、山口の両明倫館に学んで上京、文部省などを経て判事の職についていたところを、在京の県出身者たちに推薦されて、明治16年山口中学校校長となる。高等中学校成立後、引き続き校長をつとめる。教育への熱意と誠実な人柄から、生徒からの信頼も厚かった。

山口高等中学校在職時の河内信朝

教頭・数学教師、隈本有尚（くまもと ありたか）

富士山頂で日本初の気象観測をおこなったほか、日本にマトリックス代数を紹介するなどきわめて優秀な人物で、東京大学予備門では、夏目漱石、正岡子規、秋山真之らに数学を教えていた。正義感が強く厳格な性格から逸話も多く、厳しい授業ぶりには生徒から不満が出ることもあったようだ。夏目漱石の小説『坊っちゃん』に登場する一本気な教師「山嵐」のモデルともいわれている。

隈本有尚

「学友」表紙

学友会と同窓運動会

明治21（1888）年、学術を研究し知識を交換することなどを目的に「学友会」が組織された。翌年創刊された月刊雑誌「学友」には学術論文、文芸、学内の雑報が掲載された。

また、明治22（1889）年には、体育の奨励を目的として「同窓運動会」を創立、2月11日の紀元節には大運動会を開き、以後、春秋に大運動会、毎月遠足登山をおこなうなど、学生の体育向上と心身鍛錬に資することになった。

COLUMN

寄宿舎

通学に不便な生徒のため寄宿舎がもうけられ、改築を経て寮舎をふやした。明治24年当時で宿舎費は無料、賄方（まかないかた）がつくる食事は1日7銭前後で、1人1日分の米の量は5合1勺だった。食事・入浴・就寝時間以外は自習時間にあてられ、その間、雑談・笑話は禁止、許可なく寝室で休むこともできなかった。また、通俗小説を読むことや囲碁・カルタなどの遊戯も禁じられており、管理は厳しかった。

寄宿舎

寄宿舎の食堂

講堂（「山口高等商業学校卒業アルバム」より）

9

県内初の高校誕生
― 山口高等学校

学制改革により高等学校へ

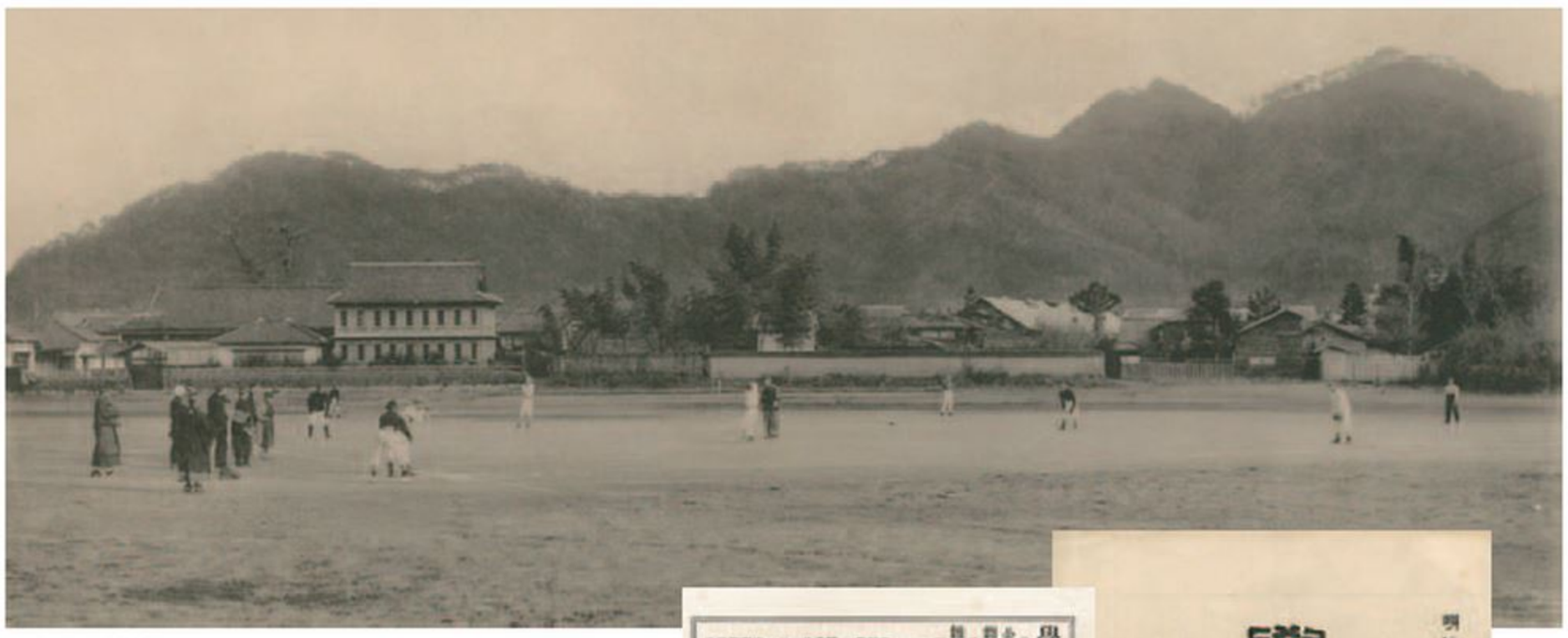
明治27（1894）年、「高等学校令」が公布され、「高等中学校」は「高等学校」となった。それにより「山口高等中学校」も「**山口高等学校**」と改称される。当時全国に開設された高等学校は、第一から第五までの高等学校と山口高等学校の6校のみで、これらは帝国大学予科としての性格が強かった。山口高等学校もまた修業年限3年の「大学予科」を設置し、大学の学科に関連して、第一部（法科・文科）、第二部（工科・理科・農科）、第三部（医科）に編成された。

高等学校の入学資格は、尋常中学校を卒業した17歳以上のものであった。全国では、募集人員をこえる場合に選抜試験をおこなっていたが、山口では高等中学校時代からの慣例により、山口県尋常中学校卒業生は、無試験で入学でき授業料が半額だった。

明治28（1895）年には、約200人が生活できる新しい寄宿舎が完成し、かねてより念願だった全寮制が実現した。

山口高等学校管理許可指令書
（「山口高等商業学校沿革史」より）

山口高等学校帽章
（明治28年）



野球をする学生たち
（「山口高等商業学校卒業アルバム」より）

学友会報

学友会の復興

山口高等中学校が山口高等学校に改称された明治27年は、日清戦争が起こった年であり、時代は軍事色を強めていた。そのため、体操教師として陸軍の予備将校が任用され、体操の授業はもっぱら兵式教練と行軍、発火演習にあてられた。

明治37（1904）年、日露戦争が開戦する。山口高等学校からは、教職員13名が召集され、うち2名が戦死、2名が負傷した。

その一方、高等中学時代にいったん廃止された学友会が復興。運動部の活躍が注目を集めた。明治32（1899）年2月11日、山口高等学校の運動部陸上遠足会が、山口～宮市（防府天満宮）間の約18kmを走破。当時の運動会では長距離走といっても1000m程度だったため、この快挙は「ジャパンタイムス」や「時事新報」などでとりあげられた。

野球部では、まちまちだったルールを整理して「野球規則」を制定、県内の各中学校に配り、野球大会を主催した。技術向上にも熱心で、ときには遠征試合をおこなった。特に熊本の第五高等学校とは数度にわたり対戦。善戦したが、ついに勝利は得られなかったようである。

COLUMN

山高の呼び名は3つ

「山口高等学校」と呼ばれる学校は、時代とともに3校ある。
ここに述べた、明治時代に高等中学校の後を受けて成立した官立山口高等学校を「旧旧山高」
大正8年創立の官立山口高等学校を「旧制山高」
戦後生まれた現在の県立高等学校を「山高」
このように呼んで区別している。

群を抜いた帝大進学率

高等学校大学予科を卒業したものは、帝国大学の各分科に無試験で入学できた。しかし、明治29(1896)年の「分科大学通則」の改正にともない、人員をこえる場合は試験をおこなうことになった。

山口高等学校(旧旧山高)12年間での卒業生は累計で832名で、その98%にあたる818名が帝国大学の各分科に進学している。これは他府県の群を抜いた数で、世に注目された。

第5回卒業生　**岩田 宙造**

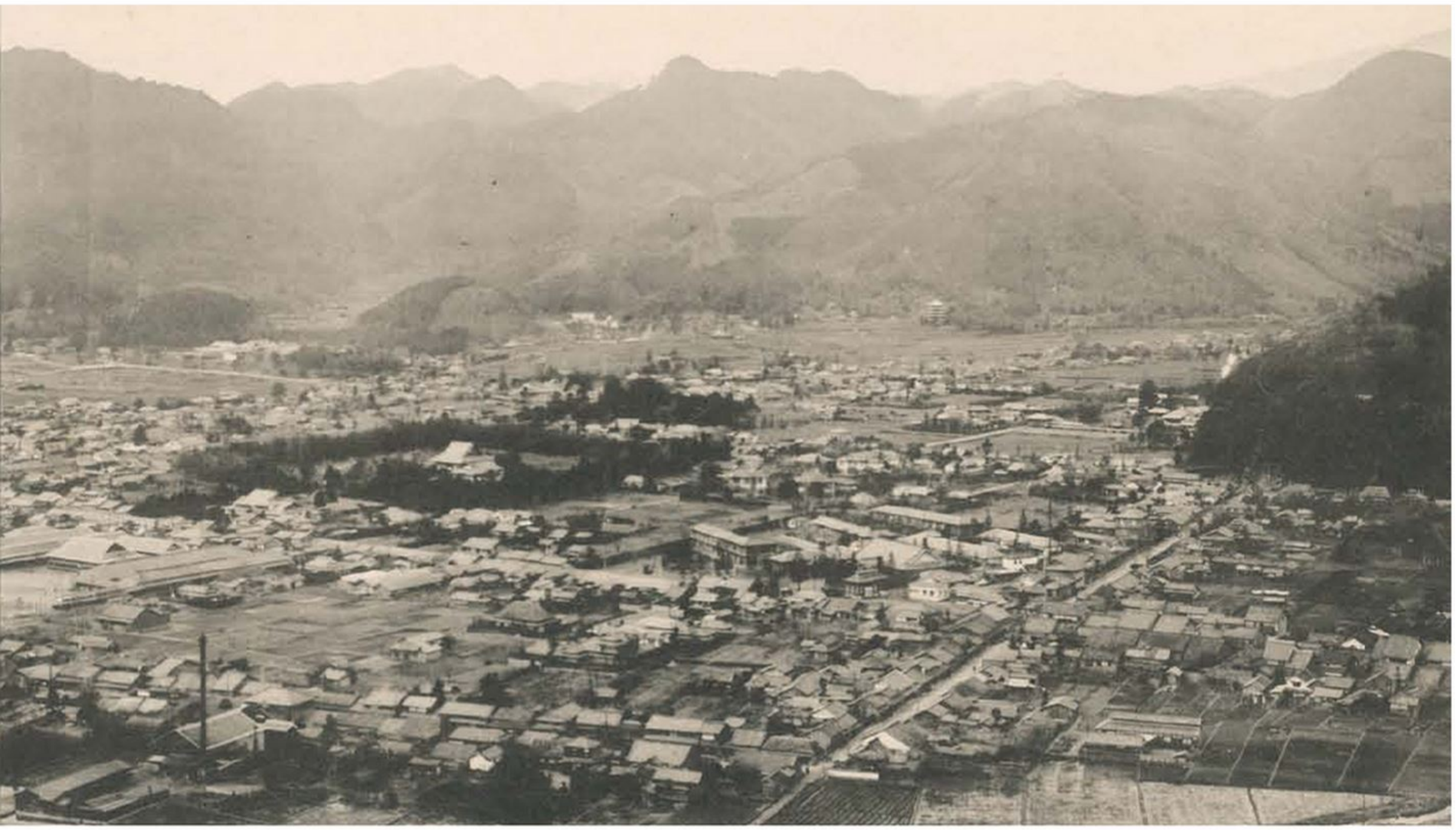
光市出身。弁護士、貴族院議員、司法大臣。東京帝国大学法科に進学、高等中学校当時の校長、岡田良平や伊藤博文から学費の援助を受け、苦学した。

第8回卒業生　**河上 肇**

岩国市出身。経済学者、社会思想家。東京帝国大学法科に進学。「社会主義評論」を新聞に連載、マルクス経済学を研究した。昭和8—12年、治安維持法違反により入獄。

第10回卒業生　**鮎川 義介**

山口市出身。実業家、政治家。東京帝国大学工科に進学。芝浦製作所(現在の東芝)に職工として入社したのち渡米、帰国後起業し、のちに日産コンツェルンを形成した。



明治末頃の山口

山口高等中学校時代を含めて三度校長を務めた河内信朝先生を讃え、
昭和9年に銅像が建てられた。

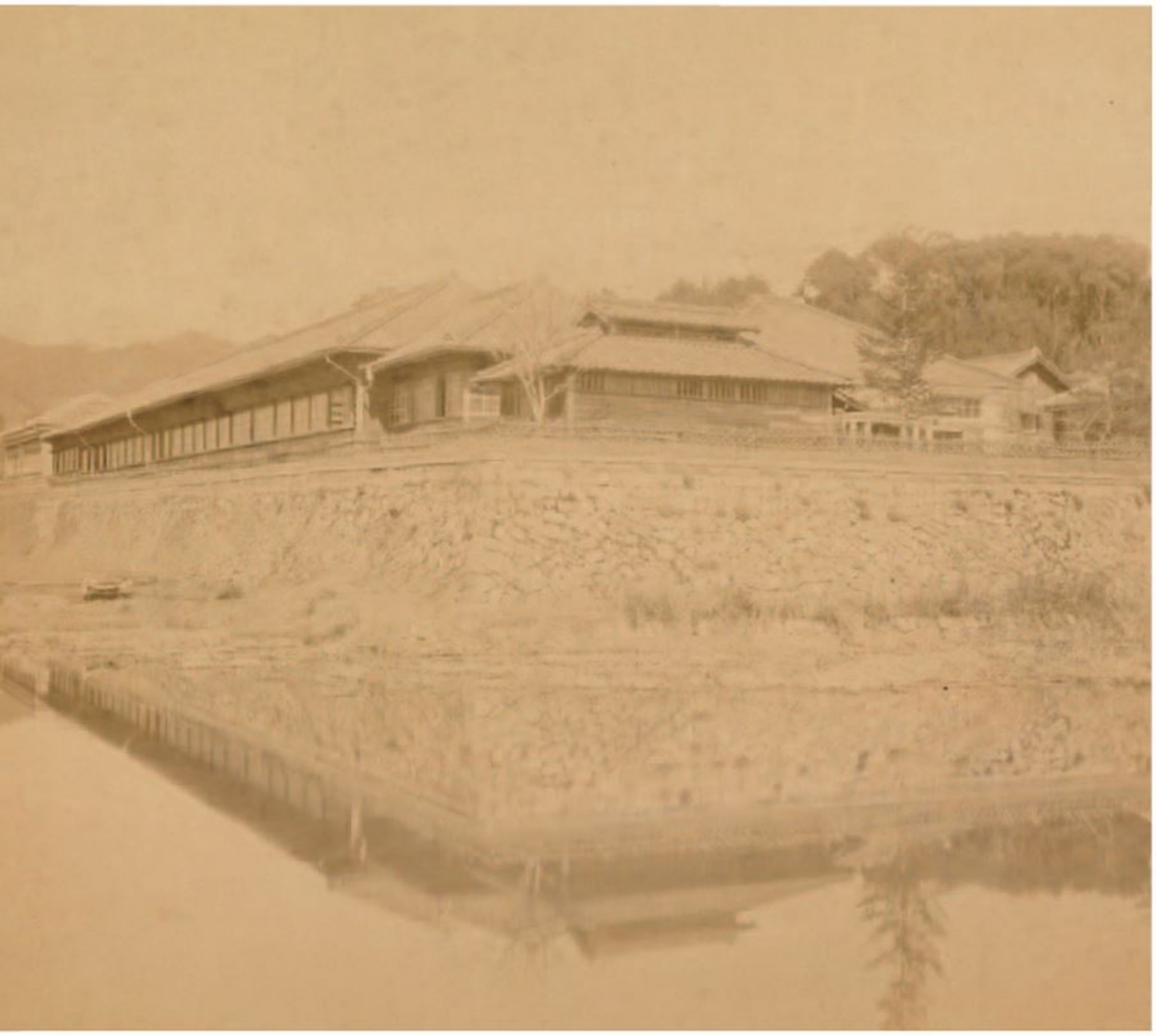
旧旧山高の終局

全国的に高等教育熱が高まりだした明治30年ころから、入学志願者が急増する。そのため文部省は、各高等学校の入学制度に統制を加えるようになった。

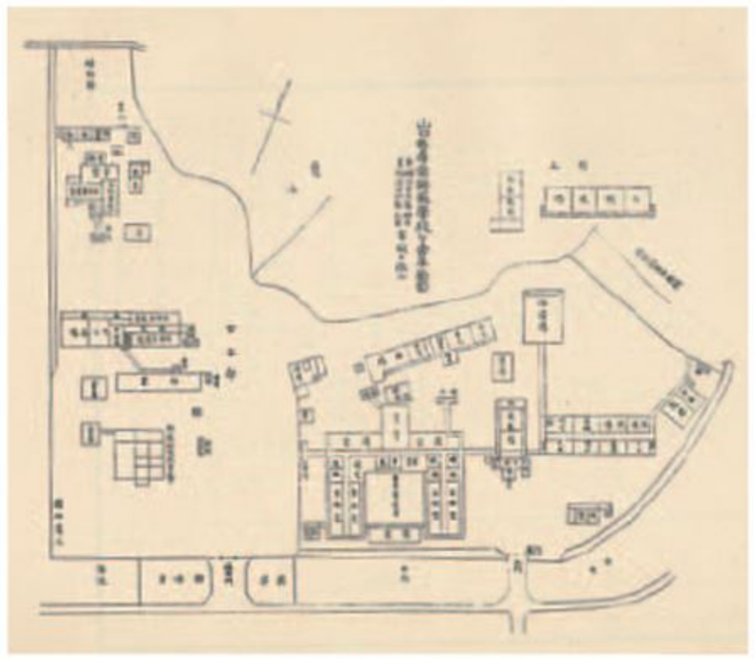
明治35（1902）年からは全国で共通選抜試験が実施され、合格者の志望と試験成績によって入学する学校が決められることになった。これにより、明治37年には、山口高等学校生徒中、県内出身者は20％足らずとなる。

山口県の教育振興を主旨として設立され、入学・授業料の両面で県内の子弟を優遇してきた防長教育会であったが、その方針が時代に合わなくなり、また、入学者の増加や物価高騰により経済的な負担に苦しむようになる。

明治38（1905）年、ついに学校経営を断念、経費をすべて国庫に移した。同年7月、最後の卒業式をおこない、山口高等中学校につらなる山口高等学校は19年にわたる歴史に幕をおろした。その後は、**官立山口高等商業学校**として引き継がれることになる。



山口県尋常師範学校校舎（明治時代）



山口県尋常師範学校校舎平面図（明治24年頃）

第1回山口県師範学校運動会（明治34年ごろ）

10

教える道の発祥、師範学校

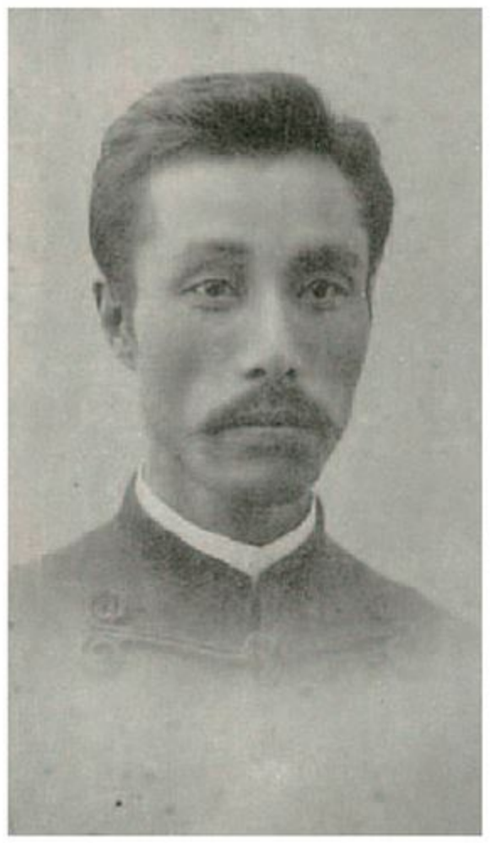
師範教育の確立へ

明治7（1874）年、山口と岩国に**教員試験所**が設置され、授業の伝授がおこなわれる。同年、文部省に届け出て旧山口明倫館の隣（現在の山口市役所附近）に「**山口県教員養成所**」を開設、本県における師範教育のはじまりとなる。

明治10（1877）年、政府は官立の師範学校を東京のみとし、それ以外は地方に設立をまかせた。県は教員養成所を「**山口県師範学校**」と改称、初代校長に長屋又輔を任命し、修業年限1年半として文学、数学、史学など11科目を教授した。明治17（1884）年には3年制の女子師範学科が併設される（明治28年廃止）。明治18（1885）年、「**山口師範学校**」に改称。

明治19（1886）年4月「師範学校令」が公布され、師範学校は小学校教員を養成する「尋常師範学校」と尋常師範学校・尋常中学校の教員を養成する「高等師範学校」（官立で東京に1校のみ）に分けられた。これが、戦後の新学制まで続く日本の教員養成の原型となった。山口師範学校は「**山口県尋常師範学校**」と改称され、修業年限4年で、倫理、教育、国語など19科目を教授、全寮制による軍隊式管理をおこなった。

明治31（1898）年、師範教育令の制定を受け、「**山口県師範学校**」と改称された。



山口県師範学校　**上司 淵蔵 校長**

明治16年に長屋校長の後を受けて校長に就任した。教員養成所設立当初からの9年間、学校長として13年間の計22年の在任に及び「山口師範育ての親」として評価されている。

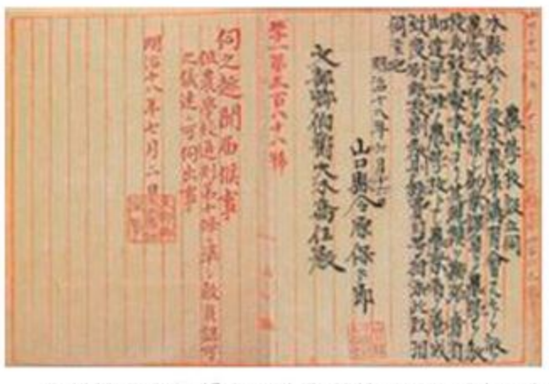
氷上校舎全景

農学校通則(明治16年)

11

農業教育のめばえ

―農学校



農学校設立伺(「小郡農業学校100年誌」より)

学制による農業教育

明治16(1883)年、県は、山口上宇野令(現在の山口市民会館の地)にあった栽培試験場に**農事講習会**を開設し、農家の子弟に農業教育をおこなうようになった。翌年には、獣疫の流行から獣医の必要に迫られ、**獣医講習会**を併設した。明治18(1885)年、両講習会を廃止し、同じ場所に「**山口県山口農学校**」を開設、獣医科も併設された。入学者は小学中等科を卒業した15歳以上のもので、修業を2年とし、実務者の養成を目的に教育をおこなった。明治23(1890)年には、大内村氷上に移転する。

その後、度重なる教育制度の改変で、校名、修業年限、定員などが変わっていく。

明治28(1895)年、氷上校舎に「山口県簡易農学校」を併設するが、3年で農学校に併合。さらに明治32(1899)年、「実業学校令」の制定に伴い、農学校は「**山口県農業学校**」と改称された。明治43(1910)年には氷上から吉敷郡小郡町に移った。

こうして県で最初の実業学校としてスタートした農学校は、国の実業教育の改革と軌を一にしつつ、山口県の農業教育に大きな功績をのこした。

開校式記念撮影

12

山口高等商業学校の成立

旧旧山高から引き継いだ校舎本館

全国3番目の官立高商

明治30年代、日清戦争後の日本では産業が発展し、実業教育振興の機が熟していた。相次いで実業学校が設立され、明治36（1903）年には「専門学校令」が制定される。

そのような時代のなか、政府は、国庫に移管された山口高等学校（旧旧山高）を「高等商業学校」（高商）に変更することを決定する。こうして、明治38（1905）年4月、官立の「**山口高等商業学校**」が、東京高商、神戸高商につぐ全国で3番目の高商として誕生した。同年誕生した長崎高商よりほんの一足早かったわけだが、「全国で3番目」は名声を高める要因となり、山口高商生の誇りでもあった。

第1回入学者は101名で、5月8日に入学式がおこなわれた。また、2年後の明治40（1907）年5月8日には、防長教育会会長、山口県知事ら130余名の来賓をむかえ、開校式が盛大におこなわれた。夜には校舎をイルミネーションで照らし、花火がうちあげられた。職員生徒・来賓が「高商」の文字を染めた提灯を手に市内をめぐる行列は4時間におよんだという。いわば時代の花形である「高商」の誕生を、地元をあげて歓迎したのである。

校門

開校時帽章

実践室　山口高商は他の高商にさきがけてタイプライターを導入した

図書館閲覧室

図書館書庫外観

当時の商品陳列室

経済学部東亜経済研究所書庫に保存されている当時の図書

現在の商品資料館
商品標本は現在も商品資料館に継承されている。
右の黒い建物は東亜経済研究所

図書室、商品陳列室の充実

開校式の式辞で松本源太郎初代校長が4か条の教育方針を述べているが、そのなかで注目されるのが、次の2項である。

第一　高等商業学校トシテノ本校ハ徒ラニ深遠ナル空理ニ馳セス実際ニ重キヲ置クヘキコト

第三　本校ノ卒業生ハ成ルヘク満韓地方ノ実業ニ従事セシムル目的ヲ以テ教育スルコト

第一項を反映して、授業科目は旧旧山高時代から大きく転換、商法や商業学、商品学などに重点が置かれることになった。これにともない、施設の充実が急務となる。

まず、防長教育会から臨時に寄付金を受け、商業・経済・法律関係の専門書を収集。海外留学する教官に現金を持たせ、洋書を購入させた。増加する図書のために明治43(1910)年には書庫を増築している。

また商品学の施設として、教室を改造して商品学講義室と商品陳列室をもうけた。ここに陳列する商品標本は、教官が出張の際に購入したり、生徒に寄贈を呼びかけたりして集め、大正4(1915)年末には、6,629点(時価13,244円余り)をそろえることができた。

大陸への修学旅行（旅順 松樹山砲台にて）

大陸への修学旅行（蘇州 寒山寺にて）

支那貿易科研究室

貿易別科　臨海学校の様子
修業年限が1年と短いため、夏季休暇を利用して特訓を行った。

外国語の授業

満韓経営への人材育成

教育方針の第三項にみるように「満韓地方ノ実業」を重視した山口高商だが、時局に応じて、その地域を中国（支那）にも拡大していった。

大正から昭和にかけ、「支那貿易講習科」（その後、「支那貿易科」、さらに「東亜経済研究科」と改称）、「貿易別科」、「支那科」を新設して、中国・南洋貿易で活躍する人材を育てたほか、「東亜経済研究会」（大正6年）と「東亜経済研究所」（同10年「調査部」として設置。昭和8年に改称）を設立して、東アジア経済の研究に力をそそいだ。

東亜経済研究会と東亜経済研究所は一体となって、研究のための資料を調査・収集するとともに、研究会や講習会を開催し、書籍や機関誌「東亜経済研究」を発行した。この「東亜経済研究」には、執筆者として山口高商や帝国大学の教授、満鉄調査部職員らが名をつらねており、最高の研究水準をしめすものだった。

注目をあびたのは、明治40年から大正12年までおこなった満韓修学旅行である。30日程度の行程で中国、朝鮮各地の商店や工場を見学し、実業界の講演を聞いた。外国旅行をおこなう実業専門学校はほかになく、カンカン帽姿での修学旅行は山口高商名物になったという。

記念祝賀式当日の正門

祝賀式

ポスター展覧会

土産品展覧会

記念大運動会

提灯行列

広告祭

大音楽会

ポスター

高商改称30周年

昭和10(1935)年、山口高商は改称30周年をむかえた。祝賀式には、九州帝国大学総長や公爵毛利元昭代理、山口県知事、京都帝国大学法学部長らを来賓に招き、参列者は1300人にものぼった。

また、各種の記念事業もおこなわれた。主なものをあげても、日本経営学会山口大会を招致しての公開講演会や研究懇談会などの開催、沿革史展覧会・図書館展覧会・ポスター展覧会・土産品展覧会など各種展覧会、大音楽会の開催、そして、記念大運動会や長崎と大分の高商をむかえての野球リーグ戦開催など、多岐にわたった。

学校、生徒だけでなく、市民が参加して祝賀を盛りあげたことも特筆されるだろう。提灯行列では市内の諸学校や一般市民も行進して高商運動場へ。山口市商工会では広告祭を挙行し、商品を広告する仮装行列をおこなって、市民の目をおどろかせた。

記念出版としては、記念論文集や経営学論集、『山口高等商業学校沿革史』をまとめた。

「昇格か廃校か」と書かれた旗を掲げ町内を行進する生徒たち

大学昇格運動 — 幻の防長大学

大正9(1920)年に東京高商が大学に昇格した。その前々年に公布された「大学令」で単科大学が認められたためで、ほかにも神戸高商など5校の大学昇格案が報じられた。

この動きに山口高商生も鋭く反応し、同年11月、400名余りの生徒が亀山公園に集まり学生大会を開催、山口高商の大学昇格を期して、血判状に名前をつらね、山口町内を練り歩いた。さらに実行委員10名が決議文を携えて上京、有力者への協力要請もおこなった。

学校側も「商科大学に昇格し、法学部を併置して総合大学とする」という「防長大学設立趣意書」をまとめ、校長・教授が上京した。しかし結局、運動は実らなかった。研究科設置の承認を得たが、関東大震災に見舞われ、その財政難のあおりを受けて見送られてしまったのである。その後も運動を継続したが、ついに日の目をみることはなかった。

学生生活 — 学友会と鳳陽寮

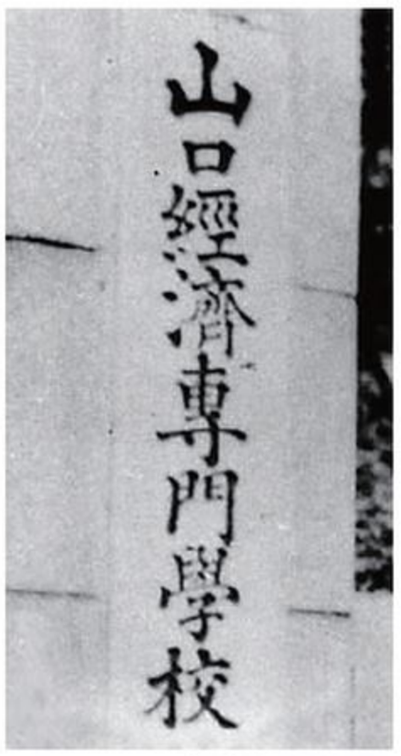
明治後期、山口高商への移行期に学友会を構成した部は、邦語講談会、英独講談会、剣術会、柔術会、ベースボール部、ローンテニス会の6部だった。大正期には、「商学研究会」が結成され、「商学研究雑誌」を発行、また、生徒の意見発表の場として、「山口高商新聞」も発行された。昭和期に入ると部は急速に増えて、学友会所属の部は23部(文化部6、運動部17)にのぼった。

旧旧山高のものを引き継いだ寄宿舎は、大正11(1922)年に「鳳陽寮」と名づけられた。昭和4(1929)年には5棟の寮舎と建物を新築、東中寮ではベッドが使用され、当時としては画期的だった。

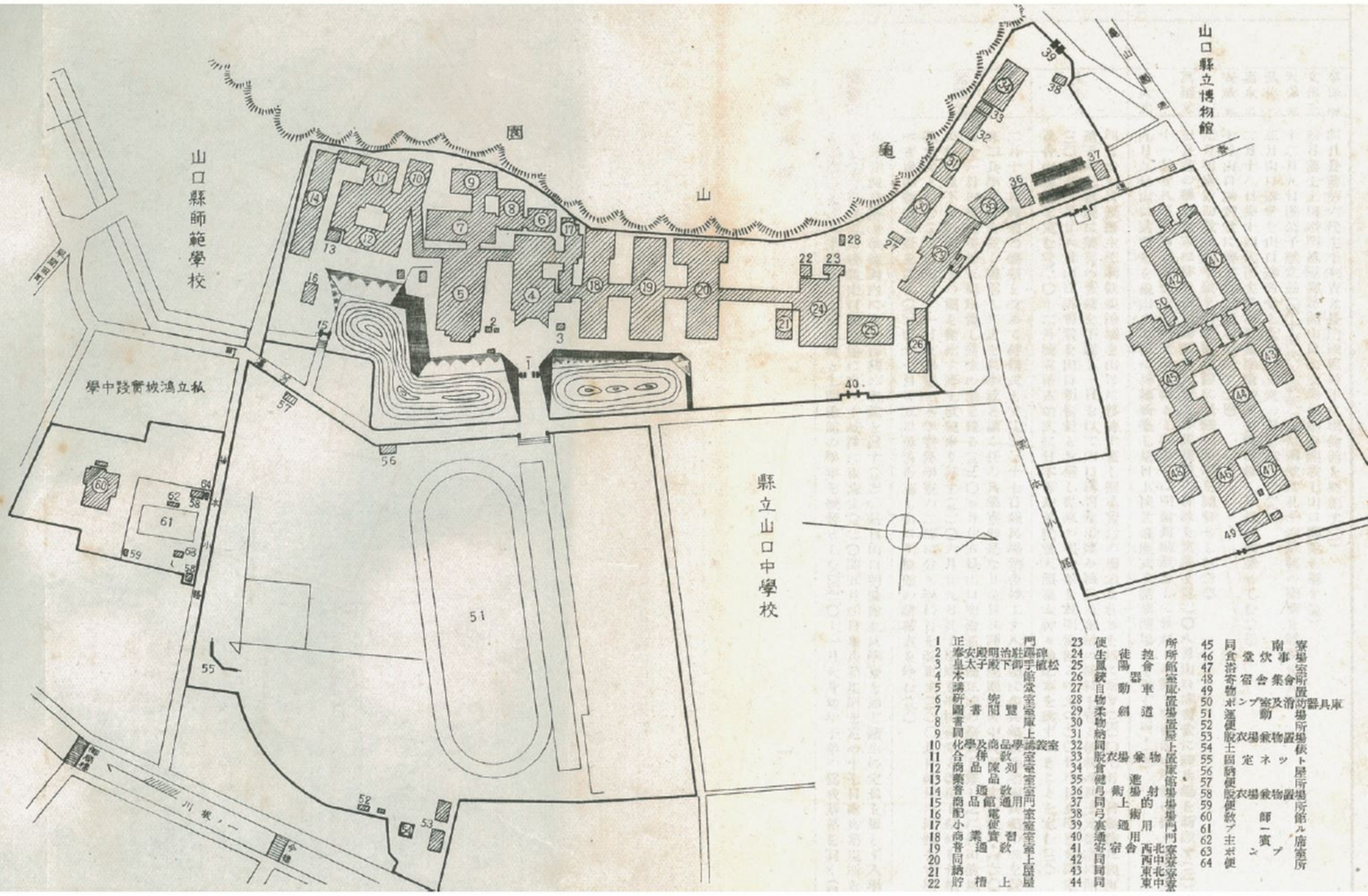
経済専門学校へと改称

昭和16(1941)年における卒業生の就職状況をみると、まず、就職率が高いのは、当然ながら、商業金融関係である。次いで鉱工業(経理や企業会計部門に採用されたと考えられる)で、三井、三菱、住友など財閥系企業や日産コンツェルン系列などの大企業が就職先となっている。また、南満州鉄道、朝鮮銀行、東洋拓殖などに採用され、外地へ赴任したものも多かった。進学先の上級学校は、九州帝国大学、東京商科大学、神戸商科大学などとなっている。

昭和19(1944)年、全国の高等商業学校、商科大学から、「商業」の呼称が消されることになり、山口高等商業学校は「**山口経済専門学校**」へと改称された。



山口経済専門学校門標



山口高商平面図(昭和14年ころ)

山口高商新聞

寮生の居室

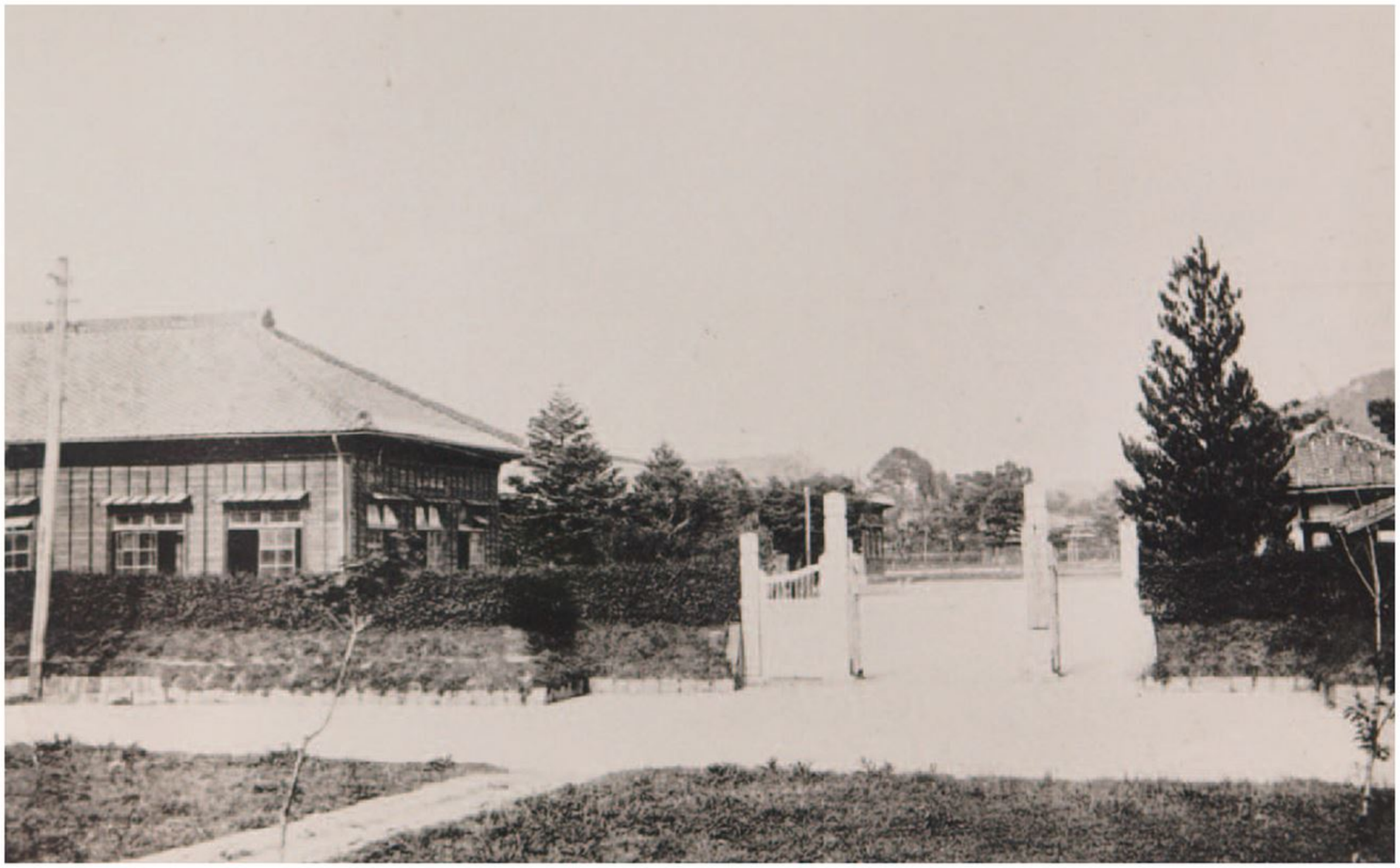
鳳陽寮(昭和4年3月新築)

広告研究会 会誌

排球部

ストーブ会議

自動車練習



山口中学校校舎（現在の山口県立山口図書館付近）

13

山口高等学校の再興

山口県への高等学校誘致運動

旧旧山口高等学校が廃校となって以来、県下から大学へ進学することがきわめて不便となっていた。大学進学のためには他県の高等学校に入学しなければならず、これが経済的に大きな負担だったのである。みかねた在京の卒業生らは、母校の復活を政府に請願していたが、なかなか見通しがつくものではなかった。

しかし、大正期に入り、全国で高等学校への入学希望者が増え、産業界から優秀な人材をもとめる声が高まると、いよいよ政府は、高等学校４校の新設を決めた。

これを受けて、山口県を含め全国で誘致運動が起こった。設立のための地元負担金は約55万円。この時代としては莫大な金額だが、防長教育会、卒業生、毛利氏、財界人、山口町などが力を尽して59万円以上をあつめ、ついに、山口県に１校を設置することが承認された。

こうして、大正８(1919)年４月、「高等学校令」により、山口県山口町に念願の**官立山口高等学校**が設立された。この時新設されたのは山口、新潟、松本、松山の４校。それまでにあった第一高等学校から第八高等学校までの８校を合わせ、官立高等学校は12校となった。

設立資金内訳	
防長教育会	200,000円
久原 房之助	80,000円
藤田 平太郎	80,000円
藤田 政輔	40,000円
毛利氏	100,000円
山口町（敷地用）	60,000円
山口県予算	37,000円
計	597,000円

代用学生寮となった山口師範学校女子部寄宿舎跡（下竪小路）

新保寅次校長

旧制山高始動！

初代校長には、鹿児島県立第二中学校長であった新保寅次がつき、開校の準備がすすめられた。校舎の建設が間に合わなかったため、当面、県立山口中学校（現在の山口県立山口図書館の敷地）の一部を仮校舎とすることになった。また、町内に4 か所の代用学生寮を置いた。7月、身体検査と7科目の学科による入学試験で、669名の受験者から160名の入学者が選ばれ、9月、山口中学校講堂において第1回入学宣誓式がおこなわれた。

修業年限は3年、「文科」と「理科」に分かれ、さらに第1外国語の選択により、「甲類」（英語選択）と「乙類」（ドイツ語選択）のクラスに分かれた。文科、理科ともに外国語教育に重点をおいたのは、旧高等学校令以来の伝統でもある。

校章

COLUMN 初代校長 新保寅次

新保校長は、新潟県生まれ。東京の一高出身だったが、旧制山高生には、一高、三高を凌駕せよとハッパをかけた。このころの学生はバンカラをきどり、時にはハメをはずし不始末をしでかすこともあったが、新保校長は、寛大に接し、常に学生の自主自立を尊重した。このような校長を、学生たちは「親爺」と呼んで慕い、転任の際には留任運動が起こったほどである。

校舎本館（玄関）

講堂

現在の講堂（県立山口高等学校内）平成18年改築
現在、記念館として県立山口高等学校の敷地内に残っており、
管弦楽部の部室として使用されている。

落成式

寄宿舎（鴻南寮）

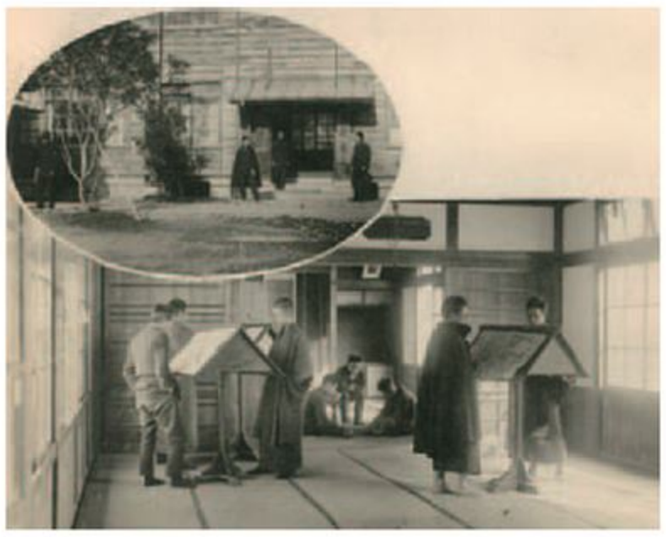
校舎の建築と火事による焼失

開校から1年後の大正9（1920）年8月、山口町宇野令糸米（現在の県立山口高等学校の敷地）に、まず、校舎本館と寄宿舎（鴻南寮）3棟が完成し、9月1日、山口中学校の仮校舎から移転した。その後、特別教室、講堂なども、引き続いて完成してゆき、大正11（1922）年4月にすべての建築工事が終了した。

5月16日、新しい講堂でおこなわれた校舎落成式には、文部省学務課長、山口県知事、毛利元昭公爵ほか、地元各界の来賓250名がまねかれ、校舎の完成を盛大に祝った。

しかし、それから14年後の昭和11（1936）年、校舎は災難にみまわれる。10月29日未明、本館2階から出火した火災で、本館を焼失してしまったのである。重要書類や調度品の大部分は運び出されたが、十数年にわたって県下から発掘、収集していた考古学資料や歴史資料が焼失してしまったのは、まことに残念なことであった。

火災後は、体操場や他の教室が本館の代用として使われ、翌年6月には、新校舎が完成した。



鴻南寮・新聞閲覧室

校内売店

当時流行したバンカラなスタイルの学生たち

陸上部

新保校長の銅像の前で

バンカラな学生生活

旧旧山高の廃校から14年という空隙があったためか、設立当初の旧制山高には、伝統にしばられるという悪弊がなく、自分らで校風をつくっていこうという開拓精神が息づいていた。学生たちは自治と自由を尊び、勉学やスポーツだけでなく、学校行事や校友会活動も活発におこなった。

毎年秋には創立記念祭が催され、運動会や余興、運動部の大会や展覧会のほか、寮の飾り付け、提灯行列でにぎわった。

運動部と文化部からなる校友会には、学芸、弁論、野球、剣道、蹴球（サッカー）、水泳などの部が属し、なかでも野球部は、松山高等学校との親善試合を大正9（1920）年から昭和22（1947）年までおこない、山高では全校をあげて応援に出向くほどの一大イベントとなっていた。

文化部が発行した会誌には、この時代を反映して、戦争の影響や左翼的な動向もみられ、時代とともに変化してゆく当時の学生の思想をとらえることができる。

COLUMN

金メダリスト 田島直人選手

昭和4（1929）年から3年間、旧制山高に在学し、陸上部の花形選手だった田島直人は、昭和11（1936）年のベルリンオリンピックで、三段跳びに出場し、世界新記録となる16mを跳んで金メダルを獲得した。この快挙に母校、旧制山高の教授、生徒は大いに沸いた。オリンピックで贈られたオークの苗木は京都大学に植えられ、その実から育てた苗木が、現在の県立山口高等学校にも植樹されている。

山口県女子師範学校全景（大正9年頃）

明治28年に完成した山口県尋常師範学校本館（昭和2年焼失）

山口県師範学校正門

山口県室積師範学校正門

昭和4年に完成した山口県師範学校本館

東京への修学旅行（二重橋の前にて）

14

山口県師範学校

山口県室積師範学校の開設 ― 二師範時代の開幕

師範学校は授業料が無償で、学費も支給するなど、経済的な事情から進学を断念したものにも、勉学への門戸をひらいていた。明治のはじめに教員養成所から出発し、多くの卒業生を小学校の教壇に送った山口の師範教育。その流れをおおまかにたどってみよう。

明治31（1898）年、山口県尋常師範学校を「**山口県師範学校**」へと改称。

大正3（1914）年、室積の県立工業学校を転用して**山口県室積師範学校**が開校（現在の教育学部附属光小・中学校の敷地）。山口県師範学校は「**山口県山口師範学校**」へと改称し、県には2つの師範学校がならび立つことになった。

大正9（1920）年、室積に**山口県女子師範学校**が設立された。これにより室積師範学校は廃止される。山口県山口師範学校は再び改称され、「**山口県師範学校**」となる。

昭和18（1943）年、「師範教育令」の改正により、師範学校は高等専門学校に昇格することになった。これにより、山口県師範学校と山口県女子師範学校は統合され、**官立山口師範学校**に昇格された。この官立への昇格が、のちの山口大学教育学部へとつながっていく。

室積師範学校の制服
（『室積師範学校一覧』より）

明治34年4月に完成した寄宿舎

寄宿舎自習室

教育実習の様子

鎌倉への修学旅行

奉公塾の塾舎

相撲部

学校生活 — 教師育成の場として

当初から師範学校は全寮制であり、師範教育の充実とともに寄宿舎の整備も進んだ。山口尋常中学校（現在の山口市民会館の場所）移転後の建物を増改築して、明治34（1901）年4月には、寄宿舎3棟と食堂が完成。玄関と道路の間に広場があり、テニスコートや器械体操具を配した、ハイカラな建物であった。

明治36（1903）年に創設された校友会では文化部、運動部が活動し、心身の強化鍛錬という立場から運動部の活動はとくに奨励された。おなじく心身の修養鍛錬を目的に、明治38（1905）年からは、椹野川や室積湾で水泳鍛錬がおこなわれた。

附属小学校の訓導（正教員）の指導の下、70日間にわたる教育実習は、学習の総仕上げであり、その間は、猛勉強する生徒で深夜まで寮の明かりが消えなかったという。

最終学年の5月には、9日間の修学旅行があった。昭和15（1940）年の旅行では、東京、京都、大阪の「三府」と、奈良、鎌倉を見学し、9日目の朝6時ごろ帰ったようである。

昭和14（1939）年から18（1943）年ころまで、山口市内の法泉寺（現在の滝町の辺り）に田地と農家を借り受け、「奉公塾」が開設された。生徒はここに1週間入塾して、農地の開墾や作物の植え付けなどに従事した。

記念運動会の模様

記念式典で式辞を読む山本昇校長

記念運動会の模様

祝賀会

郷土展覧会の様子

校訓

教育ニ関スル勅語ノ
聖旨ヲ奉体シ、
敬虔報謝ノ念ヲ培イ、
自治協同事ニ当リ、
勤労奉仕ニ努メ、
質実剛健ナル精神ヲ養ヒ、
之ヲ貫クニ至誠ヲ以テシ、
以テ天壌無窮ニ皇運ヲ
扶翼シ奉ルコトヲ
得ヘキ善良有為ノ
国民教育者タラムコトヲ期ス

創立60周年記念事業

山口県における師範学校の前身である山口県教員養成所の開設から、60周年にあたる昭和9（1934）年10月、当時の金額で総額3540円を投じ、創立60周年の記念式典が挙行された。

創立記念式と記念祝賀会のほか、60年史の刊行、校訓・校歌の制定、記念運動会、記念学芸会、郷土展覧会など多彩な行事がおこなわれた。

校訓は、山本昇校長により、これまで培われてきた伝統をもとに制定された。戦前の師範教育の中核をなした「師道の錬成」がうたわれ、当時の山口県師範学校の教育目標を如実にあらわしたものとなっている。生徒はこれを暗唱し、ことあるごとに斉唱したという。

校旗

教官・学生集合写真

校庭に整列する学生

漁をする学生

農作業風景

農作業風景

山口県立青年学校教員養成所

実業補習学校農業科教員養成所の門

青年師範学校 — 実業教育の教員を養成

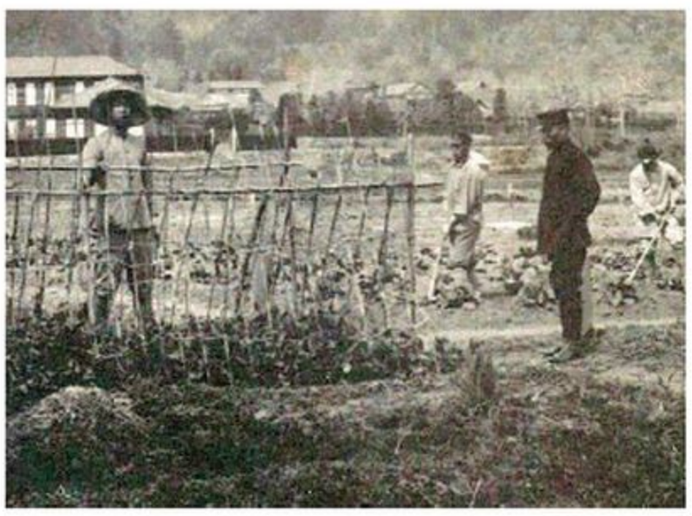
明治時代、日清・日露戦争を契機として国の経済が発展すると、産業に従事する勤労青少年の教育が急がれるようになった。彼らに実業教育と普通教育の補習をおこなう学校として生まれたのが、「実業補習学校」である。

この学校の農業科専任教員を養成するため、山口県山口師範学校におかれた**農業教員養成所**が、のちの青年師範学校へつながる源流である。

一方、第一次大戦後、勤労青年に対して軍事教育を施す「青年訓練所」が設置された。昭和10(1935)年になって、この2校、実業補習学校と青年訓練所は統合され、勤労青年に中等教育程度の教育をおこなう定時制の学校、「青年学校」がうまれる。

明治時代の農業教員養成所は、幾度かの改編を経て、この青年学校で教える教員の養成所となり、昭和16(1941)年、女子部をもつ**山口県立青年学校教員養成所**として防府の三田尻(現在の桑山)に移転した。昭和19(1944)年、「師範学校令」の改正にともない、養成所は**官立山口青年師範学校**となった。官立への昇格で、青年教育の飛躍が期待されたが、残念ながら、大きな成果をあげることなく戦後を迎えることになった。

山口県立小郡農業学校 山手校舎全景



農科蔬菜実習

林科害虫駆除実習

明治43年に完成した寄宿舎

（『山口県立山口農業学校百年史』より）

品評会

15

農業教育の発展

山口県立小郡農業学校 ― 県の農業教育の中核

明治43（1910）年に、小郡町に移転した山口県立農業学校は、県の農業教育の中心として発展していた。

大正12（1923）年、「**山口県立小郡農業学校**」と改称。昭和19（1944）年に、山口県立小郡高等女学校を統合した。戦後は、昭和23（1948）年の学制発布により、「山口県立山口農業高等学校」と改称し、新制高等学校として歴史をあゆんでいくこととなる。

大正時代から戦前までの農業教育は、以下のような内容であった。

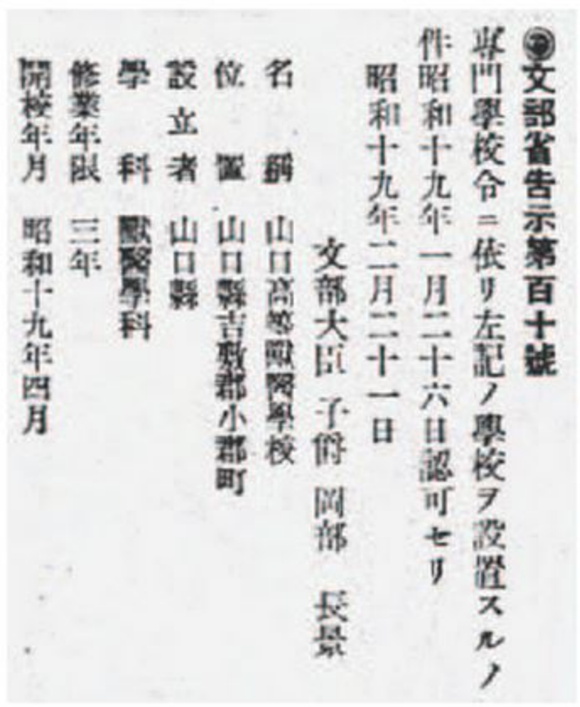
分科は農、林、養蚕、獣医畜産の4科で、授業は、午前に学科、午後に実習というかたちでおこなわれていた。カーキ色で折り襟の上下服、ゲートル地下足袋姿が、お決まりの実習服であった。

大正時代、農業学校での教育には徳性や人格の陶冶も織り込まれていたから、寄宿舎での生活はきびしく指導され、訓育や勤労作業が重視されていた。

家畜舎(『山口農業高等学校100年史』より)

山口高等獣医学校仮校舎(小郡高等女学校校舎)

山口高等獣医学校仮校舎(小郡高等女学校校舎)



◉文部省告示第百十號

專門學校令ニ依リ左記ノ學校ヲ設置ス

件昭和十九年一月二十六日認可セリ

昭和十九年二月二十一日

文部大臣 子爵 岡部 長

名 稱 山口高等獸醫學校

位 置 山口縣吉敷郡小郡町

設立者 山口縣

學 科 獸醫學科

修業年限 三年

開校年月 昭和十九年四月

山口高等獣医学校設置認可の告示
(文部省告示第110号)

16

獣医教育の再興

山口高等獣医学校
(山口獣医畜産専門学校)跡

移転感謝祭(昭和24年3月)

山口高等獣医学校の創設と山口獣医専門学校への改称

昭和に入ると、農業学校の獣医畜産科に大きな変化がおこる。

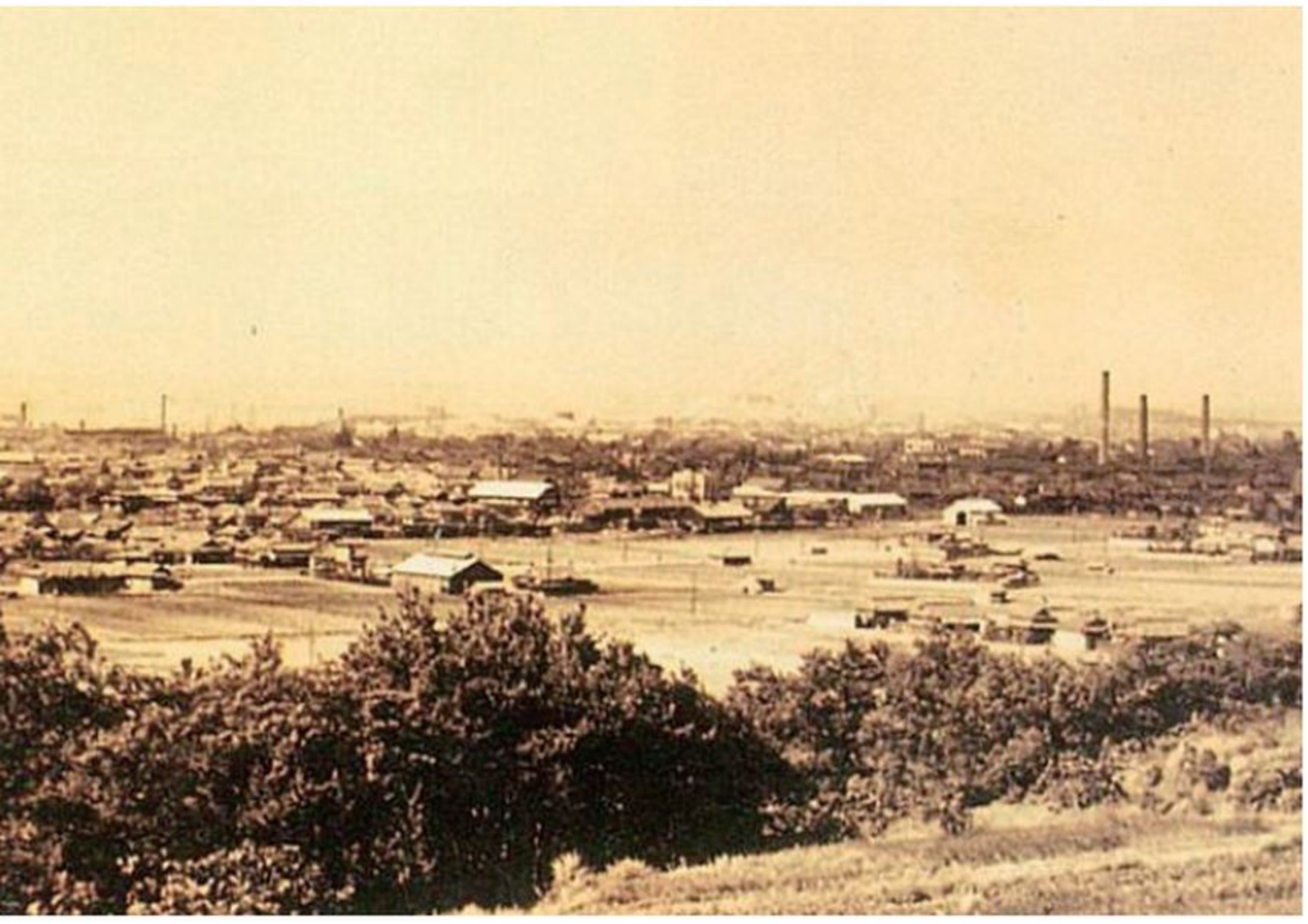
従来、獣医師免許は、農業学校卒業生には無試験で交付されていたが、大正15(1926)年の「獣医師法」により、専門学校以上の卒業生でないと交付されないことになってしまった。

このため、山口県立小郡農業学校では、県下唯一の獣医師養成機関であった獣医畜産科の獣医部門を、昭和11(1936)年、いったん廃止する。その後、第二部獣医科を新設し、獣医師試験の受験資格が得られるようにした。

昭和19(1944)年、この第二部獣医科を専門学校として独立させることとなった。終戦直前の財政難の時期であったが、県から140万円、小郡町から70万円(現在の金額で約90億円)という巨額を支出し、同年4月、**山口県立山口高等獣医学校**が誕生した。卒業者は、高等学校2級、中学校1級の教諭(生物、理科、畜産、保健)免許と、無試験で獣医師免許証を取得することができた。

太平洋戦争の状況は日を追って悪化しており、開校はしたものの、校舎新築はならず、当初は小郡農業学校に同居、3か月後には、移転した小郡高等女学校の校舎を仮校舎とした。

昭和20(1945)年、「**山口獣医畜産専門学校**」と改称。昭和23(1948)年末に下関市長府校舎へ移転し、翌年新制山口大学に移行することとなる。



昭和13年頃の宇部市

開校当時の下松工業学校(『久原房之助』より)

17

工業教育のめばえ

官立高等工業学校を誘致

渡辺祐策(『素行渡辺祐策翁』より)

明治30年代、国内では産業が飛躍的に発展し、工業教育が重要度を増してくる。

山口県では、明治36(1903)年、室積に、造船と機械工業従事者を養成する県立工業学校が設置されたが、大正3(1914)年には廃校となった。

その後、郷土の産業人の支援を受け、県立工業学校が再び設置される。県は、宇部共同義会から寄付金30万円を受け、大正10(1921)年、宇部に山口県立宇部工業学校を設立。同年、実業家久原房之介からの33万円の寄付により、下松に、山口県立下松工業学校が設立された。

昭和13(1938)年、戦局が拡大するなか、技術者の拡充をはかるため、文部省は7つの官立高等工業学校を新設することとした。そのうち1校が山口県につくられることになり、これに、新進工業都市として発展しつつあった宇部市が名乗りをあげる。

建設用地として高台に約4万坪という広大な土地(現在の常盤台)が確保され、宇部市、地元企業からの寄付と県の資金をもとに、昭和14(1939)年、**官立宇部高等工業学校**が誕生した。

宇部共同義会と渡辺祐策

COLUMN

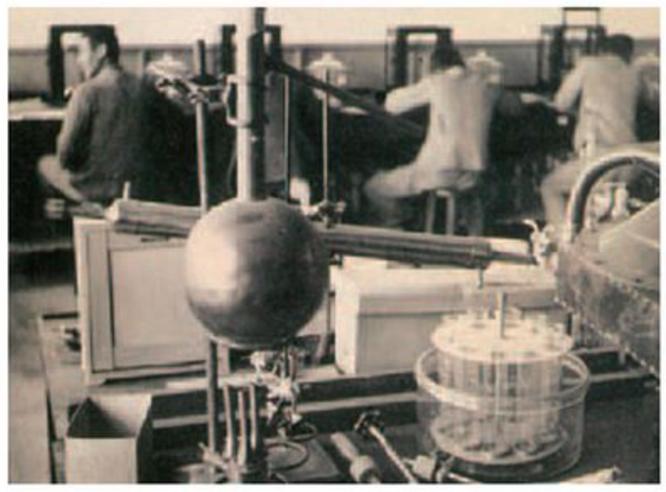
明治19(1886)年、炭鉱の採掘権を共同で管理するために設立された宇部共同義会は、石炭需要の高まりにつれ、大きな財団に成長し、宇部の公共施設、社会福祉、教育文化に巨額の寄付をした。小学校の講堂や村立中学校の建設、県立宇部工業学校の誘致などに財を投じ、宇部高等工業学校創設では、建設用地を用意した。

渡辺祐策は、宇部共同義会中、最も成長した沖ノ山炭鉱(のちの宇部興産)の頭取で、私立の工業学校を設立するなど教育機関や社会基盤の整備に尽力し、宇部村発展に大きく貢献した。

完成した新校舎

鵜之島の仮校舎

講義風景（昭和16年頃）



化学天秤測定（昭和17年頃）

常盤台新校舎への移転

福井私城校長

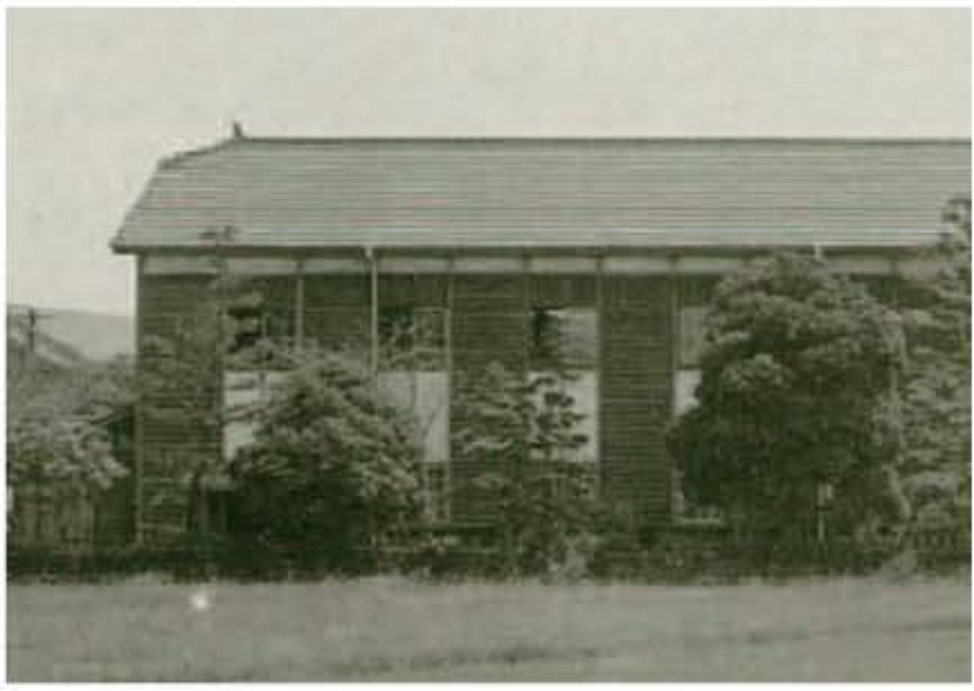
宇部高工の校章

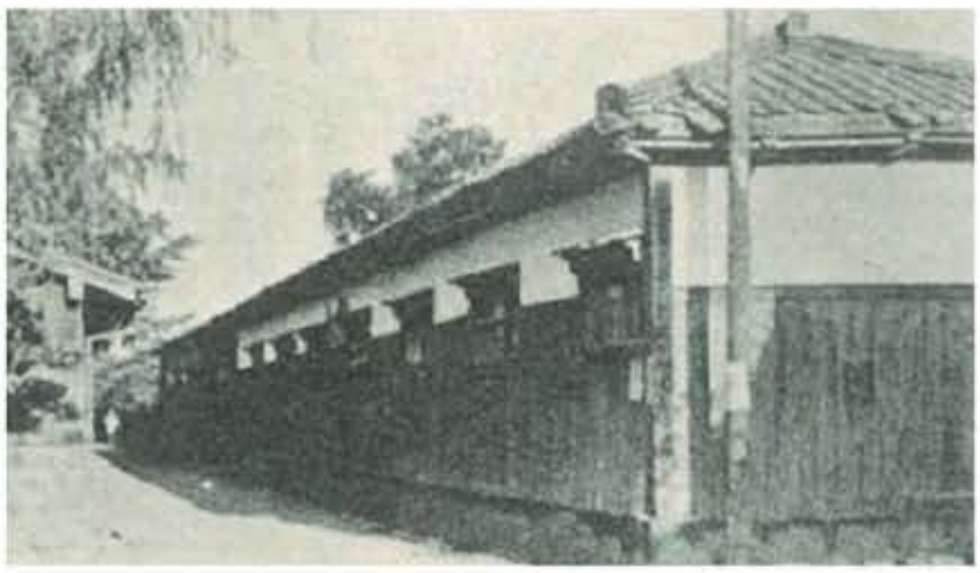
官立宇部高等工業学校の発展

初代校長には、東京工業大学予備部主事で理学博士の福井私城がつき、機械科、精密機械科、工作機械科、鉱山機械科、採鉱科の5学科200名を募集した。学内には旧制高校に近い自由闊達な雰囲気があった。鵜之島にあった仮寮では、この新設の高工をいかに他に負けないものにするか、学生が議論し、まちにくりだし気炎をあげたという。昭和15（1940）年には新築の常盤寮での生活がはじまり、名物の寮祭では、さまざまな出し物を楽しんだ。

その後、各学科で増員が続き、昭和17（1942）年には工業化学科が新設された。これには、機械系技術者の増強やエネルギー政策への重点化などをすすめる時代の要請が大きく影響していたようである。

昭和19（1944）年には、「**宇部工業専門学校**」へと改称し、工業教員養成所（機械科）を附設した。戦況が激しくなった同年の秋以降、学生は工場や鉱山へ勤労動員にかり出され、現地での出張授業もおこなわれるなかで、終戦を迎えた。





好生堂長屋門(『萩市史』より)

華浦医学校の校舎と生徒(『山口大学医学部50周年記念誌』より)

18

医学教育のめばえ

県立医学校の創設と廃止

防長における医学教育のはじまりは、文政6(1823)年にさかのぼる。

ドイツの医師シーボルトが長崎に着任したこの年、徳山藩では藩校「鳴鳳館」内に医学館を置いて医学講義をはじめた。天保10(1839)年、萩藩では大坂、江戸で蘭学をおさめた青木周弼(しゅうすけ)が藩医となり、翌年設立された医学所で医学教育がおこなわれた。この医学所は「好生館」、「好生堂」と改称し、明倫館にうつされ、のち、山口好生堂と萩分館に分かれた。

明治維新を迎えると、医科学教育にも変化がもたらされる。

明治5(1872)年、県は医術試験「壬申考試」を施行、下関には赤間関医学校が開設される。一方、山口好生堂は「山口県立山口医院」と改称後、明治7(1874)年に三田尻に移され、山口県立華浦(はなうら)医学校となった。明治9(1876)年には赤間関医学校を統合するが、県の財政難のため私学化されたり、県立として再興されたりした末、明治16(1883)年、廃校となった。

明治42(1909)年、県内の医師たちにより、山口県医師会が設立されるが、医師養成機関を復活させるにはいたらなかった。

山口県立医学専門学校旧校舎全景

病理解剖実習室

渡辺剛二

冨田雅次校長

山口医専の校章

創立当時の医専生

山口県立医学専門学校の創立

県立の医学校が明治期に廃止された後、再興がかなわぬまま、約60年が過ぎた昭和19(1944)年、宇部市下宮地(現在の北琴芝)に**山口県立医学専門学校**が設立された。

設立にあたっては、宇部興産株式会社会長で、県医師会会長でもあった渡辺剛二(渡辺祐策の次男)の尽力が大きい。設立資金250万円のうちの50万円を寄付し、県下の会社、個人、医師会等からも寄付を集めた。

初代校長には、台北帝国大学医学部教授だった冨田雅次が着任した。入学生約120名、教官は常勤・非常勤を合わせて約30名の小さな組織だったが、「昭和の松下村塾」となることをめざし、教授と学生が起居をともにして熱心な教育を実践した。

創立当初は戦時下であり、実習器具や参考書も十分ではなかったが、実験器具として備えられた顕微鏡は当時自慢のもので、空襲があるたびに奉安殿に格納したという。

昭和20(1945)年、長崎に原爆が投下されると、冨田校長以下、教授6名、助教授1名、学生18名がただちに長崎に赴き、救護、調査にあたった。

当時の開墾の様子

学校でとれた芋を食べる学生

山口経専の寮日誌
「若き者は夢を持たねばならぬ」と
新しい時代に生きる若者を
激励するような一文も見られる。

19

混迷から新しい時代へ

学舎への復帰

戦争末期、深刻な労働力不足を補うため、全国で学徒が勤労動員された。山口県の各校でも、生徒たちは毎日のように集団勤労作業にかりだされ、河川の改修、築堤、農場開墾、工場作業などをおこなった。県外への派遣や軍隊への応召で学舎をはなれる生徒、教職員もあった。

昭和20(1945)年8月15日に終戦を迎えると、学徒動員や勤労動員で各地に散らばっていた学生がもどり、9月ころから徐々に授業が再開されていった。しかし食糧難のため、授業や試験がボイコットされることもあり、混乱は長く続いた。軍学校の学生や外地の専門学校から復員した学生など、さまざまな経歴のものが編入・転入学する一方、経済的事情などで、やむなく学窓を去るものもあった。

深刻な食糧難に対応するため、各校では、授業を繰り合わせては、あらゆるところを開墾し畑にしていた。昭和21(1946)年3月頃に旧制山高が運営していた農園は、じつに校舎内外と旧射撃場の2町6反(東京ドームの約半分の広さ)におよんだ。土曜日の午後には、多くの寮生がリュックを担いで、自宅へ食糧を取りにもどった。学校では夏休みを延長したり、「食糧休暇」を設けたりして、この食糧難をなんとかしのいでいた。

学生たちの集会の様子

デモ行進

学生たちの集会の様子

県知事を囲んで昇格歌を歌う山口医専生

県知事に要望書を手渡す山口医専生

「図書等設備充実費寄附募集趣意書」(昭和23年11月)

新学制に向けて— 昇格か、廃校か

一方、日本の教育制度は、戦後の新しい体制へと歩をすすめていた。

昭和21(1946)年、「日本国憲法」公布。そして、翌22(1947)年、「教育基本法」、「学校教育法」が制定され、6・3・3・4制の学校制度や男女共学が発足することになった。

高等教育機関は新制4年制大学に一本化されることとなり、それまでの高校、専門学校、師範学校は、新制大学に昇格か、新制高等学校か、廃校かの選択をせまられた。

県内の官立5校——山口高等学校、山口師範学校、山口青年師範学校、山口経済専門学校、宇部工業専門学校——、および県立2校——医学専門学校、山口獣医畜産専門学校——は、新制大学への昇格をめざし、それぞれ運動を展開させる。学校ばかりでなく、県民、市民も地元への大学誘致に熱意を注いでゆく。

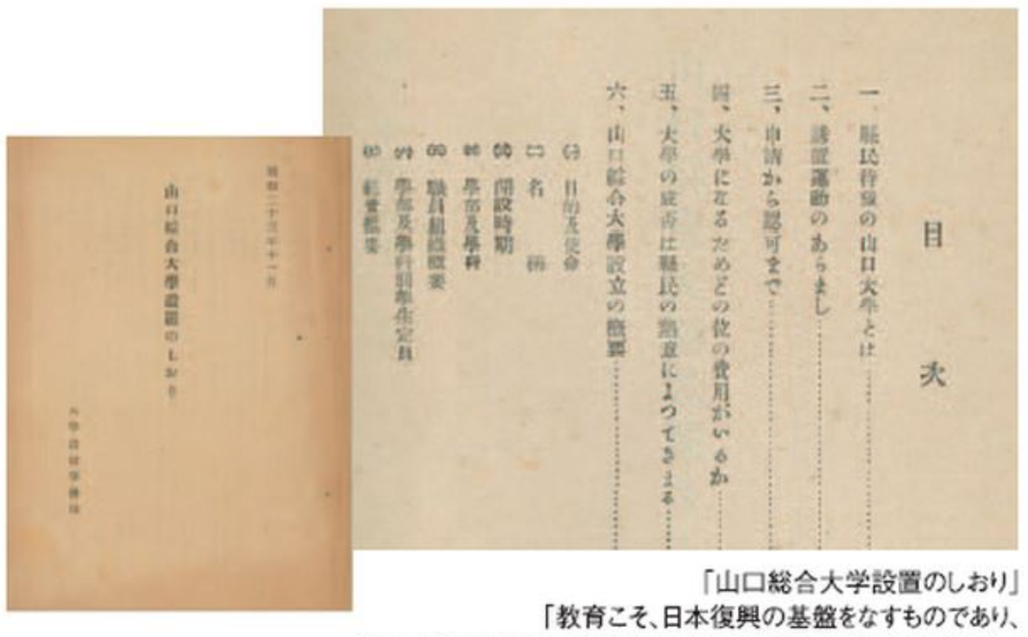
COLUMN

男女共学

昭和22年、男女共学がはじまった。その年の女子入学者は旧制山高が1名、宇部工専3名。当初、共学反対の学生が多かったが、戦後再開されたアメリカ映画「キュリー夫人」が上映されていた影響もあり、「全国にさきがけて(女性に)門戸を開き、わが高からマダム・キュリーを出そうではないか!」という声で空気が変わったといわれる。なお、山口経専では1名の女子志願者がいたが、残念ながら入学ははたせなかった。

山口市全景（昭和22年頃）

文部省学校教育局長からの通知「直学62号」



「山口総合大学設置のしおり」
「教育こそ、日本復興の基盤をなすものであり、
山口大学の設置は、明日の山口県に光明を与えるものである。」
ことを真剣に考え、百五十万県民の皆様と共に、
是非、総合大学設置の悲願を、達成したいと思います。
と県民に呼びかけた。

20

山口大学誕生

設置はほぼ確実に

昭和22（1947）年、他にさきがけ、県立医学専門学校が**山口県立医科大学**（旧制）へ昇格した（昭和27年より新制）。一方、ほかの専門学校は、単体ではなく総合大学としての昇格をめざす方向に転換する。

翌23（1948）年6月、混沌としていた政府の方針がようやく定まった。文部省は、新制国立大学設置についての「十一原則」を決定。大学が大都市に集中することを避け、一府県一大学を設置すること、教養および教職に関する学部か部をおくこと、第一学年から発足すること、など十一の原則が定められた。

7月、「国立山口大学設立申請書」が受理され、第二水産講習所をのぞく官立5校による4学部と山口獣医畜産専門学校による1学部の設置がほぼ確実となった。

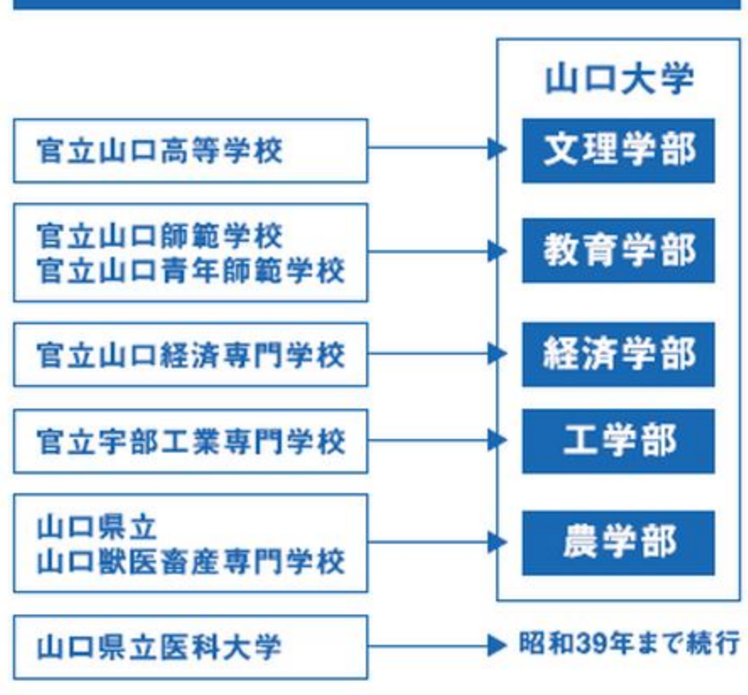
残る問題は、設置にかかる莫大な費用である。県負担額以外に、建物や施設、図書などにかかる5000万円について、郡市別に目標額を決めて、県民から募金を集めようとした。しかし、食べることにも困るような時勢においてはむずかしく、県外の関係者、関係機関の寄付をうけて、なんとか財源を確保するにいたった。

※第二水産講習所
農林省直轄の水産専門学校で、昭和22（1947）年、下関市に開設。現在の水産大学校の前身。
「国立山口大学設立申請書」では水産学部への昇格がめざされた。

第1回入学式で告辞を述べる松山学長

門標も「山口大学」へ
（「防長新聞」昭和42年6月2日より）

旧高専校から学部への移行図



新制大学スタート

山口県総力をあげての運動が、ついに結実する日がやってきた。昭和24（1949）年6月1日、全国の国立大学69校のうちの1校として、総合大学、**山口大学**が誕生した。

学生定員は文理学部105、教育学部160、経済学部160、工学部120、農学部60の計605名、本部を経済学部におき、初代学長には京都大学名誉教授の松山基範（もとのり）が着任した。

教育理念として、広く教養的知識を授け、深く専門の学術を教授研究することが掲げられた。あたらしい時代をになうにふさわしい、教養豊かな、視野の広い人材を送り出すために、山口大学は始動したのである。

7月15日に第1回入学式、11月5日には、教職員250名、文部大臣、ガッサー山口民事部隊長、田中県知事、山下山口市長ら来賓を招いての開学式が挙行された。

開学式の前後には、運動会や音楽会、対抗野球試合などの行事が開催され、設立に力を尽した県民へ感謝が表された。のちに6月1日が創立記念日と定められ、11月には大学祭が開催されるようになり、現在にいたっている。

なお、山口県立医科大学は、同27（1952）年に新制大学となり、さらに同39（1964）年に国立に移管、山口大学の学部に統合された。

3
旧制高校時代の学生生活

1
行事・イベント等

大正2(1913)年頃　第1回水泳大会(師範)

大正15(1926)年頃　萩旅行(女子師範)

大正11(1922)年　創立記念祭(旧制山高)

大正15(1926)年頃　防府への長途競争(旧制山高)

弁論大会(山口高商)

昭和14(1939)年　運動会野試合(山口師範)

昭和8(1933)年頃　音楽の夕(山口高商)

運動会での仮装行列(宇部工専)

昭和24(1949)年　移転感謝祭(厳医専)

10里マラソン(宇部高工)

仮装行列(山口医専)

麻雀をする学生(山口医科大)

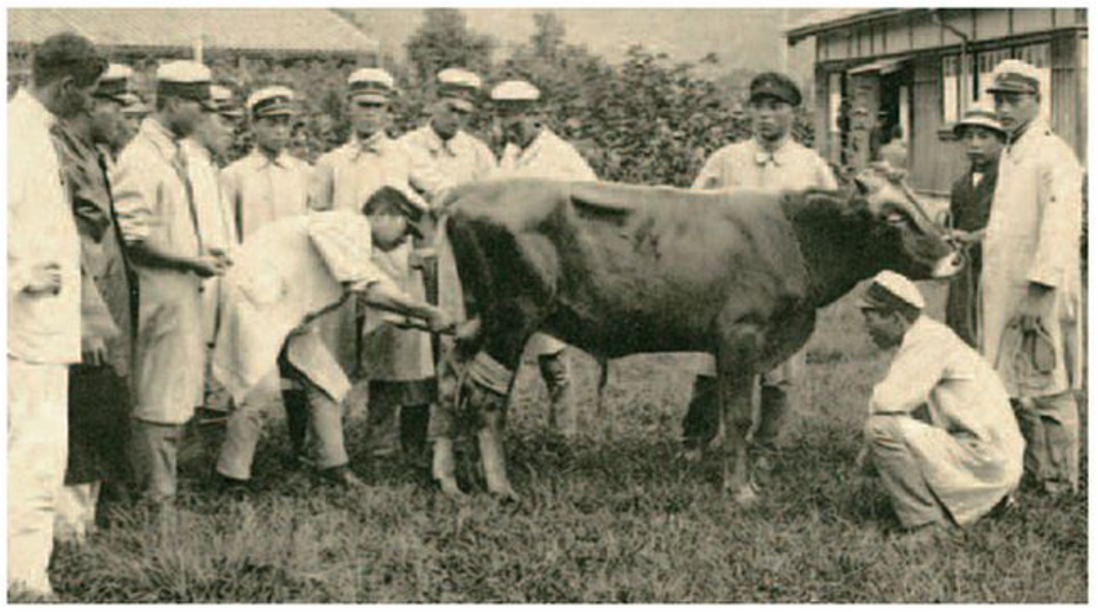
10里マラソン(宇部高工)

第1回開学記念運動会(山口医専)

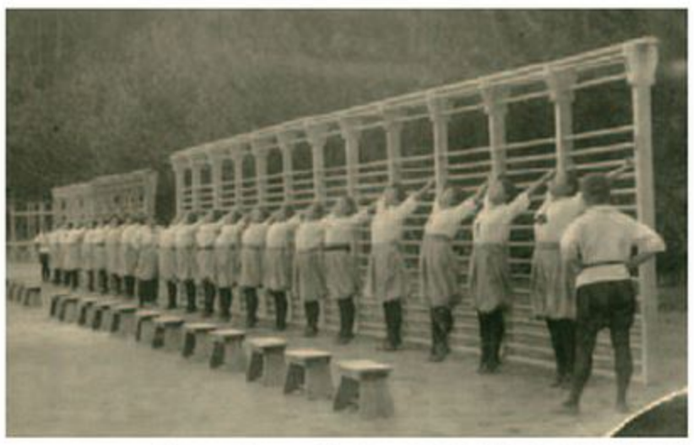
2

授業・実習等

明治41(1908)年頃　授業風景(山口高商)



獣医畜産科実習風景(小郡農業)



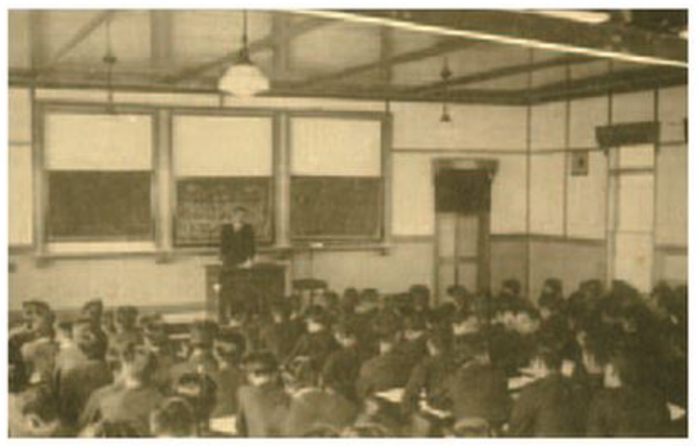
大正15(1926)年頃　体操授業風景(女子師範)

大正15(1926)年頃　水泳実習風景(女子師範)

大正15(1926)年頃　自習室(女子師範)

化学授業風景(旧制山高)

昭和9(1934)年　実習風景(旧制山高)

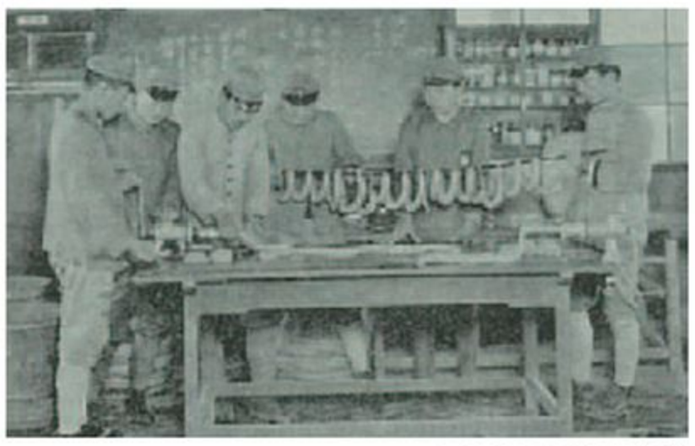


昭和8(1933)年頃　授業風景(山口高商)

昭和20(1945)年頃　稲刈奉仕(青年師範)

昭和18(1943)年頃　竹槍訓練(青年師範)

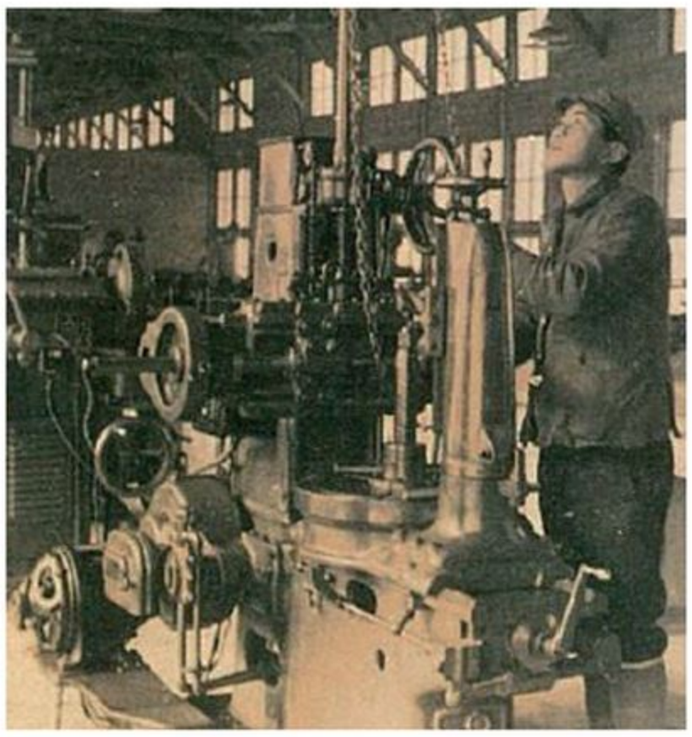
タイプライター実習(山口高商)



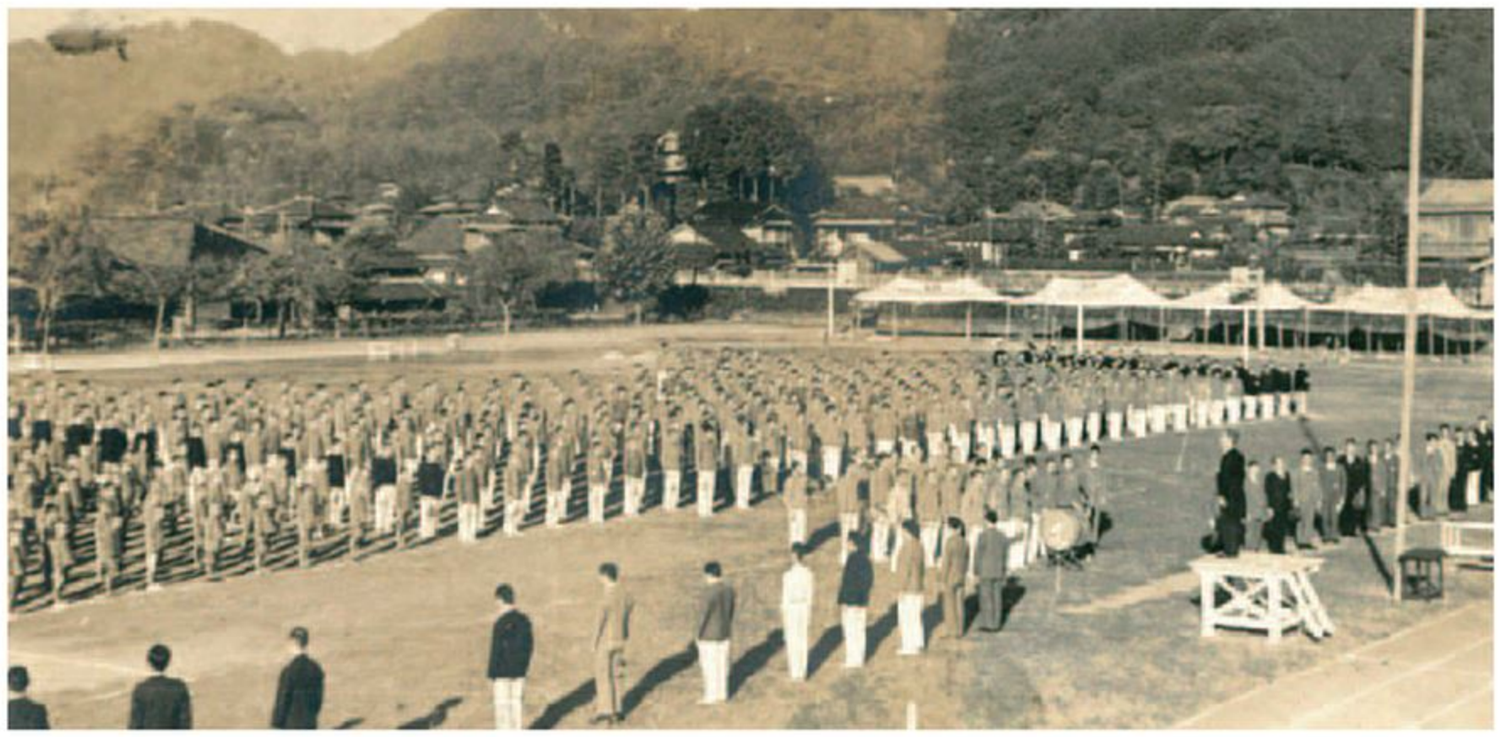
ソーセージの製造実習(小郡農業)

昭和15(1940)年頃　炊事実習風景(山口師範)

昭和18(1943)年頃　算盤授業風景(青年師範)



昭和17(1942)年頃　実習風景(宇部高工)



昭和14(1939)年頃　グラウンドでの朝礼(山口師範)

昭和17(1942)年頃　製図実習風景(宇部高工)

授業風景(医専)

解剖実習(医専)

3

学友会·校友会等の活動

陸上部(旧制山高)

会誌の一部(旧制山高)

自動車部(旧制山高)

広告研究会(山口高商)

新聞学会(山口高商)

相撲部(山口高商)

水泳部(旧制山高)

昭和21(1946)年　山口・九州地区インターハイ(山口経専)

学童音楽会(山口師範)

ホッケー部(山口高商)

ラグビー部(山口医科大)

排球部(山口師範)

馬術部(山口高商)

サッカー部(山口医科大)

野球部　対旧制松山高等学校戦(旧制山高)

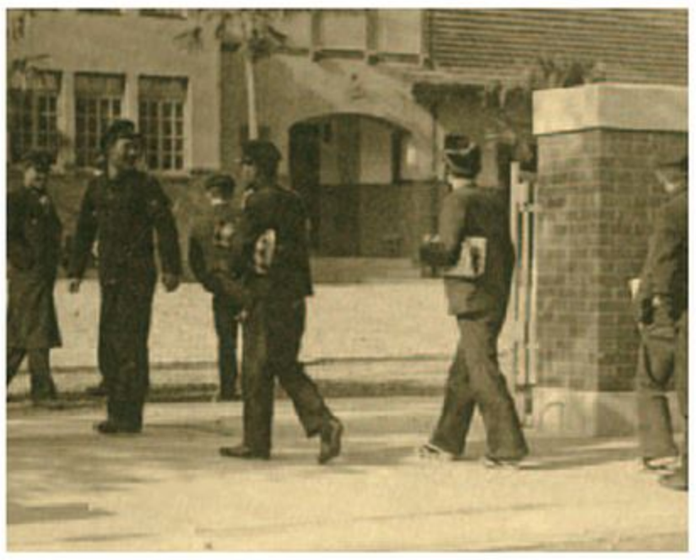
4

学生生活のひとこま

大正5(1916)年(山口師範)

大正15(1926)年頃　洗面所(女子師範)

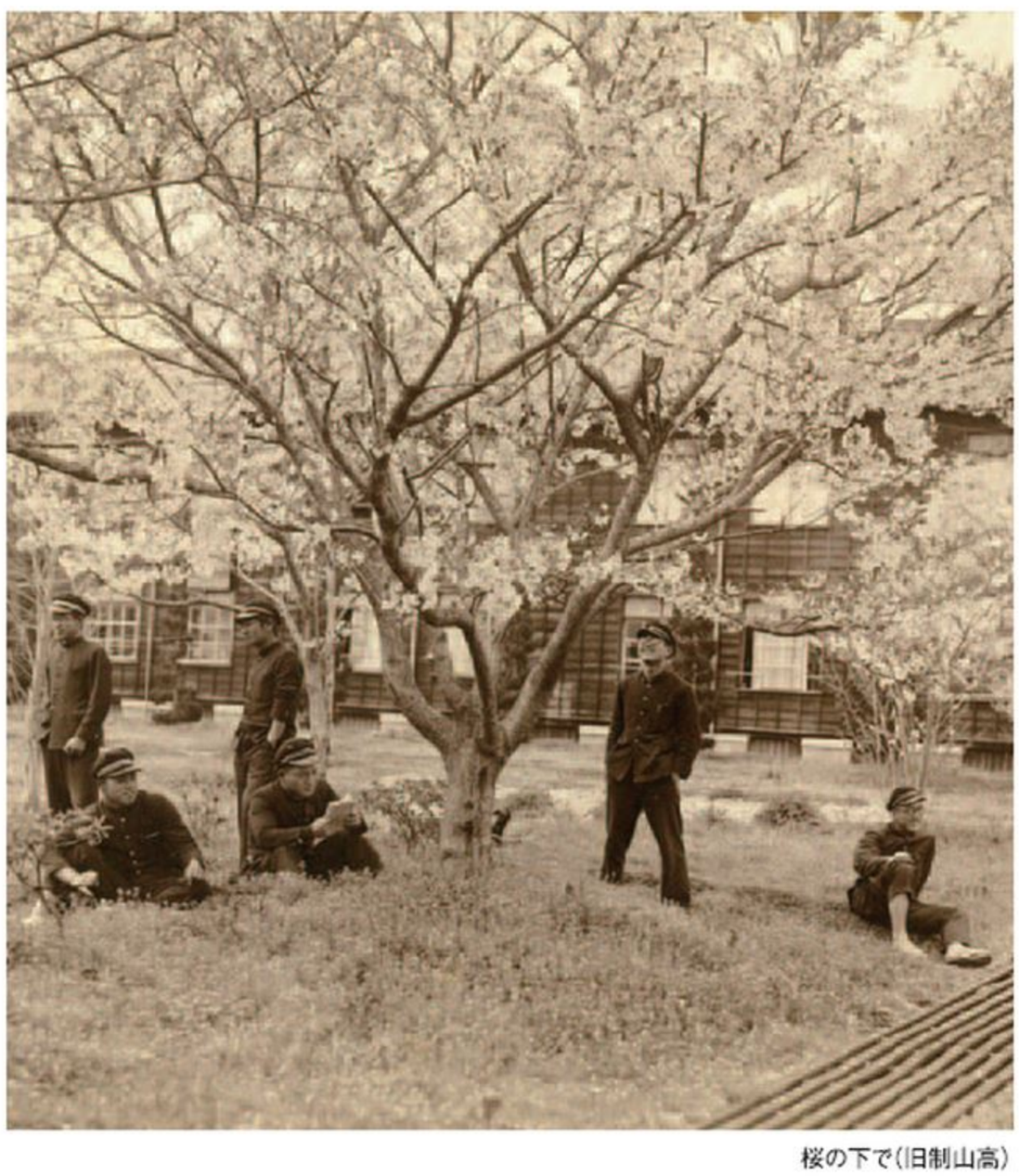
昭和8(1933)年頃　新聞閲覧風景(山口高商)



昭和8(1933)年頃　登校風景(山口高商)

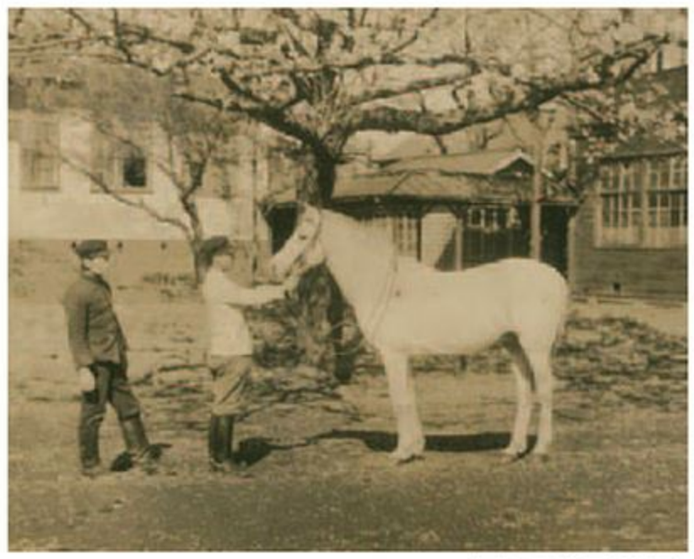
昭和8(1933)年頃　おでん屋にて(山口高商)

昭和15(1940)年　校舎にて(旧制山高)



桜の下で(旧制山高)

昭和15(1940)年　湯田温泉にて(旧制山高)



生徒と馬(高等獣医)

昭和20(1945)年頃　時雍寮菜舗(山口師範)

朝礼風景(宇部高工)

トランプをする寮生(宇部高工)

市民館での洋画鑑賞(山口医科大)

昭和10年代　食堂(山口師範)

寮掃除風景(宇部高工)

4

ゆかりの地をたずねて

「山口講堂跡」記念碑（山口市中河原）

上田鳳陽の墓（山口市乗福寺）

上田鳳陽碑（山口市宮島町）

山口教学発祥の地碑（山口市役所内）

山中健児の碑（バークロード）

山口高等中学校時代の石垣（バークロード）

鳳陽館（山口市亀山）

鳳陽寮歌碑（山口市亀山）

旧制山口高等学校正門（山口高等学校内）

旧制山口高等学校講堂（山口高等学校内）

旧制山口高等学校跡碑（山口高等学校内）

教育学部付属山口中学校跡碑（山口市中央消防署前）

山口講習堂玄関（山口県鴻城高等学校内）

山口獣医畜産専門学校跡碑（山口市小郡）

教育学部付属防府中学校跡碑（防府市立桑山中学校内）

山口県青年師範学校跡碑（防府市立桑山中学校内）

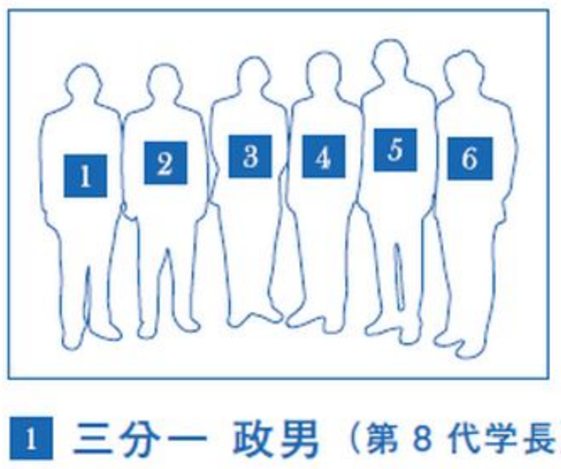
山口大学農学部創設の地碑（下関市長府運動場内）

※学校内の記念碑を見学する際は、事前に許可が必要です。

5

歴代学長座談会

山口大学の「志」について語り合う



1 三分一 政男（第 8 代学長）
2 村上　　悳（第 9 代学長）
3 廣中　平祐（第10代学長）
4 加藤　　紘（第11代学長）
5 丸本　卓哉（第12代学長）
6 岡　　正朗（第13代学長）

司会
山内 直樹（副学長）
前坂 祥子（情報環境部）
日高 友江（情報環境部）

— 上田鳳陽先生が「山口講堂」を設立されて以来、その「志」は歴史の中で脈々と受け継がれて、今日の山口大学に至っています。その「志」について、本日は先生方に語り合っていただきたいと思います。

まず、就任中にどのような「志」をもって任務に当たられたか、また就任中のいちばんの思い出は何かについてお話しいただけますか。

工学研究科の改組が一番の思い出

三分一 政男・第8代学長（平成2年～5年）

すでに20年以上を経過して、記憶も定かでないところもありますが、当時は「世界で活躍できる専門知識を有する数多くの人材を育成しよう」という国策のもとで、大学院博士課程、修士課程の新設・定員増などが図られていました。大学には、個々にその必要性を証明すること、他に類を見ない特長をアピールすること、卓越した研究教育のスタッフを有することなどが求められました。

山口大学では、「教育研究体制の高度化・学際化、開かれた大学としての地域社会への貢献、国際性豊かな大学」を掲げて、全学を挙げて組織改革を検討し、その実現に努力しました。

当時の概算要求には、学部、学科、講座の新設・改組再編が目白押しでした。調整は難航いたしましたが、各学部ならびに改組案検討委員会・将来構想委員会などのご努力の甲斐あって、いくつかの構想が実現を見ました。特に、工学研究科の改組（博士課程の設置）は、すでに医学研究科には博士課程が設置されていましたが、工学部全学科および工業短期大学部の改組とともに一番の思い出です。

三分一 政男（第8代学長）

徹夜して教養部の解散を決議

村上 悳・第9代学長（平成5年～8年）

いま三分一さんからお話があった大学改革の問題が、当然私のときにも非常に大きな課題になってきました。

当時、マーチン・トロウというアメリカの社会学者が、高等教育の発展段階を、「エリート段階」「マス段階」「ユニバーサル段階」という三つの段階に分けました。「エリート段階」は、18歳人口に占める大学在学者の割合が15%程度の段階をさすというものです。そこで言われていることが多くの人の関心を引いていたわけですが、大学としては、大学のありかたを厳しく縛っていた大学設置基準の問題、そしてそれを支えている大学教授の世代交代の問題を抱え、マーチン・トロウの言う「エリート段階」が崩壊しつつある中で、大学改革をどう進めていくのか、ということが最大の関心事であったわけです。

そこで山大の大学教育検討委員会で全学的な問題として大学改革をどう進めていくかの検討がスタートしましたが、最終的に、教養部の廃止にどう対処していくかということになりました。しかしなかなか結論が出ず、昼から始めた委員会が延々と夜まで続き、結局、夜をこして、翌日の朝やっと教養部の解散が決議されたのであります。

それまで教育・学問中心であった大学が、次第に学生や教育の問題に重心を移していくという形をとるようになってきました。社会も大学に期待しているモデルは一元的ではなく、次の

村上 憲（第9代学長）

ような四つの役割を考えるようになってまいりました。a；研究の役割、b；専門教育の役割、c；一般教育・教養教育の役割、d；社会に対する役割であります。これら四つの特化した役割を大学側が、どのような組み合わせで選択するかということになるのであります。

ここまできて私の学長としての時間終了ということになりました。

「時間学研究所」で異分野共通の話題を

廣中 平祐・第10代学長（平成8年～14年）

私は、自分にできることは数学だけだと思っていましたので、大学がどういうものなのか、いわゆる管理職、特に学長という職がどういうものなのか、まったく考えたこともありませんでした。したがって、最初はどうしていいのか分からないという感じでしたが、いろいろ勉強して、2年目ぐらいに、ようやく大学の組織が何かというのが少しずつ分かり始めてきました。

「山口大学」は一つの大学だと思っていたのですが、たとえば同窓会はそれぞれの学部に同窓会があって、しかも同窓会のリーダーの方々は「山口大学」の卒業生ではないのです。工業専門学校とか経専とか県立医科大学、あるいは旧制山口高校の卒業生で、それぞれが別々に活動しておられる。私から見ると、一つのものではないような気がして、不思議な感じがしました。また、宇部地区と山口地区は相当な距離がありますが、一つの大学でそんなに離れたキャンパスがあるところには、それまで勤めたことがありませんでした。それで、同窓会だけでも何とか一緒のものを作ろうと皆さん方と話し合いをして、ようやくそれを作ることができました。

もう一つは、共通の基金でも作ったらどうかと。基金そのものが大きなものでなくても、山口大学を卒業した学生にとって、自分たちも恩恵を被ったようなものが大学に一つある、ということはいいのではないかと思って、結構四苦八苦しましたが、最後には山口県出身の文部科学大臣のところに行って、ちょうど私の学長の任期が終わる頃に認可されました。ちっぽけなものでしたが、共通のものがあるということが、一つの象徴にはなったのではないかと思います。

それから、それぞれの学部は皆独立した感じで、学部の違う先生方同士はあまり話をしないのではないかと。だから、先生方がお互いに話せるような方法はないかと思って、「時間学研究所」というのを作りました。「時間」といえば、医学、数学、物理、工学、経済など分野が違っても、共通の話題があるのではないかと思って、文科省から予算も出なかったわけですが、各学部の皆さんが賛成してくださって、「時間学研究所」というのができました。その結果、各学部の先生方がお互いに話をされるようになって、私としてはたいへん良かったと思っています。

独立行政法人の話は、私のときはまだ議論ばかりでした。準備が十分できなくて心配していましたが、加藤先生は相当ご苦労なさったのではないかと思います。

廣中 平祐（第10代学長）

法人化の危機で大学がまとまった

加藤 紘・第11代学長（平成14年～18年）

苦労がなかったとは言いませんが、レールはできていましたから非常にやりやすかったです。私の4年間でいちばん大きな出来事は、いま廣中先生がおっしゃった、大学法人に変わったということです。

学長になって、当時の遠山文部科学大臣が、大学に民営的経営手法を取り入れる、日本版シリコンバレーを10か所つくる、特許を10倍にする、と言われた。全部実学です。そして、6年間の中期計画を出せ、それによって評価する、運営交付金を決める、とおっしゃったわけです。

加藤 紘（第11代学長）

企業の経営的手法を取り入れるというけれども、大学の人を育てる教育とか、研究というのは、そんなものではなかろうという議論は当然ありました。私もそう思いましたが、もう法律で決まってしまったのです。それで評価される、予算まで決められるとなると、やはりまずは生き残る、その中でいかに現況を持って行くか、というのが課題だと思いました。

2年後に法人化になるということが分かったので、すぐに委員会を作って中期目標を作ってもらいました。次の丸本先生のときに大学憲章ができましたけれども、まだそれもなかったわけです。「発見し・はぐくみ・かたちにする」というのだけあって、何を発見するかもないわけです。それで一生懸命勉強して、幸い私は大学のことが非常によく分かりまして、附属小学校のことまで分かりました。

そして平成16年4月1日に法人化になりました。危急存亡の秋なので、大学の人たちが皆さん一致して動いてくれました。法人化、危機、ということでまとまったのだと思います。非常に有り難いことに、スムーズに乗り切らせていただいたと思います。

大学改革の第一歩 — 鹿児島大学との共同獣医学部

丸本 卓哉・第12代学長（平成18年～26年）

私は廣中先生と加藤先生の下で、副学長をほぼ6年させていただきました。そのときに、今までは農学部だけだったのに、全学的な視点から見なければいけないという経験をしました。ちょうど法人化の過渡期の混乱をずっと見ていて、山口大学はどこを改善していったらいいか、私なりにいくつか考えはありました。

その一つは、大学改革をどう進めていったらいいのかというときに、各部局の考え方がたいへん違う、特に文系と理系で違う。その違いを何とか一つにまとめていかなければ、法人化後、うまく行かないと思っていました。それで、大学全体で、山口大学が今後目指す方向はこういうものだ、というものを作る必要があると思いました。

丸本 卓哉（第12代学長）

理念はできていました。ですから10年～15年ぐらいの中期ビジョンとして、「明日の山口大学ビジョン」というのを作り、「教育」「研究」「社

会貢献」の三つをその中核としました。ただし、文書を作っただけでは動きません。そこでタイムスケジュールとロードマップを考え、10年スパンの「山口大学の改革ビジョン」を作りました。

そして学部の改革、共通教育の改革、大学院の改革などのグルーピングを作って進めようとしました。どれも難しい問題なので、その中でまず手を着けられるところからということで、当時いちばん問題になっていた獣医学の国際化という問題に取り組みました。鳥取、山口、宮崎、鹿児島の四つの獣医学科が連携していたので、私が4大学に話をして協議を進め、最終的に鹿児島大学との共同獣医学部ができました。これが大学改革の第一歩になりました。このとき20億近いお金が付き、教員も8名プラスされました。この過渡期に大学改革の先陣を切ってお金がポーンと付いた。これでみんなが大学改革をしなければいけないという気運になったと思います。

それから私の最後の仕事になったのが、部局長の選考方法の改革です。最初はすべての部局から猛反対を受けましたが、法人化後、大学が変わるためには部局の意識も変わってほしいと説得を重ねて、最終的には昨年末に全部局から賛成を得ることができました。これは実際には岡先生の代から実行されるわけですが、全国でこれをやった総合大学は山口大学が初めてだったのです。

平成27年に国際総合科学部がスタート

岡 正朗・第13代学長（平成26年～）

山口大学は先生方のおかげで、ずいぶん改革の気運が感じられます。もともと長州ですから、この土地の中に維新のDNAが何らかの形で刷り込まれていると思っています。いろんな改革の時期にあって、その先頭に立たなければいけない、というのが今の私の決意です。丸本先生のご厚意で、さまざまな会議に一緒に出させていただいて、バトンタッチをしたときには、自分ではかなり加速をつけたつもりでいました。そういうことで、現在の執行部の先生方もスムーズに大学運営に移れたのではないかと思います。私としては幸せな滑り出しだと思っています。

岡 正朗（第13代学長）

平成28年から第3期の中期目標に移りますので、この2年間に改革を見える形にするということを文科省からも言われているわけですが、幸い山口大学は平成27年に国際総合科学部という新しい学部をスタートできそうです。これは文理融合型の学部で、山口大学では9学部目になります。大学というのはやはり学問をするところであって、専門の学問領域があるというのが大前提だと思います。ところがこの新学部は、私から見るとむしろ実学的なのかなと思っています。こういう学部が国立大学の中にできるのは、あまりないケースではないかと思っています。コミュニケーション能力と課題解決能力の二つは、いま社会で非常に強く求められている能力です。この二つを鍛えよう、そして国際化に備えようというものです。こうした人材を育成するというのは、ある意味、吉田松陰先生の実学に似ているのではないかと私は思っています。

これを皮切りに、教育学部の改組、経済学部の改組、そして人文学部の改組を行いたいと思いますが、文部科学省からは、人文学部の改組が行われるというのは画期的だと言われています。その次は理系の大学院の改組、そして理系の学部の改組に着手しなければい

けないと思っています。

知事を初めとする地域の首長さんも、山口大学にたいへん注目してくださっていて、私は、山口大学が山口県のシンクタンクになる、「山口県にある大学」から「山口県の大学」になる、と言っています。

先輩の学長先生方の意志を私も受け継いで、山口大学をさらに発展させるために、微力ではありますが全力を尽くしたいと思っております。

前坂 祥子（情報環境部）

大学が生き残っていくためには、やはり山口大学の価値を高めていくことが重要なのだと思います。そのためには私たち卒業生が、社会に出てからどう活躍していくかということが大事だろうなと、そういった思いで日々仕事をしています。そこで私にできることは何かと考えたとき、先生方の研究のサポートとか、学生の学習のサポートを全力でやっていくことが、微力だとは思いますが、私のできる仕事だと思っています。

― 本日は卒業生も出席しております。本学の卒業生であり、また職員でもある立場から、どのような「志」をもってこれから歩んでいくか、ということについて前坂さんと日高さんにお願いします。

山内 直樹（副学長）

山口大学の価値を高めていくには

前坂 祥子・人文学部卒

私は、職員になって初めて、大学というのは、一つの目標や行く先があって、たくさんの人によって支えられて運営されている組織なんだと知りました。

いま図書館で働いていますが、私が職員になってからたびたび耳にしたのは、大学は生き残るためにこれから大変なんですよ、職員としてちゃんと考えて働きなさいよ、ということでした。

歴史の上に立っているという認識をもって

日高 友江・人文科学研究科修了

私もいま図書館で働いていて、レファレンスというのをやっています。大学の中からも外からも日々、こういう資料はありませんかとか、このことについて調べてください、といった問い合わせが来ます。最近多いのが、廣中先生のお話にもありましたが、前身の山口高商とか旧山口高校の同窓会の方からの、昔の資料を探しているのですが、それが図書館にありませんか、

日高 友江（情報環境部）

というお問い合わせです。そういう方とやり取りをしていると、たいへんな熱意を感じます。そういう方の思いが脈々と山口大学に繋がっているんだなと感じています。図書館としては資料を保存することも一つの仕事ですが、自分もそういった歴史の上に立っているんだという認識の上に、大学を支えていく一員であるという意識をしっかり持って働いていきたいと思っています。

— 最後に、これからの山口大学はどうあるべきか、その「志」について、一言ずつお話をいただければと思います。

イノベーション発生の場として

三分一 政男・第8代学長

維新発祥の地であり、大業を果たした先人たちの進取の気性を受け継いで、単なる技術革新ではなく、総合大学の利点を活かした、新しい資源への挑戦、新しい組織の構築などをも含んだ広い意味での「イノベーション発生の場」として学問文化の推進役を担うことを期待しています。

変革の流れに即応して

村上 悳・第9代学長

歴代学長先生の話をお聞きしていると、それぞれの方々の時代に少しずつシフトしながら大学がどんどん変革してきていることがわかります。ですから、そういうことを早く自覚して、それに乗っかって、それに対応できる動きをしていくことが、「志」を受け止めて、次の次代に伝えていくことに繋がるのではないかと思います。

専門分野を深く研究することを忘れるな

廣中 平祐・第10代学長

私が海外で経験したことから言うと、それぞれの専門分野の人たちが非常に深く研究をしていて、その上で違う分野の人同士が話をしている。違っていても話をするということが大切なことなのです。しかし、専門分野を深く研究することを忘れてしまったら、全体の水準が落ちるばかりではないかと心配するのです。ですから、自分の専門分野で世界的な水準になろうと思って、一生懸命頑張って、他の分野のことなど耳も傾けないという時期があっていいんだ、そういう青春もあっていいんだと、その上でコミュニケーションとかいろんなことを言うべきだと思います。それによって大学の特徴が出てくるのだと私は思っています。

山口県人の気風の上にあぐらをかいていてはいけない

加藤 紘・第11代学長

山口県といえば吉田松陰先生だ大内文化だと言われます。そのDNAは残っているのかもしれないけれど、それは昔のことです。明治維新を見ても分かるように、山口県人には進取の気風がある、改革の気風があるといいますが、それにあぐらをかいていてはいけないのではないか。たしかに山口県人は独特な気風を持っています。自分に対してプライドがある、何かやれるのではないかという気持ちが強い。そういうところは活かす、ただし、いい方向に活かす。どういうふうに活かすかを客観的に冷静に判断する。そういうことも含めて、山口大学がどういう方向に特徴を作っていくかというのが大事なことで、そのあたりは岡先生に期待したいと思います。

たくましく、チャレンジ精神に富む人材を共に育てる

丸本 卓哉・第12代学長

長州、山口の文化や歴史を活かす、そして、たくましく、チャレンジ精神に富む人材を共に育てる、という「志」を、山口大学の教職員・学生が一体となって、伝えていってほしいと私は思います。それしか他大学に勝つ道はないと思っています。

私の背中を1万人の学生が後押ししてくれている

岡 正朗・第13代学長

山口大学は創基200周年ということで、その歴史にはたいへん重いものがあると思います。ただ、山口大学の学生や教職員がそのことをよく知っていたかというと、そうではなかったのです。ですから、このたびの創基200周年記念事業は、山口大学の歴史を振り返るたいへんいいチャンスになったと思います。

私は、大学の生き残りなんて考えていません。生き残ることは当たり前で、発展することしか考えていません。むしろそのために何をするか、ということを我々は考えるべきだと思っています。私の背中を1万人の学生が後押ししてくれているのだという気概のもとに、力いっぱい進んでいきたいと思っていますので、学長先生の方々には、大所高所からご支援いただけますことを心からお願い申し上げます。ありがとうございました。

【第2部】

轍

1949年→2014年

知の広場への道のり

山口大学設立から現代まで

【第2部】

繋

1

写真でつづる
山口大学の軌跡

1 草創期　1949年→1965年

昭和24年(1949.7.15)　入学式(第1回)学生代表宣言

昭和24(1949)年6月1日に山口大学は産声をあげた。

入学生定員は、文理学部、経済学部、教育学部、工学部、農学部を合計して605名。専任教授は全学でも17名という陣容でのスタートだった。第1回の入学式は同年7月15日に開催された。

戦後の混乱は沈静化に向かってはいたが、食料品や生活物資の困窮が続く時代、学生たちは空腹を抱えながらも目を輝かせて講義に聴き入った。

設立当初の亀山キャンパスは、経済学部と教育学部のみであったが、昭和29(1954)年に文理学部が糸米から後河原に移転したことにより、大学が山口市街の中心を占めることとなった。中心市街地には学生が闊歩し、にぎやかな様子を見せた。このキャンパス風景は、統合移転により吉田キャンパスに移るまで続いた。

一方、常盤キャンパスでは、第1回卒業式が行われた昭和28(1953)年に工業短期大学部が併設された。工業短期大学部は平成2(1990)年に改組、平成5(1993)年に廃止されるまで、多くの卒業生を輩出した。

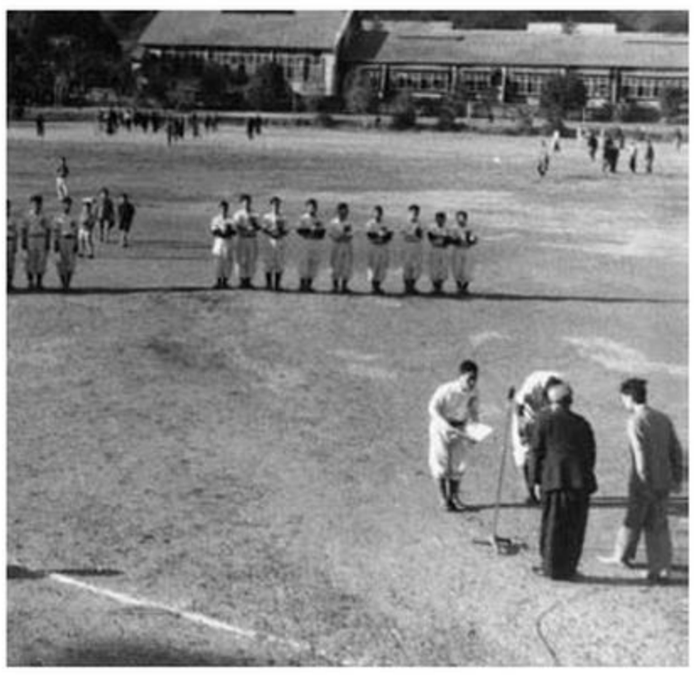
昭和24年(1949.11)　開学式

昭和24年(1949.11)　開学式　田中龍夫県知事の祝辞

昭和24年(1949.11)　記念祝賀会の様子

昭和24(1949)年　開学記念運動会

昭和24(1949)年　開学記念運動会



昭和24(1949)年　開学記念野球大会(対福岡商大)

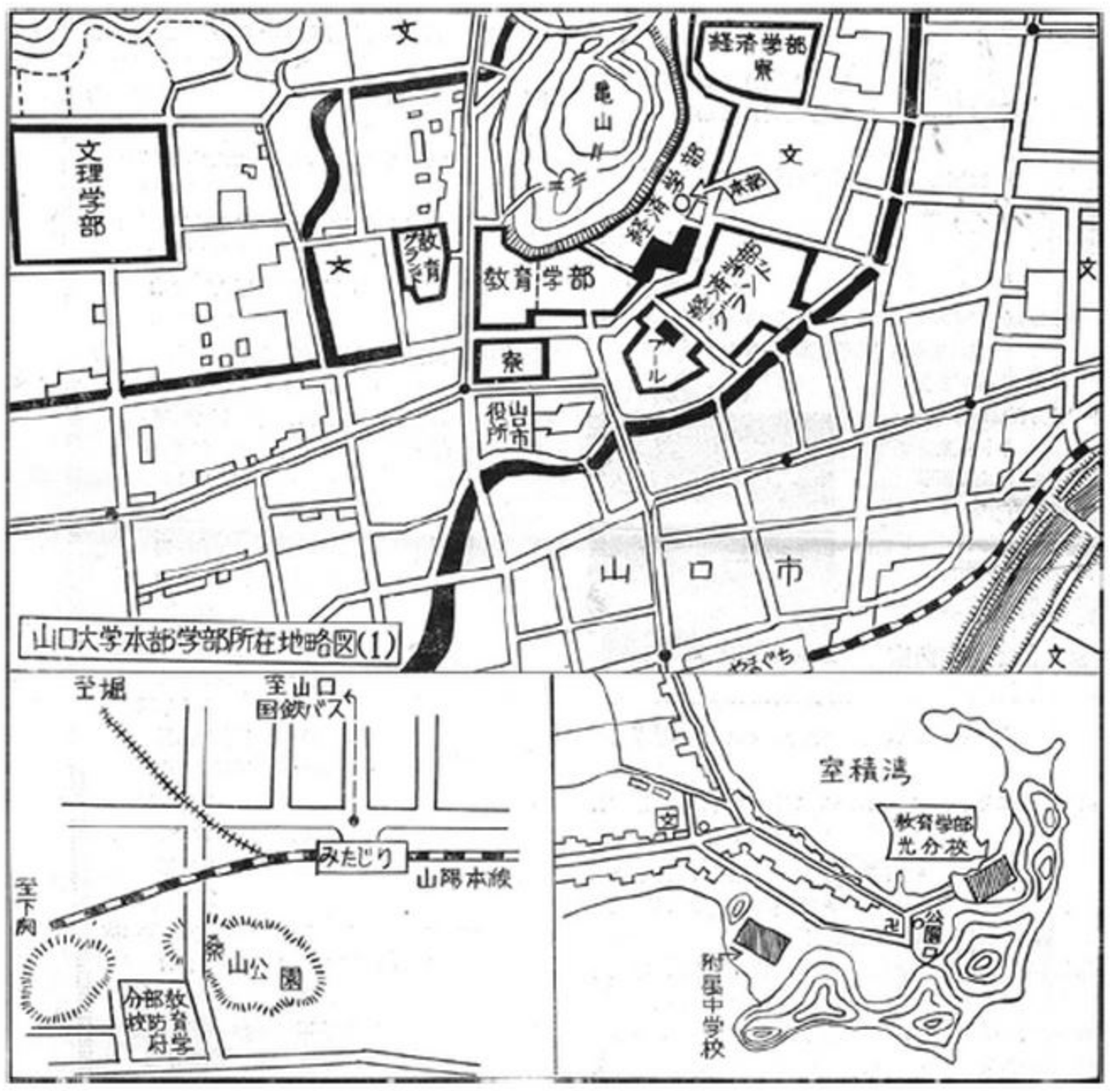
COLUMN

山口大学学報の創刊

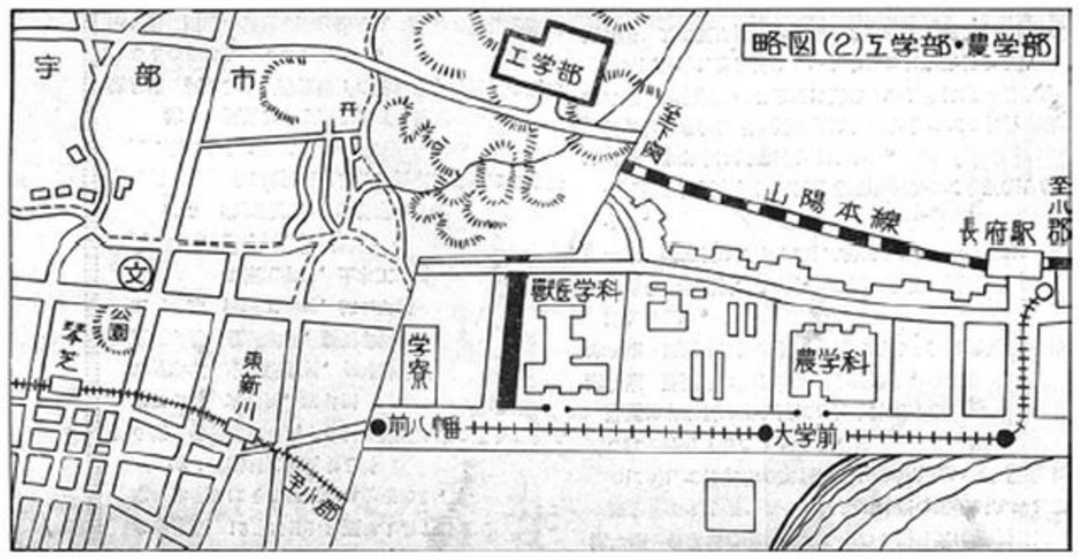
昭和25(1950)年、学報が創刊された。発刊の辞で松山学長は、「学園は自然の真理を探求し、人生の機微を感得する厳粛なる場である。この場に携わる総てのものは停滞を許されない」と述べている。「この学報が責任者の努力と一般の支持によって、よく報道の任務を全うするよう健全に発達して行くことを望んで止まない」との松山学長の言葉のとおり、学報は現在も毎月発刊され、本学の現状を報せるとともに、たゆまぬ活動を記録し続けている。

学報
山口大学
発刊の辞
學長 松山 基範

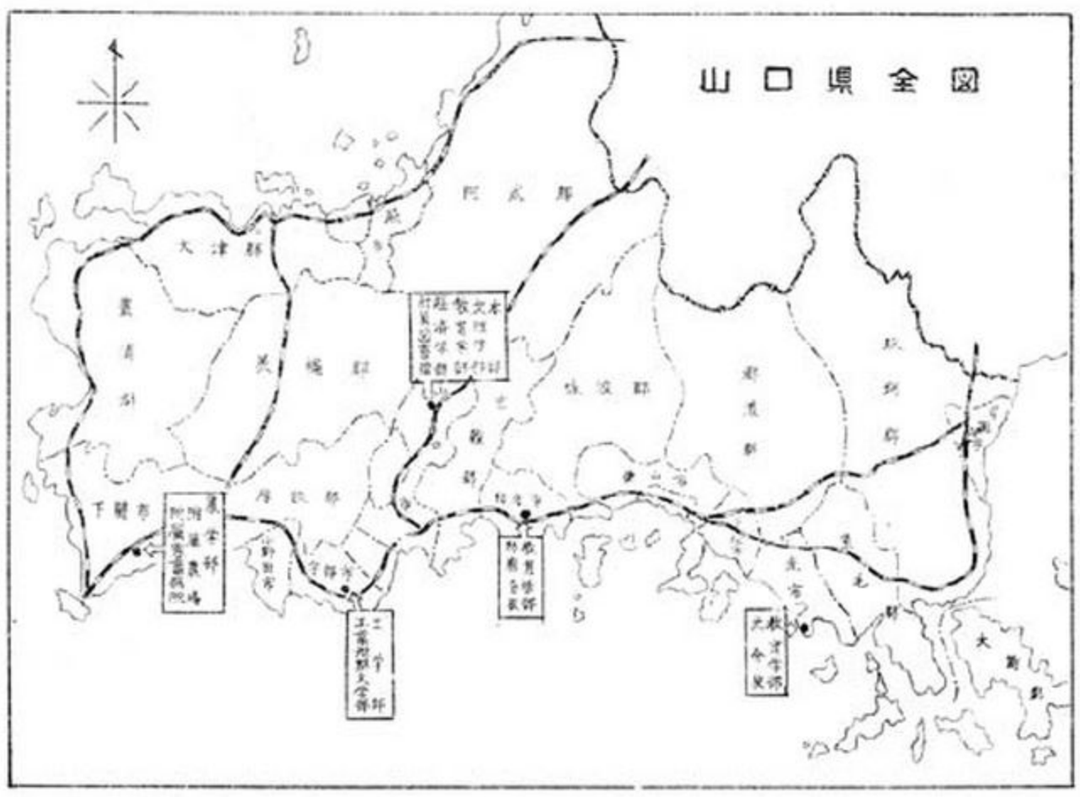
山口大学学報　第1号



昭和27(1952)年度　『山口大学要覧』より



昭和27(1952)年度　『山口大学要覧』より



昭和28(1953)年頃の学部等配置図(昭和30(1955)年度『山口大学要覧』より)

昭和28(1953)年以前　山口大学本部(新道移転前)

昭和24(1949)年頃　糸米時代の文理学部講堂

教育学部正門

昭和30(1955)年頃　経済学部校舎全景(昭和30年度卒業アルバムより)

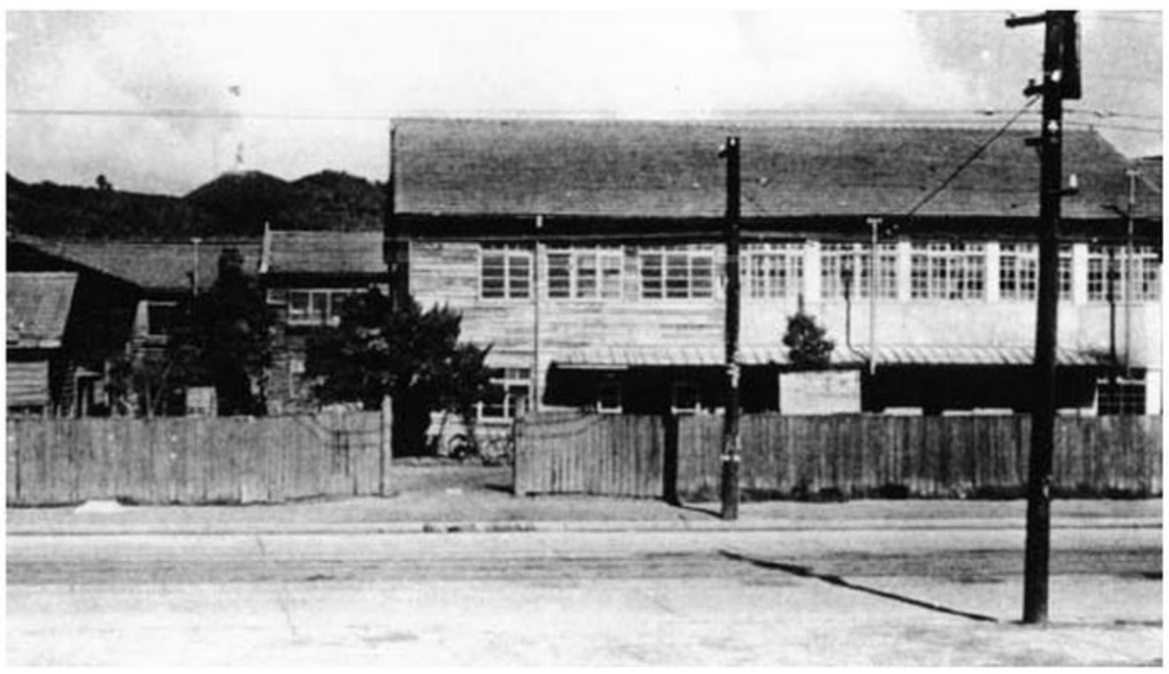
併設された門標

教育学部防府分校

昭和24(1949)年　山口師範女子部及び教育学部光分校

長府時代の農学部校舎前景

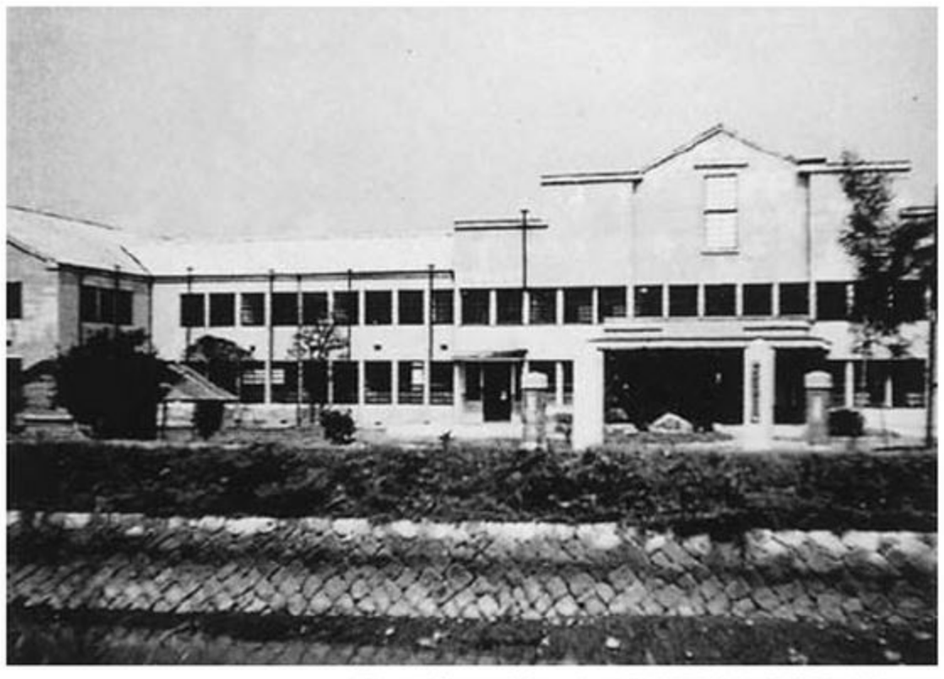
昭和26(1951)年　附属光中学校



獣医学科校舎

開学した頃の山口県立医科大学校舎

工学部本館前庭

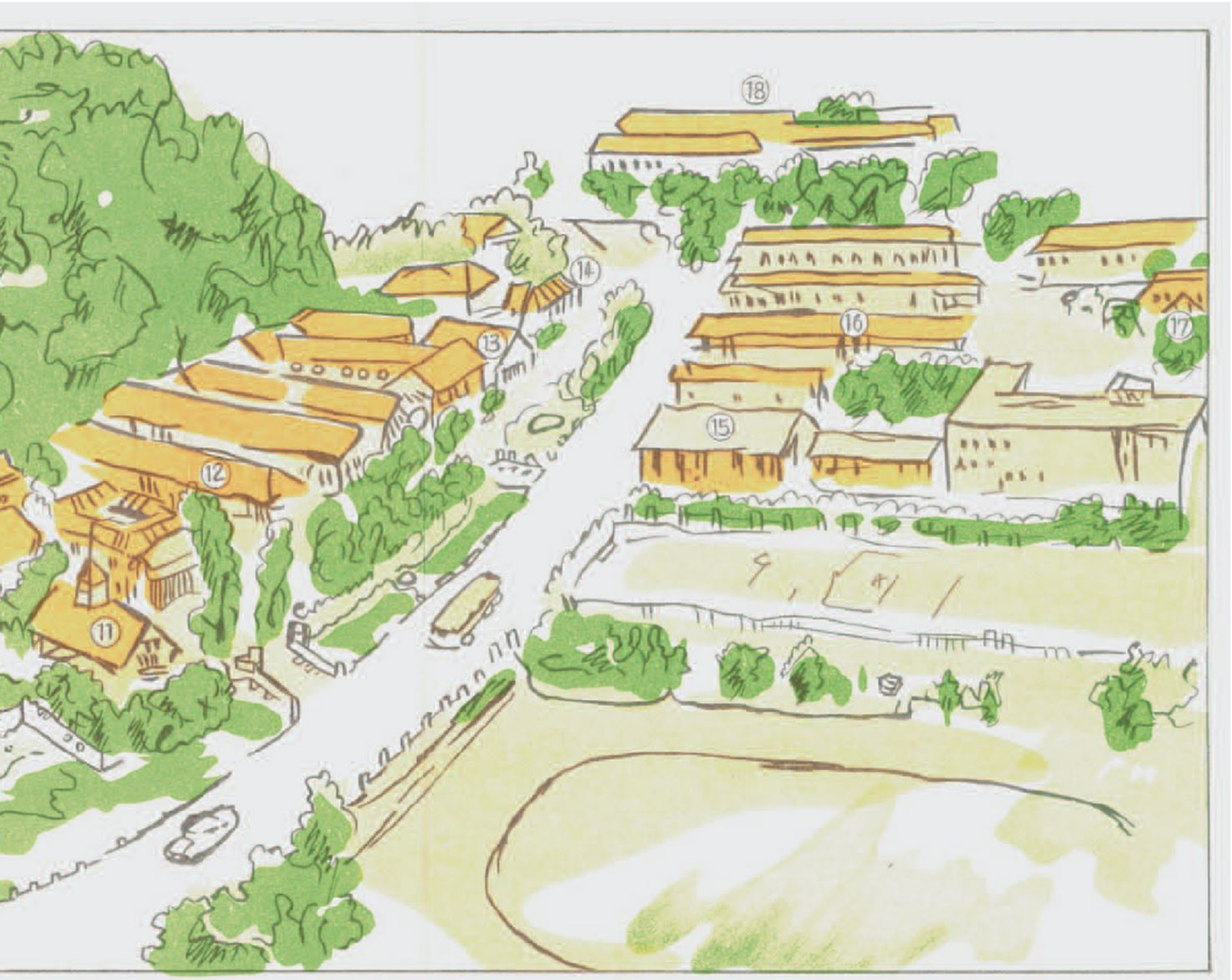


昭和27(1952)年　山口県立医科大学附属病院正面

山口大学鳥瞰図

① 大学本部
② 学生健康相談所
③ 時雍寮
④ 附属山口中学校
⑤ 附属山口小学校
⑥ 鴻南寮
⑦ 教育学部
⑧ 教育学部講堂
⑨ 学生相談所

後河原に移転後の文理学部校舎全景



⑩ 図書館
⑪ 経済学部講堂
⑫ 経済学部
⑬ 学生ホール
⑭ 鳳陽会館食堂
⑮ 体育館
⑯ 文理学部
⑰ 文理学部記念館
⑱ 鳳陽寮

昭和34(1959)年　『山口大学学生便覧』より

山口大学学生歌

一、連なる周防の山高く
　今焼の雲を呼ぶ
希望は高く溶らつと
　若き吾等のかいな組む
世代の覇者の歌声は
　世紀の空に高らかに
ああ山大 山大 山大！

二、みなぎる意気と感激に
　今れいめいの朝明けん
ゆるかな平和めざしつつ
　若き力のかいな組む
時代の覇者とつどいたる
　吾等の誇り高らかに
ああ山大 山大 山大！

三、若き正義は脈打ちて
　今焼の空を呼ぶ
時代の歴史かざる為
　若き命のかいな組む
ここ周防のふところみに
　輝くほまれ高らかに
ああ山大 山大 山大！

山口大学学生歌　昭和27(1952)年完成
作詞/永井 正春　作曲/藤井 哲雄

昭和38(1963)年　亀山上空

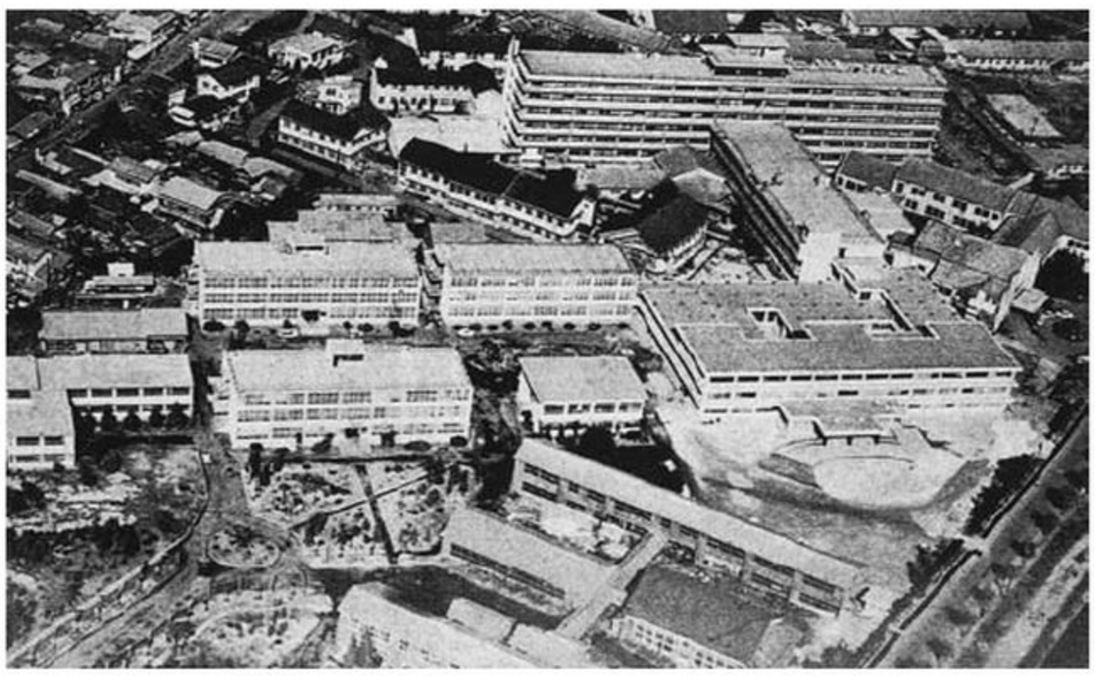
昭和32(1957)年　経済学部講堂(第5回卒業アルバムより)

昭和35(1960)年頃　経済学部周辺

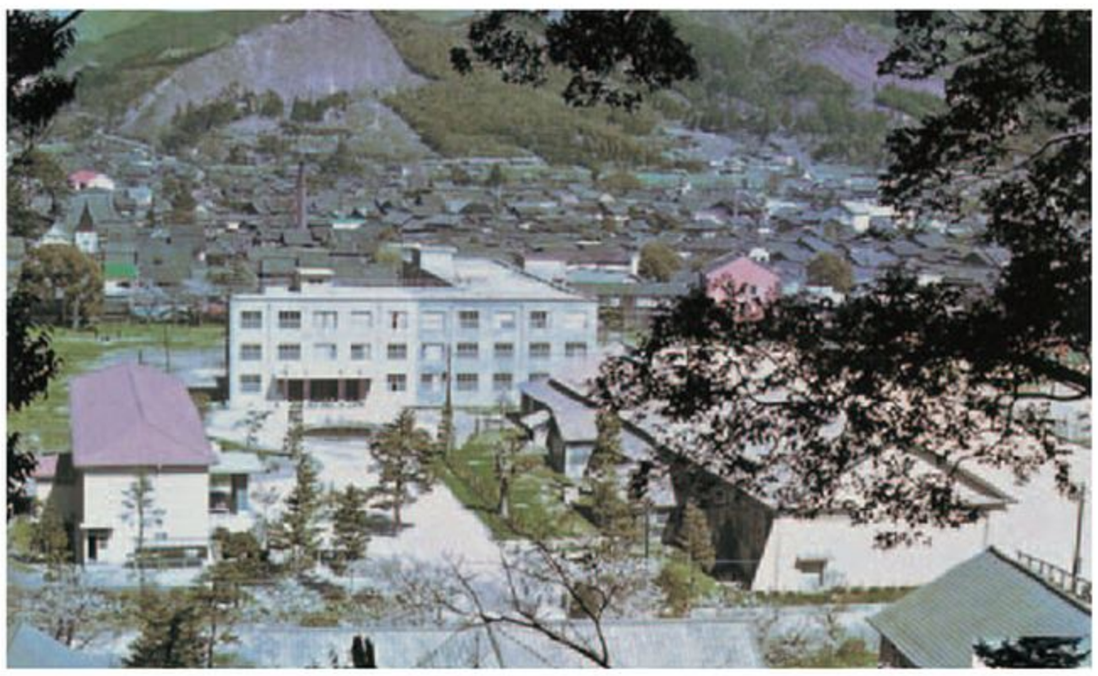
経済学部校舎　大イチョウのある風景

昭和35(1960)年　工学部　中央に正気館、左に工化実験棟、手前に寮

昭和36(1961)年　附属山口小学校正門付近



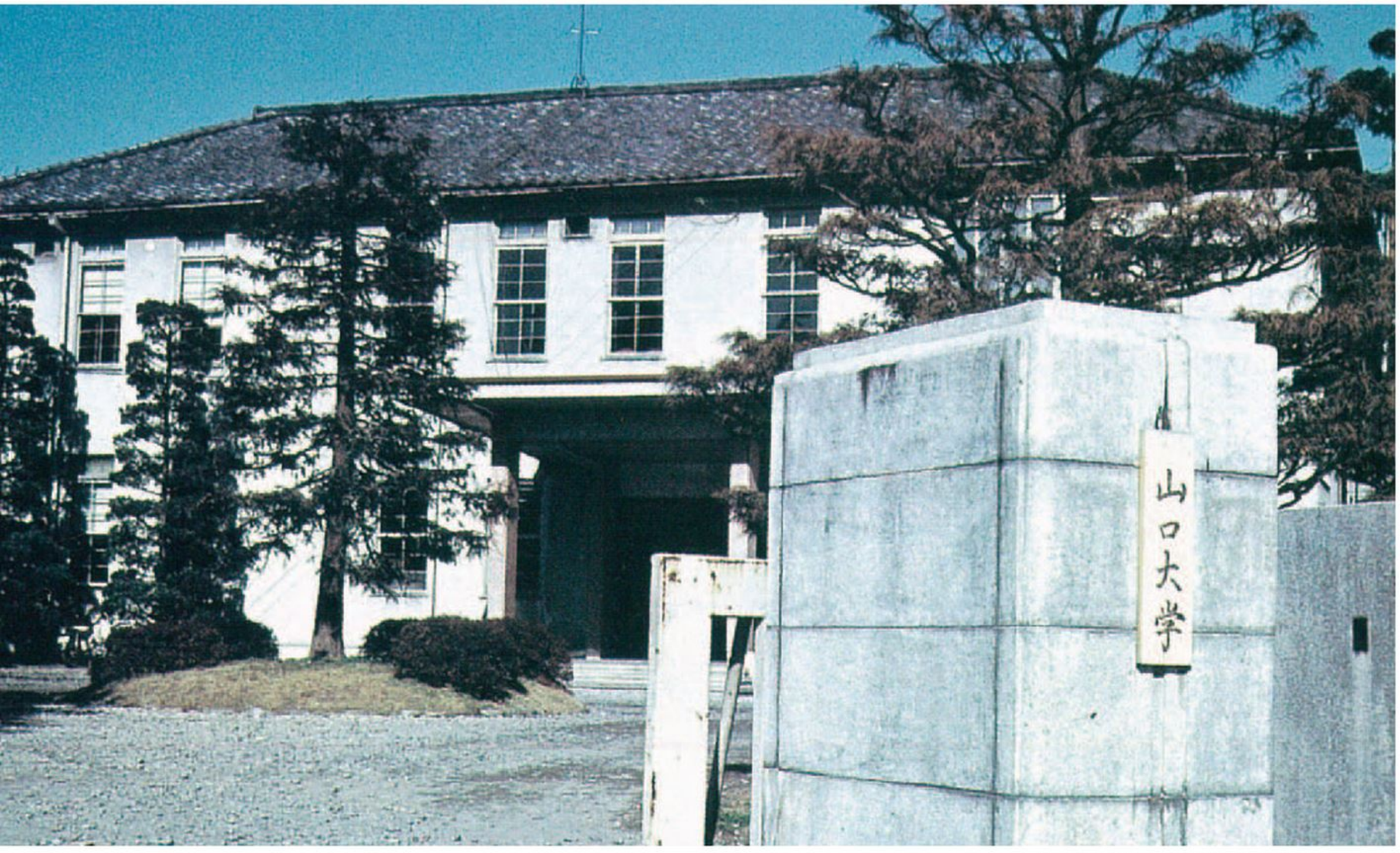
昭39(1964)年頃　山口県立医科大学キャンパス



昭和36(1961)年　文理学部玄関付近

昭和36年(1961.4)　文理学部理科棟(経済学部講堂付近から望む)

2 統合移転期　1966年→1973年



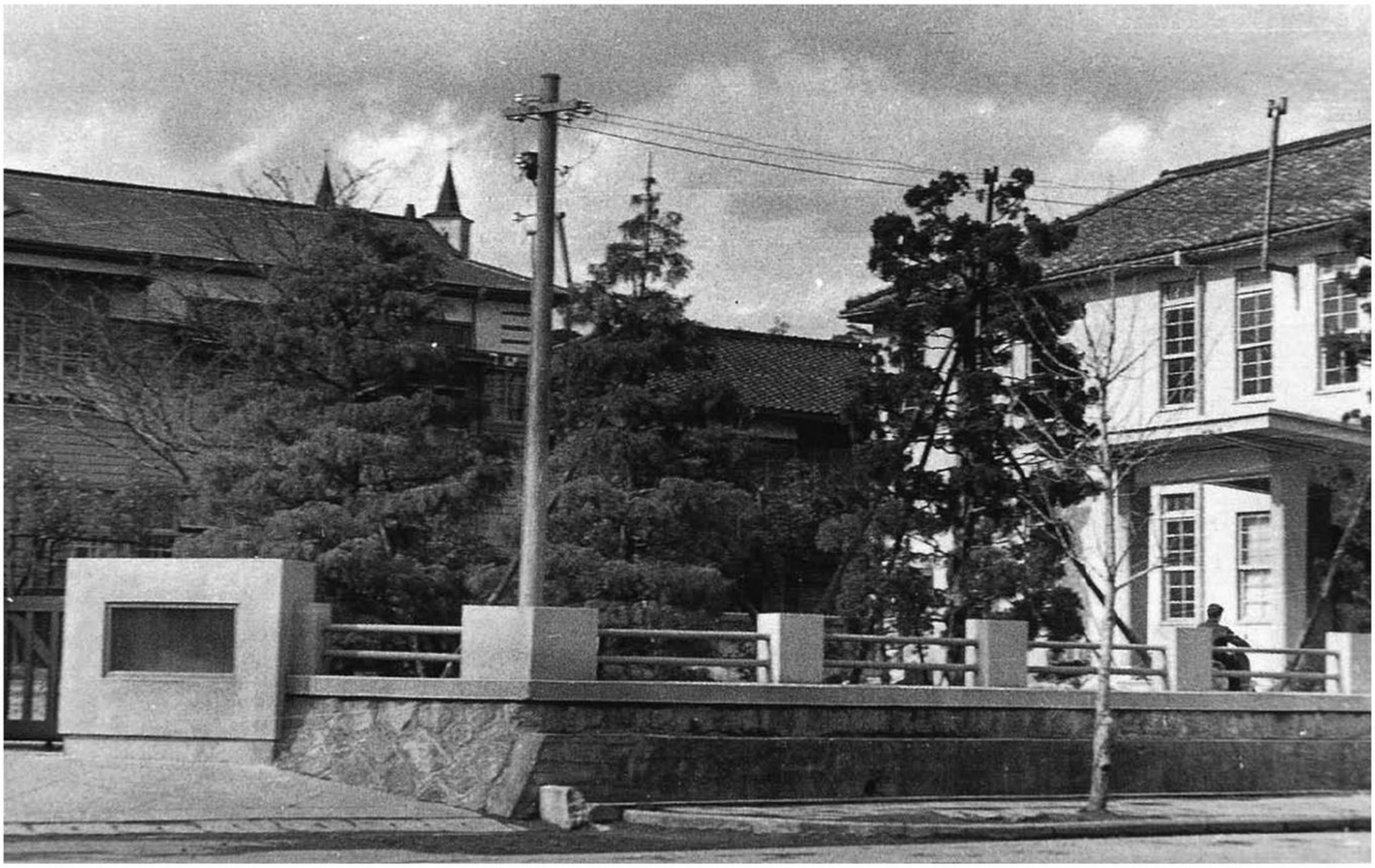
昭和42(1967)年　本部(統合移転前)現山口市民会館

昭和35(1960)年夏頃から高度成長期に入り、山口大学でも高等教育熱の高まりを反映して学部、学科の新設・増設が続いた。昭和39(1964)年4月には、山口県立医科大学を国立移管して医学部が設置され小串キャンパスが新たに加わり、昭和41(1966)年には文理学部の拡充改組により教養部が設置されている。

また、昭和41(1966)年、山口大学として初めての大学院工学研究科が発足し、常盤キャンパスは工業都市宇部にふさわしい最高学府へと発展していった。

山口市平川地区への統合移転が昭和39(1964)年9月の評議会において決定され、昭和41(1966)年の農学部にはじまり、昭和42(1967)年教養部、昭和43(1968)年文理学部・事務局・学生部、昭和45(1970)年附属図書館、昭和47(1972)年教育学部、昭和48(1973)年経済学部で移転が完了した。

こうして、平川地区において山口大学は新たな総合大学としてのあゆみを始め、小串、常盤キャンパスとともに学びの道を拓いていった。



本部前付近　現山口市民会館に建て変わる

昭和30(1955)年頃　農学部長府校舎

昭和41(1966)年　附属幼稚園誕生
附属小学校の校舎の一部を改造、一学級でスタート

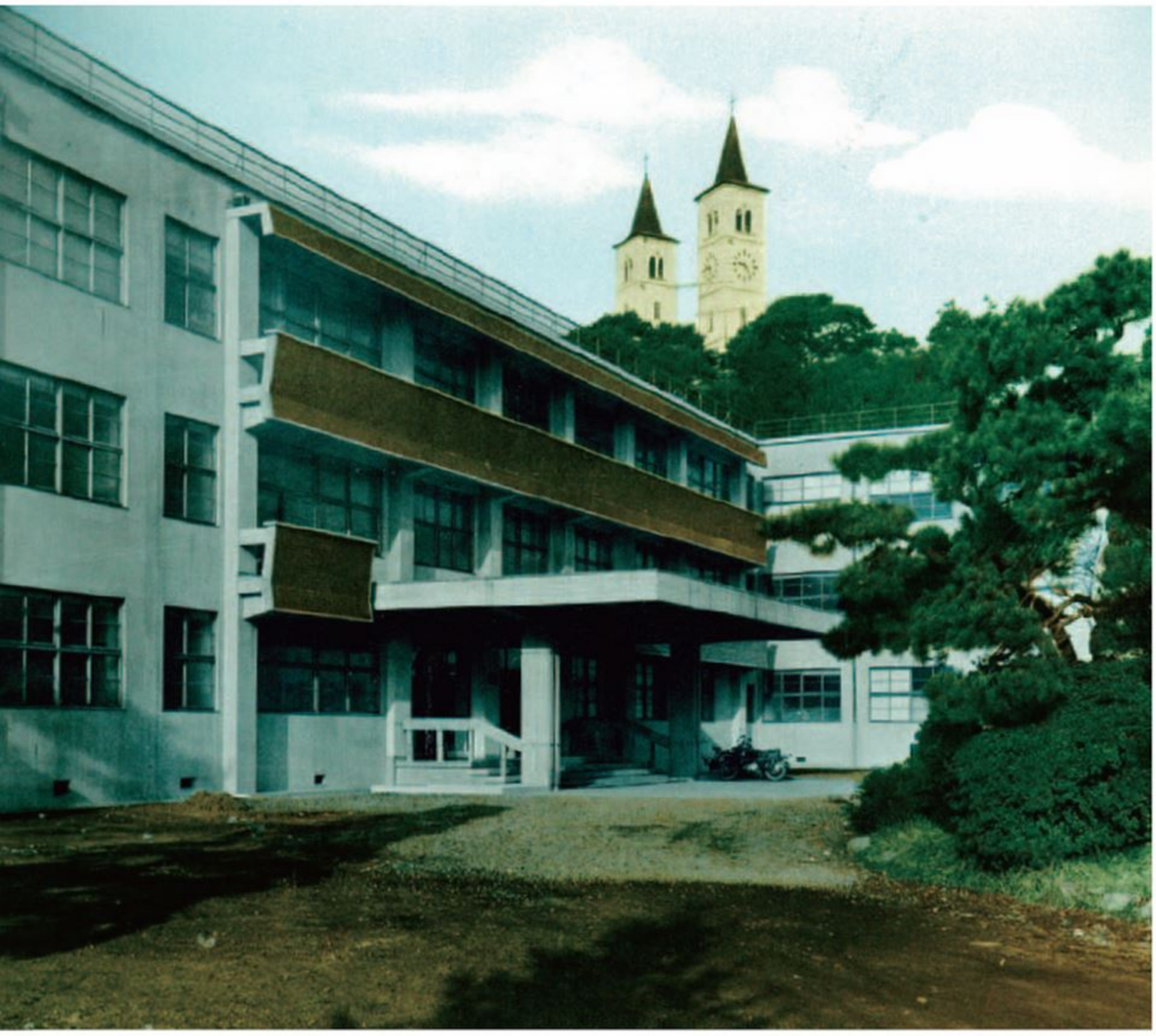
COLUMN

統合移転後の学生食堂

昭和41(1966)年の移転当時、吉田キャンパス付近には食堂がほとんどなかったため、学生食堂建設が急がれ、昭和42年に第1学生食堂が完成した。統合移転が進むなか、昭和47(1972)年、新たに第2学生食堂が完成した。医学部では、昭和50(1975)年に医学部学生食堂を開設。工学部では、学部開設当時から喫茶部のみが設けられていたが、昭和38(1963)年にこれを学生食堂(名称 工友館食堂)とした。その後、各キャンパスの学生食堂は改築、新築が行われ、機能を充実させている。

当時の第1学生食堂

当時の第2学生食堂

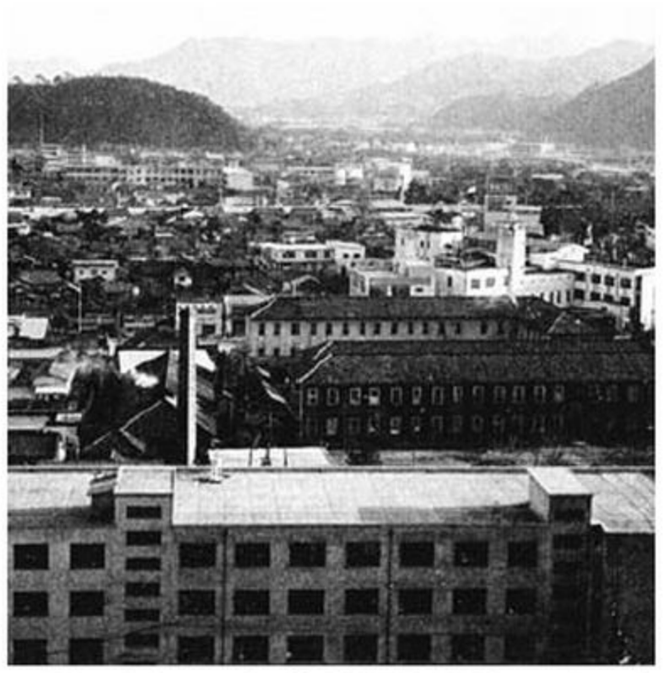


昭和41年(1966.3)　教育学部玄関付近(卒業記念アルバムより)

昭和42年(1967.3)　文理学部門標

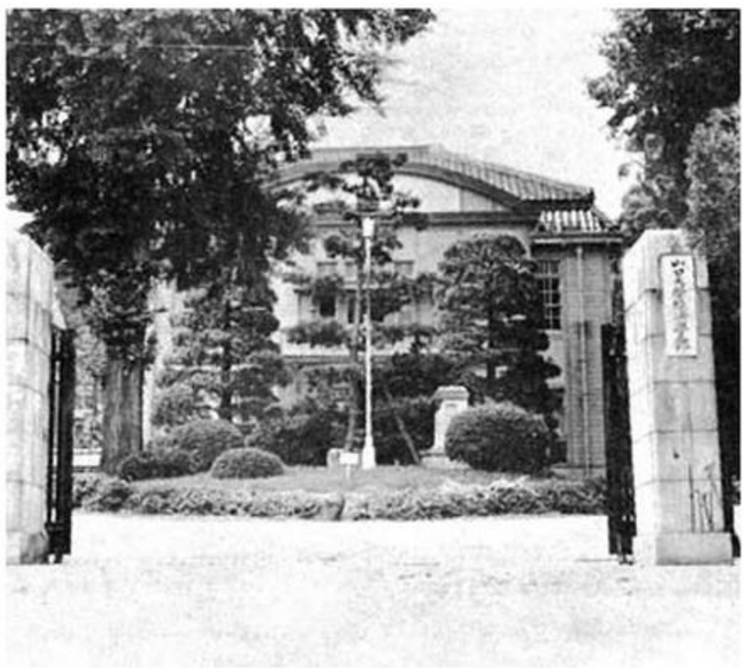
昭和41年(1966.3)　亀山より教育学部を望む(卒業記念アルバムより)

昭和41年(1966.3)　教育学部(卒業記念アルバムより)



昭和41年(1966.3)　教育学部(卒業記念アルバムより)

昭和45(1970)年頃　本部



昭和46(1971)年　経済学部

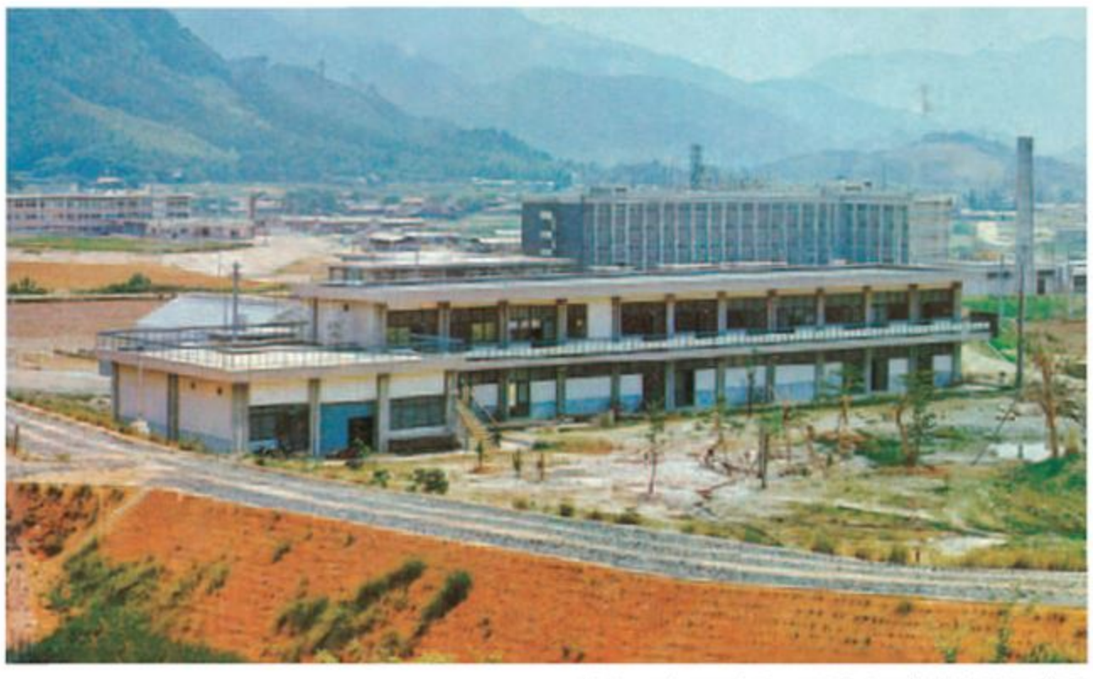
昭和41年(1966.3)　教育学部(卒業記念アルバムより)

昭和42(1967)年頃　経済学部校舎全景

昭和43(1968)年　山口大学吉田地区

昭和42(1967)年　農学部と建設中の文理学部

昭和43(1968)年　農学部



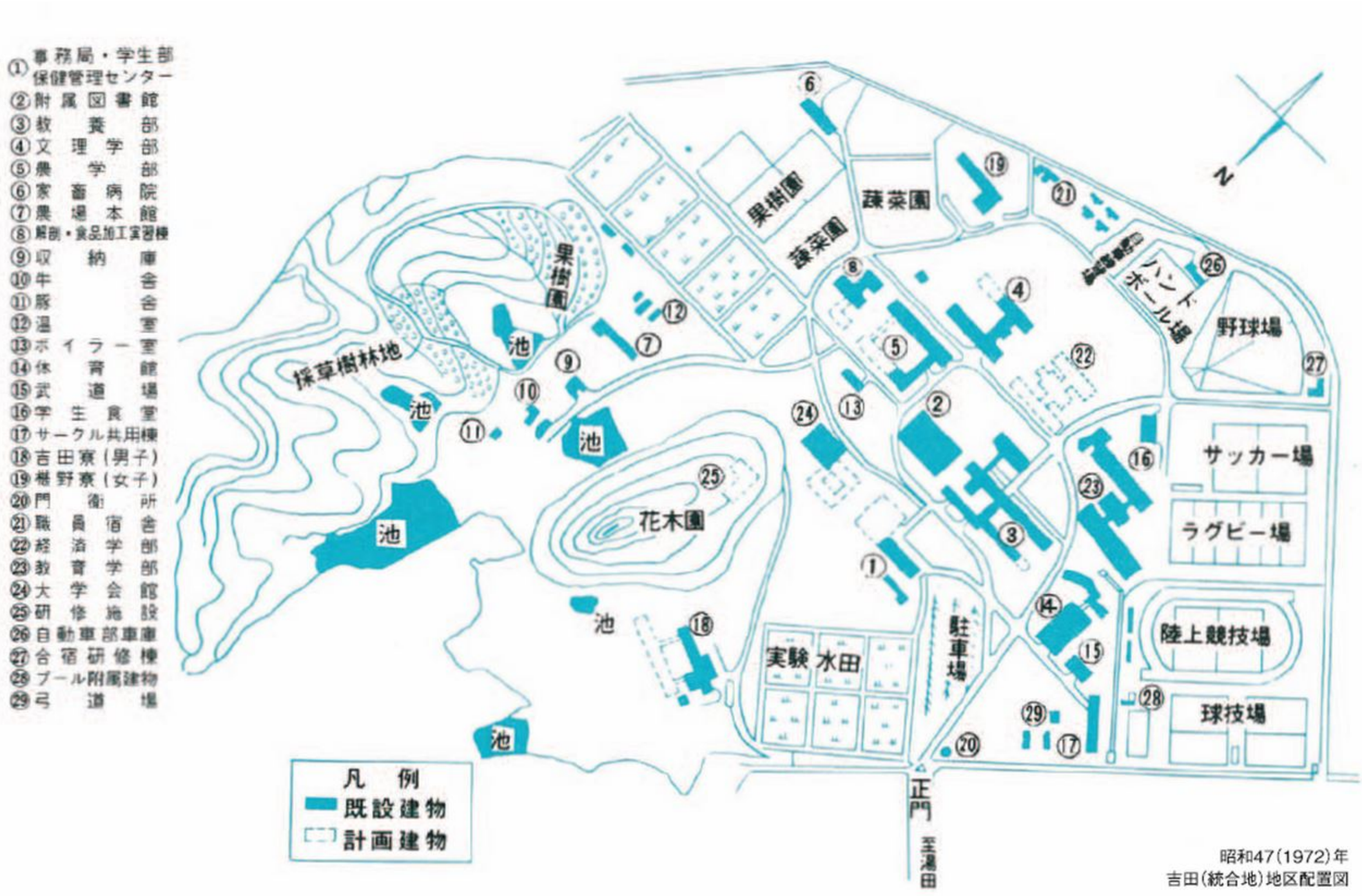
昭和43(1968)年　建設中の農学部附属農場

昭和46(1971)年　経済学部

昭和44(1969)年　正門風景

昭和45(1970)年　事務局

昭和46(1971)年　山口大学吉田地区(本部、文理学部、農学部、教養部、附属図書館等)



昭和47(1972)年
吉田(統合地)地区配置図

昭和48(1973)年　吉田地区

昭和50(1975)年　文理学部

昭和51(1976)年　経済学部

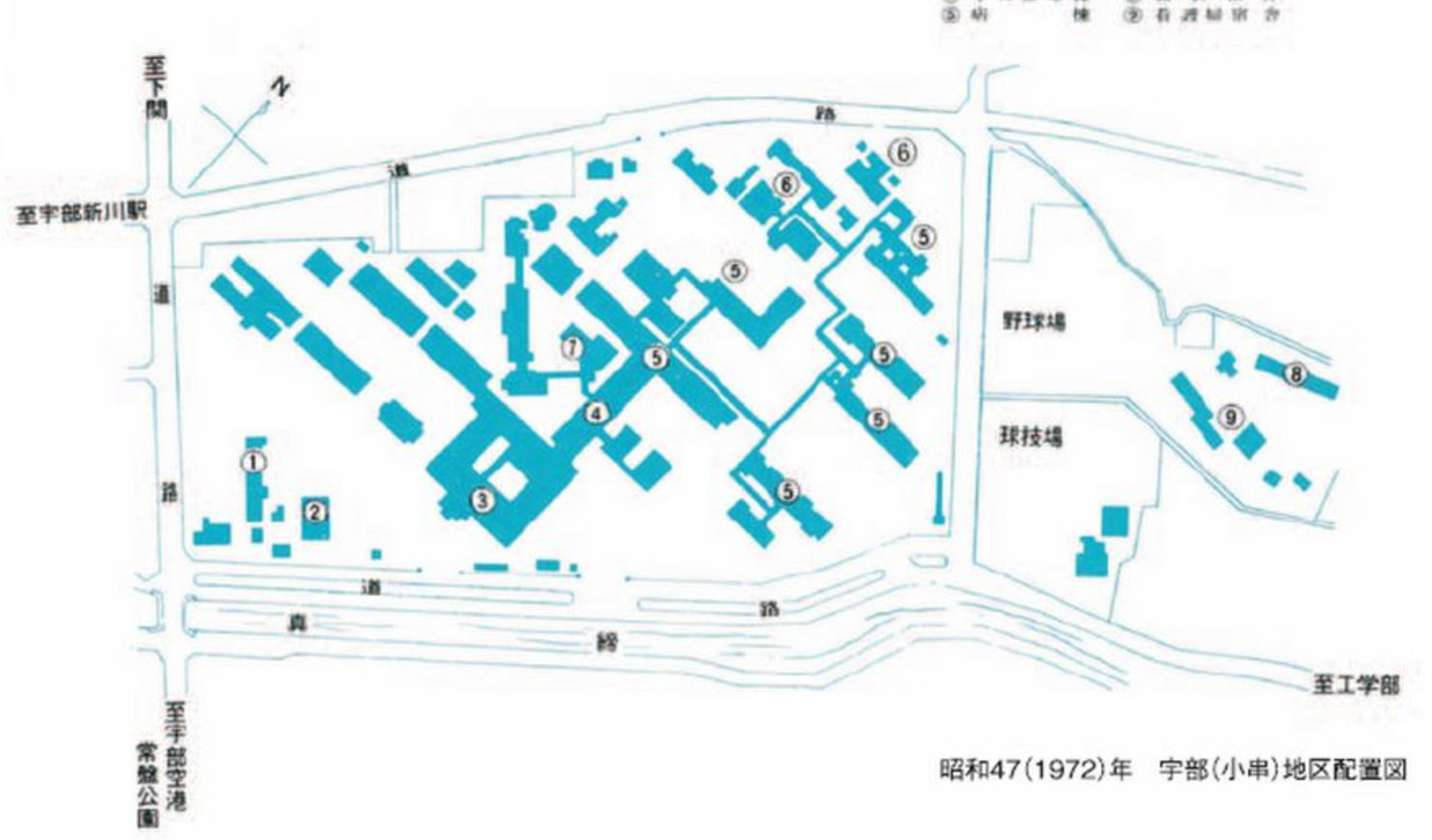
昭和52(1977)年　教育学部

昭和55(1980)年　農学部

昭和48(1973)年　小串地区

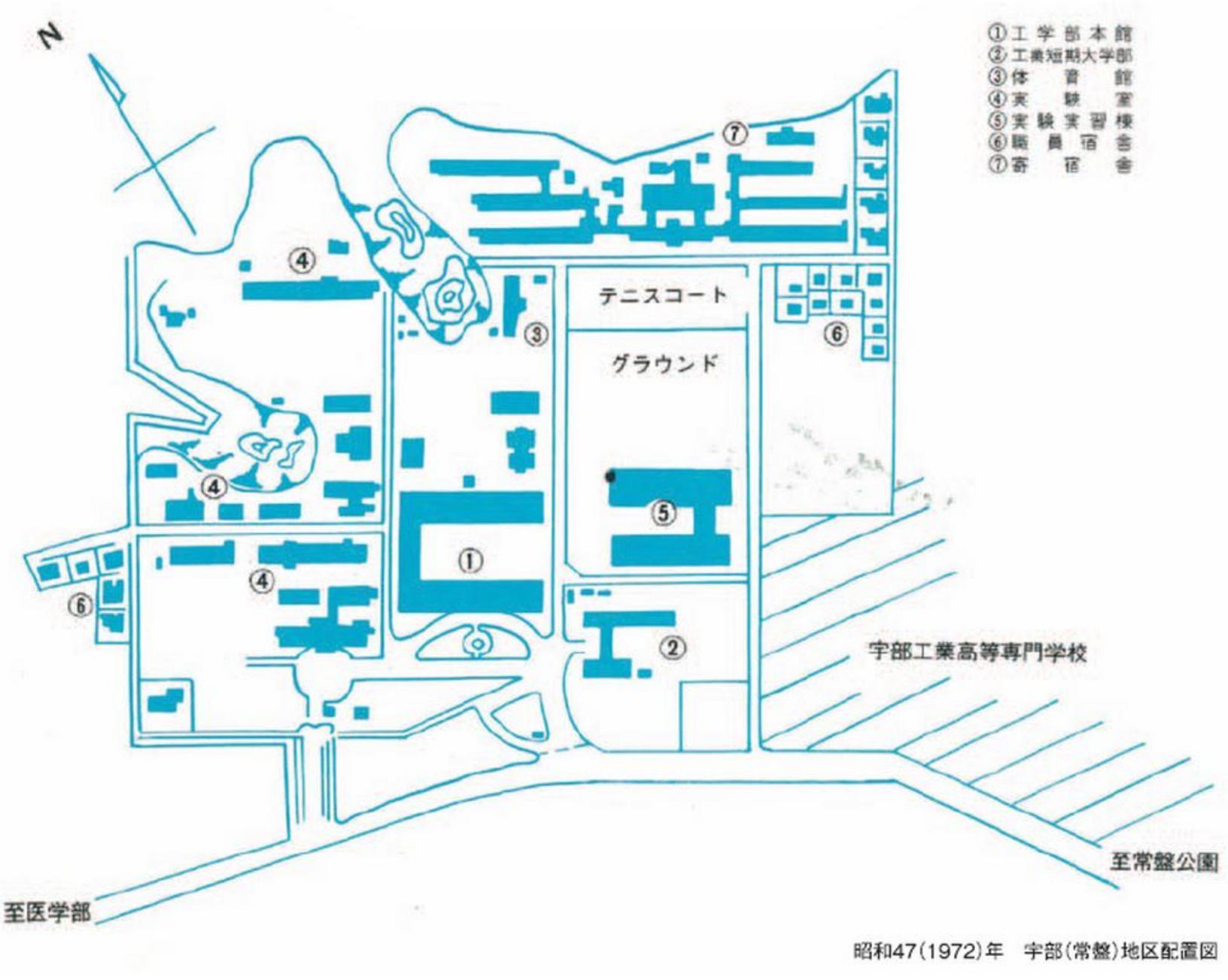
昭和49(1974)年　小串地区

昭和46(1971)年頃　医学部校舎



昭和47(1972)年　宇部(小串)地区配置図

昭和48(1973)年　常盤地区



昭和47(1972)年　宇部(常盤)地区配置図

建設中の工学部本館

工学部新本館屋上より望む

昭和45(1970)年　附属図書館落成

昭和46(1971)年　大学紛争当時経済学部正門付近

昭和46(1971)年

昭和45(1970)年　保健管理センター設置

昭和45(1970)年　機動隊の規制を受けてデモする学生たち

昭和46(1971)年
附属山口中学校プールから旧サビエル記念聖堂の塔を望む

昭和47(1972)年　附属幼稚園新園舎完成
玄関から遊戯室と保育室を望む

昭和48(1973)年　附属図書館工学部分館

3 整備·拡充期 1974年→1988年

昭和49(1974)年　吉田キャンパス正門

昭和53(1978)年に文理学部を改組して、人文学部と理学部が設置された。

この頃、時代の流れを背景に大学院も次々に設置され、昭和44(1969)年に農学研究科、昭和50(1975)年に経済学研究科、昭和57(1982)年に理学研究科、昭和60(1985)年に人文科学研究科、平成3(1991)年に教育学研究科が誕生した。

小串キャンパスでは、昭和60～平成5(1985～1993)年までの間、外来診療棟の改築にはじまり、病院と学部が近代的な建物に次々と建て替えられ、地域に密着した医療の中心となった。

吉田キャンパス、常盤キャンパス、附属学校等の各地区でも設備が充実していき、学びの環境が整えられていった。

こうした中で、激動の戦中・戦後を体験した昭和の時代が幕を閉じ、新たに平成の時代を迎えることとなった。

昭和51(1976)年　工学部・工業短期大学部正門

工業短期大学部旧校舎

昭和52(1977)年　教養部校舎全景

昭和52(1977)年　埋蔵文化財資料館竣工

昭和54年(1979.6.1)山口大学創立30周年記念式典(於 経済学部大講義室)

昭和54(1979)年　附属養護学校設置

COLUMN

山口大学標章(シンボルマーク)

創立30周年を記念して、本学の標章(シンボルマーク)の図案を学生および教職員から募集した。71点の応募作品の中から入選作品が決定し、その作品に若干の補正を加えたものを標章として制定した。この標章には以下のような作者の狙いが込められている。

- Yamaguchi UniversityのYとUを入れる
- 飛翔・発展するY(山口大)を
- 真・善・美を通じて自由・完全(円)を希求するbackboneある人物となることを志向する

昭和56(1981)年　医学部附属動物実験施設設置

昭和58(1983)年　大学会館新営に伴う発掘調査

昭和59(1984)年　理学部2号館(大学院棟)完成

昭和60(1985)年　大学会館設置

大学会館レストラン

大学会館喫茶部

昭和60(1985)年　経済学部創立80周年記念式典

昭和62(1987)年　教育実践研究指導センター設置(開所式)

昭和62年(1987.3)　医学部附属病院外来診療棟

昭和63(1988)年　国際交流会館(吉田)設置

昭和63(1988)年　附属図書館医学部分館

昭和63年(1988.9.17)　山東大学学術交流代表団来学　歓迎会

昭和63(1988)年　教養部校舎全景

昭和61(1986)年　吉田地区

附属養護学校

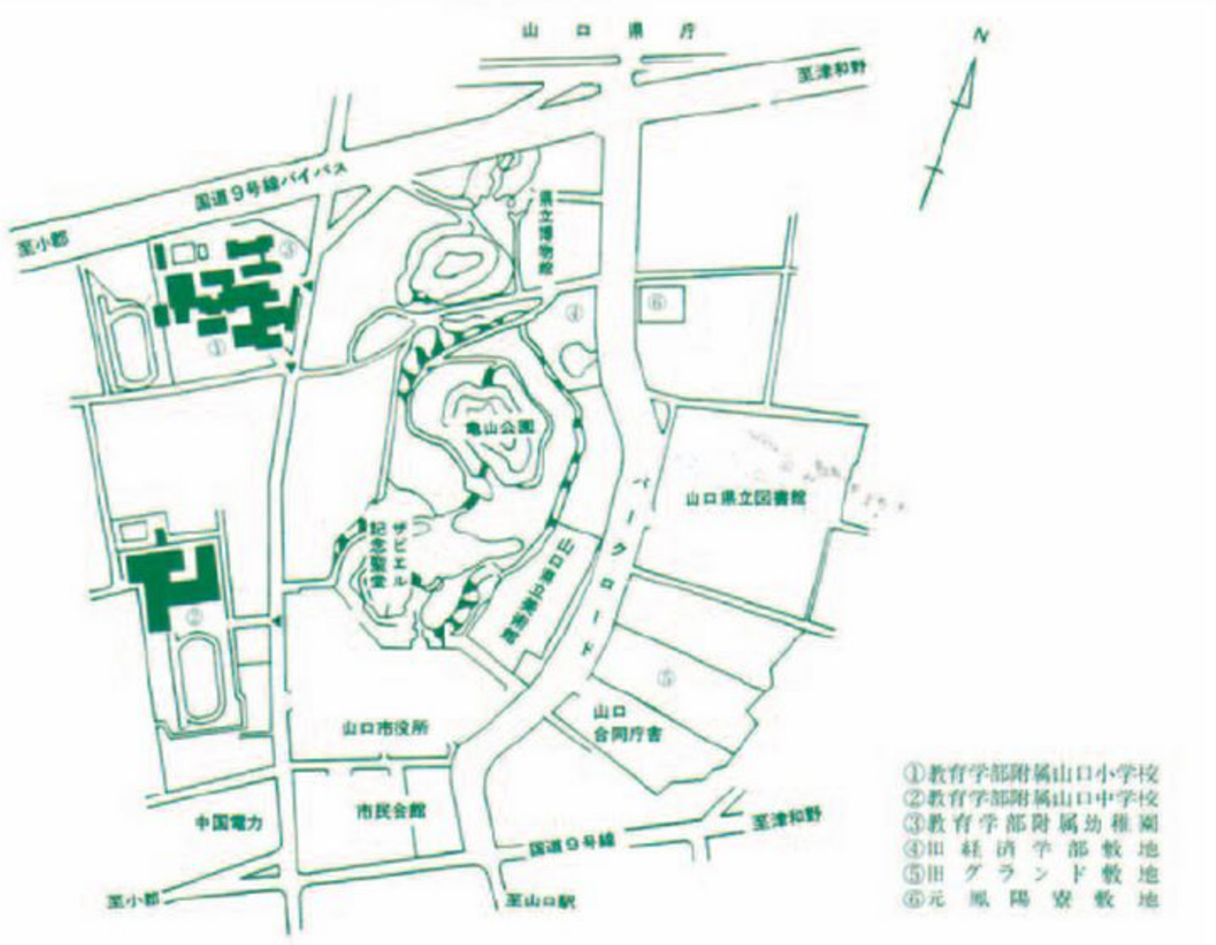
昭和63(1988)年　山口(吉田)地区配置図

附属幼稚園

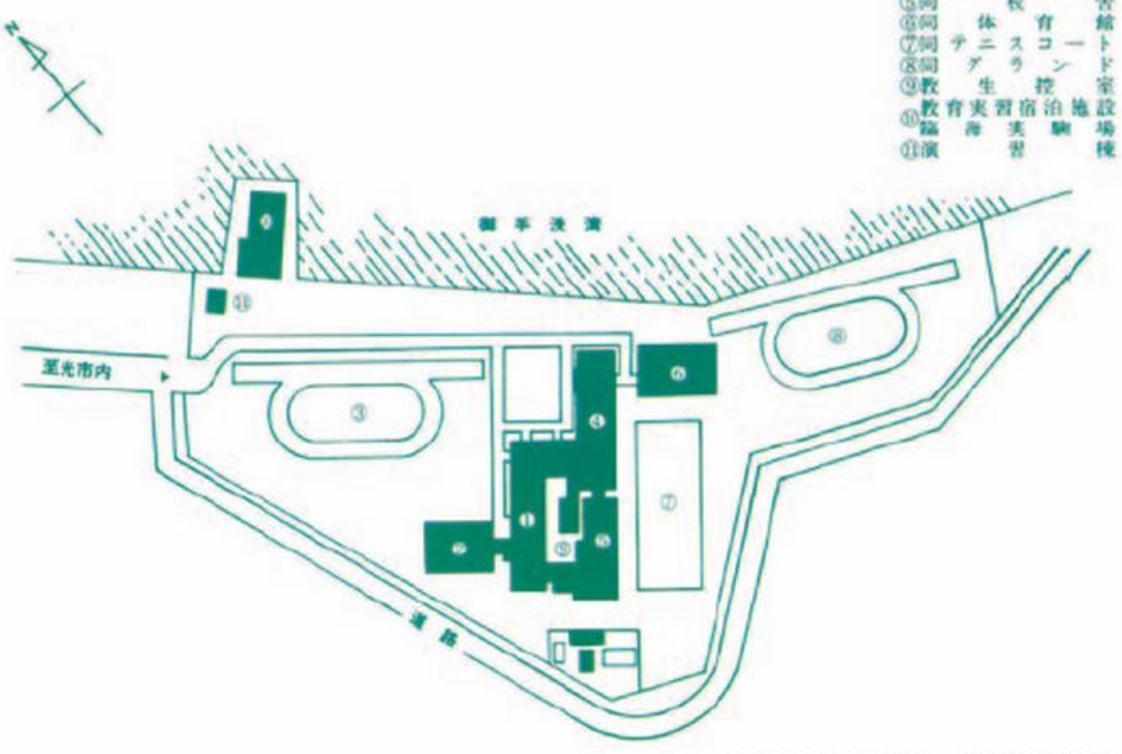
附属山口小学校

附属山口中学校

附属光小·中学校

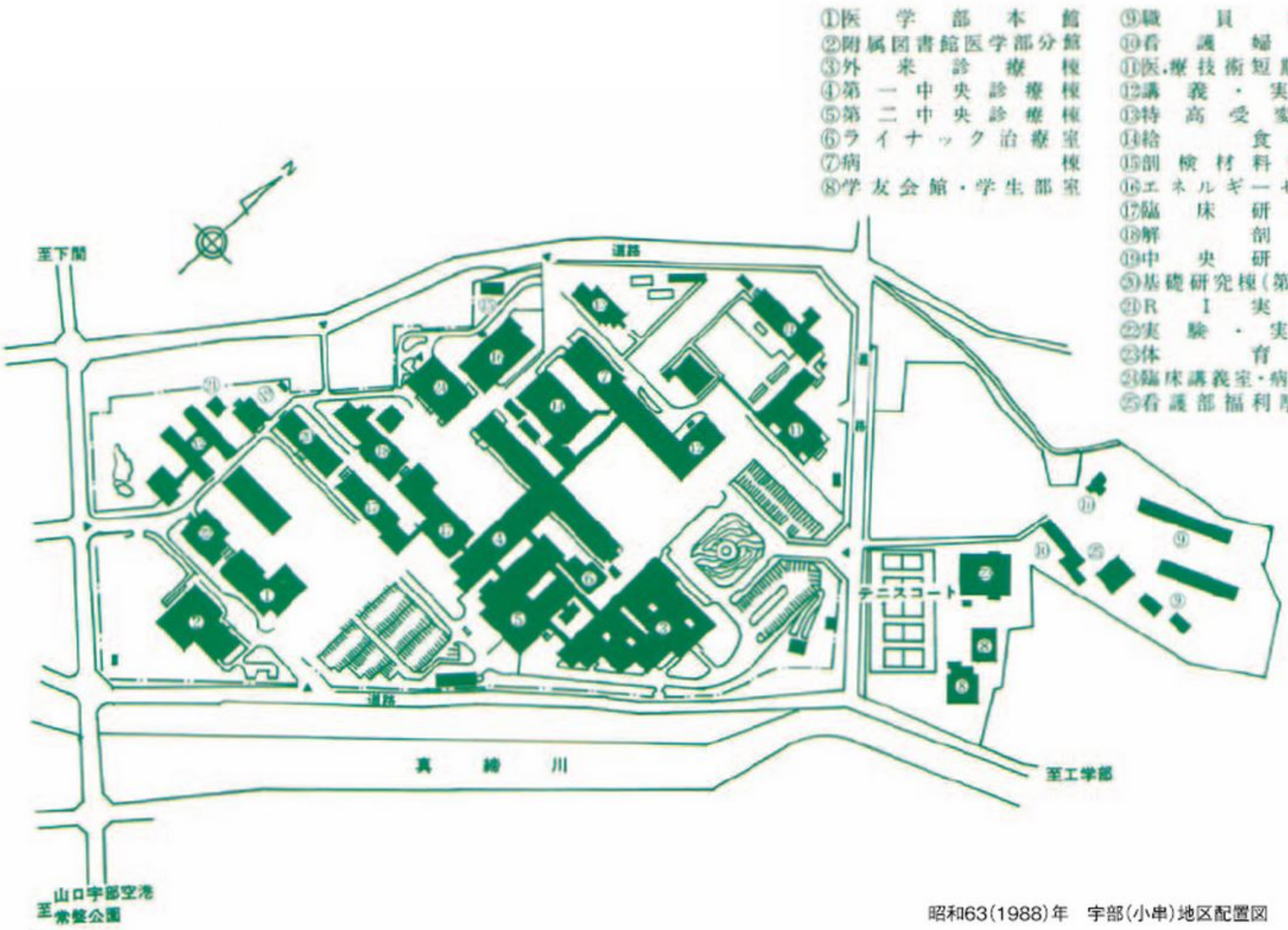


昭和63(1988)年　山口(亀山)地区配置図



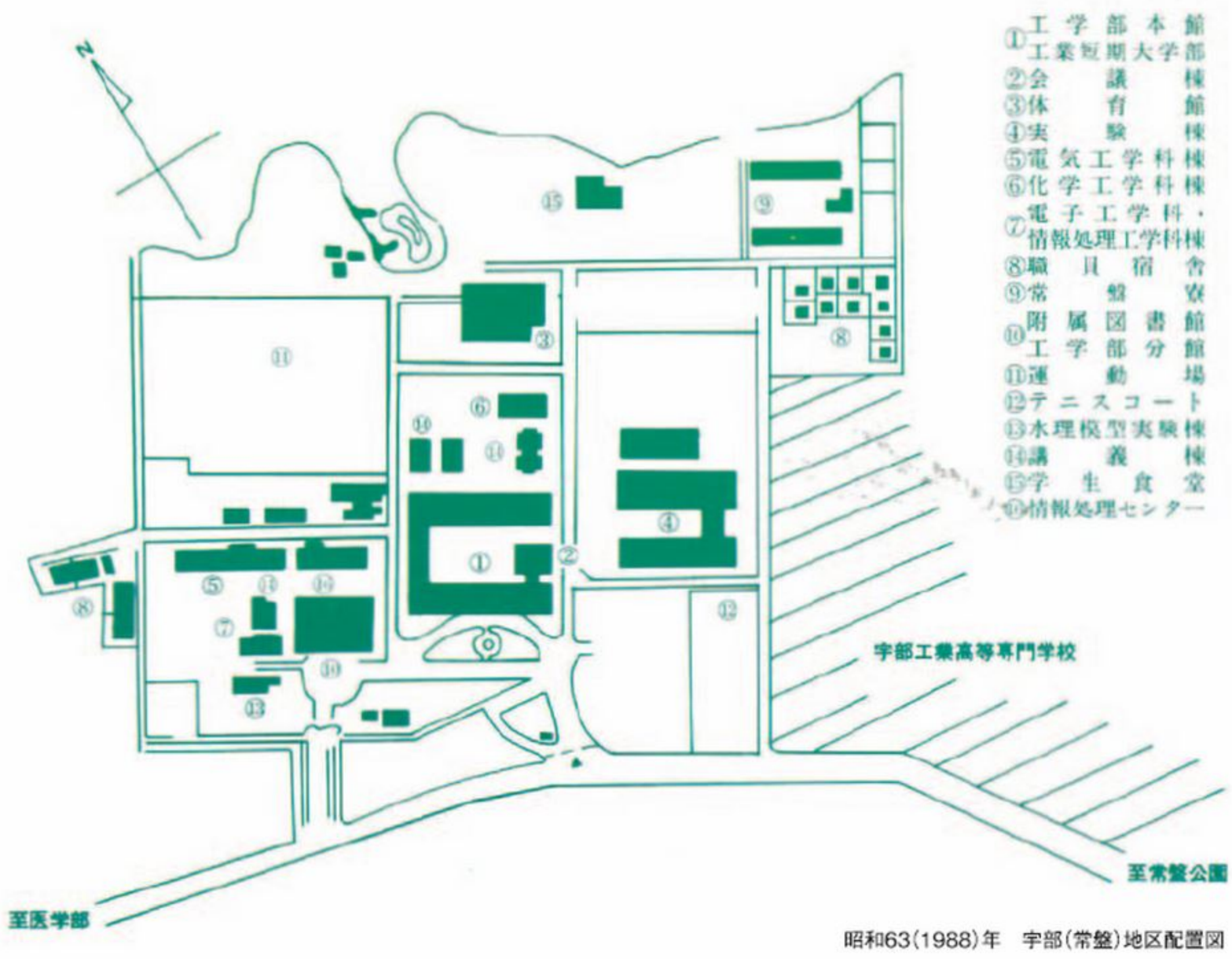
昭和63(1988)年　光地区配置図

昭和61(1986)年　小串地区



昭和63(1988)年　宇部(小串)地区配置図

昭和61(1986)年　常盤地区



昭和63(1988)年　宇部(常盤)地区配置図

4 変革期 1989年→2003年

平成11(1999)年　山口大学創立50周年記念式典

平成時代に入ってからも、学部・大学院の拡充が続いた。平成元(1989)年に農学研究科の農学専攻は鳥取大学の農学研究科に参画、平成2(1990)年に農学研究科の獣医学専攻は連合獣医学研究科として再スタート、平成3(1991)年には教育学研究科が設置され、平成9(1997)年には理学研究科が工学研究科とともに理工学研究科として再スタートをきった。

また、平成12(2000)年に医学部に保健学科、平成13(2001)年に大学院医学研究科内に、日本で初めて医学部と工学部が連携した応用医工学系専攻が設置された。一方、教養部は平成8(1996)年に共通教育センターの設置とともに廃止となり、4年一貫教育が実施されるようになった。

この時代に山口大学は創立から50周年を迎え、数々の記念行事を開催、平成11(1999)年に創立50周年記念式典を挙行した。その後、平成13(2001)年度より法人化への動きがはじまり、3年の準備期間を経て平成16(2004)年、国立大学法人に生まれ変わった。

平成元年(1989.11.13)　山口大学創立40周年記念巡回講演会(岩国市民会館ホール)

平成元(1989)年　工学部創立50周年記念式典

平成11(1999)年　山口大学創立50周年記念祝賀会

平成11(1999)年　山口大学創立50周年記念祝賀会

平成11(1999)年　山口大学創立50周年記念
エズラ・ヴォーゲル博士(ハーバード大学教授)への名誉博士称号授与式

平成11(1999)年　山口大学創立50周年記念50祭

COLUMN

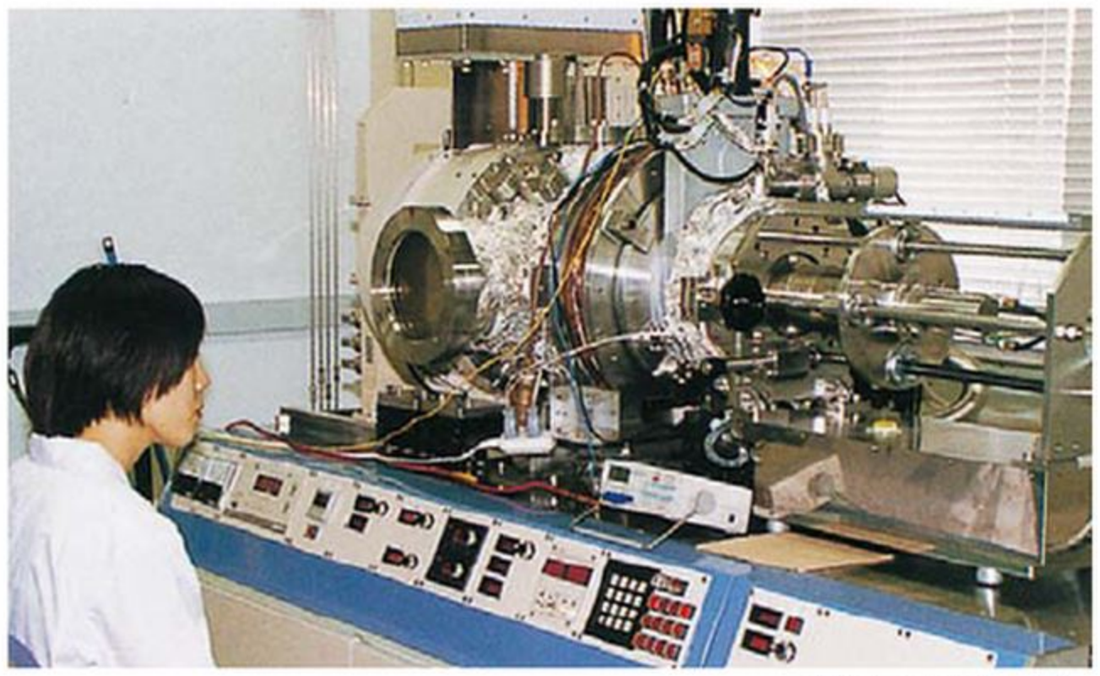
山口大学広報誌(YU Information)の創刊

平成4(1992)年7月に山口大学広報誌が創刊された。学生、教職員、保護者、高校生、地域の方々へ山口大学の取り組みや新しい情報を発信するため、毎号さまざまなテーマを設定し広報活動を行っている。近年は1年間に6回のペースで発行しており、平成26(2014)年7月号で120号目となった。2013年度からはデジタル化を推進し、インターネットでの配信を実現。より広範囲へ情報を届けられるようになっている。

平成3年(1991.6.20)　山口大学大学院教育学研究科修士課程設置記念式典

平成3(1991)年　地域共同研究開発センター設置

平成3年(1991.8.5)　地域共同研究開発センター開所式



地域共同研究開発センター

平成3年(1991.9.28)　台風19号被害状況
家畜病院車庫付近

平成4(1992)年　機器分析センター設置

平成4年(1992.8)　機器分析センター門標

機器分析センター(電顕室)

平成5(1993)年　大学院連合獣医学研究科棟

平成5年(1993.12.2)　大学院連合獣医学研究科棟落成記念式典

平成5年(1993.12.2)　大学院連合獣医学研究科棟落成記念式典

平成6(1994)年　遺跡保存地区大学会館南側整備

平成6年(1994.9.6)　山口大学ATM開設式(旧教養部裏)

平成6(1994)年　医学部創立50周年記念式典

平成7(1995)年　医心館

医学部門標

平成7(1995)年　体育館

平成7(1995)年　グラウンド

平成7(1995)年　第2学生食堂

平成10年(1998.5.21)　経済学部商品資料館内部

平成7(1995)年　経済学部商品資料館竣工

経済学部東亜経済研究所(書庫)

医学部本館

医学部基礎研究棟

医学部臨床研究棟

昭和56(1981)年　情報処理センター設置
平成7(1995)年　総合情報処理センター設置

平成8(1996)年　共通教育センター設置(旧教養部)

平成10(1998)年　共通教育センター(旧教養部)

平成8(1996)年　ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー教育研究施設設置

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー教育研究施設

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー教育研究施設

平成8年(1996.3.26)　新放射性同位元素総合実験室落成

平成8(1996)年　心理教育相談室開設

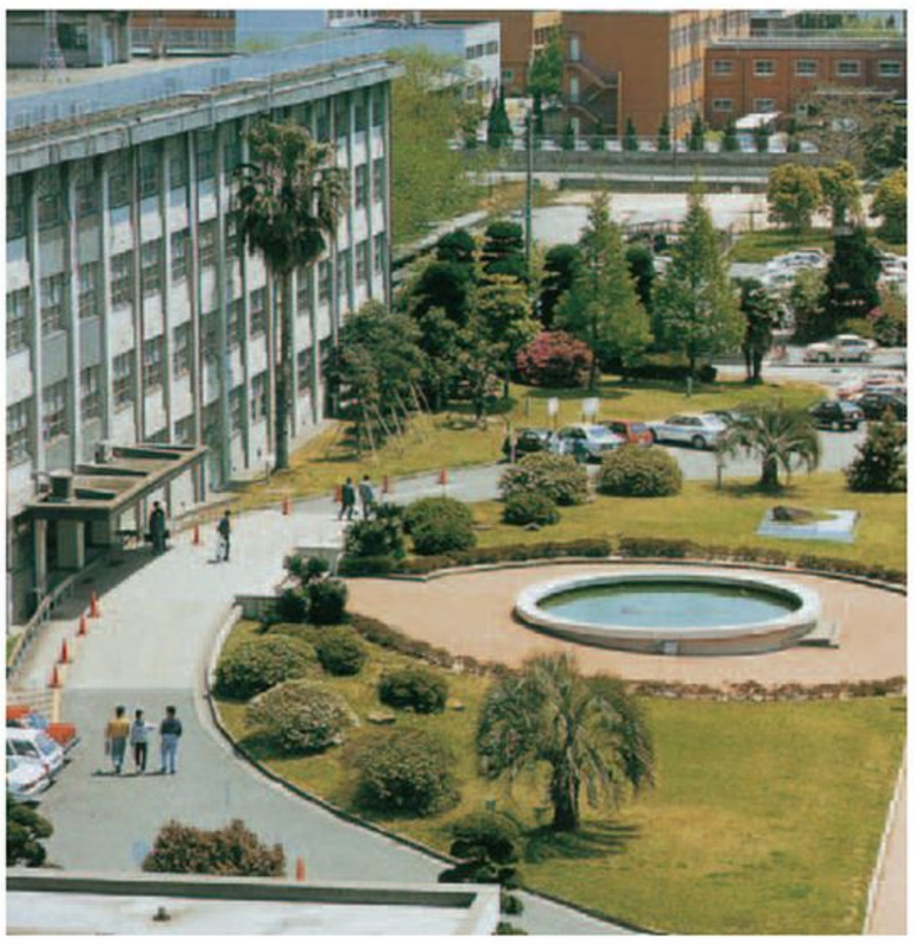
平成9(1997)年　学生センター開所祝賀式

平成9年(1997.6.8)　おもしろプロジェクト「めだかの学校」

平成9年(1997.6.8)　おもしろプロジェクト「めだかの学校」

平成9(1997)年　附属図書館

平成14(2002)年　附属図書館閲覧室



平成10(1998)年　工学部玄関付近

平成10(1998)年　附属山口中学校50周年(航空写真)

平成10年(1998.6.25)　仁荷大学校大学間学術交流協定締結

平成10(1998)年　遺伝子実験施設

平成14(2002)年　工学部福利厚生棟

平成14(2002)年　第2回オープン・ライブラリー

平成15(2003)年　法人化に向けてのアンケート実施(七夕祭)

平成15年(2003.1)　保護者向け広報誌創刊

平成15(2003)年　法人化に向けて審議

平成15(2003)年　シンボルマークアンケート実施(大学祭)

平成11(1999)年　吉田地区

平成11(1999)年　附属養護学校

N

①事務局・学生部・保健管理センター一
②人文学部
③教育学部
④経済学部
⑤理学部
⑥農学部
⑦共通教育本館
⑧附属図書館
⑨教育学部附属養護学校
⑩教育学部附属教育実践総合センター
⑪農学部附属農場
⑫農学部附属家畜病院
⑬情報処理センター
⑭山口分室
⑮埋蔵文化財資料館
(吉田地区)放射性同位元素総合実験室
⑯大学会館
⑰山口国際交流会館
⑱体育館・武道場等
⑲サークル共用棟
⑳合宿研修棟
㉑吉田寮(男子)
㉒椹野寮(女子)
㉓学生食堂
㉔生活排水処理施設
㉕特殊排水処理施設
㉖門衛所
㉗大学院連合獣医学研究科棟
㉘商品資料館
㉙機器分析センター

平成11(1999)年　吉田地区配置図

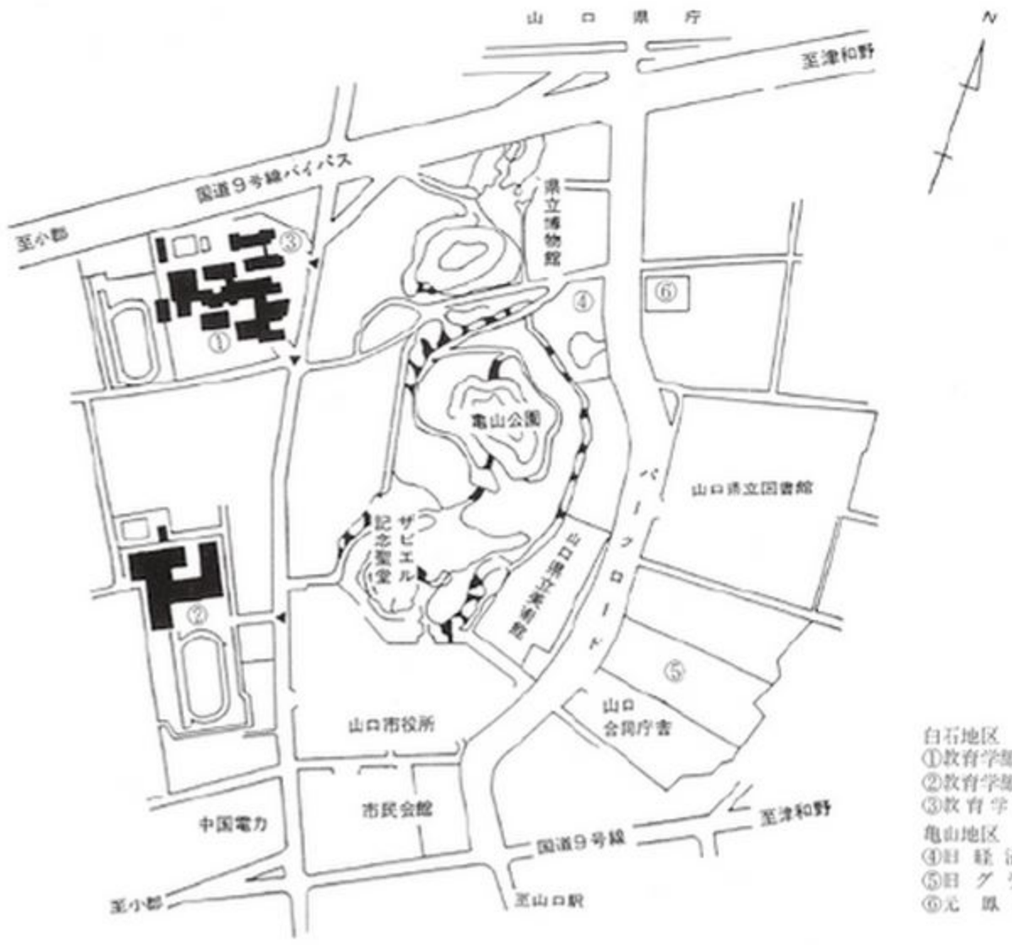
平成11(1999)年　附属幼稚園

平成11(1999)年　附属山口小学校

平成11(1999)年　附属山口中学校

平成11(1999)年　附属光小学校

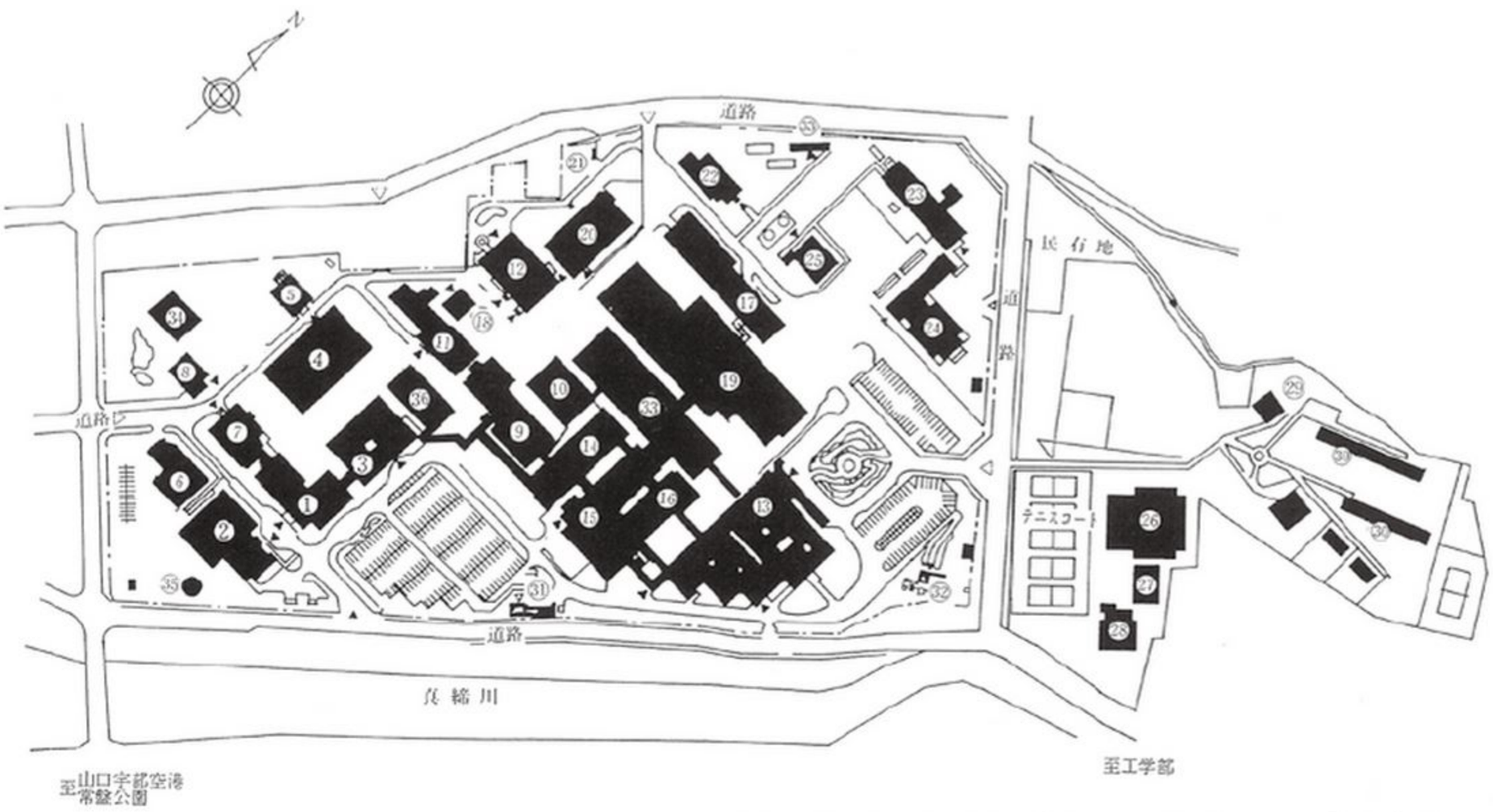
平成11(1999)年　附属光中学校



平成11(1999)年　白石・亀山地区配置図

平成11(1999)年　光地区配置図

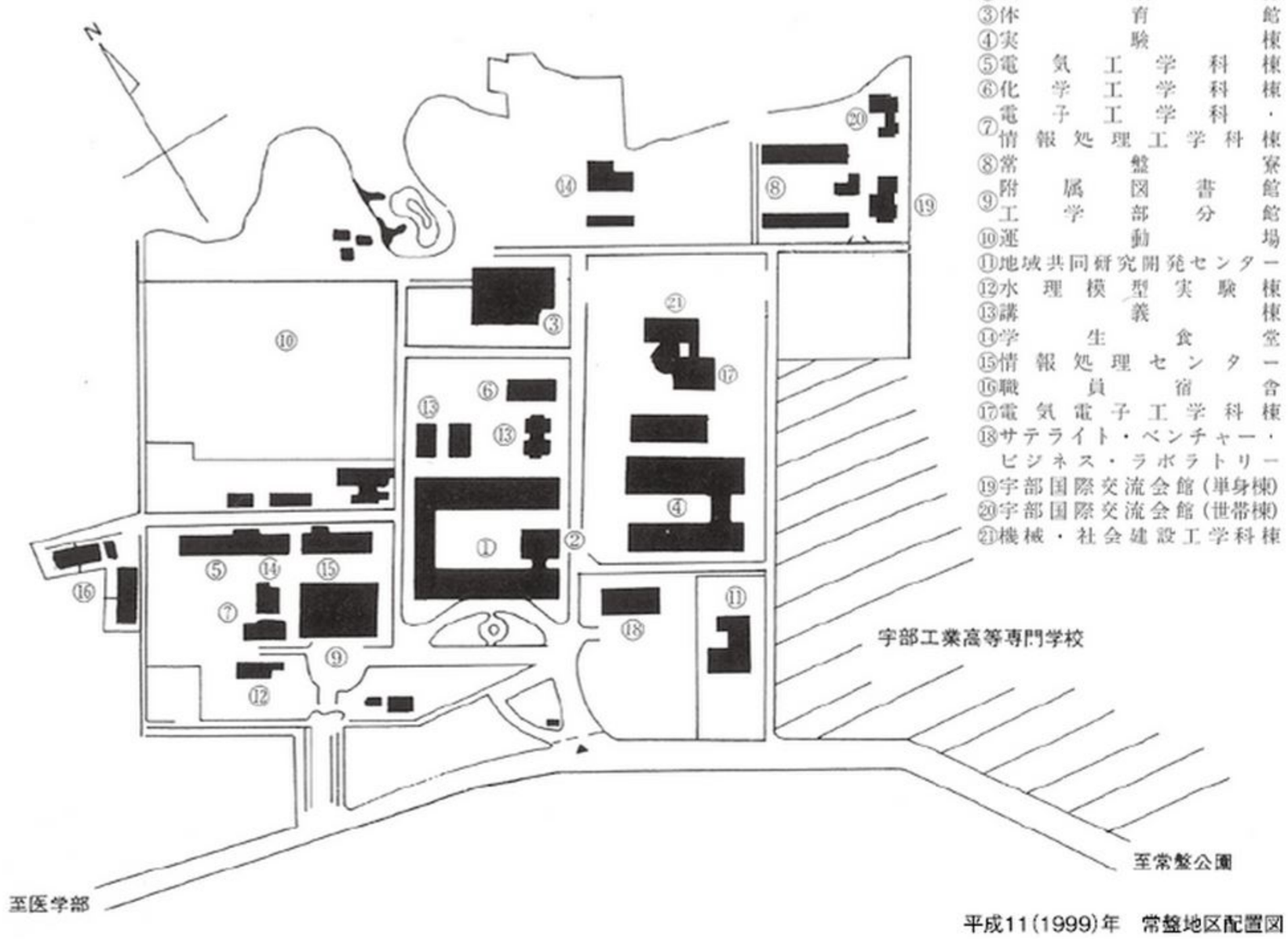
平成11(1999)年　小串地区



①医学部本館	⑬外来診療棟	㉕医療技術短期大学部学生ロッカー棟
②附属図書館医学部分館	⑭第一中央診療棟	㉖体育館
③基礎研究棟	⑮第二中央診療棟	㉗学生部室
④臨床実験施設	⑯ライナック治療室	㉘学友会館
⑤中央研究棟	⑰第二病棟	㉙看護婦宿舎
⑥福利棟	⑱法医解剖棟	㉚職員宿舎
⑦実験・実習棟	⑲第一病棟	㉛車庫
⑧講義棟	⑳エネルギーセンター	㉜焼却場
⑨臨床研究棟	㉑剖検材料保存室	㉝中央診療棟
⑩M R棟	㉒特高受変電棟	㉞医学部記念会館
⑪解剖棟	㉓医療技術短期大学部本館	㉟納骨堂
⑫臨床講義室	㉔医療技術短期大学部校舎棟	㊱共同研究棟

平成11(1999)年　小串地区配置図

平成11(1999)年　常盤地区



平成11(1999)年　常盤地区配置図

5 飛躍期　2004年→2014年

平成16(2004)年頃　吉田キャンパス正門

平成16（2004）年4月1日、山口大学は国立大学法人として新たなスタートをきった。法人化にともない、シンボルマークやカラーを一新、平成19（2007）年には「山口大学憲章」が制定され、新しい大学づくりがさらに一歩前進した。

法人化後は、企業・地方自治体等と包括的連携協力の協定を次々と締結するほか、公開講座や開放授業等を実施するなど、地域との交流や地域貢献活動に積極的に取り組んでいる。

平成13（2001）年に大学院東アジア研究科を設置、平成17（2005）年大学院医学研究科を医学系研究科に改称し、同研究科に保健学専攻を設置、技術経営研究科を設置、経済学部に観光政策学科が設置された。さらに、平成24（2012）年共同獣医学部が創設された。

平成27（2015）年に迎える創基200周年を祝し、平成22（2010）年にはシンボルマーク・キャッチフレーズが定められた。大学のさらなる飛躍に向けて学生、教員、職員が一体となって改革に取り組んでいる。

平成16(2004)年　大学正門のシンボルマーク

平成16(2004)年　門標

平成16(2004)年　校旗

平成16(2004)年　シンボルマーク入りのグッズ

平成16(2004)年　小串総合研究棟竣工

平成16(2004)年　小串総合研究棟竣工

平成16(2004)年　常盤総合研究棟竣工

平成16(2004)年　常盤総合研究棟竣工

COLUMN

山口大学シンボルマーク・ロゴタイプ

山口大学は平成12(2000)年4月に新たな教育理念・目標である「発見し・はぐくみ・かたちにする　知の広場」が制定されたのを機に、本学のUI(University Identity)を表現するVI(Visual Identity、シンボルマーク、ロゴマーク及びスクールカラー等)の制定を山口大学広報活動専門委員会が中心となって作業を進め、平成16(2004)年1月、新シンボルマーク等を制定した。

シンボルマークは未来をまっすぐに見据えた顔を表現しており、それはまた、個性を大切にした教育・研究を育む学問の芽であり、世界に向かって大きく開いていくことを意図している。

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

平成17(2005)年　学生センター

平成17(2005)年　山口市との協定調印式

平成18(2006)年　開放授業開始の記者会見

平成18(2006)年　地域との交流会開始

平成18(2006)年　長州五傑記念碑除幕式

平成18(2006)年　第1回ちゃぶ台フォーラム開催

平成18(2006)年　附属光小学校・附属光中学校創立60周年記念式典

平成19(2007)年　山口大学憲章制定

平成19(2007)年　附属病院高度救急救命センターリニューアルオープン、ハイケアユニット(HCU)10床が稼働

平成20(2008)年　東亜経済研究所竣工

平成21(2009)年　O-HARA山口大学就職支援施設誕生

平成21(2009)年　大原学園との連携事業の記者会見

平成20(2008)年　メディア基盤センター ISO/IEC27001の認証取得

平成21(2009)年　工学部創立70周年記念植樹

平成21(2009)年　医学部に頌徳碑完成

平成22(2010)年　常盤女子寮竣工

平成22(2010)年　整備を終えた正門駐車場

平成22(2010)年　農学部創設の地記念碑除幕式
(下関市長府)

平成22(2010)年　東アジア研究科・経済学研究科棟完成

平成22(2010)年
「共育の丘」およびモニュメント完成披露式典

平成22(2010)年　附属動物医療センター改修工事竣工

平成22(2010)年　農学部植物工場開所

平成22(2010)年　創基200周年ロゴマーク・キャッチフレーズ決定

平成23(2011)年　小串団地構内立体駐車場完成

平成23(2011)年　やまぐちイノベーション創出推進拠点開所

平成23(2011)年　廣中平祐先生時間学研究所名誉所長任命

平成23(2011)年　ドクターヘリ運航開始

平成23(2011)年　吉田寮1号棟改修完了

平成26(2014)年　ドクターヘリ格納庫完成

平成24(2012)年　医学部附属病院地域医療教育研修センター竣工

平成24(2012)年　キャンパス・イノベーションセンター内に東京事務所開設

平成24(2012)年　共同獣医学部設置記念式典

平成24(2012)年　平成24年度国立大学図書館協会賞受賞

平成24(2012)年　工学部附属グローバル技術者養成センター開所

平成25(2013)年
「世界一大きな郵便ポスト」ギネス記録認定

平成25(2013)年　記念スタンプ

平成25(2013)年　やまぐち子育て応援優良企業表彰受賞

平成26(2014)年　「りぶカフェ」図書館内に設置

平成25(2013)年　山口学芸大学、山口芸術短期大学と協定締結

平成26(2014)年　総合図書館増築･改築竣工

COLUMN

山大ブランドの創出

平成16(2004)年の法人化後、大学では受験生や保護者、地域の方に魅力をアピールするため、ブランド力の向上に力を入れている。選ばれる大学になるため、教育面での特徴ある取り組みのほかに、大学の研究成果の製品化や独自ブランドの商品開発・販売、シンボルマーク、キャラクターの制作など、多方面でイメージ戦略が繰り広げられている。

大学キャラクター「ヤマミィ」

平成24(2012)年11月に山口大学のシンボルマークの形とカラーリングをイメージした、「自由さ」「好奇心」「柔軟性」を持ったネコをモチーフとして作成された。名前の「ミィ(Me)」には、「ヤマミィに、大学の「私(=アイデンティティ)」を体現する存在になって欲しい」「学生の皆さんに、山口大学でそれぞれの「私」を発見して欲しい」という思いが込められている。本学のキャラクターとして学内外の行事に参加するほか、キャラクターグッズも多数制作され、大学のPR活動に貢献している。

山口大学発! さまざまな商品

学生や教職員のアイデアを取り入れつつ、シンボルマーク入りのグッズや、日本酒、まんじゅうなど、さまざまな商品を地元企業とともに開発、販売している。

「山口大学まんじゅう」

平成18年度のおもしろプロジェクトで誕生。学生が大学のブランド商品を企画し、県内のまんじゅう製造会社や印刷会社と連携して制作した。平成19年から学内で販売されている。

「長州学舎」

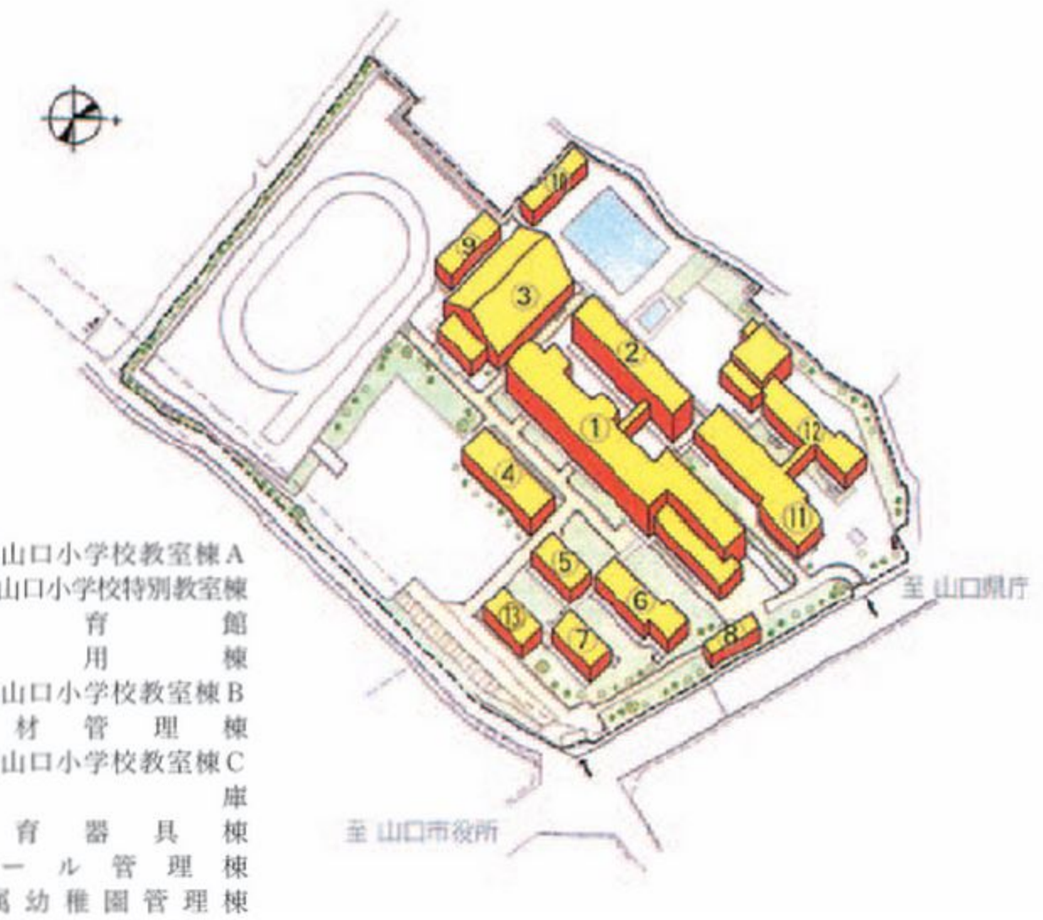
日本酒「長州学舎」は、山口県で開発された酒米「西都の雫」を本学農学部附属農場で栽培し、萩市の酒造会社に醸造を依頼して誕生。銘柄及びラベルデザインは公募により決定した。平成21年から学内で販売されている。

平成26(2014)年　吉田地区

①事務局
①保健管理センター
②人文学部
③教育学部
④経済学部
⑤理学部
⑥農学部・共同獣医学部
⑦共通教育本館
⑦総合図書館（1号館）
⑧総合図書館（2号館）
⑧総合図書館（3号館）
⑨教育学部附属特別支援学校
⑩教育学部附属教育実践総合センター
⑪農学部附属農場
⑫共同獣医学部附属動物医療センター
⑬メディア基盤センター（吉田センター）
⑭埋蔵文化財資料館
⑮総合科学実験センター（システム生物学・RI分析施設）
⑯大学会館・放送大学
⑰山口国際交流会館（1号館）
⑱山口国際交流会館（2号館）
⑲体育館・武道場等
⑳サークル共用棟
㉑合宿研修棟
㉒吉田寮1号棟（男子）
㉓吉田寮2号棟（男子）
㉔椹野寮1号棟（女子）
㉔椹野寮2号棟（女子）
㉕第一学生食堂
㉖第二学生食堂
㉗旧生活排水処理施設
㉘特殊排水処理施設
㉙門衛所
㉚大学院連合獣医学研究科棟
㉛商品資料館
㉜東亜経済研究所
㉝総合科学実験センター（機器分析実験施設(吉田)）
㉞吉田総合研究棟
㉟東アジア研究科・経済学研究科棟
㊱案内所
㊲O-HARA山口大学就職支援施設
㊳特高受変電設備棟
㊴大動物教育研究棟
㊵獣医学国際教育研究センター棟（H26.12 竣工）

平成26(2014)年　吉田地区配置図

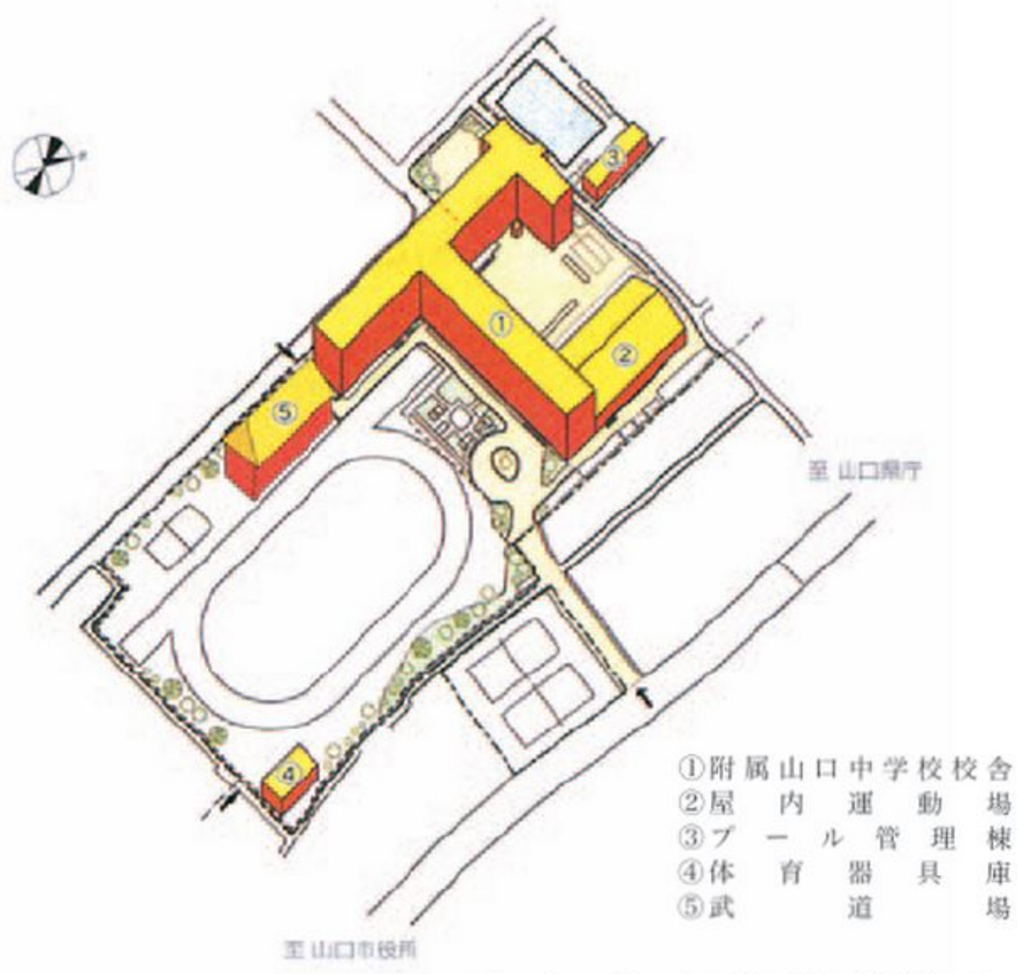
平成26(2014)年　白石地区(附属小学校)



①附属山口小学校教室棟A
②附属山口小学校特別教室棟
③体育館
④共用棟
⑤附属山口小学校教室棟B
⑥教材管理棟
⑦附属山口小学校教室棟C
⑧倉庫
⑨体育器具棟
⑩プール管理棟
⑪附属幼稚園管理棟
⑫附属幼稚園舎
⑬事務棟

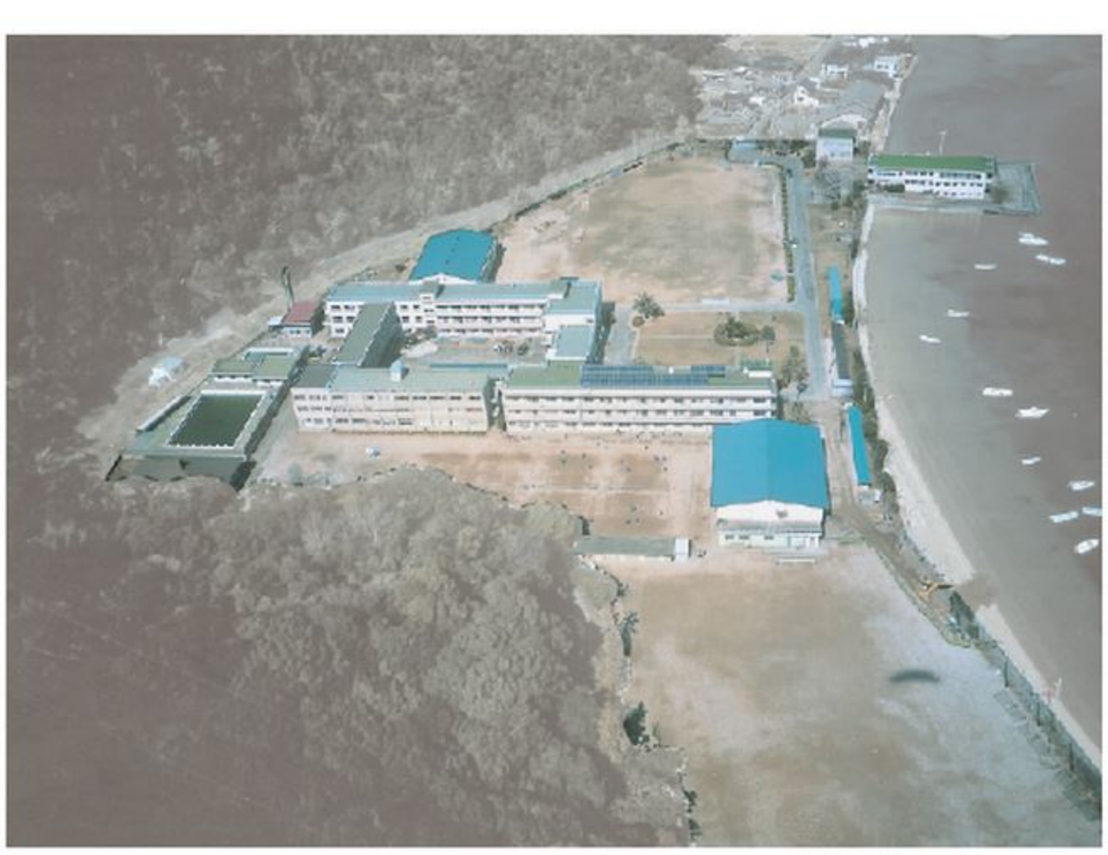
平成26(2014)年　白石地区(附属小学校)配置図

平成26(2014)年　白石地区(附属中学校)



①附属山口中学校校舎
②屋内運動場
③プール管理棟
④体育器具庫
⑤武道場

平成26(2014)年　白石地区(附属中学校)配置図



平成26(2014)年　光地区

①附属光小学校校舎
②附属光中学校校舎
③附属小学校体育館
④附属中学校体育館
⑤武道場
⑥倉庫
⑦プール管理棟
⑧体育器具庫(附属光中学校)
⑨学生実習宿泊棟
⑩演習棟
⑪体育器具庫(附属光小学校)

平成26(2014)年　光地区配置図

平成26(2014)年　小串地区

①医　学　部　本　館
②基　礎　研　究　棟
③共　同　研　究　棟
④臨　床　研　究　棟
⑤講　義　棟　B
⑥実　習　棟　A
⑦臨床実験施設棟
⑧講　義　棟　A
⑨実　習　棟　B
⑩講　義　棟　C
⑪M　R　I　棟
⑫外　来　診　療　棟
⑬第一中央診療棟
⑭第二中央診療棟
⑮新中央診療棟
⑯放射線治療棟
⑰第　一　病　棟
⑱第　二　病　棟
⑲エネルギーセンター
⑳資　料　管　理　棟
㉑特高受変電棟
㉒保健学科研究棟
㉓保健学科第2研究棟
㉔保健学科福利棟
㉕車　庫
㉖ヘリポート
㉗医学部図書館
㉘福利厚生施設棟（医心館）
㉙記念会館（霜仁会館）
㉚納　骨　堂
㉛立体駐車場
㉜体　育　館
㉝学　生　部　室
㉞学　友　会　館
㉟看護師宿舎
㊱職　員　宿　舎
㊲小串総合研究棟
㊳保　育　所
㊴廃棄物管理棟
㊵地域医療教育研修センター(白理館)
㊶薬剤部事務棟

平成26(2014)年　小串地区配置図

平成26(2014)年　常盤地区

①工　学　部　本　館
②会議棟・保健管理センター
③体　　育　　館
④社　建　実　習　棟
　社会建設・機械実習棟
　機　械　実　習　棟
⑤総合研究棟２号館
⑥環境共生系専攻棟
⑦知　能　情　報　棟
⑧常　　盤　　寮
⑨工　学　部　図　書　館
⑩共同研究開発棟
⑪西　研　究　棟
⑫講　義　棟
⑬サ　ー　ク　ル　棟
⑭メディア基盤センター（常盤センター）
⑮職　員　宿　舎
⑯電　気　電　子　棟
⑰先　端　研　究　棟
⑱宇部国際交流会館（A棟）
⑲宇部国際交流会館（B棟）
⑳機　械・社　建　棟
㉑総　合　研　究　棟
㉒福　利　厚　生　棟
㉓ビジネス・インキュベーション棟
㉔大学院技術経営研究科棟
㉕光半導体素子研究開発棟
㉖常　盤　女　子　寮
㉗学　術　資　料　展　示　館

平成26(2014)年　常盤地区配置図

【第2部】
連繋

2

学部・大学院等の発展

1 新制大学以降の学部のあゆみ

1-1 文理学部

昭和 24(1949)年	旧制山口高等学校は山口大学文理学部として発足　(文学科、理学科)
昭和 29(1954)年	糸米から後河原へ移転
昭和 41(1966)年	教養部が文理学部から分離
昭和 43(1968)年	山口大学の統合移転に伴い亀山地区から吉田キャンパスへ移転
昭和 49(1974)年	文理学部改組の将来計画委員会設置
昭和 53(1978)年	文理学部解体　人文学部、理学部発足

発足から解体まで

文理学部は現在の人文学部と理学部の前身であり、昭和 24(1949)年 6 月 1 日、山口大学開学とともに発足し、昭和 53(1978)年に人文学部、理学部の発足によって解体している。発足から解体までの詳細な経緯は、『山口大学 30 年史』に記されており、遠い過去の出来事の感があるが、文理学部が文系・理系の基礎を担う大学教育の中核的存在であったことを思えば、その成り立ちを知ることには意義があろう。文理学部の直接の母体は、大正 8 年に設立された旧制山口高等学校である。発足当初、校舎は糸米にあったが、5 年後の昭和 29(1954)年、後河原に移転した。この後河原の時代まで学部の建物は木造であった。校舎は昭和 43(1968)年 10 月、吉田に再度移転するとともに鉄筋コンクリート製となった。この建物は平成 14(2002)年の大規模改修を経て、現在でも理学部 1 号館として使われている。

文理学部の改組

文理学部は、文学科と理学科からなり、一般教育課程も併せ持つ独特な存在だった。いずれの学科も基礎的学問分野を主体としており、大学教育の中核となるに相応しいアカデミックなものだったが、両学科には、教育・研究いずれの面でも相互の関連や接点が乏しく、発足当初から単一学部として大きな矛盾を抱えていた。昭和 41(1966)年には教養部が文理学部から分離独立した。文理学部の改組による文学部と理学部への分離は早い時点から望まれていたが、改組を議論する将来計画委員会が設置されたのは、昭和 49(1974)年のことである。長い討議が重ねられた結果、昭和 53(1978)年 6 月 17 日、ようやく文理学部改組が実現し、人文学部と理学部の発足によって文理学部はその歴史を終えた。

1-2 | 教養部

昭和 41(1966)年	文理学部から分離し、教養部発足
昭和 44(1969)年	教養部大学制度検討委員会が発足しカリキュラムの改善が図られ、総合科目の開設、ゼミナール形式の授業を開始
昭和 53(1978)年	中国・四国地区の国立大学合同合宿授業開始（夏季休暇中実施）
昭和 59(1984)年	週２回授業により半年間で４単位を認定する一種のセメスター制を一部の科目で採用 教養部の授業に対する学生からの評価を行う
平成 2 (1990)年	「学部化構想委員会」が、総合科学部創設構想の概要を提言
平成 8 (1996)年	大学設置基準の改正により、教養部廃止

設置の目的

新制大学の特徴の一つは、学部、学科、専攻を問わずに全学生に共通する一般教育の科目が必修として設定されたことである。山口大学創設当初は、旧制山口高等学校を母体とした文理学部が一般教育の責任主体となり、各学部からも応援を得て授業が行われた。

教養部の設置は、昭和 38(1963)年に国立学校設置法に「数個の学部を置く国立大学に、各学部に共通する一般教養を一括して行うための組織として教養部を置く」という条項が加えられ、文理学部が主体となって一般教育を担当している場合は、教養部を独立させる形で文理学部を改組する方針を文部省が打ち出したことによる。改組案作りは難航したが、文理学部 27 名、工学部１名、教育学部１名、他大学１名を合わせ計 30 名(定員 36 名、欠員 6 名)で昭和 41(1966)年 4 月に発足した。

特色とする活動・部分

人文科学分野では、哲学、倫理学、歴史学、文学のほか、音楽・美術(いずれも非常勤講師による)を開講した。昭和 56(1981)年に「東洋文化論」が新設され、また分野内総合科目として「人文科学総合」が立てられ、「日本文化論」が開設された。

社会科学分野では、法学、政治学、経済学、社会学、文化人類学、統計学、教育学、心理学、地理学など多くの科目が開設された。逐次、専任教官も配置されたが、一部の授業科目は非常勤講師や学内兼担講師で担われた。

自然科学分野では、数学、物理学、化学、地学、生物学、農学があり、物理学、化学、地学、生物学においては講義とともに実験も大きな役割を果たした。農学は学内兼担講師や非常勤講師が担当した。

外国語分野は、当初、英語、ドイツ語、中国語であった。フランス語は昭和 43(1968)年に開設され、昭和 48(1973)年には専任教員が配置された。中国語とドイツ語においては外国人講師や外国人教師も採用された。

保健体育分野では、講義２単位と実技２単位が必修として課された。運動や食生活に関する理論的知識と実践方法を中心とした講義や卒業後も長期にわたって行える実技種目(エアロビクス等)の開設などがあった。

総合科目は昭和 44(1969)年に開始された。昭和 48(1973)年 10 月には学科目として「人間環境論」が設置され専任教官(1 名)が赴任した。以来、担当者の増加も見ながら、「総合コース」と呼ぶオムニバス形式の授業を運営し、授業内容は講義録にまとめられた。

社会との接点（公開講座）

教養部における公開講座は、昭和 56（1981）年に行われた「教養総合講座 山口の自然と文化」に始まる。次いで平成元（1989）年度から毎年 2 つの公開講座を後期の土曜日午後に実施するようになり、平成 7（1995）年度まで続けられた。専門領域を異にするさまざまなスタッフが揃う教養部の特性を生かして、総合的なテーマを取り上げたところが特長である。なかでも「ヒューマン・スクール」は、生きる、人生論を考える、老い、出会い、愛、ゆたかさなどのテーマで毎年開かれた。

終焉

一般教育を担当していた教養部であったが、昭和 59（1984）年、臨時教育審議会で「大綱化」が打ち出され、答申本文の解説において、一般教育とその担当組織に関する国の基本政策が示された。その最終答申を受けて、平成 3（1991）年、大学設置基準が改正された。

それに伴い、本学でも急遽改革に向けた作業が進められたが、結果的に廃止することになり、平成 8（1996）年 3 月をもってその役目を終えた。

1-3 工業短期大学部

昭和 28（1953）年	山口大学に工業短期大学部を併設 機械科、工業化学科を設置
昭和 33（1958）年	工業短期大学部創立 5 周年記念式典
昭和 40（1965）年	電気科を設置
昭和 41（1966）年	土木科を設置
昭和 44（1969）年	科が学科制となり、それぞれ機械工学科、工業化学科、電気工学科、土木工学科となる。
昭和 49（1974）年	情報処理工学科を設置
平成 2（1990）年	工業短期大学部の学生募集停止 短期大学部の定員を工学部に移籍 昼間コース 120 名 夜間主コース 80 名（機械工学科、社会建設工学科、電気電子工学科、知能情報システム工学科）
平成 5（1993）年	工業短期大学部廃止

設置目的

昭和 26（1951）年、学校教育法の一部改正により、短期大学の設置が公布された。

工業短期大学部は、工業都市宇部市を中心とする企業等の勤労青年を対象とする夜間工業短期大学の設置の要望に応えるべく、昭和 28（1953）年に開設された。開設に先立ち、校地、校舎、機械、器具、図書館等、創設の整備は、宇部市の寄附とした。

修業年限は 3 年とし、開設当初は、機械科と工業化学科（定員各学科 40 名）の 2 科で発足した。その後、昭和 40（1965）年に電気科、翌 41（1966）年に土木科、昭和 49（1974）年

には情報処理工学科が増設された。

特に、経済的理由で大学進学を諦めざるを得ない優秀な学徒の受け皿でもあり、卒業生は産業界の発展に大いに寄与した。

創立5周年記念式典

昭和33(1958)年には、創立5周年を迎え、関係者多数を参集して、「工業短期大学部校舎竣工・創立5周年記念行事」が盛大に挙行された。田中晃学長(当時)の挨拶(要旨)(三十年史より)では、「～中略～この学園に学ぶ学生諸君が地元工業界の発展に寄与され、宇部市の御厚志を永遠に意義あらしめられんことは、わたくしの特に切望するところであります。」とあり、宇部市が設立に向けて多大なる貢献をされたことが読み取れる。

また、この式典において、創立以来の宇部市の貢献に対し、灘尾弘吉文部大臣(当時)から三隅順輔宇部市長(当時)に感謝状が贈呈された。

工学部への統合

高度経済成長期の昭和30～40年代には、他の国立夜間工業短期大学とともに、充分にその目的を果たしたが、高度経済成長が終焉した昭和50年代には、働きながら勉強する刻苦勉励型志願者が減り、さらに不況の下で地元産業への就職者の減少となり、志願者が逓減することになった。本工業短期大学部も例外ではなく、余儀なく方向転換を迫られた。

そして、平成2(1990)年を最後に短期大学部の学生募集を停止し、定員を工学部に移し、昼間コースと夜間主コースに振り分けた。夜間主コースは、引き続き勤労学生の受け入れを存続させた。

平成5(1993)年3月、全ての在学生が卒業を迎え、工業短期大学部は40年の歴史を終えた。

1-4 医療技術短期大学部

昭和54(1979)年	山口大学に医療技術短期大学部を併設、看護学科を設置
昭和56(1981)年	衛生技術学科を設置
昭和57(1982)年	医学部附属看護学校を廃止
昭和58(1983)年	医学部附属臨床検査技師学校（専修）廃止
平成 元(1989)年	医療技術短期大学部創立10周年記念式典
平成12(2000)年	医学部保健学科を新設
平成15(2003)年	医療技術短期大学部を廃止

あゆみ

山口大学医療技術短期大学部は、昭和27(1952)年に設置された山口県立医科大学附属准看護婦養成所に始まり、いくつかの変遷を経たのち、昭和42(1967)年に国立移管し、山口大学医学部附属看護学校ならびに衛生検査技師学校となった。その後、昭和47(1972)

年、衛生検査技師学校は臨床検査技師学校となった。

昭和 54(1979)年、医療を取り巻く環境の変化に対応し、高度な医療を維持できる優れた医療技術者を養成するため、国立大学として 14 番目となる医療技術短期大学部が山口大学に併設された。

昭和 55(1980)年 1 月 23 日付の朝日新聞に医療技術短期大学部の開学に関する記事が掲載された。開学当初の入学定員は、看護学科が 80 名、その後の衛生技術学科は 40 名であった。初代の主事であった松本昇先生は、診療放射線学科や理学療法学科などの開設も構想にあったようである。さらに、4 年制教育機関への昇格も目指していた。

「心に愛を、手に技を」をスローガンに、教官・学生の熱意もあり、当初から国家試験の合格率は高く、平成元(1989)年の「ウベニチ(地方新聞紙)」にも、看護師、臨床検査技師国家試験に両学科とも 2 年連続で 100%合格の快挙を成し遂げたとあった。

また、医療技術短期大学部は短期大学であったため、専門教育を受けるための基礎教育として、また、人間性・社会性の形成として、心理学、統計学、数学、物理学、化学、生物学、英語、保健体育等の教育も行われた。

社会との接点(地域活動・国際交流)

昭和 58(1983)年から、一般市民を対象とした公開講座を開始し、同年 9 月に「楽しい周産期の過ごしかた」、10 月には「明るい家庭と健康生活」が行われた。その後も継続して行われ、昭和 60(1985)年 4 月からは医療関係者のための継続教育講座が一般教育科、衛生技術学科、看護学科の教官が年 6 回程度交代で開催していた。

昭和 63(1988)年には山口大学・山東大学学術交流協定締結の一員として、松本医療技術短期大学主事も記念講演を行い、さらに友永先生がカルフォルニア大学医学部ロサンゼルス校解剖教室に文部省在外研究員として海外留学された。

また、1985 年には 1 年間ブラジルからの留学生を迎えた。

先進医療への対応

平成の時代となり、医療は高度化し、医療に対する社会の期待も徐々に大きくなった。医療環境の変化から保健師や助産師数の増加も社会の課題となってきた。これら医療技術の高度化・社会ニーズに対応するために医療短大(3 年生)から大学保健学科(4 年生)への移行が国の政策となり、平成 12(2000)年に医学部保健学科が開設され、平成 15(2003)年、ついに医療技術短期大学部はその役目を終了し廃止された。

2 各学部等の発展

2-1 | 人文学部

昭和 53(1978)年	文理学部を分離改組し、人文学部発足 (人文学科７学科目、語学文学科６学科目)
昭和 54(1979)年	人文学科に３学科目新設 学芸員資格課程開始
昭和 55(1980)年	人文学科に１学科目、語学文学科に２学科目新設
昭和 56(1981)年	人文学科に１学科目新設、語学文学科で１学科目が２学科目に分化
昭和 60(1985)年	図書館司書資格課程開始
平成 4 (1992)年	語学文学科に言語情報処理学学科目新設
平成 5 (1993)年	学科改組 (人文学科は人文社会学科に、語学文学科は言語文化学科に)
平成 9 (1997)年	異文化交流研究施設設置
平成 16(2004)年	社会調査士資格取得可能に
平成 19(2007)年	講座再編 (６講座から５講座)

発足

人文学部は、文系基礎学問を担う学部として、昭和 53(1978) 年 6 月 17 日に、文理学部文学科を改組・拡充する形で発足した。人文学科と語学文学科の 2 学科、小講座制で、人文学科が哲学、倫理学、中国哲学、国史学、東洋史学、西洋史学、社会学の 7 学科目、語学文学科が国語学、国文学、中国語学・中国文学、英語学、英米文学、ドイツ語学・ドイツ文学の 6 学科目での出発であった。昭和 54(1979) 年、人文学科に日本思想史学、美学・美術史、考古学、昭和 55(1980) 年には、人文学科に社会心理学、語学文学科にフランス語学・フランス文学と言語学の各学科目が開設された。

昭和 56(1981) 年には、更に人文学科に社会人類学学科目が加わり、また、語学文学科の中国語学・中国文学学科目が、中国語学と中国文学の各学科目に分化した。

こうして人文学科 12 学科目、語学文学科 9 学科目となったが、この体制は、平成 4(1992) 年、語学文学科に新たに言語情報処理学学科目が開設されるまで続くことになる。

発足当初、人文学部はまだ自らの学部棟を持っていなかったが、昭和 54(1979) 年 12 月に人文学部棟が完成し、これにより設備の面においても学部としての形が整うこととなった。

学部の改組

平成 5(1993) 年、人文学部は改組を行い、学科名も、人文学科は人文社会学科に、語学文学科は言語文化学科に改称された。この

改組の特徴としては、小講座制から大講座制へ改編したこと、教育組織としてコース制を導入したこと、言語文化学科で、教員組織である大講座の区分と教育組織であるコースの区分を大きく異なるものとしたこと、各コースの定員の上限に余裕を持たせたことなどがあげられる。

大講座制・コース制への移行は、学際的・総合的な研究・教育環境が求められていたことに応じたものである。大講座は、人文社会学科が、人間学講座(哲学、倫理学、日本思想史学、中国哲学)、歴史文化講座(国史学、東洋史学、西洋史学)、社会情報学講座(社会学、社会心理学、社会人類学、美学・美術史、考古学)、言語文化学科が、国際コミュニケーション講座(国語学、中国語学、英語学、ドイツ語学、フランス語学)、比較言語文化講座(国文学、中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学)、言語情報学講座(言語学、言語情報処理学)という構成で、コースは、人文社会学科が、人間論コース(哲学、倫理学、日本思想史学、中国哲学)、地域歴史文化論コース(国史学、東洋史学、西洋史学)、社会情報論コース(社会学、社会心理学、社会人類学)、博物文化論コース(美学・美術史、考古学)、言語文化学科が、日本語文化論コース(国語学、国文学)、中国語文化論コース中国語学、中国文学)、英米語文化論コース(英語学、英米文学)、独仏語文化論コース(ドイツ語学、ドイツ文学、フランス語学、フランス文学)、言語情報論コース(言語学、言語情報処理学)という構成であった。

言語文化学科において大講座とコースの区分を大きく異なるものにしたのは、大講座は研究組織であるので、学問分野別に区分するのがより適切であるが、教育面では扱う言語の問題が大きく、よって、教育組織であるコースは、学問分野別ではなく言語別に区分するのが妥当との判断によるものである。また、各コース定員の上限に余裕を持たせたのは、小講座時代、第一志望の講座に所属できない学生がかなりの数に上っており、その問題を緩和する目的で導入されたものである。

平成 8(1996)年、教養部廃止に伴い、人文学部に 15 名の教員が加わった。

授業風景

学部の再改組

平成 19(2007)年、再度改組が行われた。

この改組により、人文社会学科では、美学・美術史が哲学・思想講座(コース)へ、考古学が歴史学講座(コース)に統合された。言語文化学科では、研究組織と教育組織が重なり合っていないことが、やはり様々な問題を生じ、これを解消するために、講座、コース共に、対象言語に基づいた区分に改められた。

この改組により、人文社会学科は、研究組織が、哲学・思想講座、歴史学講座、社会学講座、教育組織が哲学・思想コース、歴史学コース、社会学コース、言語文化学科は、研究組織が、アジア言語文学講座、欧米言語文学講座、教育組織が、日本語学・日本文学コース、中国語学・中国文学コース、アジア言語学コース、英語学・英米文学コース、ヨーロッパ言語・文学コース、言語情報学コースという編成となった。

平成 25(2013)年から平成 26(2014)年に

かけて、人文学部研究棟の耐震改修工事が行われた。改修後の研究棟には、1階に人文学部図書室が設けられた。

取得可能な資格

人文学部では、教育職員免許状の他、昭和54(1979)年より学芸員資格、昭和60(1985)年より図書館司書資格、平成16(2004)年より社会調査士資格が取得可能となっており、学部の一つの特色になっている。

生涯学習活動

人文学部は、平成元(1989)年より、様々な生涯学習活動に携わってきている。その中でも、中心となるのが、「やまぐちサタデー・カレッジ」である。

人文学部は、平成元(1989)年より、一般市民対象の公開講座を毎年数講座開講していたが、平成13(2001)年、それを発展させ、「やまぐちサタデー・カレッジ」とした。この「やまぐちサタデー・カレッジ」は、一般市民だけでなく、人文学部の学生も受講対象者とし、一般市民と学生が共に学びあい、刺激しあう場として企図されたものである。「やまぐちサタデー・カレッジ」の他、現在人文学部が携わっている生涯学習活動には、防府市で行っている公開講座と出前講義がある。

異文化交流研究

人文学部は、平成9(1997)年、異文化交流の実施と異文化の研究を目的に、異文化交流研究施設を開設した。この施設の主な活動は、『異文化交流研究施設ニューズレター』及び雑誌『異文化研究』の発行と異文化講演会の開催である。『異文化交流研究施設ニューズレター』と『異文化研究』はともに年1回発行で、異文化講演は、海外から研究者を招き、年2回開催している。

刊行雑誌

人文学部及び東アジア研究科比較文化講座専任教員は、山口大学文学会という学術団体を組織している。この会は、文理学部が開設された昭和24(1949)年の誕生で、年1回、会誌『山口大学文学会志』を発行している。この『山口大学文学会志』及び前述の『異文化研究』の他、人文学部教員が関係している学内刊行雑誌には『山口大学哲学研究』、『アジアの歴史と文化』、『やまぐち地域社会研究』、『山口国文』、『英語と英米文学』、『山口大学独仏文学』、『やまぐち学の構築』がある。

人文学部研究棟外観

人文学部研究棟内部

2-2 教育学部

昭和 24(1949)年	山口青年師範学校と山口師範学校は山口大学教育学部として発足 光分校、防府分校設置　附属山口小学校、光小学校、山口中学校、光中学校を設置
昭和 32(1957)年	光分校廃止
昭和 35(1960)年	防府分校を山口本校へ統合移転　防府分校廃止
昭和 41(1966)年	附属幼稚園の設置
昭和 47(1972)年	山口大学の統合移転に伴い亀山地区から吉田キャンパスへ移転
昭和 54(1979)年	附属養護学校設置
昭和 62(1987)年	教育実践研究指導センター設置
平成 元 (1989)年	総合文化教育課程新設
平成 9 (1997)年	教育実践研究指導センターを教育実践総合センターに改組
平成 10(1998)年	課程の改組（4 課程を 5 課程）
平成 19(2007)年	附属養護学校を附属特別支援学校に改称
平成 21(2011)年	附属臨床心理センターを設置 小学校教育コース設置

役割

教育学部のアドミッションポリシーには、教育理念・目標として「教育」をキーワードとした多様な教員の指導や研究のもとで総合的な思考や分析、表現能力を育てることを目指し、このような資質を育んで、学校教育教員養成、および社会の様々な分野において教育の素養を持って貢献できる人材養成をおこなう事を目標にすると謳われている。

明治 5(1872)年の学制の公布以降、時代の要請に応える教員・人材の養成を担うという役割は戦後においても同様であり、新制山口大学の発足以降、それまでの師範学校は教育学部として、戦後の復興を担う教員養成をスタートした。その後、1960 年代から 70 年代にかけての高度経済成長、その後に訪れる低成長期、さらに国際化の時代を標榜し、今日に至る時代の流れの中で、時代の要請に応じた教員・人材の養成に努めてきたわけである。

戦後においても学部教官や事務系職員の増減、昭和 47(1972)年のキャンパス移転、昭和 62(1987)年の教育実践研究指導センターの設置、平成元(1989)年の総合文化教育課程(非養成課程)の発足、平成 3(1991)年の大学院教育学研究科の設置、平成 9(1997)年の教育実践総合センターの設置、などなどそのいずれもが社会情勢の変化に応じた改変であったといえる。

学部の現状

学部の設置以降、平成 9(1997)年に至るまでの戦後復興を支え、経済成長を支え、その後の経済大国として国際化や産業の高度化を支えた人材の養成を、最も基本的な教育という側面から担ってきたことは大学の 30 年史、また 50 周年記念誌に詳しい。ここでは主に 50 周年記念誌以降の状況に焦点をあてながら記述したい。それは、50 周年記念誌にも記されてい

る教養部の廃止にともなう教養部教官の教育学部への分属（平成 8（1996）年）、非養成課程の設置を含めた数次の課程の改組、大学院の設置・拡充などの一連の大きな改変の後の 15 年間の変化でもある。

平成 9（1997）年までに大きな一連の改変を経たこともあり、この間に小学校教育コースの設置をのぞいて、大きな組織的な改変はない。平成 10（1998）年の学校教育教員養成課程の定員 100 名および非養成課程の実践臨床教育課程 20 名、情報教育科学課程 40 名、健康科学教育課程 40 名、総合文化教育課程 40 名、合計 240 名という枠組みも大きく変更されておらず、平成 21（2009）年に学校教育教員養成課程に小学校教育コース定員 30 名を設置したことにともない、現在（平成 25（2013）年募集）は、学校教育教員養成課程の定員を 130 名とし、実践臨床教育課程 20 名、情報教育科学課程 30 名、健康科学教育課程 30 名、総合文化教育課程 30 名の合計 240 名となっている。

近年の動向

しかし、組織的な変化は大きくはなくとも、平成 16（2004）年からの国立大学法人化をはじめとしてこの間に教育学部を取りまく情勢は大きなうねりを見せた。一つには国際化や少子高齢化などの社会情勢の変化であり、二つには学力低下、教員の質の問題、いじめや不登校の問題などの教育にかかわる情勢、三つにはこの時期声高に叫ばれるようになる大学改革や教育学部改革など大学を取りまく情勢である。それらとの関わりは学部の歩みの上で無視することはできない。とくに平成 13（2001）年に文部科学省の「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会」の報告書で、教育学部の統廃合を含めた提案が示されたことは、大きな議論を呼んだ。そうした中で教員数は漸減し、いかにして従前のカリキュラムを維持し、優れた人材を輩出していくかが重要な課題となっている。

一方、平成 21（2009）年からの教員免許更新制の実施に伴い、更新講習が実施されるようになった。山口大学での開講にあたっては必修領域、選択領域をあわせて多くの教育学部教員がそれを担っている。また、既に述べた非養成課程の設置は、国際化や情報化の進展の中で、また、少子化の影響が進む中で学校教員養成以外にも対応できるような資質を持った学生を育て、幅広い人材養成をおこなう事を目指したものであり、設置以来着実に卒業生を送り出してきた 15 年であるということもできる。その意味で、これまでと同様に時々の社会の情勢、教育を取りまく情勢、大学を取りまく情勢に応じた教員養成・人材養成に取り組んできたのである。

特色ある取組

その取り組みの中で、この間の特色とする活動として、一連のちゃぶ台方式によるプロジェクトがある。これは「「ちゃぶ台」方式による協働型教職研修計画（ちゃぶ台GP）」（平成 17、18 年度）が、文部科学省が平成 17（2005）年度からスタートさせた「大学・大学院における教員養成推進プログラム（教員養成GP）」に採択されたことに始まる。

教職志望学生と現職教員、教育関係者が共に学ぶ教職研修プログラムの様子

教員養成GPとは、教員により高度な専門性と実践的指導力が求められるという社会の要求に対応するため、「資質の高い教員を養成するための教育内容・方法の開発・充実などをおこなう特色あるすぐれた教育プロジェクト」であり、34 件が採択された（申請数は 101 件）。「ちゃぶ台GP」はそのうちの 1 件である。

教育学部がそれまで実施してきた「フレンドシップ事業」や「放課後学習チューター」など、教員を目指す学生が、実際に地域や学校で継続的に子どもたちと関わる実践の場の拡充を図るとともに、その実践をおこなった学生が体験を振り返り、個別の教育支援を受けられる場として「ちゃぶ台ルーム」を設置するというものであった。また、「ちゃぶ台ルーム」では学生だけでなく、大学教員、小学校や中学校などの学校教員、また教育に関心を持つ様々な人がちゃぶ台を囲む場所として提供されている。

ここで文字通りちゃぶ台を囲んで勉強会や研修会、交流会を持ち、教壇と生徒席という関係ではない互いに膝をつき合わせた関係の中で教育の議論を深めている。当初の教員養成GPは平成18(2006)年度で終了するが、その後「ちゃぶ台型ネットによる理科教育支援計画」(平成19、20年度 文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム)、「ちゃぶ台方式による学生と新任教員の協働型教職研修」(平成19年度 教員養成改革モデル事業)、「ちゃぶ台方式による小・中連携型の社会科授業研修計画」(平成19年教科指導力向上プロジェクト)などが採択され、現在まで「eちゃぶ」、「理科ちゃぶ」、「ちゃぶ台次世代コーホート」、「ちゃぶ台林間学校」などの事業として引き継がれている。

「ちゃぶ台」を囲んで、楽しく、緩やかながら、豊かな学びの場を実感する学生たち

進路状況

昨今の就職事情、とくに教員の場合には県内外の募集人員の枠に大きく左右されるという特殊な事情がある。このため、少子化が叫ばれる中で、かつて採用された教員数と生徒数のアンバランスや、教員の年齢構成のアンバランスなどもあって平成10(1998)年代には教員採用数がかなり絞られていたということもあり、軽々に教員養成能力やその役割を論じることはできない。しかし、教員に限っては近年の学部卒業生の就職状況は改善してきている。とくに正規採用者数は平成10(1998)年代半ばより着実に増加していることは評価して良いだろう。

団塊世代が大量に定年退職することなどによる教員不足が指摘されるなど、近年教員需要が上向いていることは事実であるが、大都市部のように教員不足が大きく取り沙汰される地域と山口県が同じではない。なお、教員採用は狭き門という側面も残っている。こうした地域的な事情を十分に考慮していく必要がある。

地域的特性

また、教育学部ばかりではないが山口大学の特徴として、県内出身者の比率が低いという事情も少なくない。平成24(2012)年の入学者253名中山口県出身者は97名で4割を下回っている。平成20(2008)年度など3割を下回っていた時期もあり、近年多少県内比率が上昇してきている傾向があるとはいえ、なお、県外出身者が多いという傾向は否めない。当然、卒業生の多くは出身県での教員採用試験を第1志望とする傾向が高く、その結果として山口大学卒業生に占める山口県教員採用試験受験者が低く発現してしまうという側面がある。

これは教育学部の位置する山口市の県内における中心性の低さという地理的条件(県東部は広島方面、県西部は福岡方面を近隣の進学先として選考)とも関わる。そうした状況の中、周辺の県や大都市部との動向を踏まえて、どのような教員養成・人材養成を担っていくかが今後の課題となろう。

2-3 経済学部

昭和 24(1949)年	山口経済専門学校は山口大学経済学部として発足 経済学科・経営学科を設置
昭和 29(1954)年	商業教員養成課程を設置
昭和 48(1973)年	山口大学の統合移転に伴い亀山地区から吉田キャンパスへ移転
昭和 52(1977)年	国際経済学科を設置
昭和 55(1980)年	経済法学科を設置
平成 6(1994)年	経済学科・経営学科・国際経済学科を大講座に改組
平成 7(1995)年	経済学部商品資料館開館
平成 16(2004)年	経営学科に職業会計人コースを新設
平成 17(2005)年	観光政策学科を新設
平成 20(2008)年	新東亜経済研究所開所

沿革

経済学部は、文化 12(1815)年に萩藩士・上田鳳陽によって開設された「山口講堂」を起源とする。以後、この山口講堂は幾多の変遷を経て、明治 38(1905)年に創設された官立山口高等商業学校となった。これが経済学部の直接的な前身である。山口高商はその後、戦時下の昭和 19(1944)年に山口経済専門学校と改称し、戦後の学制改革によって昭和 24(1949)年に新制山口大学経済学部として、経済・経営二学科体制(入学定員 120 名)で再スタートを切った。昭和 29(1954)年には、商業教員養成課程も設置されたが、これは現存する全国唯一の課程として、今なお異彩を放っている。

山口高商から経済学部に至るまで、山口講堂以来の由緒ある山口亀山の地に校舎を構え、150 年余の歴史を重ねてきたが、昭和 48(1973)年に吉田キャンパスに統合移転され、創設の地を離れることになった。この際、現存していれば重要文化財級の近代建築だったであろう立派な本館や講堂が、保存されずに失われてしまった事は、創基二百周年という節目を迎えるに当たり、何とも惜しまれる。

かくして山口講堂との由縁の地を離れてしまった経済学部であるが、昭和 52(1977)年に国際経済学科、同 55(1980)年に経済法学科がそれぞれ設置され、平成 6(1994)年には全学科で大講座制を導入するなどのカリキュラム改革も進められ、順調に発展を遂げていった。平成 10(1998)年には、教育の目的・理念を定め直し、「現代経済社会の諸問題を理論的、実証的に分析する能力を育てつつ、社会に貢献しうる実践的経済人を育成する」ことを教育目的とし、「国際的センスや豊かな人間性を涵養し、的確な判断力を培い、時代や社会の変化に柔軟に対応し、未知の分野を開拓していく創造性あふれる個性を育む」ことを教育理念とし、その実現を期するため、平成 12(2000)年に様々な工夫を凝らした新カリキュラムを導入した。

創立百周年を迎えて

平成 16(2004)年、山口高商以来 99 年に及ぶ官立・国立学校としての歴史に幕を閉じ、

全国の国立大学とともに山口大学経済学部も国立大学法人化されることになった。

この国立大学法人移行の中、経済学部は二つの戦略的展開を打ち出した。一つは、平成16(2004)年に経営学科に設置された「職業会計人コース」である。このコースは、山口高商以来の伝統である実学教育の強化を目的に設けられ、学部内での四年間で、公認会計士・税理士の資格を学生に取得させようとする本格的な教育プログラムである。すでに、学部在籍中に公認会計士・税理士に現役合格する学生も続々と誕生しており、全国的に大きな注目を集めるとともに、着実な成果を収めている。もう一つは、平成17(2005)年に、国立大学初の観光系の学科として創設された「観光政策学科」である。この学科は、21世紀最大の成長産業と言われながら、我が国では立ち遅れていた観光分野でのリーダー人材育成を経済分析応用力養成の面から進めていくことを目的に設置された。この目的のため、観光関連の実践的な研修を含むプロジェクト演習を課し、語学教育も重視するなど、他学科にはない特徴的なカリキュラムを実施している。奇しくもその創設は、山口高商創立以来百周年の節目に当たり、経済学部の新たな歴史の一頁を飾るにふさわしい船出であった。

第二大講義室

公認会計士現役合格報告会

新たな挑戦

平成18(2006)年には、法人化に対応した新カリキュラムが導入された。この改革では、複雑かつ細分化し過ぎた授業科目・コースカリキュラムの整理統合を行うと共に、TOEICを卒業要件として必修化するなど、語学教育強化も図られた。

平成20(2008)年に発生したリーマン・ショック以降の世界的不況により、経済学部でも就職状況の悪化が深刻な問題となった。こうした状況に対処するため、本学部は、経済界の第一線で活躍されている卒業生を数多く擁する同窓会「鳳陽会」との連携を深めながら、学生に対する就職教育・支援を積極的に進めることになった。その第一歩が、平成22(2010)年に始まった鳳陽会寄附講座「現代企業経営と期待するビジネスピープル」という特殊講義で、講師は全て経済学部の卒業生である。その目的は、活きた企業経営の現実や、大学と企業の関係などを、実際の経験に基づいた内容で学生に学ばせることにあるが、企業が求める学生像などのテーマも含まれており、就職活動をする上で得られることも多い。この寄附講座は、その後も毎年継続して実施されている。

平成23(2011)年からは、鳳陽会による就職アドバイザー制度もスタートした。これは、企業経営に実際に携わっておられた鳳陽会有志の方々が、毎日学部に常駐し、学生の就職相談・支援を行うものである。また、平成24(2012)年からは、学生の団体である「ゼミ連」の要望に基づき、鳳陽会と経済学部就職委員会が連携して、「模擬面接」も開始された。この模擬面接には、地元大手企業のご厚意により、人事部から実際の担当者が派遣され、本番さながらの面接が実施される。学部1・2年生を中心に、模擬面接を通じて実社会を垣間見ることで、これからの修学に対する意欲を高め、就職活動に対する意識を喚起することを目的としている。

現状と課題

現在の本学部は、入学定員385人(収容定員1540人)を抱え、経済、経営、国際経済、経済法、観光政策、商業教員養成課程および職業会計人コースという5学科1課程1コースを擁している(平成24年度末現在)。専門分野の多様性と共に、その連携による経済の総合的教育・研究体制を構築している点は、本学部の最大の特徴である。

しかしながら、少子高齢化の進行する社会情勢下で、このような大規模な学生定員を維持することは次第に困難になりつつある。また、経済学部のゼミナールによる少人数教育重視の伝統も、法人化以降の教員数漸減などにより、その実態は「中人数教育」に近くなってきているのが現状である。

高度成長期・バブル期以来の経済人の大量育成路線を改め、伝統の「少人数教育」に立ち戻って、一人一人の学生に目の行き届いた教育を行い、その資質を高めて社会に送り出す学部へと、変革を迫られている。その変革を経ずして、創基二百周年以降の展望は開けないのではないだろうか。

東亜経済研究所

本研究所は、法人化以前についに省令化はかなわなかったが、山口高商以来の伝統ある研究機関である。

経済学部の前身である山口高商は、東アジア経済に関する教育・研究の拠点校としての特徴を有し、昭和8(1933)年にその付属研究機関として設置されたのが東亜経済研究所である。しかし、終戦によって東アジア地域とのつながりや重要性が失われた結果、昭和21(1946)年にこの研究所は一旦閉鎖されることになった。

新制大学への移行当初、経済学部は関門経済の研究など、地域経済研究を学部の新たな核にしようと試みた時期もあった。しかし結局、昭和32(1957)年に東亜経済研究所を再設置し、その機関誌としての『東亜経済研究』も復刊するなど、東アジア経済に関する本格的な資料収集・調査研究活動が再開された。この東亜経済研究所には、戦前以来の貴重な東アジア経済社会に関する資料が膨大に所蔵されており、その学術的価値は極めて高い。昭和52(1977)年に国際経済学科が新設されたことにより、東アジア経済に関する教育・研究の受け皿も整備され、本研究所の存在意義もますます高まった。

この間、吉田キャンパス移転後の東亜経済研究所は、経済学部棟の一角に置かれていたが、平成20(2008)年、株式会社ヤマコー代表取締役山田宏氏による多額の寄付によって東亜経済研究所棟が新たに竣工することになった。この研究所棟は、山口高商卒業生である山田氏の御祖父君の尊名を冠して「山田孝太郎記念館」と命名された。建物の完成とともに、研究拠点としての新たな飛躍が期待される。

商品資料館

明治38(1905)年の山口高商創設以来、商品学の授業の研究資料として各種商品の収集が始められ、明治41(1908)年に商品陳列室が設置された。その後も一貫して商品資料の収集が続けられ、平成7(1995)年には商品陳列室を発展的に継承する形で商品資料館が建設された。この資料館には、永年にわたって収集された主要な産業の商品や輸出入品など約八千点の貴重な資料が収蔵されている。特に戦前の主要な輸出入品の収集は、品種、数量ともに他に類を見ないものであり、産業経済の実証的教育研究の伝統継承及びその発展に資する役割を果たしている。

2-4 理学部

昭和 53(1978)年	文理学部を分離改組し、理学部発足 数学科、物理学科、化学科、生物学科、地質学鉱物科学科の５学科
昭和 57(1982)年	大学院理学研究科の設置 学科に対応する修士課程５専攻を備える
平成 2(1990)年	情報基礎の共通講座新設 機器分析センター設置
平成 7(1995)年	５学科を再編統合し、３学科へと改組 数理科学科、自然情報科学科、化学・地球科学
平成 9(1997)年	理学研究科を廃止 理学研究科の５専攻は、新たに発足した理工学研究科の３専攻（博士前期課程）へと改組　同時に理学系博士後期課程を設置
平成 16(2004)年	学科改組によって、４学科６分野体制とし、現在に至る 数理科学科、物理・情報科学科（物理分野と情報科学分野）、生物・化学科（生物学分野と化学分野）、地球圏システム科学科
平成 18(2006)年	大学院理工学研究科が改組され、理学部の教員は理工学研究科の理学系３専攻、環境共生系専攻（理工融合）、および、医学系研究科の応用分子生命科学系専攻（理・工・農・医系融合）に所属、現在に至る

あゆみ

理学部は、昭和 24(1949)年の山口大学開学時に旧制山口高等学校を母体として設置された文理学部の理学科をその前身としている。その後、昭和 53(1978)年の文理学部分離改組によって、理学部は人文学部とともに、ここ吉田の地に誕生した。発足から平成 9(1997)年に至るまでの理学部のあゆみは、『山口大学 30 年史』（昭和 57 年発行）、および『山口大学 50 周年記念誌』(平成 11 年発行)に詳しい。

また、平成 6(1994)年、平成 10(1998)年、平成 15(2003)年に発行された『理学部の現状と課題』1～3 号には、理学部の教育研究活動と組織運営が詳細にまとめられている。

この間の、教育体制に関する特筆すべき出来事として、昭和 57(1982)年の大学院理学研究科(修士課程)の設置、平成 7(1995)年の情報系学科(自然情報科学科)の設置及び、平成 9(1997)年の博士後期課程(理工学研究科)の設置が挙げられよう。自然情報科学科はその後の学科再編で形を変えたが、理学部の教育･研究分野は、伝統的な数、物、化、生、地に情報が加わった 6 分野構成となった。

さらに平成 8(1996)年に教養部の廃止に伴って 11 名の教員が理学部に移行するなど、教員組織の強化が続き、平成 9(1997)年には理学研究科から理工学研究科への大学院改組、それと同時に、長年の悲願であった博士後期課程の設置に至った(大学院については別項を参照)。

その後の改組・再編による学科構成の変遷はあるものの、これによって、実質的な教育・研究分野として、数学、物理学、化学、生物学、地学、情報科学の 6 分野を備えた学部、そして、修士課程(博士前期課程)と博士課程(博士後期課程)を備えた大学院という、充実した教育・研究体制がひとまず完成したのである。戦後日本の目覚しい経済発展、そして 1990 年代に顕著となった情報化の進展に呼応するように、理学部も順調な発展と変貌を遂げてきたと言えよう。

21 世紀になってからも理学部および大学院の改組・再編は継続したが、それは発展・拡大の単なる延長ではなく、少子高齢化に伴う 18 歳人口の減少、大学間競争の激化など、日本の社会的・経済的な変動を反映するものとなった。

平成16(2004)年の国立大学法人への移行後、理学部は、数理科学科、物理・情報科学科、生物・化学科、地球圏システム科学科の4学科6分野へと改組・再編され、平成18(2006)年、大学院においても、理学系、工学系、医学系、農学系の融合・再編を伴う大掛かりな改組がなされた(大学院の沿革は175頁参照)。変動する時代を生き残るための教育・研究体制の模索は平成25(2013)年現在においてもなお進行中である。

理学部の教員数は、法人化後に一時期減少したが、その後回復しつつあり、平成25(2013)年時点では、時間学研究所と機器分析実験施設の関連教員を合わせて70名超、さらに、外部資金等による学術研究員が8名を数えるなど、組織体制の面での新たな発展と成熟の兆しが見える。

ハイライト研究

理学部では学部の看板となる優れた研究テーマを、平成17(2005)年から毎年1〜数件「ハイライト研究」として選定し、研究支援するとともに、その成果を社会にアピールしている(詳しくは理学部のHP)。秋吉台の生物群、洞窟化石、貴重な地質遺産である阿武火山群、32m電波望遠鏡による銀河探索など、その成果がマスコミ報道にも取上げられる魅力的な研究テーマが多い。

サイエンスワールド

一般市民、特に、将来の理学部生となり得る小・中・高生向けに、理学部ならではのサイエンスの魅力をアピールするイベントとして、「サイエンスワールド」(当初は「理学部先端科学フェスティバル」)が平成11(1999)年から毎年開催されている。学生が企画する実験のデモンストレーションや展示、学術講演、高校生による研究発表コンテストなど、見ごたえのあるイベントとして、毎年数百人から千人を超す来場者を集め、好評を得ている。また、理学部教員による一般向けの公開講座として、「サマーサイエンススクール」が平成14(2002)年より毎年開催されており、小学生からお年寄りまで、幅広い年齢層の受講者を集めている。

サイエンスワールド2011

常設展示

上記のイベントに加え、理学部の研究活動や、収集した学術資料を一般市民向けに公開するための展示が1号館内に常設されている。1号館玄関ホールの各学科研究紹介パネル、1階の学術資料展示室、4階の地球科学標本室とゴンドワナ資料室など、来訪者の興味を引いている。

学術資料展示室

地球科学資料室

建物

理学部の教育・研究の舞台である建物と敷地は、平成 14(2002)年頃から整備が着実に進むとともに、学部間調整によってその版図を大幅に拡大した。講義室・実習室・教員研究室の場所は、従来の本館(1 号館)に加え、遠隔講義システムを備えた 2 号館、かつての農学部獣医学科の実習棟を全面改修した 3 号館、さらに平成 13(2001)年設立の山口大学総合研究棟へと広がった。講義・実習の大半が行われる 1 号館は、平成 14(2002)年に全面改修され、各階の階段付近にはラウンジや休憩スペース、さらに、中庭にはあずま屋と椅子も整備された。授業の合間や昼食時に、心地よい空間で学生と教職員が、歓談し、寛ぐ姿が理学部の日常的光景である。

1 号館中庭

総合研究棟

1 号館

2-5-1 医学部

昭和 39(1964)年	山口県立医科大学を国立移管し、山口大学医学部として発足
昭和 42(1967)年	内科学第三講座新設
昭和 43(1968)年	麻酔学講座を新設
昭和 46(1971)年	RI実験施設を設置
昭和 47(1972)年	脳神経外科講座を新設
昭和 50(1975)年	寄生体学講座を新設 歯科学講座を歯科口腔外科学講座に改称
昭和 51(1976)年	生化学第二講座を新設
昭和 54(1979)年	医療技術短期大学部を併設
昭和 56(1981)年	附属動物実験施設を設置
昭和 57(1982)年	附属看護学校を廃止
昭和 58(1983)年	臨床検査医学講座を新設 医学部及び附属病院事務部を統合 附属臨床検査技師学校を廃止
昭和 62(1987)年	麻酔学講座を麻酔・蘇生学講座に改称
平成 5(1993)年	神経内科学講座を新設
平成 6(1994)年	医学進学課程と専門課程の区分を廃止し、6年一貫教育を実施 救急医学講座を新設
平成 7(1995)年	専門教育に単位制を導入
平成 8(1996)年	医療環境学講座を新設
平成 9(1997)年	附属実験実習機器センターを設置
平成 12(2000)年	医学部保健学科を設置 大講座制を導入（基礎系講座と臨床系講座統合）
平成 15(2003)年	医療技術短期大学部を廃止
平成 22(2010)年	寄附講座（地域医療推進学講座）を設置
平成 24(2012)年	「高度学術医育成コース」を新設

歴史

山口県に医学校の設立を望む声が大きくなり、太平洋戦争の勃発による軍医養成の大義のもとに山口県・宇部市・医師会・地元企業の献身的な努力によって、昭和19(1944)年に山口県立医学専門学校が創立された。その後、昭和27(1952)年に山口県立医科大学が設置され、附属蛋白化学研究所および附属産業医学研究所ならびに附属准看護婦養成所が設置された。昭和32(1957)年に大学附属高等看護学校、翌年には大学院医学研究科、昭和35(1960)年には大学附属衛生検査技師学校が設置された。昭和39(1964)年から山口大学医学部への国立移管が始まり、昭和43(1968)年に移管が完了した。

教育・研究環境の充実が図られ、平成6(1994)年には創立50周年を迎えた。その後も専門教育の単位制導入や教養部の廃止と講座(寄附講座も含めて)の新設が進み、平成12(2000)年には医学研究科の改組とともに、保健学科が新たに設置された。

医学部は着実に発展を遂げ、平成16(2004)年に国立大学法人へ移行し、現在に至るまで紆余曲折を経ながらも、地域から国内外に多くの医学研究者や医療技術者を輩出して国民の健康増進に貢献してきた。

医学部の創立から50年のあゆみについては、山口大学50周年記念誌ならびに山口大学医学部50周年記念誌に詳しく記載されているので、本誌では、国立大学法人後の医学部の教育、研究ならびに社会貢献の現状と課題について紹介する。

教育

医学部は、医学・医療の専門的知識と技術の教授とともに、豊かな人間性を涵養する教育を行い、人間の健康の増進に資する研究を推進し、社会・時代のニーズに応える高度な知識と技量を「発見し」、「はぐくみ」、「かたちにする」人材を育成することを理念・目的に掲げ、医学・医療の変化や医療人の社会的役割の変化に加えて国際化に対応できる人材の養成を目標にしている。

医学科では、豊かな人間性と高い倫理性を持った医師、研究者を育成すること、課題解決能力及び自己開発能力を育成すること、実践的臨床能力と先進的医療への対応能力を育成すること、医学・医療の分野で実践的英語能力を育成し、国際交流を推進すること、知的成果の積極的な公開とその応用を推進すること、医学・医療の向上を目指して、地域社会との交流を深めることを目標に掲げている。

現在、現実の医療を習得するための実践教育を推進するため、カリキュラムの改正を行っている。今後のグローバル化に備え、国際的医学教育認証にも十分に対応できる参加型臨床実習の充実を目指している。また、チーム医療のマインドを涵養し、総合力(人間力)のある人材を育成するため、臨床実習ではログブックを用いた自己目標立案能力と評価能力を養い、低年次からのポートフォリオ形成評価も行いながら6年一貫教育を行っている。

一方で、以前から研究マインドのある国際的な医師・医療人を育成するための「自己開発コース」など実践教育を推し進めてきた。

さらに、大学院の講義を4年生から履修することのできる山口大学独自の「SCEAプログラム」や「AMRAプログラム」を実施してきたが、平成24(2012)年には文部科学省から「高度学術医育成コース」が採択され、中・四国地区の拠点大学として活動を始めている。このプログラムでは、低学年から交換留学生など海外との交流をはかり、地域から世界に発信できる基礎研究・橋渡し研究・臨床研究を行うことのできる人材の育成を目指している。

保健学科は、保健・医療の分野において、真理を探求し、人類の幸福と発展に資する知識・技術を「発見し」、「はぐくみ」、「かたちにする」の理念のもと、医療の変化に対応できる人材を育成すること、チーム医療の一員として活躍できる人材を育成すること、医療技術の学問体系の確立に貢献できる人材を育成すること、医療の国際化に対応できる人材を育成すること、地域医療の向上に貢献できる人材を育成することを目標にしている。

保健学科では、設置以来、看護・医療検査技術の教育の国際化を目指して、英語を母国語とする専任教員による専門科目を導入し、看護・健康科学領域のリーダーを育成するために「APAHL (Asia-Pacific Alliance of Health Leaders)」国際交流事業に取り組んでおり、毎年、韓国・タイ・オーストラリアの協定校で学生・教職員の合同研修を行い、グローバルな医療人育成の取り組みを行っている。また、地域の医療機関や保健機関などの協力を得て、優れたカリキュラムの実施により、看護師・

保健師・助産師・臨床検査技師の国家試験合格率もトップクラスである。

看護学専攻では、学生全員が看護師・保健師の受験資格を得るためのカリキュラムを履修するダブルライセンスの教育体制をとっており、さらに、選択によって助産師の受験資格が得られる「助産師コース」を設置し、専門的な看護系人材育成の体制を構築している。

検査技術科学専攻では、臨床検査技師の受験資格に加えて、細胞検査士、健康食品管理士、バイオ技術者などの受験資格が得られる選択コースを設けており、これらの専門職種は、従来の医療分野だけにとどまらない社会に必要とされている多種多様な分野の医療人を育成している。

実習風景

研究

医学部では、各講座や大学院との連携を図り、学際的で柔軟な教育・研究を推進する目的で、平成12(2000)年に基礎系講座と臨床系講座の統合による大講座を導入し、平成13(2001)年には、創造的・先端的医療技術の開発研究を推進するため、医学と工学を連携した応用医工学系の大学院を設置し、さらに平成18(2006)年には社会に貢献できる高度専門職業人の育成と医療関連分野の発展を目指した医学・工学・農学・理学を横断的に連携した応用分子生命科学系の大学院を設置し、学部の枠を超えた再編によってリサーチ・ユニバーシティとしての教育機能の強化を行ってきた。

また、平成17(2005)年には、保健医療の専門的知識と技術を教授するとともに、豊かな人間性を涵養する教育を行い、医療の多様化・高度化に対応しうる医療人を育成することを目的として保健学専攻を設置した。

歴史的には、昭和34(1959)年の交叉電気泳動法の開発や二次元親和電気泳動法の開発、昭和52(1977)年の扁平上皮癌の腫瘍マーカーSCC抗原の発見、平成10(1998)年の微生物ゲノムコンソーシアムの主管と病原細菌の全ゲノム解読など、今も世界的な評価を受けている業績を上げている。現在、基礎研究からの臨床応用を目指すトランスレーショナルリサーチ(橋渡し研究)に力を入れ、独創的な研究活動に対して大学独自の支援を受けている。さらに、「先進医療」や「高度医療」の開発を目指した質の高い研究成果を世界に発信しており、以下にその一部を紹介する。

世界で初めて山口大学が開発した「自己(患者)骨髄細胞を用いた肝臓再生療法」は世界に普及しつつあり、文部科学省の国家基幹プロジェクト「培養ヒト骨髄細胞を用いた低侵襲肝臓再生療法の開発」が開始されている。一方、遺伝子多型を利用したがん感受性評価法の開発や新たながん免疫療法の開発を目指した研究が進んでいる。自己骨髄細胞の血管新生能力の発見から下肢虚血の治療応用は先進医療として認可されている。また、JNKシグナル経路を分子標的とした大動脈瘤の薬物療法の開発や、血管攣縮の特効薬としてエイコサペンタエン酸の可能性を明らかにした画期的な研究成果が世界に発信されている。脳・神経・精神疾患領域では、難治性てんかんの脳局所療法の開発や脳温度制御による脳・脊髄の保護効果の研究、うつ病を対象としたエピジェネティックな研究や精神疾患における脳での脂肪酸代謝の器官解剖的な研究が注目を浴びている。さらには、インスリン様成長因子-1とサブスタンスPからなるペプチド製剤の創傷治癒作用の研究と臨床応用、カルシウムハンドリング異常による心不全の病態解明、Wolfram症候群の遺伝子同定、生体の恒常性維持機構

の解明やヒートショックプロテインと癌（悪性黒色腫や膵臓癌など）の研究など枚挙に暇がない。また、平成 22（2010）年に放射線治療学分野を設置し、放射線医学を用いた研究を更に強化している。

このように、医学科では基礎と臨床の融合を目指した独創的な研究活動が、長い歴史の中で現在まで受け継がれている。

保健学科では、看護学専攻と検査学専攻に分かれて研究を行っている。看護学領域では、患者家族の心理的ケア、女性のライフサイクルの支援、遺伝看護学分野での看護ケア、高齢者ケアの研究を多方面から研究している。さらには、保健医療の観点から精神疾患患者のケアの研究を行っている。検査学領域では、難治性神経疾患における慢性疼痛の病態解明や治療法の開発や臨床検査評価の国際基準の策定、猫ひっかき病やサラセミアなど血液疾患の遺伝子研究などが盛んに行われている。特に高次神経機能の研究では学内外との共同研究や医療機器の開発に取り組んでいる。

医学科としては昭和 60（1985）年本邦における脳死判定基準の作成、平成 17（2005）年に手腕振動症候群対策としての抹消循環機能評価法の確立など厚生労働省研究に関与し、健康保険の推進に貢献している。

また、永年にわたり、山口県下の司法解剖・行政解剖を通じて死因の究明と再発防止に向けて法医学的研究に取り組み、検死制度改革へ貢献している。

さらに、山口県の修学資金を活用した地域特別枠入学生に対して医療人育成センターを中心にキャリア教育支援を行うとともに、卒前卒後の一貫教育による多職種との連携医療にも対応できる地域医療を担う人材の育成を進めている。

保健学科では、日本における看護・健康科学分野で初めての英文誌Nursing and Health Sciencesの事務局やSTTI（Sigma Theta Tau International）のTau Nu Chapter支部として、地域における看護・健康科学分野を世界水準に高める人材育成に貢献している。

社会貢献

医学部と附属病院が連携し、医療人育成センターを拠点として全国で通用する地域医療を担う総合診療能力のある医師・医療人の養成を行っている。その一貫として平成 2（1990）年には総合診療部を開設して人材育成の実績をあげながら、医学部附属病院を拠点に高度先進医療を推進し、広く社会に貢献してきた。詳細は医学部附属病院の項を参照いただきたい。

医学祭

医学部正門

2-5-2 医学部附属病院

昭和 42(1967)年	山口県立医科大学附属病院を国立移管し、山口大学医学部附属病院として発足（医療法の規定に基づく開設の承認） 消防法の規定に基づく救急病院の指定
昭和 49(1974)年	伝染病棟を廃止し、共通病棟と改称
昭和 51(1976)年	看護部設置
昭和 63(1988)年	臨床修練指定病院に指定
平成 2 (1990)年	MR（磁気共鳴）棟竣工 総合診療部新設
平成 6 (1994)年	特定機能病院に指定
平成 9 (1997)年	新中央診療棟竣工
平成 10(1998)年	日本医療機能評価機構認定病院に認定
平成 11(1999)年	難病医療拠点病院に指定 結核病床 15 床を一般病床に種別変更
平成 12(2000)年	高度救命救急センター（三次救急病院）の設置承認
平成 15(2003)年	高エネルギー棟竣工
平成 18(2006)年	腫瘍センター設置
平成 19(2007)年	都道府県がん診療連携拠点病院に指定 エイズ治療中核拠点病院に指定 病床数 736 床に変更（現在に至る）
平成 21(2009)年	肝疾患診療連携拠点病院に指定 山口県DMAT（災害派遣医療チーム）指定病院に指定 クリニカルスキルアップセンター設置 肝疾患センター設置
平成 23(2011)年	ドクターヘリ運航開始 総合周産期母子医療センター指定病院に指定 医療人育成センター設置
平成 24(2012)年	地域医療教育研修センター（白翔館）竣工
平成 25(2013)年	二次被ばく医療機関に指定

歴史

昭和 21(1946)年 9 月、山口大学医学部の前身山口県立医学専門学校の附属病院は、宇部興産株式会社沖之山同仁病院、同東見初病院および宇部市立伝染病院が一つになって発足した。昭和 23(1947)年 11 月に附属病院の第 1 期工事が竣工し、昭和 27(1952)年に山口県立医科大学となり、昭和 33(1958)年には大学院医学研究科が設置された。昭和 39(1964)年に山口大学医学部(国立移管)となり、昭和 42(1967)年 6 月に附属病院が移管した後、附属看護学校、附属衛生検査技師学校、大学院の移管も順次進められ、昭和 43(1968)年 3 月には全て完了した。神経内科(昭和 63 年)、放射線治療科(平成 25 年)の新設が進み、現在の 28 診療科、736 病床の体制となり高度な医学と医療を提供できる山口県随一の基幹病院になっている。

診療施設は、検査部、手術部、放射線部、

輸血部、リハビリテーション部、先進救急医療センター、集中治療部、総合診療部、総合周産期母子医療センター、病理部、光学医療診療部、血液浄化療法室、生活機能向上センター、地域遠隔医療センター、高次統合感覚器医療センター、再生・細胞治療センター、超音波センター、遺伝診療部、栄養治療部、腫瘍センター、漢方診療部、肝疾患センター、放射線治療部の23部門から構成され、専門診療科の縦糸と診療施設の横糸が紡がれ、附属病院の目指す全人的医療を実践している。

また、企画・管理部門は、医療材料物流センター、医療情報部、臨床研究センター、ME機器管理センター、医療安全推進室、医療経営センター、診療連携室、患者相談室、診療録センター、感染制御室、医療人育成センターの11部門から構成され、診療科及び診療部門で勤務する医療従事者等を横断的に支えている。

本院は特定機能病院の指定(平成6年)を受けてすべての分野の疾患について高度で先進的な医療を実践し、一方では国立大学病院のなかで全国に先駆けて認可された高度救命救急センター(平成12年)を中心に多くの命を救うべく日夜努力している。また、山口県DMAT(災害時派遣医療チーム)指定病院(平成21年)、総合周産期母子医療センター指定病院(平成23年)など、山口県における医療の最後の砦となる中核病院として、また、地域全体のレベルアップを図る目的で制度化されたがん診療連携拠点病院(平成19年)、肝疾患診療連携拠点病院(平成21年)として地域医療の発展に寄与している。

このように、社会のニーズの変化や医療保険制度の変更に適格に応えることができるよう、病院設備を増強するとともに柔軟に病院組織を運用し、着実な運営を行っている。これからも社会の要望に応えて患者の立場に立った全人的医療を実施し、将来を担う医療人の育成と医学・工学・生命科学の英知を集約した新しい診断および治療法の研究開発を推進することにより山口発高度先進医療を世界に発信していく所存である。

山口大学医学部附属病院の理念・目的は、

1. 患者の立場に立った全人的医療を実施する
2. 将来を担う医療人を育成する
3. 世界に発信する先進的医療を推進する
4. 地域医療を発展させる

であり、全職員の共通認識になっている。

本稿では、国立大学法人化後を中心に附属病院の診療、教育・研究、経営の具体を紹介していく。

診療

山口県の中核医療機関として地域医療機関との連携を推進し、地域に密着した高度な医療を提供している。その代表的なものとして、国立大学病院で最初に認可された「高度救命救急センター」(平成12年)がある。毎年約1000例以上の高次救急患者の診療を行い、宇部・山陽小野田消防本部と連携して医師が添乗するドクターカー(平成15年)、山口県全域をカバーするドクターヘリ基地(平成23年)の運用など、病院に搬送されるまでの救急医療の初動体制の充実を図っており、二次救急医療機関及び救急患者搬送機関との緊密な連携体制によって危機的状態で高度な集学的治療を要する救急患者への医療を提供している。

当院は、がん診療連携拠点病院として、腫瘍センターを中心にがん診療連携協議会、拠点病院実務担当者会議、院内がん登録セミナー、緩和ケアセミナー、キャンサーボードなどの活動を行い、また、肝疾患診療連携拠点病院として、肝疾患センターを中心に診療連携協議会、地域コーディネーター養成講習会等を開催し、県内の医療機関および行政との情報交換を行うとともに地域医療を担うスタッフの育成及び連携を充実させている。腫瘍センター及

び肝疾患センターにはそれぞれ「がん相談支援室」、「肝疾患相談支援室」を設置して、患者、家族、地域医療機関、地域住民からの多様な相談を受けている。山口県の周産期医療は、本院を含む2つの総合周産期母子医療センター、4つの地域周産期母子医療センター及び地域の周産期医療関連施設、行政機関や救急隊と協働した診療体制がとられており、全国で問題になった合併症をもつ妊婦の受け入れ問題(たらいまわし)は山口県では発生しない優れた連携基盤を構築している。

近年では、災害医療への対応も充実させており、東北大震災の際のドクターヘリによる医師・看護師の派遣、DMATやこころのケアチーム等の活動に対して厚生労働大臣から感謝状が贈呈された(平成25年)。

教育・研究

附属病院では、医学部及び医学系研究科と連携して、臨床教育・研究のサポート体制を充実させている。

臨床教育については、将来を担う優れた医療人を育成すべく様々な取組みを行っている。医学教育における医師養成課程については、国際的医学教育認証への対応、チーム医療マインドの涵養、総合力のある人材育成などの医学科のカリキュラム改正に合わせて柔軟に実施している。特に臨床実習においては従来の52週から72週へ再編が予定されていることから、受入期間の増加に向けて、より一層教育に力を入れられるよう準備している。

平成16年から医師卒後臨床研修制度が開始されたことに端を発し、医療を取り巻く環境が大きく変化し"医師不足"が社会問題となっている。卒業後二年間の初期研修が義務づけられて研修医が大都市の研修機関に集中した結果、地方の医療機関への医師派遣の中心的役割を担っている大学病院の医師不足が深刻化し、地域医療圏の医療体制の維持が危機的状況に陥っている。本院においても例外ではなく、新制度に対応するために卒後臨床研修センターを設置し、附属病院に在籍する研修医の減少に対する対策などを行ってきた。

さらに、平成23年からは医療人育成センターに改組して研修医・専門医支援部門、地域医療支援部門、男女共同参画支援部門、コメディカル育成支援部門の4部門を設置し、研修医の獲得、医師の定着、女性医師への支援、医療技術の習得・向上などに附属病院が一体となって積極的な取組みを行っている。

看護師については、厚生労働省がすすめる急性期病院の7対1看護に対応するため法人化前と比較して激増しており、新人看護師の教育体制の整備が大きな課題となっている。年度毎にクリニカルラダーを明示した個人のレベルに応じた継続教育プログラムを作成して看護の実践を支援するとともに、看護職員として必要な知識、技術、態度を習得させ、自己のキャリアアップと組織の成長を図っている。また、専門学校や地域医療機関から看護師、薬剤師、放射線技師等の実習・研修を受け入れており、地域の医療従事者の育成にも積極的に取り組んでいる。

院内では事務職員を含めた全職員を対象とした感染対策研修、医療安全研修、接遇研修等を行うと共に、院外の各学会のシンポジウム、診療報酬・労災請求説明会、DMAT訓練などの専門性の高い研修会等に積極的に参加し、スキルアップを図っており、未来を担う医療人を育成するための教育体制を充実させている。

臨床研究については、平成8年に我が国初の治験コーディネーター制度を導入した臨床試験支援センター(現:臨床研究センター)を設置して、科学性、倫理性を保証した臨床治験を日常診療のなかで積極的に取り組むことを可能にする臨床研究支援体制を整備した。また平成23年度からは、先進的な診断法・治療法の開発につながるトランスレーショナルリサーチを推進するため、病院収入を財源として年間7件約4,500万円(平成26年度)の研究助成を行った。

経営

附属病院の経営は、病院長のリーダーシップの下に病院戦略会議・医療経営センター会議等で毎年度の目標設定を行い、診療科長、部長、センター長が参加する病院運営審議会で着実な実施と検証を行い、経営の安定化及び収支改善に取り組んでいる。

病院の収入は、独立行政法人化した平成16年度は16,835百万円であったが、平成25年度は20,286百万円と大幅に増加している。この結果は、その間の医療費抑制政策や"医療崩壊"の危機に対して病院職員が一丸となって対応した賜である。

平成26年度の目標値として病床稼働率88.5％、稼働額209億円、医療経費率38.5%を設定するなど、経営の安定化、収支の改善に取り組んでいる。このような収入増と経費削減を両立させるたゆまぬ努力の結果、病院施設・設備の計画的整備及び医療従事者の戦略的配置、処遇改善等を進めて好循環している。

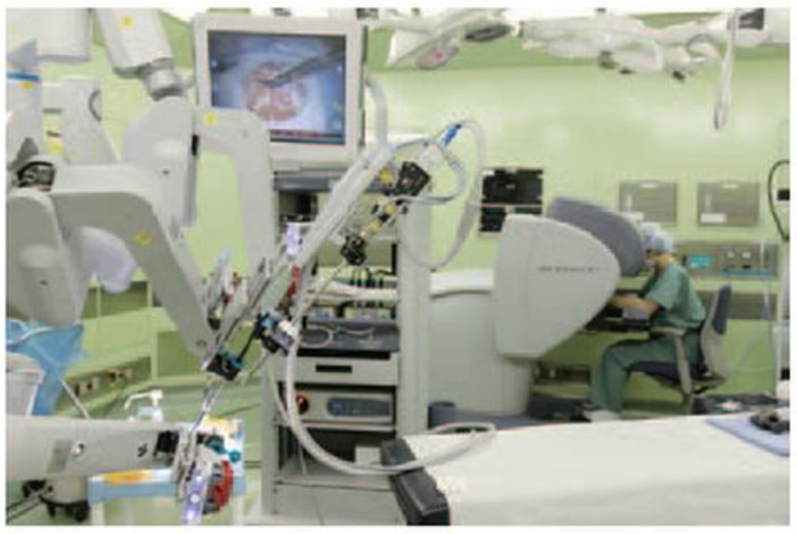
病院施設・設備の計画的整備については、「施設整備年次計画表」や「設備マスタープラン」に基づき、電子カルテ、ハイブリッド手術室及び放射線治療機器等を整備した。

医療従事者の配置については、法人化後は病院収入や外部資金を用いて柔軟に配置できるようになっており、平成16年度と平成25年度を比較すると約370名(教員医師40名、看護師260名、医療技術職員70名)を増員している。この様な職員増により、7対1看護体制の維持、病棟薬剤師の配置、新たに設置した部門の専任教員の配置など、病院機能の強化を図るための体制を充実させている。

収入増及び経費削減のための取組みとしては、医療材料や医薬品の共通化および価格交渉、医事当直、病院基盤設備の保守等の外部委託、診療報酬の加算要件の整備等、対応可能なすべての取組みを行っている。併せて、医療保険制度の変更を適格に把握して診療報酬請求に技術の精緻化、DPCデータを活用したマーケティング、民間医療機関の知恵に学ぶ研修会や勉強会への参加、他大学との情報交換等を行い、専門性を必要とする職員の育成を行うことで経営の安定化を図っている。

また、附属病院は、病院機能評価、医療監視(病院立入検査)、大学間相互チェック(感染対策・医療安全・災害対策)等の第3者評価を積極的に受審することで病院機能の強化・充実を図っており、安全・安心で信頼される高度先進医療を提供し続ける体制整備に努めている。

"Your Health, Our Wish"をキャッチコピーとして、病棟新営を含めた病院機能の再配置計画を進めている。病院整備計画室を設置して各診療科、部門、センターからのヒアリングを実施して、将来の高度先進医療を体現し災害時にも病院機能を維持できる施設整備計画を進めている。新病棟は、地上14階地下1階で、竣工は平成30年度、病院の整備計画全体の竣工は平成35年度を目標としている。



ダヴィンチ(ロボット手術)

ドクターヘリ

2-6 工学部

昭和 24(1949)年	宇部工業専門学校は山口大学工学部として発足 (機械工学科、鉱山学科、工業化学科、土木工学科)
昭和 28(1953)年	工業短期大学部を併設
昭和 33(1958)年	電気工学科を新設 工学専攻科を新設 (機械工学専攻、鉱山学専攻、工業化学専攻、土木工学専攻)
昭和 37(1962)年	工学専攻科に電気工学専攻を新設
昭和 38(1963)年	生産機械工学科を新設
昭和 39(1964)年	鉱山学科を資源工学科に改称
昭和 41(1966)年	共通科を学科目制から講座制に移行　共通講座に改称
昭和 44(1969)年	化学工学科を新設
昭和 48(1973)年	共通講座に情報処理基礎学講座を新設
昭和 50(1975)年	電子工学科を新設
昭和 55(1980)年	建設工学科を新設
昭和 58(1983)年	共通講座に工業基礎学講座を新設
平成 2(1990)年	工学部の全学科改組（機械工学科、応用化学工学科、社会建設工学科、電気電子工学科、知能情報システム工学科、機能材料工学科) 工業短期大学部改組
平成 5(1993)年	工業短期大学部を廃止
平成 8(1996)年	応用化学工学科、電気電子工学科及び機能材料工学科を改組、感性デザイン工学科を新設
平成 19(2007)年	機能材料工学科を循環環境工学科に改組、学科の名称変更（応用化学工学科を応用化学科、知能情報システム工学科を知能情報工学科に改称)

あゆみ

工学部は、昭和 14(1939)年 5 月に設置された「宇部高等工業学校」を起源とする。昭和 19(1944)年 3 月、名称が「宇部工業専門学校」に改められた。昭和 24(1949)年 5 月には、学制改革による山口大学の発足に伴い、「新制山口大学工学部」として、4 学科(機械工学科、鉱山学科、工業化学科、土木工学科、総入学定員 120 名)で再スタートした。また、昭和 28(1953)年 8 月、勤労者教育を主な目的として、工学部と同じ常盤台キャンパスに山口大学工業短期大学部(機械科、工業化学科)が併設された。

我が国の経済の発展とともに、既設学科の拡充、さらに電気工学科(昭和 33(1958)年)、生産機械工学科(昭和 38(1963)年)、化学工学科(昭和 44(1969)年)、電子工学科(昭和 50(1975)年)、建設工学科(昭和 55(1980)年)の新設、並びに大学院工学研究科修士課程(昭和 41(1966)年)の開設が行われた。

大学院工学研究科修士課程発足当初の専攻は、機械工学専攻、資源工学専攻、工業化学専攻、土木工学専攻、電気工学専攻であった。その後、生産機械工学専攻(昭和 42

(1967)年)、化学工学専攻(昭和51(1976)年)、電子工学専攻(昭和54(1979)年)、建設工学専攻(昭和59(1984)年)がそれぞれ新設され、工学系のほぼ全ての分野を網羅する最高学府として、順調に発展を遂げていった。

平成2(1990)年には、工学部の全学科改組ならびに山口大学工業短期大学部の改組転換が行われた。学部は、機械工学科(昼間コース、夜間主コース)、応用化学工学科(昼間コース)、社会建設工学科(昼間コース、夜間主コース)、電気電子工学科(昼間コース、夜間主コース)、知能情報システム工学科(昼間コース、夜間主コース)、機能材料工学科(昼間コース)、および共通講座に再編された。また、同年10月、大学院を改組し、長年の懸案であった大学院博士課程が設置され、従来の修士課程は博士前期課程となり、博士後期課程とともに山口大学大学院工学研究科となった。博士前期課程の専攻は前述の各学科に所属し6専攻、一方、博士後期課程は学科間の混成により3専攻(物質工学、システム工学、設計工学、定員各8名、総定員24名)が設置・編成された。

平成8(1996)年には、応用化学工学科、電気電子工学科および機能材料工学科を改組、ならびに、感性デザイン工学科が新しく設置された。また、平成9(1997)年には、大学院工学研究科と大学院理学研究科が統合し、大学院理工学研究科に改称された。

これに伴い、大学院理工学研究科の改組再編が行われ、博士前期課程は、機械工学専攻、応用化学工学専攻、社会建設工学専攻、電気電子工学専攻、知能情報システム工学専攻、機能材料工学専攻、共通講座(数理工学コース)、数理科学専攻、自然情報科学専攻、化学・地球科学専攻となった。博士後期課程は、これまでの3専攻(物質工学、システム工学、設計工学)に、自然共生科学専攻(定員8名)が加えられた。また、平成10(1998)年、大学院理工学研究科に環境共生工学専攻及び、平成12(2000)年には、感性デザイン工学専攻が、それぞれ新設された。さらに、平成13(2001)年には、山口大学大学院医学研究科に応用医工学系専攻が新設された。本専攻は、医学と工学とが相互連携のもと、先端的医療機材の開発研究に、幅広い人材の育成を目的とした教育研究組織であり、その独自性を発揮して発展し、内外で注目を集めている。

平成16(2004)年4月、山口大学工学部は、官立学校・国立大学として、65年の長きに及ぶ歴史に一旦幕を下ろしたが、全国の国立大学とともに国立大学法人化により、新たな幕が上げられた。

平成18(2006)年4月、グローバル化に対応できる人材育成、地域社会のイノベーションへの教育研究体制の充実、産業界イノベーションを支える人材の育成などを主な目的として、大学院理工学研究科の改組が行われ、博士前期課程は、理工学研究科応用化学工学専攻、電気電子工学専攻、知能情報システム工学専攻、機能材料工学専攻、自然情報科学専攻及び化学・地球科学専攻を、物理・情報科学専攻、地球科学専攻、物質化学専攻、電子デバイス工学専攻、及び電子情報システム工学専攻に改組し、博士後期課程は、理工学研究科物質工学専攻、システム工学専攻、設計工学専攻、自然共生科学専攻及び環境共生工学専攻を、自然科学基盤系専攻、システム設計工学系専攻、物質工学系専攻、情報・デザイン工学系専攻及び環境共生系専攻に改組した。

平成19(2007)年4月、地球環境を持続させるための循環型社会の構築に資する人材の育成を目的として、機能材料工学科を循環環境工学科に改組し、応用化学工学科を応用化学科、知能情報システム工学科を知能情報工学科にそれぞれ改称した。

施設設備の発展

工学部(常盤台)キャンパスの施設設備は、昭和40(1965)年、工学部本館が建設されて以降、学部及び大学院の拡充とともに大きく発展してきた。ここでは、平成2(1990)年以降について、その概略を述べる。平成6(1994)年に地域共同研究開発センターが建設され、さらに平成11(1999)年には研究棟のさらなる拡充(建設面積が発足当初の1.8倍、現在の名称は共同研究開発棟)が行われた。また、平成8(1996)年、独創的な研究開発の推進および大学発ベンチャーの創出支援・育成を目的として、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(平成15(2003)年には、ビジネス・インキュベーション棟を含み建設面積を当初の2.0倍に増築、現在の先端研究棟)が建設された。

常盤キャンパス敷地の有効活用と不足面積の整備拡充を目的として、平成7(1995)年、地上8階、地下1階建ての電気電子棟、平成10(1998)年、地上8階建ての機械・社建棟が建設され(写真)、研究棟の高層化が実現した。

さらに、平成15(2003)年、前述の両施設の東側に、地上8階建ての総合研究棟が建設された。この間、工学部の留学生や外国人研究者用の宿泊施設として、平成9(1997)年に、常盤国際交流会館が建設された。また学生の教育および福利・厚生施設の拡充も着実に行われ、平成12(2000)年、体育館の南側に地上4階建てのD講義棟、平成14(2002)年、本館の西側に福利厚生棟が建設された。いずれの建物も、当時の国立大学としてはとてもモダンで、とくにD講義棟は、内部が吹き抜けの洒落た構造となっている。また、従来の常盤キャンパス内建物の耐震化・改修を目的として、平成16(2004)年に工学部本館の大規模改修、平成20(2008)年に常盤寮、平成21(2009)年に環境共生系専攻棟(旧化学工学棟)、平成22(2010)年に知能情報棟の改修工事が行われた。さらに、平成25(2013)年に総合研究棟2号館(旧電気棟)、平成26(2014)年にE講義棟の大幅改修が行われ、学生の教育施設の安全性・利便性がより充実した。平成21(2009)年には、当時の国立大学工学部としてはおそらく国内初の、女子学生専用の常盤女子寮が新築された。

山口大学工学部は、誇りある歴史と伝統を脈々と受け継ぎながら、創造的な研究・教育を基盤として、さらなる飛躍・発展へと日々邁進している。

工学部電気電子棟・機械・社建棟

本館中庭のジャカランダの木
(2009年6月、オーストラリア元首相ホーク氏より贈呈植樹)

ボトルで作る世界一高い彫刻(長州科楽維新プロジェクト)
高さ7.39m、LED約1万個

2-7 農学部

昭和 24(1949)年	山口大学設置に伴い山口大学農学部として発足 (農学科、獣医学科)
昭和 27(1952)年	附属農場を開場
昭和 28(1953)年	附属家畜病院を設置
昭和 41(1966)年	山口大学の統合移転に伴い下関長府から吉田団地へ移転
昭和 42(1967)年	農芸化学科を新設
昭和 51(1976)年	農学科を改組(食糧生産学コース、生産環境学コース)
平成 3 (1991)年	農学科と農芸化学科を改組し、生物資源科学科を新設
平成 13(2001)年	生物資源科学科を生物資源環境科学科と生物機能科学科に改組
平成 18(2006)年	獣医学科を大講座制に改組
平成 19(2007)年	附属家畜病院を附属動物医療センターに改称
平成 21(2009)年	附属中高温微生物研究センターの設置
平成 24(2012)年	共同獣医学部設立に伴い、2学科体制に移行 農学部附属動物医療センターを共同獣医学部附属動物医療センターに再編 農学部附属中高温微生物研究センターを農学部及び共同獣医学部附属中高温微生物研究センターに再編

平成 11 年からの変遷

農学部は、昭和 24(1949)年 5 月に山口大学の一学部として発足した。当初は、農学科および獣医学科の 2 学科であったが、地域における農学教育および農業技術研究の中核的拠点として拡大・充実を続け、現在では、食料生産および生物機能開発・利用に関する先端的かつ国際的な研究教育を行っている。なお、農学部設置から山口大学創立 50 周年(平成 11 年)までの詳細な変遷は、山口大学 50 周年記念誌(通史)に詳しく述べられている。ここでは平成 11 年以降の農学部の変遷について紹介する。

1. 生物資源環境科学科と生物機能科学科の発足(3 学科体制へ)

農学部は、平成 13(2001)年 4 月より、生物資源科学科が生物資源環境科学科、生物機能科学科の 2 学科に分かれ、獣医学科と合わせて 3 学科体制となった。生物資源環境科学科は、生物生産科学講座と地域環境情報科学講座、生物機能科学科は生物機能化学講座と環境生化学講座で構成され、それぞれ大講座制を採用し、より細分化した学科において、教育研究の独自性と効率の向上が図られた。以後、2 学科はこの大講座構成を現在まで維持している。

2. 農学部本館の改修

平成 14(2002)年には、約一年かけて農学部本館(昭和 41 年に竣工)の改修を行い、耐震性の強化と、講義室の充実や学生ラウンジの整備など学生の教育環境の向上が図られた。その際、いくつかの講義室には、当時、全学で進めていた学生のノートパソコンの必携化の流れを受け、各机に情報コンセントが整備された。その後、徐々に整備を進め、平成 24(2012)年現在、農学部のほとんどの講義室に情報コンセント、液晶プロジェクターが整備されている。

その他の農学部関連の建物としては、平成15(2003)年に附属家畜病院(現動物医療センター)近くに解剖実習棟を移設し、平成21(2009)年度に動物医療センターを改修・増築した。また、平成24(2012)年には、農場本館の改修(耐震性補強)を行った。

3. 国立大学法人化以降

平成18(2006)年度より、医・工・理・農の連携による大学院医学系研究科「応用分子生命科学系専攻(博士前期・後期課程)」の新設に伴い、農学部の5名の教員が医学系研究科所属となり、農学部の学生は大学院進学において農学研究科だけでなく医学系研究科にも進むことができるようになった。

また、獣医学科は、獣医学教育の充実をめざし、同年4月に大講座制(生体機能学講座、病態制御学講座、臨床獣医学講座の3講座)に移行した。教員定員も増え、国際基準を満たす獣医学教育の実現に向け充実を図っていく足掛かりを築いた。

そして、翌年1月には、「附属家畜病院」を、診療の対象が産業動物から犬・猫の伴侶動物が中心になったこと、および研修獣医師や動物看護師の教育にも力を注ぎ西日本全域における小動物臨床の中核センターとして機能していることなどから、「附属動物医療センター」に名称を変更した。

4. 山口県との研究連携の開始

大学法人化以降、地域への貢献や地域の機関との連携は、大学にとって非常に重要な活動の1つとなってきた。この流れを受け、それまで個人的に行われてきた山口県農林関係試験研究機関との共同研究等を基盤に、平成17(2005)年6月に連携推進会議を設置し、翌年8月には、共通の課題解決のため、協力して研究を行うことを目的に「連携研究に関する覚書」を締結した。現在の連携推進会議には、連携調整部会のほか8つの専門部会(園芸特産、獣医畜産、土地利用型作物、環境、病害虫、農山村、森林林業、食品加工)が置かれ、部会ごとに研究会を開催したり、共同研究を推進するなど、活発に活動している。さらに県からの非常勤講師の派遣など、教育面における連携も進んでいる。

5. 拠点大学交流事業

平成10(1998)年度より、足立収生教授(現山口大学名誉教授)をコーディネーターに始まった独立行政法人日本学術振興会の拠点大学交流事業「耐熱性微生物資源の開発と利用に関する研究」は、平成15(2003)年からは松下一信教授をコーディネーターとして、計10年間行われ、多くの留学生を受け入れ、アジア地域における微生物学の発展に大きく寄与した。その後、平成20年からは、アジア研究教育拠点事業「微生物の潜在能力開発と次世代発酵技術の構築(日本側コーディネーター:山田守教授(現農学部長))」として継続し、日本23大学・研究機関、タイ23大学・研究機関、ベトナム4大学・研究機関、ラオス1大学から約120名の研究者が参加するなど、現在も国際的な研究教育機関としての役割を果たし続けている。

6. 附属中高温微生物研究センターの設置

農学部において行われてきた先端的な微生物学研究を基盤に、「微生物機能の活用」研究を推進すると同時に、それに必要な研究能力とグローバルな視点を備えたトップレベルの若手研究者を育成することを目的に、平成21(2009)年9月1日に、平成27(2015)年3月31日までの時限付きで、中高温微生物研究センターが設置された。その後、平成24(2012)年の共同獣医学部発足に伴い両学部による共同設置となった。地球温暖化に伴う諸問題(エネルギー枯渇・食料危機・感染症対策・環境保全・生態系の維持など)とそれによって引き起こされる人類存続に関わる課題を解決する一つの手段として、微生物の積極的利用に関する研究を先導的に行っている。

7. 農学部オープンセミナー等の実施

平成 21(2009)年より、高大連携の一環として、高校で学習する理科の基礎知識から農学部の専門的領域に足を踏み入れるための接続授業として農学部オープンセミナーを開始した。初年度は「作ってみよう、光合成と呼吸の測定装置」、以降、「生きた細胞と細胞小器官(オルガネラ)を見る」、「身近な寄生虫の世界～食品と生活」、「光合成で決まるブドウやコムギの色と味～光合成産物の働きを計測してみよう～」、「活性酸素の話をしよう～抗酸化食品って何?～」と、毎年、大学に高校生を招き、教員による講義、実験・実習の体験の機会を提供している。また、スーパーサイエンスハイスクール事業にも協力し、高校生に講義と実験を提供している。

現在の農学部

平成 24(2012)年 4 月に、鹿児島大学と山口大学で共同獣医学部が設立され、それに伴い、農学部は生物資源環境科学科と生物機能科学科の 2 学科体制となった。教員数は多くはないが、2 学科で幅広い教育研究分野を持ち、最先端の研究活動を通じ、21 世紀の農学、農業を担う人材の育成をめざしている。

教育面においては、平成 24(2012)年度より、広島大学生物生産学部と特定科目における単位互換を開始した。インターネットを利用した遠隔講義システムを整備し、両大学において、相手校開講の一部の講義の受講が可能になっている。山口大学は「植物育種学」、「植物病理学」を提供した。また、講義の提供だけでなく、遠隔講義システムを利用した合同セミナーも開催し、連携を深めている。

研究面においては、教員の活発な研究活動により、多くの大型外部資金を獲得している。また現在、農学部教員を研究代表者とする 3 テーマ(「生物活性揮発性化合物の科学(松井教授)」「新規昆虫能力の探索とその利用技術開発(小林教授)」、「光による植物の制御・診断(山本教授)」)が、山口大学の研究推進体として認定されている。さらに、山本晴彦教授が中心となって進めていた植物工場人材育成プロジェクトを基盤に、完全人工光型植物工場が設立され(平成 24 年 8 月植物工場実証施設(第二植物工場)開所)、最新の植物生産技術に関する研究がなされている。

また、附属農場は、農学部における教育研究に利用されるとともに、公開講座など地域貢献の場としても機能している。さらに平成 24 年度から、中国・四国地区の国公立大学農学系学部(9 大学)が連携して開催する総合的なフィールド教育に、「作物生産科学フィールド演習」の提供を開始し、キャンパス内に附属農場を有しているという特徴を生かして、作物生産について総合的に学ぶ機会を提供している。

国際交流活動も活発である。学部教員の約 6 割が国際共同研究等に参加し、海外の大学との学部間協定は、平成 26(2014)年 4 月現在で 13 件締結されている。特に、山口大学唯一の国際拠点事業を 15 年間継続し、ASEAN諸国を中心に活発な国際共同研究を推進している。さらに、平成 21(2009)年度からJENESYSプログラム「若手研究者交流支援事業」を実施するなど、学生や若手研究者の国際交流も盛んである。

植物工場内

2-8 共同獣医学部

平成24(2012)年	農学部から分離し、共同獣医学部を発足 農学部附属動物医療センターを共同獣医学部附属動物医療センターに再編 農学部附属中高温微生物研究センターを農学部及び共同獣医学部附属中高温微生物研究センターに再編

設置の経緯

本学部は獣医学教育改善を目途に設置された山口大学・鹿児島大学が共同で運営する修業年限6年の共同学部(共同教育課程)であり、「国際水準の獣医学教育を体系的に創出・実践するとともに、学際協力により深い知識と高度な技術を備えた専門性の高い獣医師を養成する」ことを目的としている。

獣医学教育改善に関しては従前から議論されて来たところであり、平成16(2004)年「国立大学における獣医学教育に関する協議会」提言(文部科学省)を受けて、「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」(平成20(2008)年12月)、また同時期に文科省から出された「戦略的大学連携支援事業」に代表される大学改革事業などと相俟って、丸本卓哉前山口大学長のリーダーシップにより、九州・中国地区の獣医系大学間(連合獣医学研究科構成大学)で教育連携に関する検討を重ねた結果、平成22(2010)年8月に鹿児島大学との「設置準備に関する合意書」が取り交わされ、合同設置準備委員会等の議論を経て平成24(2012)年4月に共同獣医学部が設立された。

教育目標

本学部の教育研究目標は、「生命科学の中核をなす動物生命科学研究を推進し、人類と動物との共生環境社会を科学的に考究し、動物生命倫理を通じて命の尊厳を学び、豊かな人間地球社会の創生に貢献する」ことであり、教育面では、昨今の獣医科学をめぐる諸問題を把握し、その社会ニーズに対応した獣医学教育を改革推進し、欧米の獣医学教育認証(アクレディテーション)を視野に入れた国際水準の獣医学教育カリキュラムの構築・実践、および国際社会で活躍できる人材の育成を目指している。

本目標を達成するため、両大学の特徴を生かした相互補完的な教育研究、すなわち、山口大学は伴侶動物獣医学と公衆衛生学分野を、鹿児島大学は産業動物獣医学と動物衛生学分野を中心として、共同教育課程における教育研究体制を整備しつつある。教育面では、遠隔講義システムおよび学生移動による両大学学生への同時教育の提供、同一シラバスによる教育などの実施、専任教員増によるスケールメリットを活かした専門性が高く、かつ幅広い

共同獣医学部銘板除幕式(平成24年4月2日)

山口大学及び鹿児島大学共同獣医学部設置記念祝賀会

獣医学教育が可能となっている。また研究面では、両大学教員は連合獣医学研究科に所属し、有機的かつ総括的研究が可能となっており、一層の飛躍が期待できる。

展望

一方、獣医師養成の観点から、モデルコアカリキュラムおよび共用試験に対応するカリキュラム、ならびに参加型実習の斉一教育にも対応するとともに、各大学の特徴を生かしたアドバンスト教育も組み込まれている。

これらの活動は文部科学省の「国立大学改革強化推進事業」の１つとして推進され、欧米獣医学教育の国際認証を目指すことが具体化されている。すなわち、高度教育研究機器整備を伴う教育施設および動物医療センターの高度化、ならびに教員の拡充などにより、さらなる獣医学教育研究の改善・高度化が推進されることとなっている。

獣医学教育研究の果たす役割は社会的に大きく、ライフサイエンス研究、食資源（動物）の安心・安全、動物由来感染症の制圧、家畜伝染病防疫、人・動物福祉に関わる臨床獣医学および比較医学分野における動物医科学などの幅広い分野に貢献しており、獣医学に対する社会的要請は高く、これまでも各教員の努力により社会貢献がなされて来たところではある。今後はさらにCOC（Center of community）構想等を活用して有機的に活動し、国際的通用性のある知識・技術を備えた獣医師および獣医学研究者を育成するとともに、獣医科学の幅広い分野で国際社会・国・地域へ貢献することが期待されよう。

遠隔講義実習システム

手術風景

3 大学院の発展

3-1 | 人文科学研究科

昭和 60(1985)年	人文科学研究科設立 地域文化専攻 12 研究分野、言語文化専攻 9 研究分野
平成 5 (1993)年	言語文化専攻の研究分野に言語情報学を新設
平成 9 (1997)年	地域文化専攻の研究分野を 12 から 4 に、言語文化専攻の研究分野を 10 から 5 に改編
平成 23(2011)年	地域文化専攻の研究分野を 4 から 3 に改編

設立

人文科学研究科は、修士課程のみで、地域文化専攻と言語文化専攻の 2 専攻からなり、定員はそれぞれ 4 名ずつの計 8 名である。

人文科学研究科は、昭和 60(1985)年 4 月 1 日に設立された。人文学部の小講座に対応する形で、地域文化専攻には、哲学、倫理学、中国哲学、日本思想史学、美学・美術史、国史学、東洋史学、西洋史学、考古学、社会学、社会心理学、社会人間学の計 12 の研究分野が、言語文化専攻には、国語学、国文学、中国語学、中国文学、英語学、英米文学、ドイツ語学・ドイツ文学、フランス語学・フランス文学、言語学の計 9 の研究分野が設けられた。

平成 4(1992)年、人文学部言語文学科に新たに言語情報処理学講座が開設されたのに伴い、言語文化専攻の研究分野に言語情報学が加えられた。

研究分野の改編

平成 5(1993)年の人文学部の改組により、コース制が導入されたことに応じ、平成 9(1997)年人文科学研究科の研究分野も大括りのものに改編された。人文学部のコースに対応する形で、地域文化専攻ではそれまでの 12 分野が思想文化論、歴史文化論、現代社会分析論、博物・芸術論の 4 分野に、言語文化専攻ではそれまでの 10 分野が日本語学文学論、中国語学文学論、英米語学文学論、独仏語学文学論、言語学・言語情報論の 5 分野にまとめられた。

平成 23(2011)年、平成 19(2007)年の人文学部改組を受け、再び人文科学研究科の研究分野が改編された。

ただし、この改編においては、変更があったのは地域文化専攻のみで、言語文化専攻は研究分野の枠組みを変更しなかった。地域文化専攻では、人文学部人文社会学科に対応する形で、博物・芸術論の考古学系が歴史文化論へ、美学・美術史系が思想文化論へ統合され、その結果、思想文化論、歴史文化論、現代社会分析論の 3 分野となった。

人文科学研究科は、平成 24 年 3 月 31 日現在で、計 292 名の修了生を送り出しており、修了生は社会の様々な方面で活躍している。また、修了生の中には、留学生も多い。

3-2 教育学研究科

平成 3（1991）年	教育学研究科を設置 学校教育専攻学校教育専修の１専修と教科教育専攻（6 専修）
平成 7（1995）年	教科教育専攻に２専修を新設
平成 9（1997）年	教科教育専攻に２専修を新設し、国語教育、社会科教育、数学教育、理科教育、音楽教育、美術教育、保健体育教育、技術教育、家政教育、英語教育の 10 専修に改編
平成 12（2000）年	学校教育専攻に学校臨床心理学専修を新設
平成 21（2009）年	附属臨床心理センターを設置

目的

往時の教育学研究科案内には、「山口大学大学院教育学研究科は、就学前、初等教育及び中等教育（障害児教育含む）の各学校教育の重要な役割を担う教員の資質・能力の向上を目指し、理論的・応用的能力をもち、教育実践の場で教育・研究を推進する教員を養成することを基本方針として設置された。」と謳われている。また、学校現場や社会のニーズに対応した高い資質を持った教員の養成と、現職教員のリカレント教育という役割を担ってきたとされている。

近年整備されたアドミッションポリシーにおいては、科学技術の発展、社会生活の急激な変化の中で次世代を担う子どもたちの発達と教育が重要な課題となっていること、とくに就学前、初等中等教育の各学校教育の中核となる教員の資質･能力向上が希求されていることを受けて、(1)学校および地域における教育課題に応じて、高い資質を有する学校教員および地域社会の教育文化に貢献できる人材を育成すること、(2)学校および地域社会の研究拠点として、関連書科学と連携した統合的な教育文化の発展に貢献すること、(3)学術及び教育・文化の交流拠点として、教育資源を広く地域に向けて解放し、地域社会の発展に寄与することが研究科の目的として謳われている。

社会との接点

近年の大学院修了生の進路状況は年による変動はあるものの約 40 名のうち 10 数名が臨時採用を含めた教育現場に、約 10 名が教員を除く公的法人や民間へ就職、進学者が数名という状況である。また、毎年修了生の中には 10 数名の現職・有職者がおり、教員養成と現職教員のリカレント教育という役割を担い続けてきたといえる。

社会の変化に対応した人材養成と貢献という立場からは、平成 21 年から附属臨床心理センターを開設し、不登校やいじめ、友人関係などの子どもに関する相談から、職場での対人関係の悩みやストレスなどの一般の相談まで、幅広く受け付け、それらの問題解決などについて、臨床心理学の立場からサポートする体制を整えている。同時に、学校臨床心理学専修は平成 13 年 4 月より臨床心理士養成第１種指定の大学院に認定されており、臨床心理士、学校心理士などの養成にも努めている。また、引き続き社会のニーズに対応した大学院教育を進めていくため、平成 23、24 年には大学院修了生向けにアンケートを実施している。大学院教育に対する忌憚のない意見を真摯に吸収することを通じて、カリキュラムの改善などを含めた教育研究環境の整備、運用に努めている。

3-3 経済学研究科

昭和 50(1975)年	大学院経済学研究科（修士課程）経済学専攻を設置
平成 5(1993)年	大学院設置基準第 14 条に基づく教育方法の特例（昼夜開講制）を実施
平成 7(1995)年	企業経営専攻を新設
平成 14(2002)年	経済学専攻に外国人留学生を対象とする公共管理コースを新設
平成 21(2009)年	企業経営専攻に医療・福祉経営コースを新設

沿革と現況

大学院経済学研究科(修士課程)は、昭和50(1975)年に経済学専攻が創設されて、その歴史が始まった。創設当初は、研究者養成をその主目的に掲げていたが、地域社会に開かれた研究科とするため、社会人再教育を新たに目的に加え、平成5(1993)年からは、社会人に対応した昼夜開講制が実施された。平成7(1995)年には、新たに企業経営専攻も設置されて、その教育体制の拡充が図られた。

平成14(2002)年には、JICAのスカラーシップによる公共管理(MPA・公共管理学修士)コースが経済学専攻に創設された。これは、発展途上国の留学生を積極的に受け入れ、英語による授業によって開発政策の立案能力を養成しようとするもので、全国的にも先駆的なグローバル人材育成の試みである。

平成21(2009)年には、企業経営専攻に「医療・福祉経営コース」も創設された。これは、病院及び福祉施設経営の専門家の育成を目的とするものである。主として医療・福祉施設に勤務している社会人が入学し、平日の夜間及び土曜日に授業を実施している。

平成22(2010)年には、東アジア研究科・経済学研究科棟が竣工し、大学院生の教育環境はより充実したものとなった。

しかしながら、経済学研究科は、入学定員の充足率の低さや、日本人よりも留学生の比率が高いという問題を慢性的に抱えている。こうした課題をいかに乗り越え、研究科の存在意義や方向性を打ち出せるかが、新たな二百年に向けた鍵となるであろう。

東アジア研究科・経済学研究科棟

公共管理コースの授業

3-4 医学系研究科

昭和 42(1967)年	山口県立医科大学大学院医学研究科を国立移管し、山口大学大学院医学研究科を設置
平成 9(1997)年	大学院設置基準第 14 条に基づく教育方法の特例（昼夜開講制）を実施
平成 12(2000)年	医学研究科を再編 5 専攻（生理系、病理系、社会医学系、内科系、外科系）を 4 専攻（高次統御系、器官病態系、分子制御系、環境情報系）に再編
平成 13(2001)年	医学研究科に応用医工学系専攻を新設
平成 17(2005)年	医学研究科を医学系研究科に改称 医学系研究科に保健学専攻（修士課程）を新設
平成 18(2006)年	医学系研究科再編 医学博士課程の 4 専攻（高次統御系、器官病態系、分子制御系、環境情報系）を 2 専攻（システム統御医学系、情報解析医学系）に再編 医学系研究科に応用分子生命科学系専攻新設
平成 19(2007)年	医学系研究科に保健学専攻（博士課程）新設
平成 20(2008)年	医学系研究科附属修復医学教育研究センター新設
平成 22(2010)年	高度学術医コース（SCEA/AMRA）設定 放射線治療学分野設置
平成 24(2012)年	SMAC（Student Medical Academia Center）設置
平成 25(2013)年	修復医学教育研究センターを再生医療教育研究センターに改称

沿革

山口大学医学系研究科は、昭和 33(1958)年 4 月に山口県立医科大学大学院医学研究科として設置され、昭和 42(1967)年 4 月に国立移管し、山口大学大学院医学研究科となった。医学研究科設置当時は、生理系、病理系、社会医学系、内科系、外科系の 5 専攻から構成されていた。その後、平成 12(2000)年には、学際的で柔軟な教育・研究を推進することを目的として、5 専攻を 4 専攻(高次統御系、器官病態系、分子制御系、環境情報系)に再編成し、基礎系講座と臨床系講座の統合による大講座制を導入した。

平成 13(2001)年 4 月には、医学と工学との連携のもと、医療・福祉の新しい動向に即した理論と先端的医療機材の開発研究に必要な創造的で幅広い視野の人材を育成する応用医工学系専攻を設置した。

法人化後についても、平成 17(2005)年 4 月には保健学専攻(修士課程)の設置、平成 18(2006)年には医学・工学・理学・農学の連携のもと、地域・社会に貢献できる高度専門職業人の育成を目指すとともに、医療関連分野の更なる発展を目指す応用分子生命科学専攻(博士前期・後期課程)を設置し、医学博士課程の高次統御系専攻、器官病態系専攻、分子制御系専攻及び環境情報系専攻をシステム統御医学系専攻及び情報解析医学系専攻に改組し、医学系研究科を再編した。さらに、平成 19(2007)年には、保健学専攻(博士課程)を設置するなど、着々と高度な専門職業人を育成する教育課程を整備してきた。

また、再生医療教育研究センター、高度学術医コース、SMAC（Student Medical Academia Center)の設置など、高度先進

医学・医療分野とグローバルスタンダードに対応できるよう教育・研究体制を整備している。

このように、医学系研究科では、他の専門分野との真の協力を伴った融合と連携を行うとともに、研究資金調達の面からも産業界と連携し、とりわけ地域の産業界に興味を持っていただける研究、この地域でしかできないような研究を行い、国内だけでなく世界的にも通用していくことを目指している。そのためには、若手の人材育成が最重要課題であり、若手の研究者が志を高く持つことができる教育・研究環境の整備に全力で取り組んでいる。本誌では、国立大学法人化後を中心に、医学系研究科の教育、研究について紹介していく。

教育

医学系研究科の教育の特徴として、応用医工学系専攻及び応用分子生命科学系専攻が挙げられる。これらの専攻は、従来では各専門分野で縦断的に教育活動を実施していたところであるが、医学、工学、農学、理学の各分野を横断的に連携した教育を実施している。

システム統御医学系専攻、情報解析医学系専攻(医学博士課程)及び保健学専攻においても学際領域に関する知識を含め、幅広い視野を持った高度専門職業人を育成する教育を実施している。その中では、ゲノムやプロテオームの研究などを基礎にした高度先進医学・医療への対応と学際融合領域との連携を持った広い範囲の専門科目を提供している。

また、平成22(2010)年に設置された高度学術医コース(SCEA/AMRA)では、学部・大学院教育を一貫した研究医養成プログラムを実施している。

前期プログラム(学部課程)は、医学科3年次を修了した者を対象としており、大学院の授業を先取りして受講でき、大学院学位論文の関連論文を執筆することができる。前期プログラム履修中に外国語試験に合格した場合には、大学院入学試験受験の際に外国語試験を免除しており、大学院入学に関して優遇措置を行っている。

後期プログラム(大学院課程)では、前期プログラム期間中に受講した授業の履修免除、執筆した論文を学位論文の関連論文として認定可能、博士取得期間の短縮、など優遇措置がある。SCEAプログラムについては、奨学金を付与しているが、修了後に、基礎研究医として教育研究に携わることで奨学金の返還を免除するとしている。

専門的な看護系人材育成として、中国・四国・九州地区で唯一の認定コースである「CNS(急性・重症患者看護専門看護師、がん看護専門看護師)コース」を看護学領域の博士前期課程に設けており、急性・重症患者看護専門看護分野及びがん看護専門看護分野における専門性の高い看護職業人を育成している。

研究

医学系及び保健学系については「医学部」のページを参照していただきたい。

理学系では、応用分子生命科学系専攻にて研究を行っている。初期胚の間期伸長に伴う細胞内小器官の再構築による細胞分化の分子機構の解析の研究、非線形光学特性と無機化合物の融合による無機－有機ハイブリッド非線形光学材料の研究、生物活性化合物の合成と構造活性相関を研究など行っており、理学のみならず、医学、薬学、工学など幅広い分野と融合・連携している。細胞秩序の研究は、本学から唯一「JSTさきがけ」に採択された個

研究指導風景

性的な課題であり、論文発表のみならず電気穿孔法の特許出願も行っている。

工学系では、応用医工学系専攻及び応用分子生命科学系専攻にて研究を行っている。応用医工学系専攻では、血管内治療器具や様々な医療機器について、工学的視点からの性能・特性評価や研究、生体における力学現象と生体材料の力学特性の解明及び医療への応用に関する研究、癌やびまん性肺疾患の診断・治療支援アルゴリズムの研究等を行っている。なお、生体力学シミュレーションに関する研究では、世界で初めて軟骨内電気化学的プレストレスによる湾曲現象のシミュレーションを実現した。応用分子生命科学系専攻では、生物活性が注目される有機分子の合成、医療分野における生体適合材料や医療用機器の高分子電池材料の開発、生体高分子機能を利用したバイオプロセスの開発及び医療、製薬、食品、化学産業への応用などを行っており、科学研究費基盤研究A、NEDO、ALCA、生物系特定産業技術研究支援センターなどの競争的資金を利用した研究を進めている。

農学系では、応用分子生命科学系専攻にて研究を行っている。疾患の分子機構解析やバイオマーカーの開発、治療等への応用、化学の視点から有用微生物の応用・利用に関連した研究、脊髄内ニューロンと骨格筋細胞のメカニズムとその可塑性等による加齢に伴う機能後退の阻止などを研究、植物が放散する揮発性化合物の機能についての研究、生存戦略による耐熱化株の育種及び耐熱性を利用した省エネ型高温発酵技術の構築の研究等を行っている。

また、医学系研究科には、附属施設である再生医療教育研究センターを設置している。センターでは、「基礎研究」、「トランスレーショナル研究(TR)」、「臨床(研究)」のユニットを設けて研究リソースの集約化を図るとともに、「研究マネジメントユニット」を置いている。異なる分野から広く連携した医学系研究科の各専攻系の特徴を生かし、研究マネジメントユニットを機能させることによって、異分野融合による新しい「知」の創出のシステムを構築し、修復鍵分子の新たな発見からトランスレーショナル研究を行っている。「培養ヒト骨髄細胞を用いた低侵襲肝臓再生療法の開発」、「橋渡し研究推進合同事業」等の研究業績が挙げられる。

総合研究棟

3-5 理工学研究科

昭和41(1966)年	大学院工学研究科（修士課程）を設置 機械工学専攻、資源工学専攻、工業化学専攻、土木工学専攻、電気工学専攻
昭和42(1967)年	工学研究科生産機械工学専攻を新設
昭和51(1976)年	工学研究科化学工学専攻を新設
昭和54(1979)年	工学研究科電子工学専攻を新設
昭和57(1982)年	大学院理学研究科を設置 数学専攻、物理学専攻、化学専攻、生物学専攻、地質学鉱物科学専攻
昭和59(1984)年	工学研究科建設工学専攻を新設
平成 2(1990)年	工学研究科博士課程（前期６専攻、後期３専攻）を新設
平成 9(1997)年	工学研究科と理学研究科を統合して理工学研究科に改称 博士前期課程：機械工学専攻、応用化学工学専攻、社会建設工学専攻、電気電子工学専攻、知能情報システム工学専攻、機能材料工学専攻、数理科学専攻、自然情報科学専攻、化学・地球科学専攻 博士後期課程：物質工学専攻、システム工学専攻、設計工学専攻、自然共生科学専攻
平成10(1998)年	環境共生工学専攻を新設
平成12(2000)年	感性デザイン工学専攻を新設
平成18(2006)年	理工学研究科の専攻を再編、並びに教育内容を改訂 博士前期課程：数理科学専攻、物理・情報科学専攻、地球科学専攻、機械工学専攻、社会建設工学専攻、物質化学専攻、電子デバイス工学専攻、電子情報システム工学専攻、感性デザイン工学専攻、環境共生系専攻 博士後期課程：自然科学基盤系専攻、システム設計工学系専攻、物質工学系専攻、情報・デザイン工学系専攻、環境共生系専攻

沿革

理工学研究科の歴史は、昭和41(1966)年に設置された工学研究科(機械工学専攻、資源工学専攻、工業化学専攻、土木工学専攻、電気工学専攻の5専攻)から始まる。その後、生産機械工学専攻、化学工学専攻がそれぞれ新設され、高度技術者の養成を担ってきた。さらに、電子工学専攻、建設工学専攻が新設され、全部で9専攻の体制となった。また、教育の高度化を図るため博士後期課程設置の要求が高まり、平成2(1990)年10月には念願であった博士後期課程3専攻(物質工学専攻、システム工学専攻、設計工学専攻)が工学研究科に設置されるとともに、6つの博士前期課程(機械工学専攻、応用化学工学専攻、社会建設工学専攻、電気電子工学専攻、知能情報システム工学専攻、機能材料工学専攻)に再編された。

昭和57(1982)年には、本研究科のもう一つの母体である理学研究科(数学専攻、物理学専攻、化学専攻、生物学専攻、地質学鉱物科学専攻)が設置され、修士課程の教育が開始された。

平成9(1997)年には、工学研究科と理学研究科が統合されて理学部と工学部が共同して運営する理工学研究科となり、既設の工学系専攻に加え、理学系専攻が新設された。翌

年度には、博士後期課程に環境共生工学専攻の設置も認められ、5 専攻体制となった。平成 12(2000)年には、感性デザイン工学専攻(前期課程)が新設された。

最も新しい改組は、平成 18(2006)年の大学院の部局化に伴うもので、博士後期課程 5 専攻(自然科学基盤系専攻、システム設計工学系専攻、物質工学系専攻、情報デザイン工学系専攻、環境共生系専攻)、前期課程 10 専攻(数理科学専攻、物理・情報科学専攻、地球科学専攻、機械工学専攻、社会建設工学専攻、物質化学専攻、電子デバイス工学専攻、電子情報システム工学専攻、感性デザイン工学専攻、環境共生系専攻)となった。

進学者

工学研究科と理学研究科の統合を経て発展している理工学研究科ではあるが、「昭和」が終わるまでは、定員が少ないこともあり修士課程への進学率は卒業生の 20%程度とそれほど高いものではなかった。

理工学研究科への改組に伴い、大学院博士前期(修士)課程の学生定員が大幅に増加された頃から大学院への進学率が急速に高まり、平成 14(2002)年には、工学部卒業生の 50%超が、理学部の卒業生の約 50%が博士前期課程へ進学するまでになった。さらに平成 13(2001)年から平成 16(2004)年の間、工学系は毎年 15 人以上、理学系も約 6 名が博士前期課程から後期課程進学している。これは、学部入学者の約 40 人に 1 人以上が博士後期課程に進学したことに相当している。

研究の推進

この大学院の充実が行われた時代に、特に産学連携研究の推進や特許出願件数が大きく増加した。

例えば、平成 3(1991)年には、大学全体で共同研究は 20 件、受託研究は 8 件に過ぎなかったが、理工学研究科に名称変更した平成 9(1997)年には、その数はそれぞれ 44 件と 35 件へと大幅に増加した。更に、博士前期課程への進学率が約 5 割に達し、博士後期課程の進学者の数も多くなった平成 10(1998)年以後にはこの数はさらに大きく増加し、一時は共同研究・受託研究をあわせて 300 件を超えた。このことは理工学研究科の研究力が、大学院生の力に大きく依存していることを示している。

しかし、平成 17(2005)年度以降は後期課程への進学者が減少し(最近になって回復はしつつある)、内部進学者、社会人と留学生を合わせても博士後期課程の学生定員を満たすことが困難な状況になっている。

理工学研究科を今後も継続的に発展させるためには、博士後期課程への進学者の増加が見込める対策をとることが必要である。

医学系との連携

理工学研究科の重要な活動として、医学系と連携した大学院における教育研究が挙げられる。平成 13(2001)年には、日本で始めて医学研究科の中に応用医工学系専攻が設置され、工学系と医学系の教員が共同で、医学と工学の素養のある高度技術者のための教育を始めた。さらに平成 18(2006)年には、医学系研究科に理工学研究科、農学研究科の教員も参加して、応用分子生命科学系専攻が設置された。

この複数の学部の教員が参加する大学院の設置は、研究分野の垣根を取り払い、分野をまたいだ多くの共同研究を生み出しており、平成 24(2012)年度には優れた博士論文を執筆した者に与えられる井上研究奨励賞を受賞している。また、新たな分野への就職の開拓も行っている。

技術経営等の教育

理工学研究科を語るうえで、技術経営やベ

ンチャーマインドに関する教育も重要な事項としてあげられる。

本学では、平成3(1991)年に地域共同研究開発センター（CRC)、平成7(1995)年にベンチャービジネスラボラトリ(VBL)がともに常盤キャンパスに設置された。平成9(1997)年に大学院理工学研究科・CRC・VBL共同で大学院特別講義・社会人特別講座「ベンチャービジネス特論」を開始したことを皮切りに、平成12(2000)年度経済産業省より「先導的起業家育成システム実証事業」を受託した。平成14(2002)年には、大学院理工学研究科で「MOT教育プログラム」を開始し、現在も多くの院生が受講している。平成21(2009)年、「オープンイノベーション実践教育プログラム」に関する概算要求が認められ、専門技術教育プログラムの開発を行なっている。

このMOT教育を横串とする教育プロジェクトで開発された講義は、博士前期課程院生のコースカリキュラムとして実施されている。

理学系と工学系の教員で構成される理工学研究科は、研究や教育を通して、山口大学の活力を支えてきた。その活力は、21世紀半ばの18歳人口の減少に伴うであろう大学の再編や新たな教育研究分野の開拓にも有効に働くことが期待される。

3-6 | 農学研究科

昭和34(1959)年	農学専攻科を設置（農学専攻、獣医学専攻）
昭和44(1969)年	大学院農学研究科を新設（農学専攻、獣医学専攻）
昭和46(1971)年	農芸化学専攻を新設
平成 2 (1990)年	連合獣医学研究科の設置に伴い獣医学専攻を廃止
平成 7 (1995)年	農学研究科改編　農学専攻及び農芸化学専攻を生物資源科学専攻に統合
平成12(2000)年	生物資源科学専攻に「外国人留学生特別コース」を新設
平成18(2006)年	学科構成に合わせ、２つの研究分野に変更
平成19(2007)年	「外国人留学生特別コース」を廃止 「留学生のための生物資源科学特別プログラム」を新設

変遷と現況

大学院農学研究科の前身は昭和34(1959)年に設置された農学専攻科である。その後、昭和44(1969)年に「農学」および「獣医学」の2専攻で農学研究科修士課程が設置され、昭和46(1971)年に「農芸化学」専攻が加わり3専攻となった。平成2(1990)年には「獣医学」専攻が廃止され、平成7(1995)年に「農学」専攻および「農芸化学」専攻の改組により「生物資源科学専攻」として統合された。この間の変遷に関しては、平成11年に編纂された山口大学50周年記念誌(通史)に詳しい。

平成13年度に生物資源科学科が2学科に分かれたことから、平成18年度より生物資源科学専攻に「生物資源環境科学」、「生物機能科学」の2つの教育研究分野が置かれた。ここでは、農学と生命科学に関する応用的な教育研究を行うことにより、広範な基礎学力に基づく高度な専門的知識と能力を備え、食料生産と

環境問題に関わる諸問題の解決に寄与する科学者、技術者の養成を目指している。

また、平成 18 年度に 5 名の教員が農学部から大学院医学系研究科に移行し、農学研究科の担当教員は平成 26 年 4 月現在、28 名となっている。なお、学生定員は一学年 34 名である。

農学研究科では、修士論文は、主査 1 名、副査 2 名以上の複数の教員で多面的かつ総合的に審査する体制をとっている。なお、平成 22 年 12 月より、教授だけでなく、実質的な指導者である准教授、講師、助教も主査になれるよう、取扱要領を変更し、指導の実質化・効率化に努めている。

留学生に関するプログラムとしては、平成 12 年より「外国人留学生特別コース」を設置していたが、平成 19 年からは、この「特別コース」に代えて、生物資源科学に関する高度の教育・研究指導を英語で行う「留学生のための生物資源科学特別プログラム」を設置している。毎年、このプログラムを利用する学生がおり、国際的な教育環境の構築に役立っている。

生物資源環境科学特別講義、生物機能科学特別講義では、外部の専門家を非常勤講師として招へいし、最先端の研究に触れる機会を提供している。また、活発な教員の研究活動を基盤として、学生自身の研究発表の機会も積極的に提供している。その結果、毎年、関連学会等において、学生の研究発表に対する受賞が報告されるなど、高い教育効果が表れている。

3-7 | 東アジア研究科

平成 13(2001)年	大学院東アジア研究科を設置
平成 16(2004)年	東アジアコラボ研究推進体の設立
平成 25(2013)年	学生所属コースの改編及び「アジア公共管理コース」の新設

1　教員組織の変容

東アジア研究科は、平成 13 年 4 月に設置された後期 3 年博士課程の「独立研究科」であり、基幹講座の「比較文化講座」及び「社会動態講座」、協力講座の「社会システム分析講座」、連携講座の「東アジア経済講座」で構成されている。

設置計画において、「比較文化講座」及び「社会動態講座」は教育研究の中心として、本研究科の基幹をなし、「社会システム分析講座」は分析・解決能力の強化、「東アジア経済講座」は連携方式による教育研究能力の向上を目指していた。

このため「社会システム分析講座」は、理工学の分野で展開されているシステム的分析を学び、東アジアに生起する諸問題を解明・解決するための分析視覚及び分析手法を獲得させるために、理学部及び工学部から各 1 名の教員で構成されていた。「東アジア経済講座」は、「日本貿易振興会アジア経済研究所」との機関連携により、海外現地での研修、ケース・スタディ等の実践的能力向上を目指す教育を強力に展開することや、また、中国復旦大学との外国人研究者による教育研究交流についても計画していた。

平成24年度の教員組織の現状は、「比較文化講座」は人文学部教員14名(専任教員2名を含む)、「社会動態講座」は経済学部教員19名(専任教員2名を含む)、「社会システム分析講座」は教育学部教員10名及び理工学研究科教員1名となっている。「日本貿易振興会アジア経済研究所」との機関連携は、非常勤講師の派遣を得、客員教授の称号を授与している。また、外国人研究員については、長期間の滞在が困難な場合が多く、また、海外機関に対する需要が変わってきたことから、中国復旦大学に限らず、短期間(2〜3ヶ月)の派遣により、年間2〜3名を受け入れている。

東アジア研究科・経済学研究科棟

2　教育課程の特徴

東アジア研究科の修了要件は、「特別研究」6単位、「基盤演習」2単位、「プロジェクト演習」2単位、「特別講義」2単位の合計12単位以上修得することとしている。

「基盤演習」と「プロジェクト演習」は、5〜6名以上の複数教員による学生の研究内容を検討するジョイントセミナー形式の授業である。「特別講義」は、特定領域に関する深い知識や理解の涵養を目指すためのものである。なお、「特別講義」には、主に外国人研究員によって行われるものを毎年度開講しており、広く学生に履修するよう、指導している。

3　コース制の導入と変遷

東アジア研究科の設置計画にあたり留意した事項の一つに、入学者が持つ研究課題及び修了後の進路に応じたコース制を採用することであった。設置当初は、「東アジア比較文化コース」、「東アジア開発政策コース」、「東アジア企業経営コース」を設置した。その後、学生の需要に応えるためコース編成を見直し、平成19年度から、「東アジア比較文化コース」、「東アジア経済・経営・法律コース」、「東アジア教育開発コース」に再編した。平成25年度には、東南アジアからの入学生の実態にも合わせて、コース名から「東」を削除した。さらに「アジア公共管理コース」を設置した。

4　研究内容と成果公表

東アジア研究科では研究成果の公表を、5年プロジェクト、プロジェクト研究、研究誌「東アジア研究」、著作物、国際学術フォーラム、シンポジウム、学術講演会等の多様な方法で行っている。

(1)5年プロジェクト及びプロジェクト研究

「東アジアプロジェクト研究」は、当初「5年プロジェクト」という名称で、平成13年度から平成17年度まで、「10年間でユニークでハイレベルな博士課程として国際的評価を確立する。」ことを目標に、研究を展開した。「5年プロジェクト」では、研究費を5年間措置すること原則とし、毎年度、海外での現地調査を継続的に実施し、学生に現地調査の支援をさせたことから、教育と研究の一体化を図り教育効果が向上するなどの成果を得た。

平成23年度から研究体制を見直し、東アジア研究科に所属しない教員のプロジェクトへの参加を認め、「プログラム研究(個人研究)」を新設し、「プロジェクト研究(共同研究)」とともに研究を推進するよう研究体制を見直した。それまでの6つのプロジェクト研究の精選を行い、4プロジェクトとすることで、多角的な研究の推進を目指している。プロジェクト研究は、3年を目途に成果を取りまとめること、プログラム研究ついても、研究成果の公表を求めることとしている。

(2)研究誌「東アジア研究」

東アジア研究科は、東アジアに関する教育研究活動を支援・促進し、研究成果の発表の場を設け、学術研究の促進・交流をはかるため、学術研究誌「東アジア研究」を年1回発行している。「東アジア研究」に投稿する者は、東アジア研究科に所属する教員の推薦を必要としており、平成14(2002)年12月に第1号を発行以来、平成26(2014)年3月で12号を数える。

(3)著作物

平成22(2010)年3月30日『台湾の都市高齢化と社会意識』(三浦典子編著)溪水社

平成24(2012)年7月25日『東アジアの格差社会』(横田伸子・塚田広人編著)御茶の水書房

平成26(2014)年3月25日『教育におけるグローバル化と伝統文化』(福田隆眞・石井由理編集責任)建帛社

(4)東アジア国際学術フォーラム

・「教育におけるグローバル化と伝統文化」(平成24年12月1日)
・「東アジアにおける格差拡大と諸問題」(平成22年12月11日)
・「東アジア伝統芸能の世界」(平成20年11月15日)
・「中国内陸部の地域開発戦略」(平成19年2月15、17日)

(5)シンポジウム

・日中人材育成国際シンポジウム「中国西部開発の課題と人材育成―貴州省を中心として―」(平成18年2月21日)
・東アジア国際市民シンポジウム「地域から男女共同参画の推進を―アジアとの連帯を求めて―」(平成18年2月22日)

(6)東アジア学術講演会

学術講演会は、第1回「ワークライフバランス社会－個人が主役の働き方－を求めて」(平成21年10月20日)から始め、現在までに、第21回の「Moving Object Tracking for Virtual Human Interface: Problem-Based Implementation」(平成25年11月26日)を継続している。

(7)重点連携大学とのプロジェクト

山口大学と連携している梨花女子大学校と平成26年3月1日に「非正規労働者と貧困問題」をテーマとして日韓フォーラムを開催した。

論文発表会

3-8 技術経営研究科

平成 9（1997）年	理工学研究科・CRC・VBLの共同で大学院特別講義・社会人特別講座「ベンチャービジネス特論」を開設
平成 14（2002）年	理工学研究科で「MOT教育プログラム」を開始
平成 17（2005）年	MOT専門職大学院を設置
平成 18（2006）年	北九州教室を開設
平成 19（2007）年	広島教室を開設
平成 20（2008）年	MOT協議会会長校、「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム～MOT教育コア・カリキュラムの開発」（文部科学省）を実施
平成 22（2010）年	福岡教室を開設、北九州教室を閉鎖
平成 23（2011）年	広島教室を移転
平成 25（2013）年	宇部教室で秋入学・全科目英語講義を開始

設立と発展

山口大学は共同研究を中心に産学連携分野で技術の事業化に積極的に取り組んできた経緯があり、全国的にも実績を有していた。こうした取り組みの延長線上にMOT（Management of Technology）人材育成の必要性が浮上し、当時の工学部長がリーダーシップを取り、MOT教育の推進が図られることになった。平成 14（2002）年頃から理工学研究科の若手教員が本格的に動き始め、学生向けの講座を開講し、理工学研究科のMOT専門職プログラムの準備を進めて需要開拓や体制整備を行った。さらに、経済産業省の教育プログラム開発事業を平成 15（2003）年度と平成 16（2004）年度に受託し、プログラムの整備を進めて、開講準備を整えた。平成 16（2004）年に大学院技術経営研究科（専門職大学院）の設置が認可され、平成 17（2005）年山口大学大学院技術経営研究科が設置されることになった。

技術経営研究科では、ビジネスとテクノロジーの総合的マネジメントを学び、将来のイノベーションを目指す企業におけるMOT人材の育成を目標とした。募集定員は 15 名で、その多くは西日本を中心とした企業の経営者や企業人、行政関係者などの構成であった。専任教員は 12 名であり、経営系と工学系が 6 名ずつ、バックグランドではアカデミックと産業界で 6 名ずつというバランスのとれた構成をとり、産業界出身者は企業において経営、研究開発、特許取得などの経験が豊富な教員であった。また、MOT教育の標準化のために本研究科が中心となってMOT協議会の場でMOTコア・カリキュラムを制定した。本研究科は、全国MOT大学院に率先して質保証に向けた取り組みを実施し、全国のMOT専門職大学院のカリキュラム編成の手本となった。一方、近年の日本企業の生産拠点・研究開発拠点の海外展開から人材の国際的流動性が今後飛躍的に高くなることが予想され、こうした動きに対応した社会人教育のため、教育内容の標準化をグローバルに推進し、本研究科のMOT教育を国際的に実践するためにアジア諸国へ海外拠点を展開する動きを行った。

本研究科は、地域経済の自立的発展と連鎖的イノベーションの創出を駆動できる人材の

育成と、特にアジアを中心とした世界市場において活躍するために必要な能力を修得できる教育体制とプログラムを構築することを目標にして活動を続けていく。

授業風景

常盤キャンバス大学院技術経営研究科棟

国際会議

3-9 連合獣医学研究科

平成 2（1990）年	鳥取大学、宮崎大学、鹿児島大学及び山口大学の４大学の連合により連合獣医学研究科を設置
平成 22（2010）年	宮崎大学を除く、３大学の連合となる

あゆみ

本研究科は、「獣医学に関する高度な専門的能力と豊かな学識を備え、かつ、柔軟な思考力で活躍できる専門的職業人と広い視野を持って、社会の多様な方面、独創的な研究をなし得る自立した研究者、豊かな人間性を有するオピニオンリーダーを養成することにより、学術の進歩及び社会の発展に寄与する」ことをミッションとして、平成 2（1990）年に標準修了年限 4 年の博士課程の独立研究科として、山口大学に設置された。

設置時の構成大学は、鳥取大学、宮崎大学、鹿児島大学及び山口大学だったが、平成 22（2010）年 4 月に宮崎大学は新しい道を歩むこととなり、現在の構成大学は鳥取大学、鹿児島大学及び山口大学となった。既存の設置形態は維持したまま連合編成され、各大学の密接な連携協力のもとに運営されている。

その間、平成 20（2008）年 5 月に（独）農業生物資源研究所、平成 22（2010）年 3 月に（独）農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所、平成 25（2013）年 5 月に国立感染研究所および日本中央競馬会競走馬総合研究所との連携協力により、教育研究交流活動の活性化が図られることとなった。沿革も立地条件も特色も異なる 3 大学ならびに 4 連携研究機関が一つの独立した研究科を創設したことで、これらの特色を十二分に活用し、単一の大学や研究機関では達成できない多彩な研究テーマを擁することが可能となり、研究分野のより自由な選択を可能にし、学生の多様な志向に適切に応えると共に、同時に社会のニーズに柔軟に応え得る人材を養成する体制が整った。

獣医学は、基礎から応用、さらには臨床分野までカバーする「個の生物学」として完結した学問体系を有しているので、多種多様な研究テーマの設定は必然の結果であり、実際、これまでに輩出した獣医学博士達（課程博士として 98 名の留学生を含む 317 名、論文博士として 48 名の計 365 名、平成 25（2013）年 4 月現在）は国内外の幅広い分野で活躍している。

現在でも、参加教員 90 名と留学生 24 名を含む 91 名の院生が在籍している。

教育・研究

本研究科のミッションを推し進めるために、さらなる「研究の高度化」、「教育の実質化」が必要不可欠である。研究の高度化に向けて、平成 24 年 4 月に本研究科棟において、横断的な研究拠点として、動物感染症国際研究拠点とトランスレーショナルリサーチ拠点を設置し、各研究拠点に 2～3 プロジェクトを立ち上げ、これらを核として、外部研究資金の獲得を目指している。

さらに多くの研究機関との連携も模索しており、在野からの専門的知識の獲得のために客員教員制度も創設した。現在、国際交流委員会を新たに組織し、海外の大学院との共同教育課程の設置も鋭意努力をしているところである。

教育の実質化に向けて、平成 23（2011）年 4 月から、研究科長裁量経費により、毎年 5～6 名の院生の国際学会発表の援助を実施し、さらに台湾中興大学への短期派遣も実施してい

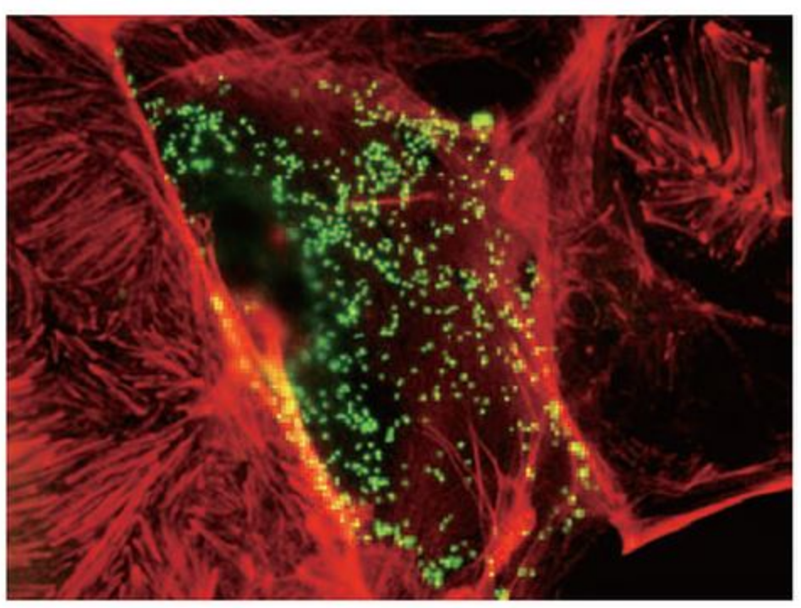
る。また、国際シンポジウムも企画し、平成 23 年度は台湾中興大学にて、中興大学-ソウル大学-本研究科の合同国際シンポジウム、平成 24 年度は東京にて、これに岐阜連合獣医学研究科を加えて、4 大学の合同シンポジウムを開催した。

これらはいずれも院生のコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を養成する目的で開催された。

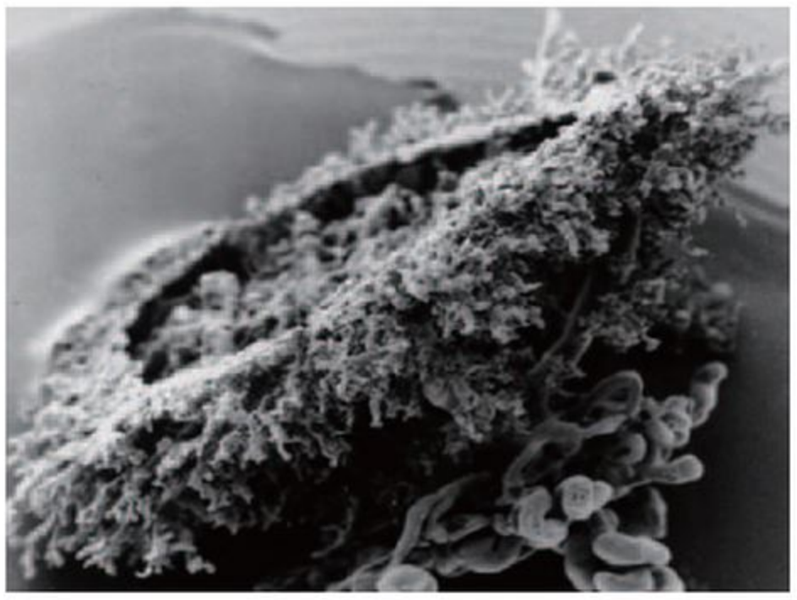
社会への貢献のため、本研究科の広報誌やHPの充実を通して、絶え間ない情報発信を図っている。

平成 25 年度春季学位授与式

タカサゴキララマダニ。
SFTSウイルス、紅斑熱群リケッチアなどを保有している



栄養膜巨細胞(赤色)内で増殖するリステリア(緑色)



マウス胎盤の母体側血管鋳型標本

3-10 連合農学研究科

平成 元（1989）年	鳥取大学、島根大学及び山口大学の３大学の連合により鳥取大学大学院連合農学研究科を設置
平成 21（2009）年	国際乾燥地科学専攻を新設

変遷と現況

鳥取大学大学院連合農学研究科は、平成元（1989）年に、鳥取大学、島根大学、山口大学の各大学院農学系研究科（修士課程）の教員組織、研究設備及び施設を連合して、一大学のみでは成し得ない多彩かつ専門性の高い教育研究分野を組織し、高度な農学系の大学院博士課程の教育研究体制を作ることを目的に設置された。教員組織は、各大学の農学系研究科修士課程を担当する教員のうち、主指導教員または副指導教員として博士課程を担当する資格を有する教授、准教授、講師および助教により構成される。

当初は、生物生産科学専攻、生物環境科学専攻、生物資源科学専攻の 3 専攻であったが、その後、平成 21（2009）年に国際乾燥地科学専攻を加え、優れた専門的能力と豊かな学識を備えた研究者・技術者を養成し、我が国の学術研究の進歩と生物関連諸産業の発展に寄与することをめざしている。

山口大学農学部の教員は、それぞれの教育研究分野に応じた各専攻に所属し、山口大学に配属された学生の主指導教員として博士号取得に向けた研究指導にあたるとともに、他大学に配属されている学生の副指導教員としても学生の指導を行っている。なお、平成元（1989）年の発足から平成 24（2012）年度までの間に、山口大学に配属され課程博士号を取得した者は、118 名にのぼり、山口大学の教員が主査となって輩出された論文博士は、15 名を数える。また、連合農学研究科では、産業社会人に対する教育にも力を入れており、社会人学生も積極的に受け入れている。

さらに、連合農学研究科は、近年急増しつつある外国人学生、特に発展途上国からの留学希望者についても精力的に受入れに応じ、それぞれの母国の発展に寄与する人材の育成に尽力している。平成 24 年度までの学位取得者の約 6 割が留学生であり、留学生特別プログラムを設置するなど、修士課程から博士課程に至る連続的な教育の試みの成果が蓄積されてきている。

4 全学教育研究施設等

4-1 大学教育機構

平成 8（1996）年	教養部廃止に伴い、共通教育センターを設置
平成 13（2001）年	大学教育機構発足 （共通教育センター、アドミッションセンターの２センター）
平成 14（2002）年	大学教育機構を組織再編 （大学教育センター、アドミッションセンター、学生支援センター、留学生センターの４センター）
平成 15（2003）年	エクステンションセンターを新設し、保健管理センターを編入して、６センターとなる
平成 20（2008）年	組織改組によりエクステンションセンターを所属替

【大学教育機構】

平成 13（2001）年、共通教育センターとアドミッションセンターの 2 センターで、「大学教育機構」が組織された。また、平成 14（2002）年、学生の入学から卒業までを総合的にケアするため、共通教育センターを大学教育センターに改称するとともに、学生支援センター、留学生センターの 2 センターを加え、4 センターに再編された。さらに、平成 15 年には、保健管理センター、エクステンションセンターが加わり、6 センターが協調的、一体的に活動することとなった。

以降、各センターにおいては名称変更等が行われたが、大学教育機構発足時の各センターの主たる業務を受け継ぐかたちで変更が行われただけである。しかし、エクステンションセンターは平成 20（2008）年 4 月に組織変更が行われ、大学教育機構から外れることとなった。現在、大学教育機構は、エクステンションセンターを除く 5 つのセンターで組織されている。

大学教育センター

山口大学は、平成 8（1996）年の教養部改組を機に共通教育センターを学内措置で設置した。同センターは、平成 14（2002）年 4 月に文部科学省の省令施設として「大学教育センター」に名称を改め、専任教員を置く全学教育研究施設に生まれ変わった。設置の目的は本学の教育活動の充実発展に寄与することであり、共通教育・専門教育を体系的に捉えた教育システムを実施するための教育企画・実施部と、授業評価・FD等の企画・実施を行うための教育評価部を置いている。

本学では、学生の英語コミュニケーション能

全学FD講演会

力を高めるため、平成14(2002)年からTOEIC利用・準拠の英語教育を導入した。この試みは高く評価され、「TOEICを活用した英語カリキュラム」として平成16(2004)年度の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に選ばれた。また、大学が教育活動の成果を通じて学生に保証する最低限の基本的な資質をグラデュエーション・ポリシーという形で記述し、このポリシーと各授業の到達目標との整合性をマトリックス表で示したカリキュラムマップを平成18(2006)年度に策定して、全学的なカリキュラム改善を推進している。この試みも高く評価され、「目標達成型大学教育改善プログラム」として平成20(2008)年度の文部科学省教育GPに選ばれた。

それ以外にも、①修学支援システム、出席確認システム、授業評価システム、成績分布共有システム等の構築と管理運営、②FD研修会の開催、③学生授業評価および教員授業自己評価の実施などの取組を行っている。

アドミッションセンター

アドミッションセンターは、AO入試を導入するために設置が決定され、平成13(2001)年4月にセンター長、専任教員3名で組織された。設置の経緯はAO入試の実施のためであったが、センターの目的は設立当初からAO入試の実施に関わるだけでなく、大学全体の入学者選抜業務に係る企画・広報・実施等の業務を行い、入学者選抜方法の改善等について調査研究を行うことにより、教育研究の充実発展に寄与することが掲げられた。

センターは目的の遂行のため、主としてAO入試の企画・実施、アドミッション・ポリシーに基づいた入学者選抜の実施、アドミッション・ポリシーの理解深化を図るための広報活動、入学者選抜方法改善のための入学者の追跡調査、高等学校及び学部に対するヒアリング等の業務を行ってきた。また、平成22(2010)年度にはAO入試の総括を行い、『山口大学AO入試10カ年総括報告書』を発行した。

平成25(2013)年4月現在、センター長は第7代であり、専任教員2名が配置されている。専任教員は、平成19(2007)年10月から1名減、平成21(2009)年4月からさらに1名減となった。平成22(2010)年4月に1名増となり、現在に至っている。スタッフの異動もあり、人員減ではあるが、業務において堅持すべきことは堅持し、センターの目的の遂行に努めている。

高校教諭対象の山口大学入試説明

学生支援センター

平成14(2002)年4月、大学教育機構の組織再編とともに、学生支援センターが発足した。

学生支援センターは、『学生の視点に立って』を理念に掲げ、学生の進路・就学・心理相談などに対応する「学生相談部」、課外活動の支援・学生の生活支援・指導を行う「学生生活支援部」および学生の就職支援・就職情報の提供を行う「就職支援部」の3部で構成し、学生に対する正課外教育・指導の充実やサービス機能の向上に努める機関である。発足にともなって専任の教員2名が配置され、全学的にキャリア教育や学生支援の戦略的研究を行い、実施していく体制がとられた。

平成17(2005)年文部科学省「特色ある大学教育支援プロジェクト」に採択された「山口大学おもしろプロジェクト」の活性化を目的として、平成18(2006)年4月、センター内に「自主活動ルーム」が設置され、ボランティア活動団体等の学生への紹介やおもしろプロジェクトの管理、運営が図られている。おもしろプロジェクト

おもしろプロジェクト　コードオレンジ(主に医学部の学生からなるAEDなどの啓蒙に努めるプロジェクト)の活動風景

については、毎年度10あまりのプロジェクトが採択され、活動を行っており、ユニークな取り組みとして対外的にも評価が高い。また、ボランティア活動団体等の紹介は、学生支援センターを主体として団体審査をおこなうシステムが導入され、学生に安全かつ教育的効果の高いボランティア活動情報を提供している。

「学生相談所」は、吉田地区、常盤地区に臨床心理士をカウンセラーとして常駐させ、学生の修学や交遊関係など様々な悩み事相談を随時受け付けている。なお、学生生活に関する様々なトラブルの相談に対応するものとして、「学生生活なんでも相談窓口」を設け、学生支援課職員による対応がなされている。

就職支援に関しては、キャリアカウンセラー・就職アドバイザーによる相談体制をとり、一人ひとりの状況に応じたきめ細やかな就職活動の支援に力をいれている。また、正課内外のキャリア教育の充実に学生支援センターは積極的に取り組んでいる。センター専任教員によるキャリア教育科目の実施や、学内業界・企業研究会の開催などである。平成21(2009)年に設立された山口県インターンシップ推進協議会の運営に積極的にかかわることで、地域のキャリア教育の拡充にも貢献している。

保健管理センター

昭和45(1970)年4月学長直属の組織として、本部保健管理センターが、医師2名・看護師2名の4名体制で、事務局1号館1階に設置された。平成15(2003)年4月、大学教育機構内の1センターとして改組され、その後、平成16(2004)年に労働安全衛生法に対応するために、3キャンパス全てに医師・保健師を配置する体制ができあがった。徐々にスタッフも増員され、平成19(2007)年に現在の医師4名・保健師5名・看護師3名の12名体制となった。医師、保健師、看護師が協力し合って、機能良く運営されている。

主な活動内容は、①健康診断の実施とその結果に基づく健康管理・健康増進支援、②心身の健康相談・支援、③産業衛生活動の3つである。諸種の健康診断はほぼ一年を通して行っており、“受診率100%”達成を目指している。また、学内の主たる行事では、安全を期するために事前に各種の安全講習会を実施している。教育面では、学生・教職員に対して心身の健康に関する啓発活動を行い、また関連領域の共通教育を担当している。学生の各サークルには、事故防止のための対策や緊急時における対応の指導を行っている。

研究活動面では、保健管理に関する学会・研究集会への参加、そして、学術誌に調査・研究による成果を継続的に発表・投稿している。

一方、社会貢献活動としては、山口大学が市民に提供している市民公開講座・開放授業・

学長杯争奪駅伝大会前救急講習会

救命体験コーナー

出前講義の一角を担当している。今後の課題としては、結核・麻疹・風疹・(新型)インフルエンザなど、感染症予防・対策や、学習障がい・不登校問題など、学生の修学中断を防止する上での修学支援、教職員のメンタル不調への対応の充実が求められる。

留学生センター

山口大学留学生センターは、留学生と地元地域との交流のフェイズは、留学生を外国からのお客様と捉える時代から日本社会の発展に必要不可欠な人材と捉える時代に移行してきていると考える。そこで留学生支援への全体認識を「ビジターからパートナーへ」のキャッチフレーズのもとに、留学生支援の力点を留学生の就職支援体制の構築におき、山口県内の他の高等教育機関、地方自治体、地元経済団体、地元企業の協力を得つつ、努力を重ねてきた。以下は、山口大学留学生センターの留学生就職支援の3本柱である。

1. 留学生就職支援フェスタ・イン・山口(年1回開催)
2. 留学生のための日本企業文化理解講座(後期15回授業、2単位)
3. ビジネス日本語の授業

「留学生就職支援フェスタ・イン・山口」では、各企業のプレゼンテーションに加えて、個別面談もあり、このフェスタを通して就職内定を勝ち取る留学生も増えている。なお、「大学コンソーシアムやまぐち」の協力により、県内の他大学の留学生も参加できる。

「留学生のための日本企業文化理解講座」には、企業の最前線で活躍中の企業人(13業種)から肌で日本の企業文化を学ぶことができる。加えて、日本での企業活動をスムースに行うための「ビジネス日本語」のクラスを他大学に先駆けて開講している。

もちろん、山口大学留学生センターでは、平成14(2002)年度の設置以来、留学生の日本語教育の充実に努め、学習指導のみならず、多様な国や地域から来ている学生の生活指導も行っている。平成21(2009)年度からは、4週間日本語・日本文化サマープログラムを開催し、協定校を中心に毎年約40名の学生を海外から受け入れ、山口の文化に触れる機会を設けている。

また、留学に興味のある学生の海外留学を促進するため、留学経験者の体験談を含めた説明会を実施している。語学研修をはじめ、中国山東大学、韓国公州大学校との三大学交流プログラムに、参加を希望する学生が年々増加する傾向にある。

留学生センターは、こうした活動を通じて留学生交流を推進している。また、この取り組み姿勢が評価され、平成24(2012)年度文部科学省留学生交流拠点整備事業の委託を受ける全国7大学の一つに選出され、平成25(2013)年度も全国10大学の一つに選出されている。

留学生就職支援フェスタ・イン山口

4-2 大学研究推進機構

平成 14(2002)年	産学公連携創業支援機構発足
平成 20(2008)年	産学公連携・イノベーション推進機構に改称
平成 24(2012)年	大学研究推進機構として組織改組 (研究推進戦略部、総合科学実験センター、知的財産センター及び産学公連携センターの１部３センター)

【大学研究推進機構】

山口大学の研究推進・産学連携を担う部局として、平成 24(2012)年 4 月に新機構として発足した。

従来、理系学部の研究支援を中心とする印象の強かった「産学公連携・イノベーション推進機構」を改組し、総合科学実験センターと融合する形で「大学研究推進機構」として再出発した。当面、文系学部を含む大学全体の研究力強化を目的として、各教員の支援体制の確立に努めている。すなわち、研究の入口から出口までを支援する体制として、1)産学公連携センター、2)知的財産センター、3)総合科学実験センター、及び 4)研究推進戦略部の 3 センター・1 部を整備した。

研究推進戦略部は大学全体の研究推進のための企画・実践機能を担い、その中に大学リサーチ・アドミニストレータ(URA)室を設置している。以下、各センター及び研究推進戦略部(URA室)について概説する。

産学公連携センター

「大学の研究シーズを活かし、地域企業を含めた産及び、各種公的機関との連携で、地域発のイノベーションを山口県から起こす」ための支援を本センターは行っている。

前身は、「山口大学地域共同研究開発センター」であり、開設以来、約 20 年の歴史を経てきた。その間、大学が果たすべき役割の変化に伴い、センターの機能強化を反映した名称変更や組織変更を行い、現在に至っている。

本センターの業務は、主に以下のような内容である。

(1)企業ニーズの聞き取り及び研究シーズとのマッチング

(2)研究者シーズの外部発信と技術移転のサポート

(3)研究体の組織編成サポート

(4)事業化等に向けた研究開発の資金調達支援

(5)産学公連携型コンソーシアム形成による商品開発支援

(6)大学発ベンチャーの起業支援

このような活動を通じて、年間約 300 件、金額ベースでは、総額 9 億円超の共同研究、受託研究を大学にもたらしている。この他、文部科学省知的クラスター創成事業等、大型研究プロジェクトにおいて、本学が中核研究機関として参画する際の支援なども行っている。また、第一次産業の活性化を目指し、各自治体等との連携による地域産品のブランド化支援などにも、最近取り組んでいる。

本センターの活動は、従来型産学公連携の枠組みを超えた深化と拡大の方向に進んでいる。大学研究者の研究揺籃期から最終出口まで、研究の「種まき」から「刈り取り、落ち穂拾い」までの各プロセスに対する支援活動を進めている。これには、専任教員、知的財産センタースタッフ、産学連携コーディネーターによる支援だけでなく、平成 24(2012)年度から設置された

URA（大学リサーチ・アドミニストレータ）室のURAとの連携も重要であり、本センターとURA室との連携強化によるシームレスな研究支援体制を整備拡充し、研究者に提供することが、今後の大きな使命となる。

知的財産センター

山口大学は、「本学の知的財産が社会に広く活用されることを通じて大学の社会貢献を推進する」基本理念を実現するため、平成15(2003)年度文科省大学知財整備事業に採択され、本格的に知財整備活動を開始した。事業終了後も、知財活動を更に機能充実・強化し、平成24(2012)年度には知財教育部門を加えた「知的財産センター」として再編成した。本センターの取組みは以下の通りである。

(1)研究成果の権利化推進とその強化の取組み

本センターの最大の使命は、教職員による研究成果を円滑に社会へ還元するための知的財産権化である。そのため、研究成果を大学として出願、審査請求等するか否か、教員の意向、大学の戦略や知財ポリシーを踏まえ、適宜・的確に判断し、権利化を推進している。更に強い特許を創出するため、外部の有識者も加えた「知財審査員会」を毎月開催し、案件を吟味している。

(2)学内知財啓発活動の推進

特許で重要な検索スキル学習のため、各キャンパスで定期的に講習会を開催し、一定のレベルに達した学生を「特許情報検索インストラクター」に認定している。彼らを要請のあった研究室へ派遣し、教員への知財支援を行うとともに、学生自身の実践的知財教育に繋げている。その他、知財啓発用に「知的財産教本」「大学と技術移転機関のための知財契約マニュアル」「研究ノート」等を発刊、配布している。

(3)山大独自で構築した特許情報検索システム「YUPASS」の有効活用

特許庁と同規模の検索システム「YUPASS」を本学で構築し、本学の研究者、学生等がどこからでも、24時間自由にアクセスできる体制により、研究者支援や知財授業、検索講習会等に供している。

(4)文系・理系全学生への知財教育への取組み

今や、企業等で事業戦略を立てる際に知財は欠かせない。これまで理系中心に行ってきた知財教育を、文系・理系を問わず全員に実施し、社会に役に立つ人材の輩出を目指している。

総合科学実験センター

総合科学実験センターは、山口大学の研究・教育をより活性化・高度化させるため、良質の研究教育支援の提供を主な目的とする。

現在の総合科学実験センターには、吉田地区に機器分析実験施設、実験動物施設、システム生物学・RI分析施設、排水処理施設、小串地区に生体分析実験施設、生命科学実験施設、RI実験施設、遺伝子実験施設の8施設がある。これらは平成15(2003)年度に、既存の学内の附属研究支援施設を統合して発足し、全学の研究支援の中核となってきた。さらに、平成24(2012)年度から大学研究推進機構に統合された。

新生の総合科学実験センターは、山口大学内での研究・教育支援をさらに充実するとともに、学外での研究教育支援を通して社会貢献にも責任を果たすことを目指している。そのために、科学・技術の発展に柔軟に対応できる効率的な支援・運営体制を構築し、信頼される技術・設備・サービスをすべての利用者に等しく供給するだけでなく、重点分野への積極的な支援を行っている。

【分析実験分野】

機器分析実験施設(吉田地区)：各種高性能大型装置を有し、各種機器分析を通して教

育及び研究に貢献しているほか、学外者の利用も可能である。

生体分析実験施設(小串地区):高い利用頻度が見込まれる高額機器を共同利用するため、機器使用と技術・研究の指導を行っている。

【生命科学分野】

実験用動物を集中管理することで、より良い環境で維持し、倫理的に良好で、かつ再現性のある動物実験が行える。

生命科学実験施設(小串地区):遺伝子組換え動物作出も可能な大規模施設。

実験動物施設(吉田地区):飼育管理全般からの教育を主体とする小規模施設。

【アイソトープ分野】

システム生物学・RI分析施設(吉田地区):DNAシーケンサなど生物学関連の共同利用機器を備え、放射性同位元素(RI)実験ができる。

RI実験施設(小串地区):RI実験のための共同利用設備を備え、放射線関連の講習や放射線実験に関する教育や支援を行っている。

【資源開発分野】

遺伝子実験施設(小串地区):遺伝子実験及び解析における技術支援を行うことを目的とし、遺伝子解析の受託や関連機器を含めた教育と支援を行っている。

【排水処理分野】

排水処理施設(吉田地区):全学の教育、研究活動等から発生する廃液の回収、排水の監視および水質検査、また環境保全に関する教育・広報活動を行っている。

研究推進戦略部(URA室)

平成24(2012)年4月の大学研究推進機構の発足に伴い、従来の産学連携支援の機能と研究推進支援の機能の統合を目指して、大学リサーチ・アドミニストレータ(URA)制度を整備した(同年6月)。URAは研究プロジェクト・メイクや外部資金獲得から、知財確保や産学連携の推進、そして科学技術イノベーション創出につながる幅広い研究支援を期待されている。

本学のURA室は、URA部門とURA支援事務部門からなり、事務部門との密接な連携により研究者の支援をきめ細かく実施する。

英文論文セミナー

研究サロン

4-3 大学情報機構

昭和 24(1949)年	山口大学の設置に伴い、附属図書館を設置
昭和 39(1964)年	山口県立医科大学の国立移管に伴い、附属図書館医学部分館を設置
昭和 40(1965)年	電子計算機室を設置
昭和 45(1970)年	山口地区の附属図書館各分館を廃し、本館に統合
昭和 52(1977)年	埋蔵文化財資料館を設置
昭和 56(1981)年	省令化に伴い、情報処理センターを設置
昭和 57(1982)年	九州大学大型計算機センターと接続
平成 元 (1989)年	学術情報ネットワーク（SINET）に加入
平成 6 (1994)年	全学ネットワークの設置
平成 7 (1995)年	情報処理センターを総合情報処理センターに改称
平成 8 (1996)年	ATM（Asynchronous Transfer Mode）ネットワーク及びTV会議システムを導入
平成 13(2001)年	やまぐち情報スーパーネットワークに接続
平成 14(2002)年	総合情報処理センターをメディア基盤センターに改称
平成 15(2003)年	学術情報機構発足
平成 16(2004)年	法人化に伴い図書館事務部を学術情報部と改め事務局へ統合 附属図書館を図書館に、本館、医学部分館及び工学部分館をそれぞれ総合図書館、医学部図書館、工学部図書館に改称
平成 18(2006)年	学術情報機構から大学情報機構へ名称変更 学術情報部に情報化推進課を統合して情報環境部とし、1 部 3 課体制に改組
平成 20(2008)年	ISO/IEC27001 の認証を取得
平成 21(2009)年	図書系 2 課を統合し、学術情報課と情報推進課の 1 部 2 課体制に改組
平成 26(2014)年	総合図書館増築及び耐震改修

【大学情報機構】

大学情報機構は、平成 15(2003)年に「学術情報及び情報基盤を総合的に整備」する目的で法人化に先行して設置された学術情報機構が前身である。

学術情報機構は、図書館(国立大学法人化に伴い附属図書館から図書館へ改称)、メディア基盤センター及び埋蔵文化財資料館の 3 つからなる組織であり、学術情報基盤の基本計画策定及び施策実施上の調整等を業務として掲げ、各学部・研究科、学内共同教育研究施設等との相互連携の下、活動してきた。平成 16(2004)年 4 月の国立大学法人化に伴い、業務内容に「情報セキュリティの施策及び実施」を追加し、その後平成 18(2006)年 4 月の大学情報機構への改組が実施されたが、その構成や業務は基本的に引き継がれている。

機構の構成各組織は、創設以来本学の教育研究の基盤を支える共同利用施設として様々な活動を推進している。以下で「山口大学 50 周年記念誌」以降の主要な活動を概観する。

図書館

図書・雑誌等の学術資料を収集、整理及び提供する図書館には、大きく分けて「学習・教育支援」、「研究支援」、「社会貢献」の三つの機能がある。

学習・教育支援として、学生用図書、留学生用図書及びシラバス掲載図書等の充実に努めるとともに、情報ラウンジ(平成12年)やグループ学習室(平成14年)の設置、自動貸出返却装置導入(平成17～18年)、学生協働によるピアサポート実施(平成19年)、ジャパンナレッジ(百科事典・辞書などを集積した知識データベース)導入(平成23年)などを進めている。また、平成26(2014)年には、ラーニング・コモンズ等の新たな学習教育支援機能を備えた総合図書館の増築・改修工事が竣工した。

研究支援としては、Elsevier、Springer等の電子ジャーナルパッケージ、SciFinder、SCOPUS等のデータベースの導入を行うとともに、「山口大学所蔵学術資産継承検討委員会」の支援を得て貴重資料の修復・デジタル化などを実施している。

社会貢献として、昭和62(1987)年から実施している一般市民への公開を促進するとともに、本学研究者の論文等の学術研究成果を収集・蓄積・保存し、インターネットを通じて無償で全世界に発信する山口大学学術機関リポジトリ(YUNOCA)のサービスを平成17(2005)年度から開始している。このほか、平成17年に山口県立山口図書館並びに山口県立大学附属図書館と、平成22年に宇部市立図書館と、平成24年に萩市立図書館との間で相互協力協定を締結し、地域との連携を進めている。

ラーニング・コモンズ

メディア基盤センター

ネットワーク・サーバ・PC等の情報処理資源及びサービスを提供する学内共同教育研究施設であるメディア基盤センターは、平成11(1999)年7月にSINETのノード校となり、全国学術情報ネットワークの山口地区中核になったのを皮切りに平成13(2001)年7月「やまぐち情報スーパーネットワーク」と接続、同年9月学内ギガビットネットワークを導入、平成23(2011)年Wi-Fi環境を増強整備するなど、学内情報基盤整備及び県域の情報環境整備を推進している。

また、平成11(1999)年3月から遠隔講義システムの導入を進め、3キャンパス間の遠隔講義を支援しているほか、平成24(2012)年度から鹿児島大学との間で共同獣医学部における遠隔講義実施を支援している。

大学全体のリスク管理の一環として、情報セキュリティ管理を先導的に推進しており、平成20(2008)年10月に国立大学では全国で3番目にISO/IEC27001の認証を取得した。平成23(2011)年には学内事務システムの維持管理を担う情報環境部情報推進課が管理するサーバ室、平成25(2013)年には学生支援部教育支援課の一部に適用範囲を拡大している。同年3月には、吉田・常盤地区間での多世代・地域間相互バックアップシステム及び緊急時における電力維持システムを導入し、事業継続性の強化をはかった。さらに平成26(2014)年3月に全学クラウドシステムを構築し、学内に点在する各種業務システムを集約するとともに、生成・蓄積されたデータのバックアップを実施している。

埋蔵文化財資料館

学内の埋蔵文化財の発掘調査及び出土品の収蔵・展示・調査研究を行う学内共同利用

施設である埋蔵文化財資料館は、「山口大学吉田遺跡調査団」（団長：力武一郎学長）の発掘調査成果の収蔵庫として設置された。

昭和54（1979）年に調査員（助手）1名が配置されて以後、調査団の活動を引き継ぎ、学内の埋蔵文化財の調査・研究業務を担当しており、平成25（2013）年度の調査実績は本発掘調査2件、予備発掘調査1件、工事立会10件である。また、資料館収蔵品のうち、山口県内遺跡より出土した考古資料の整理も推進しており、平成23（2011）年3月からは「見島ジーコンボ古墳群出土資料調査報告」を毎年刊行している。

さらに、一般市民からの資料館活動への理解を増進するため、公開授業「古代人の知恵に挑戦!－古代のお米をつくってみよう」を継続して実施している。

また、図書館と共同で県内の大学図書館・博物館に呼びかけ、平成24年3月にスタートした、山口県大学ML（ミュージアム・ライブラリー）連携特別展は、平成25年度には県内の9大学の図書館・博物館12館が、平成26（2014）年度には11大学15館が参加する展示企画に発展した。

埋蔵文化財資料館

学術資産継承事業

学術情報基盤の整備を使命とする大学情報機構の特色ある活動として「学術資産継承事業」を紹介する。

山口大学には前身校からの史資料を始め、貴重な学術資料が数多く収集されており、それらの資料群を適切な形態で保存し、将来に受け継いでいくことが大学に課せられた使命である。山口大学ではこれらの所蔵学術資料を資産として次世代に継承するため、平成17年に大学情報機構を中心に「山口大学所蔵学術資産継承事業」を実施することが承認された。

平成18（2006）年に大学情報機構長の下に各部局からの有識者で構成する「山口大学所蔵学術資産継承事業プロジェクト活動委員会」が設置された。同委員会では学内に散在している学術資料の状況を把握するための調査を実施し、「専門別、分野別のより実働的なワーキンググループを組織し、それぞれの専門的知見に即した目標設定や作業の優先順位付け、外部資金導入、地域連携の模索等の具体的プランニングと実働を行なえる体制づくりが重要である。」との提言を含む報告書を作成した。

これを受け、平成20（2008）年7月に「山口大学所蔵学術資産継承検討委員会」が全学委員会として設置され、事務を情報環境部学術情報課が担当する形で活動が開始された。

平成23（2011）年度からは同委員会の下に「文書・典籍専門部会」「博物・標本専門部会」の二つの実作業グループが組織され、さらに個別の資料の取扱いを検討実施するワーキンググループが設置された。各グループが活発に活動を継続し、修復・保存・展示等、資産継承事業の成果が着実に蓄積されている。

平成24年度から、当事業の成果を学内外に公開する「成果展」を開催しており、多数の来場者が訪れている。

学術資産継承検討委員会
事業報告会

4-4 時間学研究所

平成 12(2000)年	時間学研究所設置（時限付）
平成 22(2010)年	時限解除により常設研究所として位置付け

時間学研究所は、平成 12(2000)年 4 月に当時学長であった廣中平祐先生と時間生物学分野を中心とした学内研究グループにより学内措置として設置された。設置の意図は、時間という観点から研究者間の交流を図り、新たな学際領域を創造するとともに、研究成果の社会的な還元を行うことにあった。そのため、設置当初から文理融合による新しい研究領域を目指している点に特色がある。

研究所は平成 22(2010)年 4 月に時限が解除され、山口大学唯一の常設研究所として、第 2 期中期計画では時間学の学術領域としての確立をめざし国際拠点化を進めている。

研究所は、現在、教授 3 名、准教授 1 名、講師 1 名の専任教員に加え、所長および各種スタッフ合わせて 30 名のスタッフを有している。そして、平成 23(2011)年から提唱者の廣中先生を名誉所長にお迎えするとともに、研究をサポートする体制として 8 名の学外からの客員教授をお願いしている。

さらに、「社会的時間と人間的時間の調和の研究」、「生物に刻まれる時間と環境変遷に関する研究」、「多文化圏における時間表象の研究」、「時間に関する個別融合分野の研究」を研究テーマとした研究所専任教員と山口大学内の教員とで組織される 4 つの研究グループがある。

これらの研究テーマからもわかるように、参加研究者の学問分野は、生物学・医学・工学・物理学・心理学・哲学・社会学・経済学・文学・文化人類学など多岐にわたり、山口大学のすべての学部と深く関係している。また、研究所の運営を行うために、企画委員会、運営委員会が設置され、時間学公開講座、アフタヌーンセミナー、時間学国際シンポジウムなどを企画し時間学の普及に努めると同時に、複数の学部において研究所専任教員による教育活動も行っている。

時間学研究所の使命は、文系・理系の連携によって「時間学」という新しい学問を切り開き、時間を科学的合理性のみから解釈するだけではなく、その解釈により、人間的な生活を行うための時間を取り戻すことにある。そのために、持続可能な地球社会や人間社会を洞察し、文明論をも視野に入れた幅広い研究を行うことが極めて重要である。時間学研究所は、こうした地道な研究と、時代の要請する科学的な研究とを車の両輪として発展すると共に、研究成果を地域に還元していきたいと考えている。

山口の地は、近代社会に多大な影響を及ぼした機械時計が、フランシスコ・ザビエルにより我が国に最初に伝来した地でもある。不幸にして、大内氏に献上されたこの機械時計は、大内氏の滅亡と共に消失してしまったが、山口で時間の研究を開始し、機械時計ではない「新たな時の計測」を創始するのも意義深いと思う。

いずれにせよ、時間に関する研究の世界で唯一の「シンクタンク」を目指し、学内外を問わず、幅広く共同研究を進めていきたいと考えている。

4-5 | 大学評価室

平成 4 (1992)年	山口大学自己点検・評価委員会を設置
平成 13(2001)年	山口大学評価委員会に再編
平成 18(2006)年	国立大学法人山口大学評価委員会に再編 大学評価室を設置

本学における自己点検・評価の組織的な取組みの始まりは、平成 4(1992)年 9 月の「山口大学自己点検・評価委員会」の設置まで遡ることができる。その後、平成 13(2001)年 4 月の「山口大学評価委員会」へ再編(教育・研究・大学運営の 3 専門委員会体制)。そして、平成 16(2004)年 4 月の国立大学法人法の施行により、平成 18(2006)年 4 月に「国立大学法人山口大学評価委員会」へ再編。同時に、本法人の教育研究活動等の状況を点検･評価し、その結果の公表を行う組織として「大学評価室」が設置され、現在の体制に至っている。

この間の主な活動としては、自己点検・評価の基本方針の策定及び教員の個別活動に係る情報収集のためのWebシステム「山口大学自己点検評価システム(YUSE)」の開発を経て、平成 19(2007)・20(2008)年に、教員の自己点検活動として、「全般的活動評価」、「研究水準評価」及び「教育貢献度評価」を実施したこと、また、平成 21(2009)年に、学校教育法に基づく組織評価活動として、機関別(山口大学)及び専門職大学院(技術経営研究科)の各認証評価を受審したことが挙げられる。各認証評価においては、それぞれの認証評価機関より「評価基準を満たしている」との認定を受けている。さらに、第 2 期中期目標・計画期間(平成 22(2010)～27(2015)年)の前半期において、「YUSE」を発展的に解消するとともに、組織改善のPDCAサイクルの考え方を導入するために、新たに総合的な自己点検評価システムを構築し、運用を開始している。

大学評価室の現在の使命は、「大学活動の質の向上に資するために、自己点検・評価活動を継続的に実施するとともに、効率的な情報収集及び効果的な情報分析を推進し、さらには、社会への説明責任として、自己点検プロセスも含め評価情報を積極的に公開する」ことである。このための施策として、各種評価結果の公表のほか、機関誌「ニューズ･レター」の発刊や「活動白書」による大学活動の情報公開などを行っている。

4-6 地域連携推進センター

平成 15(2003)年	大学教育機構にエクステンションセンターを設置
平成 20(2008)年	大学教育機構から社会連携戦略本部に所属替
平成 25(2013)年	地域連携推進センターに改称

エクステンションセンターは、平成 15(2003)年 4 月、山口大学の地域貢献・社会貢献活動を組織的・総合的に推進するために設置された。設置時は大学教育機構を構成する 1 センターとして位置づけられ、センター開設半年後に 2 名の専任教員が着任して本格的な活動を開始した。

エクステンションセンターの目的は、センター規則で次のように規定された。

「教育における地域社会との多様な連携の推進及び各部局における社会連携活動の情報の集約を行い、もって国立大学法人山口大学の知的資源の地域社会での有効な活用を図り、地域社会の振興に資することを目的とする。」

具体的な業務としては、これまで各学部単位で行われていた公開講座の全学体制化と拡充、出前講義による高大連携の推進、開放授業の新規実施、中核技術者育成を目的とした特別講座の開設、講演会の開催等講座事業を中心として大学の知的資源の還元体制を構築し活発な講座事業を推進した。

平成 20(2008)年 4 月には、学長直属の社会連携戦略本部設置等の機構改革が行われ、エクステンションセンターは大学教育機構から離れて、社会連携戦略本部(現　地域連携戦略本部)の下に位置づけられた。また、センター規則の目的から「教育における」の文言を削除し、社会連携に係る企画、立案、調整及び実施に関する総合的業務を担うこととなった。

エクステンションセンターは、従来の講座事業に加え、学内部局・機関と連携しつつ、自治体、民間団体、企業等の様々なセクターとの連携関係を構築し、県内 7 地域における地域交流会の開催、山口県、山口市、防府市教育委員会、山口銀行との連携協定に基づく連携事業の推進、大学コンソーシアムやまぐちの運営支援、受託研究の実施等幅広い地域連携活動を展開し、地域社会の振興に貢献してきた。

平成 25(2013)年 4 月には、センターの名称を「地域連携推進センター」と改称し、専任教員の他部署への配置換えや新たな専門職員の採用等を伴う改組を行い、地域連携推進体制の効率化を図ることとした。

公開講座「歩いて、学んで、理解する。カタログにない秋吉台」

山口地域と山口大学の交流会(2012 年 2 月)

【第2部】
繋

3
同窓会のあゆみ

1 鴻文会(人文学部)

昭和 56(1981)年	人文学部同窓会「鴻文会」発足 初代会長に和田敏英氏（英米文学）就任 「鴻文会会報」創刊
昭和 57(1982)年	鴻文会名簿発行
平成 7(1995)年	連絡事務所を開設
平成 11(1999)年	山口大学同窓会連合会が結成
平成 18(2006)年	「留学生への奨学金支給」制度開始
平成 23(2011)年	鴻文会 30 周年

鴻文会のあゆみ

鴻文会会長　岡光 一浩（山口大学名誉教授）

文理学部文学科と人文学部との卒業生を中心に構成されている同窓会「鴻文会」の発足は、文理学部が昭和 53(1978)年 6 月に人文学部と理学部に改組された 3 年後の、昭和 56(1981)年 10 月 31 日であった。したがって、鴻文会の歴史もすでに 30 余年に及ぶが、それ以前にも、文学科の卒業生を含む「文理学部同窓会」なるものがあった。鴻文会の歴史を語る場合、その前身について触れておかなければならない。

文理学部同窓会は、第 1 回の卒業生が生まれた年の翌昭和 29(1954)年に文理学部長を会長として設立された。規約に従って、その翌年と翌々年には会員名簿が発行され、後者には「会報」も折り込まれ、そこには文理学部の近況などとともに、旧制山口高等学校同窓会との合流問題が懸案事項として掲載されている。この問題は、その翌昭和 32(1957)年 7 月に発行された文理学部同窓会と旧制山高との合冊会員録においても提起されているが、種々の事情から決着をみなかった。

文理学部同窓会の第 2 回総会は昭和 34(1959)年 5 月に開催され、翌年には、卒業生名簿が、旧制山高創立 40 周年記念事業として発行された旧制山高会員録の巻末に収録されている。さらに昭和 36(1961)年と昭和 40(1965)年(旧制山高合冊)にも卒業生名簿が発行されているが、その後しばらく文理学部同窓会は目立った活動をしていない。これは教養部創設(昭和 41(1966)年)と大学紛争(昭和

元文理学部校舎(後河原)

43(1968)年以降)の影響によるものと思われるが、その10年余り後の昭和51(1976)年3月には、当時学部内に勤務していた卒業生が中心となって、第23回までの卒業生を収録した比較的大部な「山口大学文理学部卒業生名簿」が発行されている。

その後、文理学部同窓会は昭和56(1981)年の鴻文会発足をみて28年の歴史の幕を閉じることになるが、その活動は確かに活発とは言い難いものの、そこには旧制山高の精神を引き継ぎつつ、しだいに時代に即した新しい気風を取りいれようとする熱い気概が感じられる。24名の第1回の卒業生、そして、しだいに時代のニーズによってその数を増していき、実質的なその最後となった第29回には105名の卒業生を送り出すことになった文学科、総じてその卒業生は1,839名にのぼる。その多くが今なお、教育界や官公庁のみならず、新聞や放送などのジャーナリズム、実業界などの社会の第一線で華々しく活躍している。文理学部同窓会の歴史を繙くとき、その卒業生の意気高い思いとその活躍のさまが、鴻文会の発足に力強く繋がったことを思わずにはいられない。

こうして、学部改組によって人文学部が誕生したことに即して、昭和56(1981)年10月に文理学部文学科・人文学部を一本化した同窓会「鴻文会」が新たに結成されたわけであるが、その呼称について初代会長の和田敏英氏は、「山口市の由緒ある鴻の峯にちなみ、大鳥のごとく将来雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会「鴻南会」の一字をも継承する」と会報創刊号に記している。山口の地にあって、文理学部同窓会の精神を継承しつつ、新しい人文学部の卒業生を迎え入れて新たな飛躍を模索しようとする同窓会にとって、鴻文会なる命名はまさしく言い得て妙である。新同窓会の結成が満を持しての待ち焦がれた思いであったことは、文理学部同窓会の解散総会後、人文学部講義棟で行われた第1回鴻文会総会に参加した卒業生の高揚した顔つきやうわずった歓声が如実に表していた。

その結成総会では、渡辺真治人文学部長からご挨拶をいただき、文学科と人文学部の卒業生を正会員、在学生を準会員、現旧教官を特別会員とし、会員相互の親睦と人文学部の発展に寄与することを創設の目的とすること、4年ごとに総会を開催することなどの会則を定め、名誉会長に渡辺学部長を、会長に第1回卒・英米文学の和田敏英氏を、副会長に滝本龍也(第3回卒・社会学)・大塚博久(第4回卒・中国哲学)両氏を選出し(出席者61名)、引き続いて行われた理学部同窓会(鴻理会)との合同の懇親会では、両学部の恩師21名・卒業生147名が旧交を温め、両同窓会の互いの発展を祈ってエールを交換し、新同窓会の出発を祝った。

そして今や、鴻文会も結成後32年目に入った。その歴史のありようについては、発足年の12月創刊以降毎年継続して発行されている会報(第1〜17号「鴻文会会報」;第18号〜「鴻文」、最新刊第32号)に詳しい。これらには、毎年の収支決算や事業計画、4年に一度の総会や講演会・懇親会、研究室同窓会・同期会の様子、そして学部の教員名や就職状況などの学部情報が掲載されている。しかし、そこで伝えられようとしていることはただ単なるニュースや情報だけではないようだ。遠く山口の地を離れている会員が学生時代や大学を、そして山口を懐かしんで、それらに思いを馳せ、そこになにがしかの生きる智慧や活力を生み出すことのできるような、会員の人となりの溢れている文章や山大・山口の思い出、山口点描などが盛りだくさんに綴られている。単なる情報伝達だけでなく、同窓会のもつ精神や心までも伝えようとするところに、我が会報の特徴があろう。それらをここで詳らかにすることは困難なので、直に読んでいただくしかない。よって以下、紙幅の関係で、会報の内容を情報ベースで時系列に取り出し、それらを鴻文会の歴史として紹介する。

第２回鴻文会総会

鴻文会結成後の翌昭和 57(1982)年には早くも念願の鴻文会名簿が発行され、会員全員に無料で配布された。また同年 5 月に山東大学との学術交流を促進するための山口大学日中学術交流奨励会が設立され、鴻文会も構成メンバーとして活動することとなった。第 2 回鴻文会総会は昭和 60(1985)年 11 月 2 日、前年 4 月にオープンした山口大学大学会館で開催された。総会議事に先立つ記念講演会では、厚生省人口問題研究所人口政策部長として国際的にご活躍中の河野稠果氏(第 1 回卒・社会学)の「人口高齢化を考える」と題するお話を聞き、山大マンドリンクラブのアトラクション演奏、滝本副会長の代理挨拶、名誉会長の八木充人文学部長(第 2 回卒・国史学)の挨拶の後、議事に入り、和田会長、滝本・大塚両副会長を再選した(出席者 45 名)。懇親会では、田中晃先生(元山大学長・文理学部教授)をはじめ恩師の方々からの祝福と励ましのご挨拶をいただいた。なおこの年には、より活発な同窓会活動を願って「鴻文会名簿　1985 年版」が発行された。

昭和 63(1988)年 6 月 16 日、人文学部は創立 10 周年を迎えた。この節目を祝って鴻文会では 2 つの記念行事を行った。中国新聞販売局次長の松浦亮氏(第 6 回卒・英米文学)の「大学と社会」と東海大学留学生教育センター教授の柴田俊造氏(第 4 回卒・国文学)の「日本留学生受入れの経緯と問題点」と題する人文学部大講義室での公開記念講演、そして樹高 4.5mのクスノキの学部前庭での記念植樹である。また翌平成元(1989)年から、旧制山高同窓会「鴻南会」の本部事務局を人文学部内に置き、鴻南会との関係の緊密化を図り、爾後、定期的な協議を行うこととした。なおこの年には、鴻文会発足後 3 冊目の「1989 年版会員名簿」が発行された。

平成元(1989)年 11 月 11 日、大学会館で第 3 回鴻文会総会が開催された。総会に先立ち、元NHK山口放送副局長の重中十士朗氏(第 1 回卒・国史学)の「テレビ報道 35 年―誤報と真実の間で―」と題する公開講演が行われ、和田会長・名誉会長の八木人文学部長の挨拶の後、議事に入り、次期会長に大塚博久氏を、副会長に森田良吉(第 4 回卒・国史学)・有馬正人(第 4 回卒・西洋史学)両氏を選出した。

第 4 回鴻文会総会は、平成 5(1993)年 8 月 17 日大学会館で行われた。大塚会長の挨拶、鴻南会会長の小沢太郎氏の来賓祝辞、名誉会長の山本和之人文学部長の挨拶の後、大塚会長、森田・有馬両副会長を再選した。その後の公開講演会では、鴻南会とのジョイント行事として、パシフィック野球連盟会長の原野和夫氏(鴻南会)の「分水嶺の日本」と題するお話をうかがった。当日は大雨洪水注意報も出たひどい悪天候のため出席者も少なかったが、懇親会には 70 名の出席者を得た。また 11 月には、「会員名簿　1993 年度版」を発行した。

平成 7(1995)年 9 月、念願なって鴻文会は鴻理会と共同で、大学前に連絡事務所を開設した。大塚会長と原田義博鴻理会会長の大いなるご尽力のたまものであり、両同窓会の関係や鴻南会との連携が緊密となった。

大学通り　本会事務所は右手ビル２階

平成9(1997)年8月23日、大学会館で第5回鴻文会総会が開催された。大塚会長・名誉会長の山本人文学部長の挨拶の後、会則の改正(終身会費1万円、顧問を置く)などの議事を行い、次期会長に有馬正人氏を、副会長に大野光生(第4回卒・中国哲学)・岡光一浩(第14回卒・ドイツ文学)両氏を選出した。公開記念講演会では、NHK解説委員として司法問題を担当されている松尾龍彦氏(第2回卒・社会学)の「急がれる日本の司法改革―機能低下の司法の現状―」と題するお話を聞いた。また翌年2月には「会員名簿　1997年版」を発行し、人文学部創立20周年を祝って、学部の正面玄関前にクロガネモチを植樹した。なお、平成11(1999)年6月に山口大学は創立50周年を迎えることを機に、廣中平祐学長の発案で各学部同窓会を繋ぐ山口大学同窓会連合会が結成され、鴻文会もその一翼を担うこととなった。

第6回鴻文会総会は、平成13(2001)年8月12日、大学会館で開催された。大野副会長の代理挨拶、名誉会長の田中晉人文学部長(第14回卒・英米文学)の挨拶の後、会長に大野光生氏を、副会長に立川和正(第8回卒・西洋哲学)・添田建治郎(第17回卒・国文学)両氏を選出した(出席者40名)。公開記念講演会と懇親会は鴻理会と同日総会のため共同開催とし、松下孝幸氏(鴻理会)から「人骨から日本人の起源と未来を探る」、廣中平祐山大学長から「山口大学のこれから」と題するお話をうかがい、合同の懇親会では、廣中学長からもご祝辞をいただき、非常に和やかな祝宴となった。また同年度には新たに、山口大学同窓会連合会への参加や山口大学支援財団設立募金への協力、そのことに伴う鴻文会活動の円滑化のための賛助会員制度の創設、個人情報保護のため当面名簿の発行を行わないこと、ホームページの刷新などの運営方針を決めた。

平成17(2005)年8月20日、大学会館で第7回鴻文会総会が開催された。大野会長・名誉会長の田中誠二人文学部長の挨拶の後、大野会長・立川副会長を再選し、新たに副会長に本田義昭氏(第20回卒・ドイツ語学ドイツ文学)を選出した(出席者40名)。公開記念講演会では、神戸女子大学名誉教授の林田慎之助氏(第5回卒・中国文学)の「寛政異学の禁と二人の儒侠―亀井南冥と亀田鵬斎」と題するお話を聞いた。懇親会は加藤紘山大学長からご祝辞をいただき大いに盛り上がった。なお、翌年には「留学生への奨学金支給」制度を始め、爾後毎年、中国からの大学院人文科学研究科留学生1~3名に奨学金を授与している。また、平成20(2008)年の人文学部創立30周年記念として、翌年5月、学部の中庭に街灯を設置した。

第8回鴻文会総会は、平成21(2009)年8月12日、湯田温泉のホテルニュータナカで第6回同様、鴻理会との合同開催となった。大野会長・名誉会長の湯川洋司人文学部長の挨拶に続いて議事に入り、諸々の案件の承認後、新会長に岡光一浩氏を、副会長に北川健(第8回卒・国史学)・宮藤隆夫(第15回卒・社会学)両氏を選出した(出席者40名)。公開記念講演会では、消費者行政推進会議委員の原早苗氏(第21回卒・社会学)の「消

費者庁・消費者委員会発足が問いかけるもの」と、本田技研工業株式会社副社長の近藤広一氏（鴻理会）の「ホンダのグローバル経営」と題するお話を聞いた。丸本卓哉山大学長はじめ多くの方々のご祝辞をいただき、大盛会の合同の懇親会だった。

なお現役員会は新たに、役員会の活性化、連絡先不明会員の減少、会報「鴻文」の充実、ホームページの刷新、山口大学創基200周年事業への参加、会員相互の親睦と交流の促進のために「研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会に対する助成」制度の開設などに取り組み、また、平成23（2011）年発行の第31号「鴻文」を鴻文会創立30周年号とした。平成24（2012）年4月現在、卒業生数は7,965名（文学科1,839名、人文学部5,776名、大学院・専攻科350名）。

2 教育学部同窓会（教育学部）

明治18（1885）年	山口師範学校、女子師範学校同窓会として、亀山同窓会・女子同窓会創立
明治19（1886）年 7 月	天皇臨幸記念式典を挙げ、記念碑「光被」を建立
明治36（1903）年 6 月	山口県師範学校校友会設立
大正 元（1912）年10月	山口県師範学校同窓会設立
大正12（1923）年10月	全国師範学校同窓会に加入
昭和 2（1927）年 4 月	皇太子殿下行啓記念碑「俊徳」を建立
昭和 9（1934）年10月	創立60周年記念式典挙行
昭和24（1949）年	大学昇格のための図書等充実の寄附金募集
昭和27（1952）年 8 月	大学昇格記念碑「仰徳」を建立
昭和30（1955）年10月16日	青年師範同窓会（防府）・山口師範学校同窓会（山口）・室積師範同窓会・室積女子師範同窓会（光）を山口大学教育学部同窓会として改組発足
昭和37（1962）年	初代会長に二木謙吾氏就任
昭和37（1962）年10月17日	「財団法人山口大学教育学部同窓会」として認可
昭和50（1975）年10月	山口県教員養成100周年記念祝賀式挙行同記念庭園造築
昭和52（1977）年11月	「校歌」の碑（旧室師・女師）建設
昭和55（1980）年10月	「山口県教学発祥の地」碑建設（旧山師）
昭和59（1984）年	第二代会長に徳光正亮氏就任
平成 5（1993）年	第三代会長に岩本肇氏就任
平成10（1998）年	第四代会長に真田元祐氏就任
平成13（2001）年12月～平成14（2002）年2月	山口大学教育学部存置について、本同窓会外12団体が山大学学長・山口県知事・山口県議会議長・本県選出国会議員へ要望書を提出
平成14（2002）年 6 月15日	「緊急教育フォーラム」開催「山口大学教育学部の存置を求める会」発足

平成 14(2002)年 7 月 1 日	山口大学教育学部の存置を求める署名活動を展開、15 万人の署名
平成 17(2005)年	文科省が山口大学教育学部の教員養成GP「ちゃぶ台」方式による、「協同型教職研修計画」を採択
平成 20(2008)年 12 月 1 日	「新公益法人制度」施行、「公益法人」か「一般財団法人」かの選択
平成 21(2009)年	第五代会長に藤原董剛氏就任
平成 21(2009)年 6 月 21 日	第２回拡大役員会において「一般財団法人」への移行決定
平成 26(2014)年 4 月 10 日	「一般財団法人」として発足

山口大学教育学部同窓会の特色等について、記すにあたり昭和 42 年 7 月 30 日発行の「山大同窓会だより」第 2 号での、二木謙吾会長の言をもって代えたいと思います。（事務局）

同窓のつながりをあたためる

会　長　二木 謙吾

同窓という縁は、不思議なつながりをもっております。同窓という言葉にふれると、年齢年代のへだたりを越えて、若い日に夢を同じうしたという親わしさが、人の心と心を結びつけてしまいます。

同窓会というつどいは、こうした素朴な心情の中にはぐくまれていく、なつかしい、心あたたまるつながりであります。さらにいえば、同窓会は同期同窓であるという濃い縁につながる同輩意識…同じ学窓に若き日の思い出を刻みつけたという親愛感、幾年幾十年たっても色あせることのない同類感…を基底として、先輩・後輩の年代に広いひろがりをもって永久に血の通う大動脈によってつながる血縁的集団ともいうべきであります。

しかも、年齢層の如何を問わずに、その凡てのものが、夢多い学窓時代という時点と環境の中に自分を還元して、お互いのつながりをつけているところに、同窓会という集団の特異性と若やぎがあります。

私どものこの同窓会も、明治十八年に発足した亀山同窓会という名に端を発して、現在の山口大学教育学部同窓会という名称になるまで、校地校舎のたたずまいも、幾多の変遷を繰り返しました。

また、山口、室積、小郡、防府と教員養成学校も、時代の要請を反映して、複雑な経過をたどってまいりました。

しかし何れにいたしましても、各年代に各学校において、教育の将来に夢をかけて同窓のよしみを結びあったお互いの多くが、さらに教職に携わるという同職のよしみをも通じあって、深い縁を重ねてきたことも、本同窓会の特異のつながりであります。

教育は、国民のひとしく見まもる最大の関心事であり、その道を正すということは社会の最大の課題であります。本同窓会の会員が現在教職にあると否とを別にして、同窓として教育界につないだお互いの縁を大切にあたためあって、ほんとうの教育が育つための「地の塩」となる意欲を新たにするところに、同窓という親わしいつながりの真義があろうかと存じます。

会員の皆さまのご清福をおいのりします。

「就活」と友の思い出より

昭和 32 年卒　河村 保男
（現 教育学部同窓会関東支部長）

故郷にある大学を出た者の多くは、地元で教員をやりたいと思うのが自然だ。特に私は、小中高そして大学も山口市内であり自宅通学 16 年、両親に寄りかかった生活だった。

親の庇護から脱すべく、蒸気機関車の煤にまみれながら一昼夜かけて、東京の教員採用試験に敢然と挑戦したのだった。運よく一次合格！面接試験に再度上京、これまたラッキー、「桜咲いた」の通知が来た。しかし、都教育界に全く縁もゆかりもなくつてもないのだから、まあいい体験したということで、下関市教委から届いた面接通知、「4 月 6 日に来られたし」とのはがきに感謝し、その日をひたすら待っていた。ところが、東京・葛飾区立の中学校校長から正式採用したいとの朗報が！ S.32.3.24 のことだった。下関はどうすべきか？

卒論指導教官濱田清吉先生に相談、玖村敏雄教育学部長先生に連絡してくださった。玖村学部長先生は「こんな例は、私は初めてだ！後輩のためにも行きなさい。下関の方は、なんとかする」と。感謝感激！4 月初めから教職生活は東京の下町でスタートし大田区⇒文京区の中学校に勤務、そして教職生活 38 年目最後は、東大本部の竜岡門前の中学校を任され無事終えることが出来た。一度も病気で休むことなく、どこに行っても松陰先生から学んだ「至誠・努力」の精神と山口魂で全力を尽くした。そして、悔いのない教職生活を終えたのだ。

大学時代、創部間もない「体操部」で、実力一番の福村（仁保）勤君に、ゼロから教わり、体操の楽しさに目覚め、顧問に佐藤吏先生を迎え試合に出られるまでになった。お陰で最初に赴任した中学校で体操部をつくり、子供たちに私は、山口弁丸出しで猛特訓、お陰で、運動会で子供たちは、見事な技を披露し喝采を浴びた。大会でも入賞をするようになった。

当時山口市内では、フォークダンスが盛んで、部長の仁保君もすっかり嵌まり込み、部員引き連れ踊りのハシゴをしたものだ。その余韻を、勤務校に持ち込んだ。子供達はもう夢中！になり、帰宅するのを忘れて踊っていた。クラス会をやるとあの頃の話題は、これだ。

また、仁保部長はある日から突然マラソンにも燃え、脚力とばねの強化と称して大正通りを小郡までよく走った。ついに体操部として駅伝大会に……着順は?　就職するとすぐ、子供たちに呼びかけ早朝駆けっこ会を始めた。勿論私も一緒に走った。そして駅伝チームをつくり区大会に出場、二年目から毎年上位入賞という記録に繋がった。仁保部長に感謝している。いつだったか突然上京し、私の下宿に……。数日泊まり、都内の体操クラブの視察に回っていた。その後、山口県体操界の指導者として活躍したと聴いた。でも彼は、早々と天国に旅立ってしまった。佐藤吏先生が「山口県体操協会 50 年史」を届けて下さり、仁保勤部長がしっかり登揚しておりその足跡が残っていることが嬉しくて堪らないのである。

私は、今、関東に住まいする同窓生と年一回、昔話を語り合っているが、時代格差の大きさに戸惑うばかりだ。大学の場所も移動した。でも、学んだ山口市の空気は相変わらずおいしい。

人生の転機が体研にあった

昭和 53 年卒　和田 康夫
（現 防府市立右田小学校長）

山口大学が平川に移転して間もない昭和 49 年に入学。学生運動の名残が少しばかり残っている正門や教養学部の中庭。整備が完成していない校舎は、殺風景でもあったが、自家用車を研究室のそばまで乗っていける便利さがあった。

2 年生から第 1 希望ではなかった体育研究室に入った。高校時代の一時期、文芸部に所属し、文学青年を気取っていた私は、入学と同時に、国語研究室に顔を出し、「万葉の旅」にも参加していたので、当然のごとく国研と思っていた時があった。しかし、ふたを開ければ体研。それから 1 か月経ったある日、国研の先生から「うちに来ないか。」との誘いがあったのをすぐに断ってしまった。それは、「体育管理学」「運動生理学」などの本をすでに購入していたからという単純な理由だったが、今にして思えば、自分の人生の転機だったような気がする。

3 年生からは、担当の教官が決まる。この時も単純な理由から佐藤勝弘先生の研究室に所属してしまった。当時、体研には、二人の佐藤先生がおられ、「仏の吏（おさむ）」「鬼の勝（かつ）」と呼ばれていた。2 年生の時から佐藤吏先生が声をかけてくださり、スポーツ少年団の指導をしていた私の卒論テーマは、「スポーツ少年団の指導者」と決めていた。吏先生は、当時、スポーツ少年団にもかかわられていたので、たくさんの資料をいただいて、卒論に役立ったことは言うまでもない。

ところが、3 年生になる春休み、佐藤勝弘先生（以下、勝先生）の引っ越しの手伝いに行ったとき、「お前はキザだなあ。でも、話すとそうでもない。俺の研究室に来ないか。」と誘われ、運命に従った。もちろん吏先生にも大変お世話になったのではあるが、直接指導をしてくださる勝先生の影響も大きかった。

4 年生になると、研究室の鍵を預かり、勝先生よりも早く研究室に行き、部屋の掃除をし、お湯を沸かすことが課せられた。勝先生の出勤にあわせてお茶が出ないと叱られる。学問の前に、人として、そして、社会人としての生き方を体験的に学ばせていただいたのである。

先生の家が近かったこともあり、常に先生の家に入り浸っていた。クリスマスも元旦も。夫婦それぞれの愚痴をよく聞かされるほど…。それにしても、できの悪い私の面倒をよくぞ見てくださったものだ。40 年経った今も、時折電話をしたり、新潟まで遊びに行ったり、数年に一度はお会いしているが、今でも、当時のままの気分でつきあっていただける、生涯の恩師である。

山口大学での 4 年間は、仲間にも恵まれ実に愉快だった。教員生活も後 2 年。勝先生を超えることはできなかったが、アグレッシブさだけは引き継いできたつもりである。思い出は尽きない。

山口大学と共に

昭和 59 年卒　久保田 尚
（元 山口大学教育学部准教授
現 美祢市立嘉万小学校長）

山口大学を卒業後、長らく公立小学校等で教員を務めておりましたが、今は母校山口大学教育学部で教員志望の学生たちに、現場で経験してきたことを織り交ぜながら、教職関係の授業を行っております。全国の大学でもそれぞれの特色を生かしながら、現場の教員を大学に迎え入れる「交流人事制度」を行っているところがたくさんあります。あまり知られていないこの制度について、最初に少しお話ししてみたいと思います。

山口県では、平成 17 年 12 月、山口大学教育学部と山口県教育委員会、山口市教育委員会が教育研究、教員養成や教員研修等について包括的連携を図るため、「山口大学教育学部・山口県教育委員会、山口市教育委員会の教育連携推進協議会要綱」を定め、「教育連携推進協議会」を設置しました。この協議会での取組の一つとして「交流人事教員派遣」が検討され、平成 18 年度より開始されました。

「交流人事教員」は、原則的に、公立小・中学校教頭のうち県教委経験者（派遣指導主事・社会教育主事を含む）から期限 3 年で採用され、教育学部附属教育実践総合センターに配属されています。ちなみに私は、県教委等の経験は全くなく異例の採用のようです。

平成 18 年度から 2 年間は、中学校籍の先生お一人でしたが、平成 20 年度より小学校籍の先生も加わり二人体制となりました。初代の小学校籍の先生の任期が切れたあと平成 23 年度から二代目として配属されたのが私です。

これまで小学校教員として教育に携わってきましたが、相手が一気に大学生となり、着任早々、戸惑いは隠せませんでした。しかし、「教員になる」という明確な目標をもった学生たち相手に自分の経験を踏まえて教職を語るということは、教えることの手応えを感じつつ、自分のこれまでの取組を振り返るいい機会にもなっています。

現在、教員の資質能力向上が叫ばれる中、教員養成段階から実践的指導力の育成強化が求められています。また、大学と教育委員会との連携・協働も重要視されてきています。そのような中、我々「交流人事教員」が果たす役割は決して小さくありません。申し渡された任期はあとわずかですが、少しでもお役に立てるように微力ながら力を尽くしていきたいと思っております。

山口大学とのかかわりとしては、中学生時代に附属光中学校でお世話になり、大学時代はもちろん山口大学教育学部で学び、現場に出てからも平成 8 年から 5 年間附属山口小学校で勤務しました。そして今回は、創基 200 周年を迎えようとするこの時期にまさかの本学勤務と、山口大学との縁の深さを感じずにはおれません。この縁を大切に大学のますますの発展を祈念しつつ、自分もしっかり成長していきたいと意を新たにしています。

東日本大震災と学徒動員

昭和23年山口師範卒　伊藤 美代子
（現 教育学部同窓会評議員）

3.11東日本大震災の被災地、宮城県のSさんから「被災地へ生活用品を送ってほしい。」との連絡が入った。未曾有の大災害に対して、何か手助けできないかと、思案していた時だった。私はとるものもとりあえずSさんのもとを訪ねる決心をして、被災地へ飛びたった。

Sさんとの出会いは、30年前の中学校長会の全国大会の時だった。会場内どこを見渡しても、男性校長がほとんどのなか、「あなたは中国地区で一人ですね。私も東北で最初の一人です。」とにこやかに声をかけてくださった時からの親交だった。

S夫妻の車で案内された、南相馬から宮城まで、家も人かげもない荒涼とした、まさにゴーストタウンの情景を目の当たりにして、私は胸の張り裂ける思いで言葉を失った。閖上中学校では卒業式の後、希望に燃えて巣立った生徒の何人かは校舎を離れていて津波の犠牲になったことを涙ながらに語るSさんの姿に私ももらい泣きした。三階校舎の大時計は2時45分で止まったままだった。

山口へ帰ってから、友人・知己へ声かけをして、生活用品・学用品等を被災地へ届けることに奔走の数ヶ月を過ごした。

あの、自然の猛威の前で、人間の生と死を分けたものは一体何だったのだろうか。ふと私の心に、16歳の8月7日の出来事が鮮やかに蘇えってきた。

“学生もペンを銃に・ハンマーに”のかけ声のもと、「学徒動員令」の発布により全国の学生が戦場や工場に出ていった。

山口師範学校女子部の本科生と私たちは、名古屋の三菱重工の航空機製作所で働くこととなったが、連夜のB29の爆撃で寄宿舎・工場も破壊され、命からがら富山の疎開工場に移動した。そこは、戦闘機の組み立て工場で、私たちは熟練工の手伝いとして、翼と胴体を繋ぐ仕事をさせられた。

昭和20(1945)年8月5日、私たち40名に「学校に帰れ」との突然の命令が出された。私たちは山口へ帰ることができることを喜び合ったが、戦時中のこと、何がどうなったのかわからないが、5日の出発が6日に日延べになってしまった。6日に富山を出発して、夕刻大阪で乗り替えた途端、「今朝、新型爆弾の投下で広島市内は全滅、この列車は終着駅不明」との知らせがあった。

8月7日、私たちは海田市駅で降ろされた。ホームは何の変哲もなかったが、待合室に一歩足を踏み入れて息をのんだ。赤黒く焦げた顔や手足、ボロボロに焼け衣服をまとい助けを呼ぶかすかな声、この世の地獄にただ呆然と立ちつくした。私たちは言葉もなく山口をめざした。市内に入ると足の踏み場もない、半死半生の人々、阿鼻叫喚とはこのことかと胸の張り裂ける思いがした。私たちは倒れた人や貨車を避け、灼熱の太陽の照りつけるなか這うようにして幾つもの鉄橋を渡り、富山を出て3日目やっとの思いで、それぞれの我が家へたどり着いた。

もし、私たちの出発が6日に日延べになっていなかったら、私たちは原爆投下の日に広島に入っていただろう。そうだとすると…。

私たちはこれまで、かけがえのない尊い多くの命を失ってきた。その多くの命を受け継いで、今私がここに生かされている。尊い命を犠牲にしたり、豊かな自然を破壊したりすることを防ぐために、人間の叡智を結集したいものである。

3 | 鳳陽会(経済学部)

明治 41(1908)年	山口高等商業学校同窓会発足
昭和 2(1927)年	「鳳陽会」に改称
昭和 5(1930)年	社団法人として発足
昭和 24(1949)年	新制大学の発足とともに経済学部の同窓会として継続
昭和 54(1979)年	同窓会館「鳳陽館」設置 「上田鳳陽」資料館併設
平成 17(2005)年	経済学部創立百周年記念式典に参加
平成 20(2008)年	「鳳陽会創立百周年祝賀会」開催
平成 25(2013)年	一般社団法人に移行

同窓会・鳳陽会の歩み

鳳陽会事務局長　山本 文雄

1. 沿革

明治 41(1908)年 3 月、山口大学経済学部の前身山口高等商業学校第 1 回卒業式が挙行されるにあたって、「山口高等商業学校同窓会」が設立された。昭和 2(1927)年 1 月、同窓会は、山口の地(中河原)に私塾「山口講堂」を創設された幕末の萩藩士「上田鳳陽先生」にちなんで、「鳳陽会」に改称された。ついで、昭和 5(1930)年 11 月、評議会にて「社団法人鳳陽会」に改めることが決議され、文部大臣の許可を得て、社団法人化されている。

山口高商は昭和 19(1944)年 4 月 1 日に「山口経済専門学校」と改称され、昭和 24(1949)年 5 月 31 日に新制山口大学の発足と共に「鳳陽会」も経済学部の同窓会として引き継がれた。

昭和 48(1973)年 3 月に大学の統合移転の一環で経済学部も吉田地区に移転していったが、昭和 54(1979)年 4 月に母校所在地跡の亀山公園東麓(山口市亀山町)に同窓会館「鳳陽館」が建設され本部事務局とし、併せて「上田鳳陽」資料館も併設された。平成 9(1997)年には、「山都逍遙歌」、平成 14(2002)年には、「山口高等商業学校校歌」の歌碑がそれぞれ経済学部玄関前に建立されている。

平成 17(2005)年 2 月 24 日に山口大学経済学部は、山口高等商業学校が明治 38(1905)年に創立以来、百周年を迎えた。これに関する記念事業として 5 月 28 日に関係者多数が出席し、経済学部玄関横に「鳳陽寮歌」石碑の建立除幕式が行われた。また 6 月 17 日から 19 日にかけて「創立百周年記念式典」他関連事業が行われ、多数の会員が出席した。

平成 20(2008)年 3 月 27 日「鳳陽会」は、「山口高等商業学校同窓会」設立以来百周年を迎える事になり、9 月 25 日に「鳳陽会創立百周年祝賀会」が開催された。

平成 25(2013)年 4 月 1 日には、公益法人制度改革への対応として、一般社団法人に移行した。

2. 組織・支部

「鳳陽会」は、現在本部事務局を山口市亀山の一角にある同窓会館「鳳陽館」に置いている。会員は、旧高商以来の卒業生から構成さ

れており現状約 18,000 人を擁している。支部に関して、戦前は海外支部も 10 指を数えていた。現在は国内に 40 支部がある。

3. 活動状況

「通常総会」

毎年 6 月に通常総会を全国 7 支部(東京、山口等…)の持ち回りで開催しており、全国から各支部の会員が出席している。事業、予算等の審議、承認等を行い、総会後には懇親会を実施し会員相互の親睦を深めている。

「事業活動」

毎年度具体的な事業活動を計画し、実施してきているが、最近の主要な活動実績を述べると、以下のとおりである。

1. 教育支援事業(母校、地域、学部生への支援)

若い世代の同窓会離れ等に対応し、また学部における教育支援に特に力を入れている。

① 寄附講座(特殊講義)の開設

平成 22 年度よりスタートさせ、毎年 4 月～7 月の毎週金曜日に卒業生計 15 名を派遣し、実学を主体にした講義を行っており、聴講学生は毎回約 300 名を数えている。

② 就職活動支援

厳しい就職氷河期に対応する為、「同窓会」の人脈、各支部のネットワーク等をフルに活用して学生達の就職活動支援を行っている。学部との連携で、平成 23 年度より会員による就職アドバイザー制度の実施、平成 24 年度から模擬面接を実施している。

③ 学部における各種表彰及び海外留学等への助成、支援

公認会計士、税理士試験合格者の表彰及び海外留学等への支援及び助成を行っている。

2.「鳳陽会」会報事業

同窓会活動の広報事業にも力を入れており、現在、年 3 回機関紙「鳳陽」を発行し、全国の会員はもとより、海外会員、大学本部、学部の教職員、学生、更には、他学部及び関連大学同窓会にも配布している。

3. その他事業

その他の重点事業として、各支部との連携強化等の同窓会関係事業及び学部生、その保護者並びに、他学部、他大学等との積極的交流事業を行っている。

「支部活動」

各支部における総会の開催他、若い会員との交流会、俳句、囲碁の会の実施、ゴルフコンペの開催、留学生との交流会等色々な活動を行っている。

亀山時代の校舎

亀山校舎跡地の寮歌碑

同窓会館「鳳陽館」

山口高商の思出

旧制山口高商昭和８年卒　片山 正美

山口高商に入学したのは昭和５年(1930年)の春４月である。省線(国鉄の前身)山口駅貧相な木造平屋の駅舎、これが県庁所在地の駅？向うの小高い丘(亀山)まで道が伸びている。突き当たりに学校らしき建物(旧師範学校)が見える。偶に荷馬車・大八車が通る。あまり人通りは無い。これから３年間御厄介に為る街だ。大きく息を吸い込む。

「諸君は今日から山口高商の学生のジェントルマンである。社会に己に責任を持ち決して他に迷惑を掛けない自覚を持て。最早生徒でなく生徒手帳も無い。ジェントルマンの自覚を持てばどんな事をしても構わない自由である」鷲尾健治校長講義第一声である。ヨーシ責任さえ自覚すれば何をやっても自由だ、酒も飲めるし煙草も吸える。生徒手帳で固く縛られていたのが一度に解き放され、大空に向かって両手を挙げた。此の時の解放感は生涯忘れることはない。あの頃は未成年者の飲酒喫煙には大らかであった。学生には未成年者もいたが誰も気にする者はいない。満 20 歳になると日本の男子は全て徴兵検査を受けなければならない。此れが済むと初めて一人前の男子と認められ飲酒喫煙も大っぴらに出来た。

授業の思い出。英語名物教授今泉浦次郎教授、日本で最初に英文学を紹介した厨川白村の弟子が自慢、風采構わず何時も草履か雪駄履き、教材はスティブンソン著の原書、指名した学生に「○頁を読んで其の大意を説明せよ」、と言った具合。今一人の奈倉次郎教授アメリカか何処かの新聞等のコラムを集めた厚さ4cm程の本の任意の頁を暗記させ、当日指名された学生が暗記して来た頁を淀み無く弁ずれば「よ～し」。途中で行き詰まり続かぬとまた次にと。此のレシテーションは文章の暗記を継続すれば幾つかのフレーズが身に就くという狙いらしいが、教室を出た途端綺麗に忘れ身に就くどころか。これ等の授業は中学で基礎英語が出来ている事を前提にしている。東京・神戸商大のような予科は無くともせめて１年生の前期位は今一度基礎固めの時間が欲しいと当時思った。

英語では無いが３年生の初め、活きのいい丸坊主の若い講師がお目見えした。京大の本位田教授の愛弟子で、初めての教壇が我々の教室。歳は我々より5～6 歳ぐらい上か。経済史担当。講義明快歯切れ良し、竹中靖一講師である。後年戦後昭和 39 年奇しくも再会を歓び合う。既に先生は近畿大学教授･経済学博士、著書『石門心学の経済思想』は学士院賞を受賞、錚々たる学者であった。其の著書を頂戴する。石田梅岩の思想は後年会社経営に当たり重要な指針となった。後に東京商大で経営学学会の権威と為られた古川栄一教授の名講義も忘れられない。

昭和７年高商３年の時五・一五事件、海軍青年将校がクーデターを起こして犬養首相を射殺した。高商への配属将校が３年生全員に感想を書かせた。学生の感想は「法治国家のわが国に於いて武器をもった青年将校が問答無用と徒手空拳の首相を射殺した暴挙許し難い」と全員異口同音に書いた。流石高商の学生である。良識は健在であった。配属将校は、学生達は青年将校の行為を同じ青年として賛美するとでも思ったのか、全く予想を裏切られたか、烈火の如く怒り意味不明の言葉をまくし立てた。前年昭和６年柳条溝事件を発端とし満洲

筆者の卒業写真
(山口高等商業学校卒業記念帖より)

事変を経て後の第二次世界大戦へと続く時代の流れは、軍部も未だ先の事を予想して居らず、国民は殆ど知らされず、世間も学園も表面的には平穏であった。

古賀政男作曲、藤山一郎歌う「酒は涙か溜息か」「丘を越えて」明大マンドリン部の伴奏で大ヒット、高商のマンドリン部も演奏会でメインに大受け。其の頃山口には娯楽は映画館二つ芝居小屋一つだけ。音楽家・芸術家は適当なホール、会場がない為来演は無かった。それだけ高商の定期演奏会は一般市民の楽しい年中行事であった。家族連れや若い娘さん達の参加出演も有り、皆着飾って学生の注目を集めようと競った。同級で組は違ったが塚田次夫君が小さい頃からバイオリンを習い演奏会の花形。高商マンにも芸術家が居た。

山口は学生の街、高商・高校・師範の学生の消費は市の経済的波及効果は大きかった。市民も「学生さん。学生さん。」と皆親切に心温まる接し方をしてくれた。特に高商の学生は未来の社長さん候補と、高校より手近な夢と希望を託して呉れていたのである。

山口高商弓道部(左上に幹事であった筆者の弓を引く姿が見える。)

弓道部。高商3年間の生活は下宿・教室・弓道場、此の三角形を毎日々繰り返し行動して居たに尽きる。市中の近郊の散策、鳳翩山登山、長門峡・秋芳洞観光等一切無し。辛うじて3年卒業直前秋芳洞へ日帰りをしただけ。従って山口近辺の事情は殆ど知る事が無い。

山口高商弓道部は昭和6年、明治神宮、大学高専弓道大会に見事全国制覇を成し遂げた。当時は大学及び高専対象の弓道全国大会は明治神宮のこれしかなかった。大会有史以来、優勝弓が初めて箱根の山を越えた、と東都大学連中が悔しがった。

去る平成24年6月7日経済学部での講演の折り山大弓道部道場を訪れた。神棚に拝礼して、正面の安土に一礼した瞬間、80年前の旧亀山道場の安土が眼前に拡がる。当時幹事として、部の運営、後輩への厳しい指導に明け暮れ身も心も弓道部に打ち込んだ。合宿から道場への行き帰りに詠う部歌が柔道部・剣道部に有るのに弓道部には無いのを淋しく思い部歌を作詞した。作曲は同級生の久野四郎君である。マンドリンの名手。父君は関門汽船の社長、関門トンネル・関門大橋は未だ無い。専ら此の会社の連絡船に頼る。卒業以来今日まで80年間種々の事情で全く弓に触れることなく過ごした。同期の亡くなった宇部の森本耐輔君はずっと弓を引き続け錬士にまでなった。

山口高商の弓道部の伝統は正しい精神と姿勢で放てば必ず的中、外れた時は心と姿勢に乱れが有る。当時競技用の的中主義を採る大学高専も有ったが誠に品が無い。我々はかたくなに本来の弓道を守り伝統とした。明治神宮で見事に実証された。的を見つめる眼、矢を放つ境地、道場での立ち居振る舞い、すべてのマナーがその後の人生の基幹となった。弓道場は今も尚心の拠り所である。

(平成24年10月満百歳6カ月記す)

「往時をしのんで」

経済学部昭和 40 年卒　淵上 洋一

私は齢(よわい)七十を過ぎ、人生の黄昏(たそがれ)を感じ始めている昨今であるが、思い返してみると、大学生活や実社会での勤め人としての暮し、そして結婚や子育て等の家庭人としての営み、総ての面において、いかに時代の恩恵に浴していたか、今さらながらしみじみとその有難さに感謝するものである。

とりわけ大学生活の時期は、我が国が敗戦の痛手(いたで)から漸く立ち直り、高度経済成長を遂げている折で、世相も明るくなり、古い衣を脱ぎすてて、新しい服を求め始めた様な趣(おもむき)を呈していた。精神的にも物質的にも、前に向かって力強く歩を踏(ふ)み出す、その様な時代であった。

昭和三十六年四月初め、福岡県中東部の小都市に住んでいた私は、高校を卒(お)え、親代りの叔父に認められていた国立大学二校受験を済ませたものの、その一校はしくじり、二校目の山口大学経済学部の合否が不明で、鬱々(うつうつ)として楽しまず、これから先の事を慮(おもんぱか)って暗澹(あんたん)とした思いに捉われていた。

ところが四月六日、新聞に山口大学合格の報が掲載されると、叔父が、この大学は実学教育に赫々(かっかく)たる成果を挙げていること、高等教育機関として相当の歴史を有していること、そして何よりも一人の合格者の蔭で十人余りの同年代の青年の涙が流されていることを言い募(つの)って入学することを強く勧めてくれた。

それで早速、手続きを済ませ、山口に行くことにしたが、駅に見送りに来た叔母が心配そうな面持ちで、「気持ちを強くもって生活すること」「酒に呑まれないこと」この二点を強調したことを、いまでも鮮やかに思い出す。

その日の夕刻、暮れなずむ山口駅に辿り着き、足に馴染(なじま)ぬ新しい革靴をひきずりながら、これからの生活の場となる鳳陽寮へと向ったのである。

期待と不安の入り混じった気持ちで始まった大学生活、就中(なかんずく)、鳳陽寮での暮しは、多少の不便はあったものの、実に快適であった。五つの分寮(南寮・北寮等)で形成されるその寮は、完全に学生の自治に委(ゆだ)ねられ、執行機関の長である寮総務を選挙により選び、大学当局の若干の指導は受けながらも、あくまで寮生による自治運営が基本であった。

まさしく"同じ釜のめしをくう"とはこの事で、食事や入浴という日常行動を同じくし、コンパやストーム、それに共同部屋という特殊環境による間断なき接触を重ねる日々で、友情とも、親情とも、或いは恋情ともつかぬ気持ちが、自然発生的に芽生(めば)えてきたのだった。

この様に充実した寮生活、それに加えて決して高いとはいえないレベルのクラブ活動、教師が理念と情熱をもって督励(とくれい)これ努めたゼミナール。これ等の諸活動を通じて得られた友は、終生のつきあいになるのである。

鳳陽寮での暮しの中で、四六時中、行を共にしたK。寮を出たあと彼が入居した中市の梅田下宿にも連日入り浸(びた)り、自分の方があたかも下宿人の如く振舞ったものである。そのKは繊維商社に勤め累進(るいしん)。

入学後、次第に怠惰(たいだ)に流れ易きにつく私を毅然(きぜん)と諭(さと)してくれたI君。学問を求め、卒業後

はマルクス経済学の牙城といわれた京都の大学院に進み、やがて学究の道へ。二十数年経ち、少壮学者の輝きに満ちた彼から、再び説かれた東欧経済の考察。昔通りの切味。

温容な風貌で学生の頃より大人の風格の備わっていたS氏。鉄鋼メーカーの大組織の中で悠揚迫らぬ風を貫いたことは我等友の誇り。

ラグビー部の猛者として精悍な面構えのH君。天神通りにある洒落たバーに足繁く通っていた頃、憎からず思っていた女の子に「Hさんて本当に素敵。是非紹介して」と頼まれた時は大いに落胆した。後に、食品会社において経営陣の一角に。

文武両道で才気を謳われたY君。創業経営者が猛烈に率先垂範する某自動車会社に入社して大活躍。それを退えると、大学院で再び学問を志し、今では大学講師の要職に。

これ等の友を思うとき、よき時代、よき大学で過ごした事を殊更に実感するのである。

そして、景色としての心象風景はどのようなものであったろうか。

春のうららかな日ざしを浴びて、一の坂川畔の桜をめでながら、後河原から香山園を抜け、瑠璃光寺へ至る道を散策したことがあったが、今もってあのゆったりとした気分は忘れられない。木々の間からは、ひばりの啼き声がきこえ、たんぼには一面、れんげの花が咲きほこっていた鮮やかな風景……。目をつぶれば今でも、はっきりとよみがえる。

冬の寒気厳しき頃、気のおけない親しい友と道場門前辺りの安酒場で、しこたま酒を呑み、ふらつく足どりで、左手にザビエルの塔、学部校舎を見やりながら、長山のだらだら坂を歩いて鳳陽寮へ帰った事もあった。

心ときめく情景である。

私は、社会の第一線での働きを終えたいま、若き頃の思い出が凝縮されている山口の地で老いを養うことにした。

蒼き日と枯れた日を、この地で過ごせるのは望外の喜びといってよく、まさに暮れなんとする夕べ、遥か彼方に鳳翩の山脈をながめながら、一掬の酒を汲む幸せを感じるのである。

鳳陽寮入寮記念写真(昭和37年4月)前列中央　学部長　水田金一教授
前列右から5人目が寮総務の古賀邦男氏、前列左から5人目が筆者(北寮々長)

美しき山都の青春

経済学部昭和 50 年卒　塩塚 保
（産経新聞社記者）

18 歳の早春だった。

1970 年 3 月、わたしは国鉄小郡駅 0 番ホームから列車に乗り込んだ。3 両編成の列車はとことこ走る。山口駅に到着した。山口大学経済学部（亀山校舎）をめざして歩いていく。明日は入学試験である。

早間田交差点を渡った。突如、天上から美しい鐘の音が降り注いできた。見上げる。緑の丘の上。美しく白い塔がすっくと建っていた。ザビエル教会。正午の時を告げているのか。祝福されたかのような気が満ちてきた。

山口大学経済学部の正門に立った。格調高い本館が眼前に迫る。天下の 3 高商、山口高商の伝統を実感した。隣には歴史を刻む講堂が建っていた。屋根の中央部から、にゅっとそびえる塔が印象的だ。

一方、広場には、激しい政治スローガンを書きなぐった立て看板が林立する。白、赤、銀、青、黒。様々な色のヘルメットをかぶった学生たちが政治集会を開いていた。1970 年は日米安保闘争決戦の年。首都から遠く離れた山口大学も騒然としていた。

4 月、鳳陽寮に入寮した。鳳陽寮は亀山校舎の向かいに建っていた。どっしりとした木造の寮。歴史と風格を感じさせる。さらに驚いたことに旧制高校時代のバンカラの気風が色濃く残っていた。

鳳陽寮は、北寮、南寮、西寮、西北寮、そして中寮―計 5 寮で構成されていた。わたしの部屋は北寮の 2 階。N先輩と同室だった。N先輩は松江出身。寮生活の作法や山登り、酒の飲み方などを教えてもらった。

新入生歓迎コンパが寮の一室で行われた。鳳陽寮では、主に飲む酒が決まっているという。南寮はビール、中寮は洋酒、西北寮は焼酎、そしてわが北寮は日本酒（ひや酒）である。一升瓶の封を切り、茶碗でぐいぐいやる。宴が盛り上がってきたころ、先輩が寮歌を教えてくれた。まず北寮寮歌。次に山都逍遥歌。そして鳳陽寮寮歌。寮歌は肩を組んで歌うものだ。いいしれぬ高揚、連帯感。伝統の寮歌を受け継ぐ幸せを感じた。

各寮はストームでも張り合う。寮ごとに独特の流儀があった。西寮はパンツストーム。西北寮は裸ストームだ。深夜、真っ裸で寮の廊下を駆けまわる。寮生はバケツの水をぶっかけて手荒く歓迎した。

講義は古びた木造校舎で行われた。教室には、だるまストーブがあった。寒い日。学生が新聞紙に火をつけ、石炭をくべて暖をとった。

教授は学生の自主性を重んじた。講義の出欠など気にしない。前期、後期の試験（論文形式）でそれなりの論文を提出すれば、それなりの評価をもらった。教授は亀山周辺に点在するしゃれた洋風官舎に住んでいた。学生は夜中でも休日でも教授宅を訪問した。濃密な師弟関係が実在していたと思う。

黒い学生服を着て勢揃いした鳳陽寮の北寮生たち（1971 年撮影）

山都・山口の春。一の坂川。河畔の桜が見事に咲いた。惣野(そうの)旅館でコンパ。したたかに酔い、後河原を逍遥する。下駄を鳴らして寮歌を歌う。5月末、漆黒の闇にホタルが乱舞した。ああ、美しかった。

夏。ワンダーフォーゲル部の合宿が南アルプスで行われた。めざすは北岳(標高3,193メートル)。リュックの重量は20キロを超す。重い。肩に食い込む。あえぎながら、険路を1歩、1歩登っていく。ついに北岳のてっぺんに立った。日本第2の高峰を制覇した。あの達成感。白い残雪をすくい、練乳をかけて食べた。山頂の味、いまでも思い出す。

秋。大学祭の季節だ。ロックミュージカル「ヘアー」を、亀山講堂で上演することにした。舞台に立つ役者。照明や音響、大道具、衣装などのスタッフ。そしてロックバンド。全部、学生でやる。

公演当日。会場は満席となった。さあ、開幕だ。舞台の上で演じ、歌い、踊る。反戦、そして自由を訴えた。芝居完了。拍手が沸き起こる。声援にこたえてロックバンドが、大音量で演奏再開。観客は総立ちとなった。役者が舞台から飛び降りる。観客と一体化して歌い、踊る。歌い、踊る。亀山講堂は、若々しい熱気に満ち満ちていった。

冬。部屋で寝ていた。早朝、南寮のE君からたたき起こされた。「塩塚、起きろ。雪が降っているぞ」。カメラを持って、瑠璃光寺に向かった。一番乗りだった。まっさらな白い、白い雪。雪化粧した五重塔が、新鮮な朝の陽光を浴び、輝いている。神々しいほど美しかった。

1973年、吉田移転。亀山校舎に別れを告げる日が迫ってくる。本館と講堂は破壊されるという。ところが、わたしはなにもしなかった。

いま、痛切に思う。保存運動を展開すべきだった。格調高い本館と講堂だけは、後世に残すべきだったのだ。

さて、わが鳳陽寮も大学当局から廃寮を宣告された。寮祭が敢行された。祭りの準備。一の坂川近くの造り酒屋に押しかけ、空き樽を担いで帰る。樽4個をピラミッド状に重ねる。太い荒縄で樽を縛りあげる。青い笹を飾りつけ、樽みこしが完成した。

寮祭開幕。寮生たちが樽みこしを担ぎ、門を出る。「わっしょい。わっしょい」。道場門前に繰り出していく。市民があたたかく迎えてくれた。沿道から大きな拍手が沸き起こった。あの時代、学生は確かに山口市民から愛されていた。

山口大学ワンダーフォーゲル部は南アルプスで夏合宿を行った。

寮祭最後の夜。寮生たちが広場に続々と集結してきた。さあ、ファイアーストームが始まる。たき火に点火。赤く、高々とした火柱が夜空を焦がす。

山口高商時代の伝統を受け継ぐ鳳陽寮の寮祭で盛り上がる寮生たち

肩を組む。次々に寮歌を歌っていく。最後の寮歌は、山都逍遥歌。鳳陽寮の終焉を惜しみ、万感こめて歌う。若々しい歌声は、黒々とした亀山の森、そして鴻の峰に響き渡っていった。

〽消えゆく鐘に目覚むれば
弦月白し鴻の峰
弦月白し鴻の峰…。

(了)

4 鴻理会（理学部）

昭和 56（1981）年	理学部同窓会発足 初代会長に脇坂宣尚氏（生物）就任　会長任期５年
平成 7（1995）年	鴻文会（人文学部同窓会）と共同で学外に理学部同窓会事務所設置
平成 8（1996）年	理学部同窓会を「鴻理会（山口大学理学部同窓会）」に改称
平成 10（1998）年	鴻理会の現役学生支援活動開始
平成 13（2001）年	鴻文会と合同で同窓会（懇親会）を開催
平成 18（2006）年	会長任期を３年に改定
平成 19（2007）年	鴻理会の母校支援事業強化
平成 21（2009）年	鴻文会と合同で同窓会（懇親会）を開催
平成 23（2011）年	鴻理会 30 周年記念事業

2012 年度鴻理会総会

理学部中庭に設置されたLED街灯

理学部玄関ホールに設置された電子掲示板

鴻理会設立から三十年余の今、「母校支援事業」

鴻理会 常任幹事　野崎 浩二

鴻理会（山口大学理学部同窓会）の設立以来、30 年余りの年月が経過した。この間、鴻理会を取り巻く環境は山口大学の変遷とともに大きく変化してきた。それに伴って鴻理会の役割も、同窓生同士の親睦のみならず、母校支援事業等が加わり多様化してきた。特に、2004 年の国立大学の法人化を機に鴻理会の幹事会で母校支援事業の充実の必要性が議論され始めた。その後、第六代庫本正会長就任時の鴻理会総会では母校支援事業を積極的に行うこととなった。

山口大学の他の学部の同窓会や他の大学の同窓会でもさまざまな母校支援事業を展開している。鴻理会では、「理学部の学術活動補助」と「理学部の学生支援活動補助」の 2 つの母校支援事業を同窓会の規模に似合ったやり方で実施してきた。

○理学部の学術活動補助

鴻理会が行っている理学部の学術活動補助は、毎年恒例となっている理学部の市民公開行事「サイエンスワールドへの助成」、理学部教員の主催する「研究会等の開催補助」、「理学部ハイライト研究への助成」の 3 つである。

サイエンスワールドは科学の面白さを一般市民に紹介する毎年の行事であり、現在では山口市民に認知された恒例の行事になっている。その企画は、学生自らが計画、準備、実施している。鴻理会では開催経費の一部を助成している。

理学部ハイライト研究は、理学部を広くアピールできるような研究プロジェクトを理学部が認定し支援するもので、鴻理会から研究費の一部を助成している。最初のハイライト研究は「自然遺産秋吉台のカルスト台地と石灰洞の科学」をテーマにした研究プロジェクトであった。プロジェクトには、鴻理会の会員 4 名が参加した。

理学部ハイライト研究報告書（左）と研究成果報告記者会見のようす

○理学部の学生支援活動補助

理学部の学生支援活動補助は、学生を国際会議等で海外に派遣するための「学生の海外派遣助成」、学生の国内での学会発表を支援する「学生の学会等派遣助成」、そして学生の就職活動を支援する「理学部OBとの就職座談会」である。

学生の海外派遣助成は毎年 2 名程度に対して旅費の一部を補助している。最近は申請者が増加傾向にある。学生の学会等派遣助成は、毎年 20 名程度の学生に旅費の一部を補助してきた。最近は理学部からの旅費の手当てが充実してきたため、申請者は減少傾向である。

理学部OBとの就職座談会は毎年 6 名の会員（OB）が、学生に対して仕事をすること、企業、業界について情報提供するとともに就職活動のアドバイス等を行う行事である。理学部と共催で開催している。毎年百名近い学生が参加しているが、学生からは好評を得ている行事である。

毎年開催される「山口大学理学部サイエンスワールド」
鴻理会が毎年開催経費の一部助成し、開催を支援している。

理学部OBとの就職座談会
講師は鴻理会会員である卒業生

以上のように母校支援事業は現在では鴻理会の事業の一つの柱となった。鴻理会の目的は「会員の親睦を図り、併せて山口大学理学部及び関連する大学院研究科（理工学、医学系）の発展に寄与すること」である。鴻理会発足30年余が経過した今、後者の目的がようやく具体的な形となってきた。一方で、同窓会の本来の目的である「会員同士の親睦」のための事業の充実にも努めている。最近では、会員同士が開催する同窓会を積極的に支援する取り組みを行っている。

山口大学が国立大学法人となって10年が経過しようとしている今、同窓会の役割が大学にとっても重要となっているように思われる。今後も母校山口大学のために、さまざまな事業の可能性を模索しながら、可能な限り協力していきたい。

5 霜仁会（医学部医学科）

昭和27（1952）年	第1回同窓会総会開催 初代会長に山口県立医科大学学長松本彰氏が就任
昭和29（1954）年	医学部同窓会「霜仁会」発足
昭和37（1962）年	霜仁会会報を発行
昭和55（1980）年	公益社団法人に移行
昭和56（1981）年	霜仁会検査センター設立
平成 9（1997）年	霜仁会館（創立50周年記念会館）竣工
平成20（2008）年	霜仁会医学交流会館設置
平成25（2013）年	一般社団法人に移行

医学部(医学科)同窓会―霜仁会のあゆみ

霜仁会会長　福本 陽平

1)霜仁会の設立と沿革

医学部(医学科)の同窓会である霜仁会は、現在、本部・事務局を宇部市南小串1丁目2-11にある霜仁会医学交流会館に置き、全国に33ヶ所の支部を有しています。今では、会員数が5,600名を越える組織となっており、卒業生は医師として、実地医家あるいは勤務医になってわが国の第一線の医療を支え、医学研究・教育者として先端医療の開発などに携わり、あるいは保健衛生の行政職として、全国各地で活躍中です。

1-1)山口大学医学部の創立

山口大学医学部の創立は、昭和19年の山口県立医学専門学校の開校に始まり、その後、昭和24年に山口県立医科大学へと昇格しました。昭和39年には県立医科大学から国立大学に移管し、山口大学医学部(医学科)となって現在に至っています。

医学部の母体となった医学専門学校の設立は、第二次世界大戦中に戦線が広大することで軍医の養成が必要となり、全国に数ヶ所建てることが計画されました。山口県はこの計画に強い関心を持ち、宇部市では市議会ならびに宇部興産社長の渡邊剛二氏、宇部興産同仁病院長の水田信夫氏らの努力により、昭和19年1月山口県議会において、山口県立医学専門学校を宇部市に設置することを決定・認可しました。そこで、宇部市は下宮地にあった宇部商業学校を医専の校舎に充てることに決め、初代校長には京都大学医化学の富田雅次先生が着任して、昭和19年4月山口県立医学専門学校が開設されました。ところが、昭和20年8月に終戦となり、全国にあった多くの医学専門学校が統廃合されることになりました。宇部市は昭和20年7月の米軍の空襲で焼滅状態になり、校舎も焼けたため、設備の不備な医学校は廃校になることが予想されました。そこで、本学の教員、職員、学生らは上京して陳情するなど、熱心な存続運動を起こし、昭和22年4月宇部興産沖の山同仁病院を附属病院にすることで存続が認可されました。そこで、昭和24年4月新たに山口県立医科大学として開校したという経緯があります。特に第1～2期の卒業生には、戦災と物不足の中でやっと医師免許を手にしたというご苦労があり、その当時の手記は創立30周年および50周年記念誌に残されています。

1-2)同窓会・霜仁会の設立

同窓会発足の動きは、山口県立医学専門学校で昭和24年以来3回目の卒業生が出た頃に本格化し、昭和27年4月になり当時の松本彰学長が初代会長に、第1回卒業生の大場育三氏が初代幹事長となって第1回同窓会総会が開催されました。また、山口県立医科大学では昭和28年に1回目の卒業生が出た頃、医科大学同窓会設立の動きがあり、同じ校舎で学んできた医専卒業生と医大卒業生とで、2つの同窓会を作るのかという賛否両論の議論が行われました。色々な話し合いの末に2代幹事長の宮本茂氏の下で、昭和28年11月両者は合併し一本化することになりました。昭和29年5月の同窓会総会で名称を「霜仁会」とすることが決まり、ここに医学部同窓会・霜仁会が誕生しました。その名前の由来は、宇部市の北にある霜降山(ここには、1179年厚東氏7代武光により築城された霜降山城跡があります)の「霜」と、医は仁術なりの「仁」をとり、松本彰学長が命名したと伺っています。

2）組織の沿革

2-1）霜仁会会長の選出

霜仁会設立の当時から、すでに“山口県立医専の卒業生から同窓会長を”という声があったそうですが、未だ卒業生は医師としての経験・実績が少ないなどの理由から、昭和 27 年 4 月に医学部長が霜仁会会長に就任し、実際の会務は卒業生が幹事長として執務することになりました。

前述の通り、初代会長は松本彰医学部長（昭和 27 年より）で、初代幹事長は大場育三氏（昭和 27 年より）でした。次いで 2 代幹事長は宮本茂氏（昭和 28 年より）、3 代が門田可宗氏（昭和 29 年より）、4 代が伊藤穆氏（昭和 30 年より）です。2 代目の会長は森茂樹学部長（昭和 32 年より）で、5 代幹事長は志満俊雄氏（昭和 32 年より）、6 代が岡本順二郎氏（昭和 34 年より）、7 代が津永甲次氏（昭和 35 年より）、8 代が佐々木通祐氏（昭和 36 年より）、9 代が藤井英雄氏（昭和 37 年より）、10 代が内野文彌氏（昭和 38 年より）でした。3 代目の会長は中村正二郎学部長（昭和 40 年より）で、4 代会長が井上一男学部長（昭和 44 年より）、5 代が有薗初夫学部長（昭和 46 年より）で、昭和 40 年から 52 年までの間の幹事長は、11 代幹事長の林公男氏（昭和 40 年より）が継続して担当しました。

昭和 48 年になり、初めて山口県立医専の卒業生である坂田冨士哉氏（昭和 24 年卒）が 6 代目の霜仁会会長に就任しました。以後、会長は卒業生から出しており、7 代目の会長は林公夫氏（昭和 52 年より）で、12 代幹事長は藤野巌氏でしたが、昭和 54 年から幹事長を廃止し、代わりに副会長 2 名を置くことになりました。初代副会長には渡邊裕氏と山本一男氏（昭和 54 年より）が就任しました。8 代会長は山本一男氏（昭和 63 年より）で、副会長は小倉浩二氏と横山敬氏であり、9 代会長は内野文彌氏（平成 6 年より）で、副会長は東良輝氏と水田英司氏でした。10 代会長は藤野巌氏（平成 10 年より）で、副会長は水田英司氏と浦山澄夫氏が務め、11 代会長は東良輝氏（平成 14 年より）で、副会長は浦山澄夫氏と福田進太郎氏でした。12 代会長は福本陽平（平成 22 年より）で、副会長は福田進太郎氏と藤村嘉彦氏であり、現在に至っています。

2-2）霜仁会総会と支部結成

昭和 37 年の藤井英雄幹事長の頃、霜仁会会報が発行され、霜仁会総会が開催されて総会で幹事長が決まるようになり、同時に会費の徴収が始まりました。また、昭和 38 年の内野文彌幹事長の時、霜仁会に専任の事務取扱者が雇用されて事務局ができ、同窓会としての組織的な活動がスタートしたようです。

さらに、この時期に霜仁会支部を設立する事業が立ち上がり、粟屋二郎氏（昭和 25 年卒）と藤井英雄氏（昭和 29 年卒）が担当し、防府支部が中部一夫氏（昭和 25 年卒）を中心に結成され、豊関支部（豊浦郡・下関市）は渡邊貞夫氏（昭和 24 年卒）が、萩・長門支部は大石保氏（昭和 26 年卒）が、大島支部は武居敏輔氏（昭和 26 年卒）が、岩柳支部（岩国市・柳井市）は松浦巖氏・松浦康彦氏（昭和 24 年卒）、檜垣慶典氏（昭和 26 年卒）が、山口支部（阿武郡・山口市・吉敷郡）は粟屋二郎氏が、周南支部（徳山市・下松市・新南陽市・都濃郡）は佐藤慶寛氏（昭和 24 年卒）が、宇部･小野田･厚狭支部は志満俊雄氏（昭和 24 年卒）、緒方正道氏（昭和 26 年卒）が中心となって、結成されました。一方、山口県外でも、島根支部が赤間宏氏（昭和 26 年卒）により、九州支部は宮本茂氏（昭和 24 年卒）が、四国支部は福谷啓也氏（昭和 24 年卒）が中心となって結成されました。

現在、霜仁会支部は、関東、中京、京滋、北陸、大阪、兵庫、岡山、広島、山陰、四国、岩国、柳井、周南、山口、防府、長門、萩、宇部、小野田、厚狭、美祢、下関、北九州、福岡、佐賀、長崎、佐世保、宮崎、熊本、大分、鹿児島、沖縄、山口大学医学部の 33

箇所になり、各地で支部総会が開催され、活動が続けられています。

また、4年に一度開かれる日本医学会総会の折に、開催地の霜仁会支部で同窓生が集う「霜仁会懇親会総会」が毎回開催されています。最近では、第5回懇親会総会が平成11年4月に関東支部のお世話で、第6回が平成15年4月に福岡支部で、第7回が平成19年4月に大阪支部(京滋・兵庫支部の後援)で行われ、医学部長や附属病院長と共に会員一同が集合しました。第8回は平成23年4月に東京支部で開催する予定でしたが、3月に東日本大震災が起こったために休会となりました。

2-3)霜仁会事業の展開

昭和43年、当時の林公夫幹事長が学術研究の発展と奨励のために、「霜仁会学会賞」の設立を提案しました。そこで、霜仁会学術振興賞(本賞・奨励賞)が設けられ、昭和54年には、社会において顕著な活動を行った同窓生を表彰する社会活動部門賞が創られました。昭和59年に、山口大学医学部産科婦人科学元教授の藤生太郎先生の遺志による寄付金を基金として藤生賞ができ、学術振興賞に加わりました。これらの賞は毎年公募が行われ選考委員会の過程を経て、霜仁会総会で表彰式が実行されています。近年、応募される論文の質が高まり、欧米の一流誌に掲載された業績が受賞するようになりました。

また、昭和55年には霜仁会は公益社団法人の認定を受け、諸事業を行う上で大きなプラスになりました。その後、国が新たに法人法を制定したため、定款の改定などを行い、平成25年4月に一般社団法人へと移行しています。

昭和56年に霜仁会は事業として宇部検査センターを吸収し、霜仁会検査センターを作りました。これは、昭和51年頃に同センターで産婦人科の細胞検査診断を始めたことに由来し、山口大学医学部病理学教室の協力の下に事業を続け、現在では検査センターを霜仁会医学交流会館内へと移しています。最近では、研究用の病理組織標本の作製も行い医学研究の一助になっています。

平成9年5月には、念願の同窓会館(創立50周年記念会館)が医学部構内に竣工しました。同窓会館建設の声は、すでに創立30周年を迎えた頃から上がっており、様々な経緯を辿りながら、歴代霜仁会執行部の努力により、霜仁会員からの寄付金を基に山口大学医学部創立50周年記念事業として、日本庭園にマッチした洋風の会館が完成しました。また、平成20年1月に医学部に隣接する所に霜仁会医学交流会館を建設し、ここに本部・事務局と検査センター、医学交流のための会議室を置き、円滑な霜仁会活動が出来るようになりました。

霜仁会館

3)現在の活動と今後の課題

3-1)現在の霜仁会活動

霜仁会活動は定款に則り、医学教育・研究の振興、地域医療と公衆衛生の充実を目的とし、会員相互の親密な交流と啓発ならびに、母校である山口大学医学部医学科への支援・協力を行っています。年間の活動方針は毎年代議員からなる総会において決定し、執行部の役員は25名以内の理事と2名の監事を置き、理事の内から会長1名と副会長2名を選出しています。

会長は会務を7つの委員会に分け、毎月開催する理事会において各委員会での事業の進捗状況を検討しています。霜仁会総会ならびに各委員会での事業内容は、毎年4回発行す

る霜仁会会報によって会員に報告し、山口大学医学部・附属病院の動向や、各支部および会員の現状などもこの会報によって伝えるようにしています。

3-2)今後の課題

現在、何といっても学生会員を含めた若手会員が、霜仁会に親しみや関心を持ってくれることが重要課題です。霜仁会ではその一環として、平成19年4月から、病棟での実習が始まる5年生に大学のロゴマークのはいった白衣を贈る白衣着衣式を行い、医師としての道を歩き始める諸君にエールを送っています。今後も、会員相互の親睦と母校山口大学医学部(医学科)の発展のために支援・協力を行って参ります。

謝辞:本文の内容の多くは、山本一男氏(昭和32年卒)の霜仁会会報250号、251号252号、253号の記事や、山口大学医学部創立30周年記念誌、山口大学医学部創立50周年記念誌を参照しました。

6 | 双樹会(医学部保健学科)

[前身校]

・山口大学医学部附属看護学校(同窓会名　嫩会)

昭和 32(1957)年 4 月	山口県医科大学附属高等看護学校を設置
昭和 42(1967)年 6 月	山口大学医学部附属看護学校に改称

・山口大学医学部附属臨床検査技師学校(同窓会名　真締会)

昭和 35(1960)年 4 月	山口県医科大学附属衛生検査技師学校を設置
昭和 42(1967)年 6 月	山口大学医学部附属衛生検査技師学校に改称
昭和 47(1972)年 4 月	山口大学医学部附属臨床検査技師学校に改称

・山口大学医療技術短期大学部(同窓会名　山口大学医療技術短期大学同窓会)

昭和 54(1979)年 10 月	山口大学医療技術短期大学部を併設（看護学科）
昭和 56(1981)年 4 月	衛生技術学科を新設

山口大学医学部保健学科(同窓会名　双樹会)

平成 12(2000)年 10 月	山口大学医学部保健学科を新設（看護学専攻、検査技術科学専攻）

山口大学創基 200 周年記念を祝って

双樹会会長　米田 純子

山口大学は東京大学、東北大学に次ぐ 3 番目に古い大学として歴史をもつ国立総合大学で、その開学 200 年の記念行事に携われることに、大きな感激と喜びを感じています。

保健学科の沿革は、国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令により、平成 12 年 10 月に山口大学医学部に設置されました。開設時に、看護学専攻、検査技術科学専攻の 2 専攻が設置されまして、平成 13 年 4 月から学生を受け入れています。

上記 2 専攻は、昭和 54 年 10 月に国立学校設置法の一部改正により、山口大学医療技術短期大学部が山口大学に併設され、山口大学医療技術短期大学部の看護学科、衛生技術学科を母体としています。医学部保健学科になって同窓会名も「双樹会」と命名されました。看護学専攻、検査技術科学専攻の 2 専攻の 2 本の樹がしっかりと結びつき・支えあい、その結果、会員相互ならびに大学を同窓会が支えあい、盛り立てていくことですばらしい医療従事者を輩出し、日本の医療に貢献していこうという熱烈な意思のもとに、同窓会が 1 つになりました。

現在、双樹会会員数は、看護学専攻 3,204 名、検査科学専攻 1,508 名、合計 4,712 名となっています。

200 周年に寄せて

医療技術短期大学部　昭和 59 年卒　長田英一
（小郡第一総合病院）

自分の過ごした学生時代は医療技術短期大学部だったため、吉田キャンパスでの１年次の講義はなかった。入学後すぐに小串キャンパスでの大学生活が始まった。30 年余り前の出来事だ。短大時代の教官に「中学・高校と違って大学ですから自分たちで考えて勉強するところですよ。」と言われたことを思い出す。

私の出身は大分県で家を出てから、山口県での生活の方がかなり長くなった。私たちの学年は大学病院附属の臨床検査技師学校から山口大学医療技術短期大学に変わった直後であったため、先生方の熱心な指導を受けることができた。最終的には「国家資格」を取得する事が最大の目標であった。また卒業したら「すぐに使い者になる臨床検査技師」が山大のモットーであった。

半世紀を生きた人生で、一人暮らしを始めたのもこの時期からだ。お酒やタバコ、マージャンと一通りの大学生活を人並みに体験した。サークル活動や医学祭の経験もした。当たり前のことであるが、山口大学で過ごした学生時代に多くの初めての体験をした。それは同期の仲間や先輩方、先生方から教えてもらった。今思えば、物事の良し悪しにかかわらず、あらゆることをスポンジのように吸収して行けたのもこの時期だ。

検査の実習では検量線を引いたり、病理標本のスケッチをしたり、血液のスメアを引いたりした。顕微鏡を覗きながら描く、臓器のスケッチは非常に難しく、絵画的センスが必要になるとは思いもよらなかった。血液標本を作製するに当たっては、力の入れ具合のバランスが必要で、強すぎず弱すぎず、きれいなスメアが引けるまで随分と練習した。使った器具を洗剤で洗浄した場合は、すすぎを 20 回は行う。一般的には考えもよらない回数であった。正確な診断を行うには、きれいな器具や環境、きれいな標本が必要であると学生時代に教えられた。

私たちは移行期であったことから、病院実習が１年間あった。夜遅くまで実習がかかり、大学病院の指導する先輩技師にも多大な負担をかけてしまった。私はよく病院でフラスコなどの検査器具を破損した。山口弁で「また、やぶったんか！」と叱られた。

「山口大学に進学していなかったら？」と、考える時がある。国家資格も取得し、就職し、結婚、父親になり、家も建てた。人並みのことはできた人生の源は、山口大学にある。指導者や人との出会いで今の自分がここにいる。明治維新の立役者たちも、人と人とのつながりで偉業を達成できたと思う。先人たちを見習い人と人との関係を大切にし、これからの人生を歩んで行きたい。

第 39 回医学祭（昭和 58 年）
医療技術短期大学部正門

白衣に着替えての実習風景

薬庫･･･整然と並べられた試薬

ここから始まった。

医学部附属看護学校　昭和 51 年卒　猪上 妙子
（山口大学医学部附属病院　看護部長）

私は、昭和 48 年に医学部附属看護学校へ入学しました。

当時の看護学校の教室は、現在保健学科ラウンジとして使用されている建物と、現 2 病棟 1 階東側にありました。入学当初は教室でワイワイやっていると先輩から「静かに」と注意を受けたこともあり、大変なところへやってきたなとびっくり、少し怖くもありました。

同級生 39 名のほとんどが寮生活を送り、「同じ釜の飯」を食べて 3 年間を過ごしました。初めての寮生活、講義と実習そして試験、ハードなカリキュラムをこなしながら、試験の前には後輩や先輩への慣れない夜食作り、先輩たちの過去問をみんなで回しながら、とにかくは「60 点！」をめざし、体重計を気にしながら、しっかり夜食を食べて乗り切っていました。出席番号 1 番の私が返された答案用紙を見てほっとするとみんなもほっとしたり、ため息ついたりしたことを思い出します。

実習が終わり寮に戻って、一番先にすることは、白衣（今はユニホームというけれど…）にビシッとアイロンをかけること、毎朝ナースキャップ（これも懐かしい）をつけて、ウェストをキュと締めていざ実習へ…。クラブに合コン、医学祭ではみんなで芸コンの準備に必死になり、また教務主任の故松尾縫先生からは事あるごとに、親心・看護の先輩としての温かくも厳しいお言葉をいただき、門限ギリギリには全力疾走しながら、勉強に遊びにと精いっぱい走った学生生活でした。

私は卒業後から現在まで附属病院で勤務しています。新山のおばちゃん、おにいちゃん、みつやのおむすび、二反田、小串マーケット等々、小串キャンパスの周囲はすっかり変わってしまいました。附属病院では病院整備計画が始まり、さらに変化していきますが、看護師の私はここから始まり、山口大学に守られて時を重ねてきたことをあらためて感じています。思い出がいっぱいです。

嫩寮（現：保健学科研究棟）前でのバレーボール

運動会での騎馬戦

7 常盤工業会(工学部)

昭和 21(1946)年	宇部工業専門学校同窓会発足 初代会長に高良吉宗氏就任 同窓会名簿発行
昭和 28(1953)年	宇部工業専門学校同窓会を発展的解消し、同窓会「常盤工業会」発足 第２代会長に柳井正人氏就任
昭和 36(1961)年	会員名簿発刊 運動資金不足により活動を縮小
昭和 48(1973)年	常盤工業会を再建発足
昭和 51(1976)年	常盤工業会会報『常盤』を創刊
昭和 53(1978)年	学生食堂「工友館」の運営に参画
昭和 57(1982)年	社団法人に移行
昭和 59(1984)年	50 周年記念事業会発足
昭和 63(1988)年	常盤工業会館竣工
平成 9 (1997)年	常盤工業会館増築
平成 24(2012)年	一般社団法人に移行

工学部同窓会「常盤工業会」の沿革と活動の現状

常盤工業会元副会長　梶返 昭二（山口大学名誉教授）

I. 同窓会の沿革

(1)常盤工業会前史

昭和 16 年 12 月、工学部の前身である宇部高等工業学校の第 1 回卒業生 163 名が学窓から巣立って行った。以後、将来の同窓会設立を目指して、昭和 19 年 9 月の第 4 回卒業生まで、卒業時に設立資金が積み立てられていたが、戦後の預金封鎖で凍結され、同窓会設立の計画は頓挫した。

その後、卒業生有志の間で同窓会設立の機運が高まり、昭和 21 年 11 月に開催された第 1 回総会で、高良吉宗(精密機・昭和 16 年卒)を初代会長に選出し、同窓会が初めて発足した。その活動の始めとして、ガリ版刷りの同窓会名簿を同年 12 月に出した。

以後、母校への種々の金銭的サポート、在学生の活動援助、名簿の印刷発行などを行った。

(2)常盤工業会の発足

常盤工業会の前身である「宇部工専同窓会」は、上述のような活動を行なったが、母校の宇部工専は、昭和 26 年 3 月に最後の卒業生を送り出して自然廃校になった。

昭和 28 年 4 月、母校の大学昇格後初めての卒業生が巣立った機に、宇部工専同窓会は発展的に解消され、高工・工専・工学部の全卒業生を対象とする同窓会「常盤工業会」が、新たな会則を定めて発足することとなった。第 2 代会長には柳井正人(採鉱・昭和 16 年卒)が就任し、最初の仕事として同窓会名簿(昭和 28 年版)の編集作業が開始された。この名簿は本格的な印刷製本によった。

また、この機に、宇部市内近郊の各職場を単位とする同窓会支部が結成された。

ついで、昭和36年10月には、会員名簿(昭和36年版)が完成した。この名簿の発刊には、同窓会の基盤を確立する願いが込められていたが、運動資金の欠乏や人手不足で、会の活動は縮小を余儀なくされた。

そして、これより約10年後に常盤工業会の再建がなされるまで、同窓会活動は、各学科の同窓会により維持、存続されることとなった。次にそれらを列挙する。

・機械工学科同窓会(昭和40年頃に発足)
・資源工学科同窓会(工専時代の採鉱科・鉱山機械科、大学時代の鉱山学科・資源工学科により編成)
・工業化学科同窓会(常盤化学会)(昭和31年7月に発足)
・土木・建設工学科同窓会(土木和会)(昭和33年に土木工学科同窓会として発足)
・電気工学科同窓会(昭和37年7月発足)
・生産機械工学科同窓会(昭和46年発足)
・化学工学科同窓会(昭和48年発足)

(3)常盤工業会の再建

昭和47年初頭、有名無実化していた常盤工業会を再建しようとする機運が高まり、当時工学部長であった同窓生の苣木浅彦(採鉱・昭和17年卒)の呼びかけで、同年11月、宇部近郊在住の同窓生有志と工学部に在職する同窓生らで、昭和48年4月新会則を定め、晴れて常盤工業会が再建発足した。

第3代会長には奥山勝美(精密機・昭和16年卒)が就任し、同年6月、会員名簿の発行を中心とする母校創立35周年記念事業の募金活動に着手。この名簿の編纂には多大の労力を要したが、吉野隆(工化・昭和19年卒)ら母校在職者の努力により、同年8月に発行された。昭和50年5月、藤津哲夫(採鉱・昭和17年卒)が第4代会長となった。

昭和51年2月、庶務幹事斉藤隆(土木・昭和32年卒)を編集責任者として、念願の常盤工業会会報『常盤』が新聞タブロイド版で創刊された。年1回の発行で、以後昭和55年の6号までこの形式で刊行された。

昭和52年6月に第5代会長に貞永貞雄(工作機・昭和18年卒)を選出し、年会費を徴収する登録会員制をとることとなった。

昭和53年4月には、工学部当局からの要望を受け、旧常盤寮の新寮への建替えに伴い新築された学生食堂「工友館」の運営に参画し、やっと専従職員1名を確保した。

翌昭和54年5月には、母校創立40周年記念写真集を発行した。また会報『常盤』は、時の編集委員長・梶返昭二(工化・昭和23年卒)の提案により、昭和56年発行の7号から誌面をA5判横書き冊子に改め、年2回定期的に発行された。会員名簿は、隔年定期発行となった。

(4)常盤工業会の会館建設と社団法人化

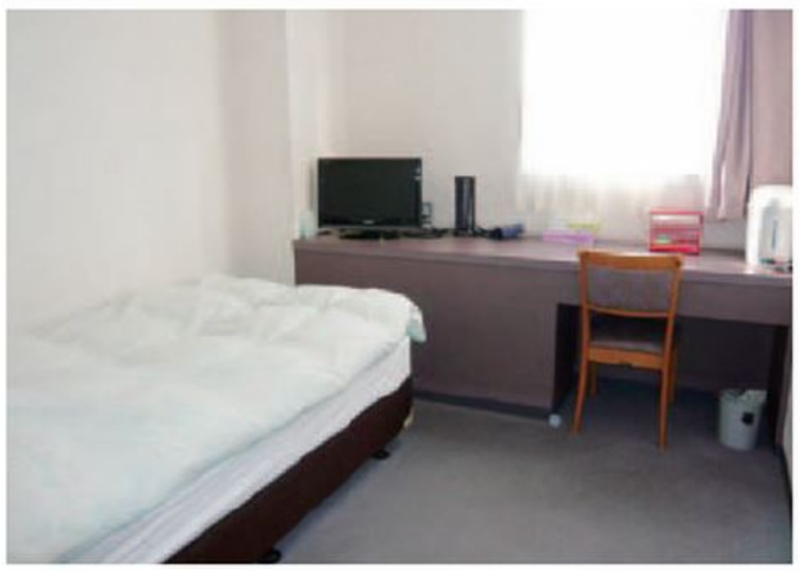
同窓会再建後の次の大きな目標は、独自の同窓会館を持つことであった。

まず建設候補地として工学部構内の敷地借用が考えられたが、文部省に認められず、ついであちこちの私有地が候補にあがったが、結局、当時の工学部テニスコートに面する中国電力所有の空き地に絞られた。貞永会長らの精力的な働きかけにより、同窓生の中国電力㈱常務・和泉晋一(機械・昭和17年卒)の協力を得て、極めて好意的な条件で、昭和56年9月、先ず452.8m^2(137坪)が確保された(なおその後、昭和60年5月に更に525.9m^2(159坪)が追加購入されている)。

かくして最適地に会館建設用地が入手されたが、次のステップとして、会の法人化が急務となった。そのための設立趣意書と定款案が作成され、各種事務手続きを経て、昭和57年7月、県の許可を得、晴れて「社団法人常盤工業会」が誕生した。その後、昭和58年に会館設立準備委員会が発足し、昭和59年に会館の建設を中心とする50周年記念事業会が発足した。

以下に会館完成までにたどった道程を、年月

会館全容



会館宿泊室

会館ロビー

平成 26 年総会

を追い、項目のみ挙げて記す。

・昭和 59 年 12 月:50 周年記念募金趣意書を全国に発送し募金活動開始。なお、昭和 60 年 5 月、会長に河野悟(機械・昭和 19 年卒)選出

・昭和 61 年 12 月:『常盤』18 号(50 周年記念特集号)で募金状況の報告と募金促進

・昭和 62 年 8 月:会館建設起工式

・昭和 63 年 2 月:会館竣工式

・昭和 63 年 4 月:会館竣工披露祝賀会

常盤工業会会館の完成により、母校の一室借用の事務局も新しい会館に移り、事務局長・田代菊丸(採鉱・昭和 22 年卒)がその運営に専念した。平成元年秋には目標額の 1 億円を突破、50 周年記念事業は完了した。

なお、この会館は、立地条件の良さから、母校工学部の教育活動に利用され、また種々の会場としても利用されることとなった。

その後、一層の充実を図るため、会館施設の隣接地を駐車場及び増築用地として、平成 5 年 10 月、中国電力㈱より 857m^2 入手した。ついで、平成 7 年 2 月に常盤工業会会館増改築事業募金を開始、平成 8 年 8 月増改築起工、翌 9 年 3 月竣工して、現在の瀟洒な白亜の常盤工業会会館が完成した。同年 5 月に第 7 代会長として佐々木孝治(機械・昭和 35 年卒)が就任した。

Ⅱ. 常盤工業会の活動の現状

(1)会員相互の交流活動

近年、常盤工業会は、約 24,000 名の会員と、全国に約 40 の支部をもつ大きな規模に成長した。本会は、年 2 回(7 月と 12 月)常盤工業会誌『常盤』(平成 16 年発行の 54 号より B5 判に変更)を発行して、会の活動や行事予定、さらには母校の様子等を広く伝えている。また、隔年ごとに会員名簿を定期的に発行(個人情報保護云々のため、名簿は 2003 年(平成 15 年)版発行以後中止)した。

常盤工業会会誌「常盤」

(2) 母校の教育・研究活動に対する助成、地域における工学教育振興等の社会的活動

以下に、母校への支援事業を列挙する。

・工学部の「常盤工業会奨学金」制度への支援及び学生の人材育成等の支援
・学生のサークル活動、学園祭に対する助成
・就職支援特別講義の実施
・「常盤賞」の授与(優秀な学生の表彰)

地域の工学教育振興事業としては、県内の小中学生を中心に、将来を担う人材育成事業への助成を行なっている。また国際交流事業の一環として留学生と日本人との交流の場を設けている。

工学部では平成 20 年、「工学部創立 70 周年記念事業」を立ち上げ、その主な事業として「学術資料展示館」を開設したが、その建設資金獲得に、当会が大いに貢献した。

(3) 「一般社団法人」への移行について

平成 20 年 12 月の公益法人制度改革により、常盤工業会は公益社団法人か一般社団法人のどちらかを選択せざるを得なくなった。そこで鋭意検討の結果、「一般社団法人」へ移行することを選択し、そのための新定款案作成の準備にとりかかったが、現行定款に沿う「総会」を開催する必要があった。

常盤工業会では、従来「評議員会」を総会として開催していたが、行政庁より指導を受けることとなった。そこでまず、現行定款に代議員制を導入し、1 万人以上の委任状をとり、形として 11,000 余名の出席のもとで臨時総会を開催し、平成 23 年度から「代議員制による総会」の開催を可能とした。かくして選挙で、初の代議員を選出した。

平成 23 年 5 月、代議員制を導入した初めての通常総会が開催され、一般社団法人常盤工業会の新定款案を決議した。

その後、行政庁との協議を重ね、認可され、平成 24 年 4 月 1 日付で、ようやく「一般社団法人常盤工業会」への移行登記が完了した。

(4) 「一般社団法人」としての常盤工業会

一般社団法人としての「常盤工業会」の概要を次に示す。

会員構成:会費納入会員が正会員となる。正会員から選出された代議員が、法人法上の社員となる。全国を 6 ブロック(東日本・東海北陸・関西・中四国・山口・九州)に分け、ブロックごとの定数を決め、2 年に一度代議員選挙を行う。

役員:理事及び監事を置く。理事のうち 1 名を会長に、3 名以内を副会長とする。会長が法人法上の代表理事となる。

総会:総会の構成員は代議員で、この総会をもって法人上の社員総会とし、総会は、会の最高意思決定機関となる。

理事会:法人の業務執行の決定、規則の制定、改正及び廃止等の職務を行なう。

事業内容:

公益目的支出計画における公益目的事業

①特定寄付―山口大学工学部および山口大学後援財団への寄付
②継続事業―人材育成支援事業

その他の事業

①山口大学学生に対する教育支援事業
②地域の学術及び文化の発展に寄与する事業
③会員相互の交流及び相互啓発に資する事業(会誌刊行、地域同窓会交流事業等)
④山口大学同窓会支援事業
⑤収益事業

以上

上記のように、常盤工業会は、平成 24 年 4 月から、装いも新たに「一般社団法人常盤工業会」となり、佐々木孝治会長の統括のもと、役員および職員が一体となって会の発展のために尽力し、現在に至っている。

8 農学部同窓会（農学部・共同獣医学部）

昭和 34（1959）年	山口獣医畜産専門学校及び山口大学農学部の同窓会を統合して 山口大学農学部同窓会発足 初代会長に坂田利明氏就任
平成 13（2001）年	山口獣医畜産専門学校跡地に記念碑建立
平成 22（2010）年	下関市長府の農学部跡地に記念碑建立
平成 24（2012）年	共同獣医学部設置に伴い、山口大学農学部・共同獣医学部同窓会（仮称）として運営

農学部同窓会― 歴史のひとコマ

農会前常任幹事長　田中 秀平（山口大学教授）

1. 同窓会概要

1）設立

農学部同窓会は、農学部の創設母体である山口獣医畜産専門学校（昭和 19 年設置）卒業生と山口大学農学部（昭和 24 年設置）卒業生で構成されている。これらは、異なる二つの同窓会であったが、昭和 34（1959）年に統合され、現在に至る。

山口大学農学部は、下関長府時代には農学科と獣医学科の 2 学科制で学生定員 1 学年 60 人、昭和 41（1966）年に現在地の山口市吉田に移転後、農芸化学科新設により 1 学年 100 人となった（平成 24 年 3 月時点で学生定員 130 人）が、いずれにしても規模の小さい学部として推移してきた。従って、同窓会の会員数も平成 24（2012）年 3 月時点で約 6,100 名（物故者含む）に留まっており、山口大学の中では規模の小さい同窓会である。しかし、小人数の学部であったからこそ、教員・事務職員も含めた人と人の交流が濃密で、学生時代の体験と学びは卒業生にとって人生を支える大きな財産となっている。

2）組織運営

統合後の山口大学農学部同窓会の初代会長を坂田利明（元獣医専同窓会理事長、獣医専 1 回卒）がつとめた。その後、中野蕙二（獣医専 5 回卒）、新谷孝之（獣医専 2 回卒）、田中敏正（獣医専 4 回卒）、岡野幸男（農学科 9 回卒）、小川　信（農学科 3 回卒）がそれぞれ会長をつとめ、現会長を稲原輝昭（獣医学科 8 回卒）がつとめている。会長就任者には山口県庁OBが多い。一方、歴代会長の中でも中野蕙二は旧教官で、現職当時から 15 年間もの長きにわたり会長をつとめ、諸々の課題に奔走し貢献された。また、小川信は、山口県農業協同組合連合会職員を経て衆議院議員をつとめ、その後同窓会長に就任している。

同窓会の事務局体制は、会則により、会長・副会長と農学部に勤務する職員（主に教員）により構成される常任幹事会が担うこととされている。統合後の同窓会事務局では常任幹事長・総務を浜崎詔三郎（農学科 8 回卒）が、会計を山根秀夫（農学科 6 回卒）が担当する体制が長く続き、ご苦労いただいた。農学部には他にも数人の卒業生が教員として常時在籍していたので、他の業務にはこれらの教員が分担し当たってきた。前述のとおり本会は小規模同窓会であることから、事務局に事務職員を配置せず、諸々の雑務も含め全ての業務を卒業生教員の手作業で行ってきた。この体制は基本的に現在も変わらない。浜崎・山根体制の後、常任幹事長は、

松富直利(農学科 17 回卒)、田中秀平(農学科 20 回卒)を経て、平成 24(2012)年度から音井威重(獣医学科 30 回卒)が担当している。

3)事業

会報と会員名簿の発行および総会開催が定期的な事業として行われている。会報は 5 年に 1 回の発行であったが、平成 10(1998)年から毎年発行となり、平成 24 年度には第 25 号を発行している。また、3 年に 1 回発行してきた会員名簿は、当初は無料配布していたが、平成 10(1998)年からは作成を業者委託とし有料注文制に変更した。会の財源が、会員名簿発行のたびに半減し、大きな財政負担となっていたことが背景にある。

同窓会事業のひとつに支部会、同期会、研究室同窓会等への開催補助金制度がある。会員名簿を有料としたことで会の財政が上向きとなったことから、新たな会員サービスとして開始された。金額的には通信費程度にしかならないが、多少なりとも会員の交流推進を支援できればとの考えによる。

2. キャンパス移転と記念碑

農学部は獣医畜産専門学校の時代を含め 2 回の移転をしている。移転をめぐる動きや移転先での生活に、当時の教員・学生の間に様々なエピソードが残されている。同窓会報や同期の仲間で出版された「記念誌」等から、当時の状況を伺わせる記事をひろってみた。

1)キャパス移転 1　(小郡から下関長府へ)

獣医畜産専門学校は当時の吉敷郡小郡町(現在の小郡ふれあいセンター)に在ったが、昭和 23(1948)年 12 月に下関市長府町に移転した。獣医畜産専門学校第 4 回卒 50 周年記念誌「角笛」に小田良助先生(旧教官、現山口大学名誉教授)による次の記述がある。

「…(前略)昭和 23 年 12 月 13 日いよいよ下関市長府町へ移転することになった。…(中略) …私は軍隊で兵馬輸送の経験があり、年齢も若いことから、国鉄貨物車輸送の学校側責任者に抜擢された。事務室の机や椅子、戸棚類。研究室の備品や実験台、標本、学生机と椅子などが日本通運の馬車隊によって小郡駅に運ばれ、貨物車に搭載された。全部で 12 車輌位あったと思う。…(中略)…新校舎は、長府駅から約 1kmの距離にある江下町に事務室、校長室(学部長室)、講堂、会議室、食堂と売店、それに来年度から入校する農学科関係の教官室、研究室と講義室が設置され、隣の前八幡町には、山口獣医畜産専門学校と新制獣医学科共通の教官室、研究室、それに付属家畜病院が設置された。

このように書くと如何にも立派なように思われるが、これらの校舎は戦前、神戸製鋼所の社員寮であったものをニュージーランド進駐軍が接収して使っていた。彼らが本国に引き揚げ空き家になっていたものを改修して校舎にしたもので大変お粗末そのものであった。大学当局は直ぐにでも山口に新校舎を建設するからと口癖のように言っては宥められた。結局 18 年間辛抱した。一方、長府町は城下町で人々は上品で親切であった。……(後略)」

このような状況の中で、山口への移転または新校舎建設は教職員ばかりでなく学生の間でも念願となっていた。同窓会報第 15 号に佐古宣道氏(農学科 8 回卒、元佐賀大学・九州共立大学学長、元山口大学監事)の次の記述がある。

「…(前略)当時の長府は、毛利藩の城下町としての色合いの濃い落ち着いた町並みでしたが、…(中略) …農学部の校舎はかなり老朽化が進んだボロ校舎でした。農学部自治会の委員長として、校舎の新築あるいは学部の統合移転についての要望書を持参して、当時の松山学長にお会いし、直にお願いしたことがあります。」

一方、当時の学生生活について、同窓会報に岡野幸男氏(農学科 9 回卒、元同窓会会長)による次の記述がある。

「…（前略）《友人》日常的に同級生、先輩、後輩との付き合いも密でした。研究室ではゼミを通した意見交換、松原寮では時としてアルコールをまじえて深夜までの語り。故郷のこと、映画のこと、欠席した講義のノートの貸し借り。これは学生数が少なかったこと（同級生は農学 22 人、獣医学 17 人）、また他の学部との交流がほとんどなかったこともあるのかもしれません。しかし、人数の多寡は別にしてもこの時の友情は今も小生の心に宿り続けています。

《町の方々》　小さな城下町・長府の方々には大変お世話になりました。下宿のおばさんは母親代わり、家庭教師のお宅では家族ぐるみでおつき合い頂き、うまい夕食をご馳走になりました。（後略）…」

2）キャンパス移転 2

（下関長府から山口吉田へ）

農学部は、昭和 41（1966）年 10 月に下関市長府から山口市吉田の現在地に移転した。農学部の山口市移転をめぐる次のエピソードが、上田正士氏（獣医学科 13 回卒、元同窓会副会長）により記述されている（同窓会報第 23 号から）。

「…（前略）農学部自治会活動で忘れられないことがある。定かではないが、3 年時終わりか 4 年時早々の頃だった。下関市長（当時は木下市長?）から「農学部学生さんの本音を聞きたい」との申し出があり、小生もメンバーの一員として参画した。美しい大きな庭園の記憶があるので、場所は毛利長府庭園ではなかったろうか。市長から「25 万市民を擁す県最大の都市下関としては、唯一の国立大学としての農学部を残したい。新たな用地も確保するので、学部存置に協力が貰えないか」というものであった。数日後、自治会は学部長（弥富先生だったか）に面談を実施し、市長の要請を伝えたところ、「宇部の 2 学部を除く全学部が山口市平川に移転統合する方向で進んでいる。文部省もこの案を既に了承済みである。後戻りは不可能。」との説明を受け、農学部の山口移転が確実になっていることを知った。かくして下関在置案は儚くも潰えた。（後略）…」

下関市には、農学部を下関に残したい意向があったようである。一方、学生の間には、校舎の新築を望みながらも、城下町長府への深い愛着があり、山口移転には後ろ髪引かれる思いもあった。濃密な友人関係と友情そして市民の方々から大切かつ親身にお世話いただいたこと、これらへの感謝の気持は今も変わらない。

山口移転の際の詳しい記述は手元の資料には見あたらないが、同窓会報第 23 号に次の記述がある。

「…（前略）当時農学部は下関長府にあり、驚愕するほどのボロ校舎でした。すでに山口吉田への移転計画が進行中で、補修には金をかけない様子の実験室の床はかなりの部分で、モルタルがはげ土が見えている状態でした。…（中略）…夏期休暇を利用していよいよ新校舎への引っ越しです。食品化学・土壌肥料学共同学生実験室は一階売店横（後に学生談話室、現学務係事務室）にあり、実験台はこれまでとは雲泥の差で白木の厚さ 5 cm天板の 3 枚合わせでした。塗料を塗るのはもったいないくらいでしたが、長持ちさせるためにとのことで小林邦彦先生のご指導で耐薬品性のアニリンブラック染料を数回塗り重ねました。また、引出しにはガラスピペット類が収納できるよう手作りの固定枠を付けたのも思い出に残っています。」（松富直利氏、農学科 17 回卒、元同窓会常任幹事長、現山口大学名誉教授）

3）記念碑建設

2 回のキャンパス移転に関わる記念碑が二つある。一つは「山口獣医専跡地・山口大学農学部獣医学科発祥の地」を記念するもので、小郡町下郷（現山口市）の獣医専跡地である「小郡ふれあいセンター」と道路をはさんで向かい側の道路沿いに建設されている（写真）。建設の経緯について同窓会報第 14 号に山縣宏氏（獣医専 3 回卒）の次の記述がある。

山口獣医畜産専門学校跡地に建設された記念碑(山口市小郡)

「…(前略)山口大学獣医学科の前身である山口獣医専門学校は、敗色日毎に深まる第二次世界大戦末期の1944(昭和19年)4月、山口県小郡町下郷に創設された。以来通算50有余年、半世紀以上の星霜を閲した今日、いささか遅きに失した感があるが、"発祥の地に記念碑"をとの議が興った。趣意を踏まえて、山口獣医専、山口大学獣医学科卒業生及び縁りの方々の基金を仰ぎ、過半来、建立事業を進めて来たが、このほど除幕式を開催(平成13年3月4日)する運びとなった。

発祥の地にふさわしい、そしてまた、関係者の熱い憶いを託した、この1基の石碑が、創立の歴史的背景、建学の精神、等々を未来永劫に社会、後進に伝えてくれることを切願するものである。」

また、もう一つの記念碑は下関市長府の農学部跡地(現下関市長府運動公園)に、2010(平成22)年に建設されている(写真)。前述のとおり、長府時代の卒業生には長府の町への大変熱い思いがあり、以前から記念碑の建設を望む多くの声が寄せられていた。山口大学開学60周年を機に、当時の同窓会長小川信の決断により記念碑の建設事業を行うこととなった。早速、会員に募金を呼びかけたところ、建設経費を上回る額の基金が集まった。

除幕式当日の様子が同窓会報第23号に紹介されている。

懸案となっていた「山口大学農学部創設の地」記念碑が、平成22年3月末に下関市長府町江下の下関市長府運動場内(旧農学部本部並びに農学科跡地)に完成し、4月24日に除幕の式典を挙行しました。

当日は、ご来賓として山内直樹農学部長、中尾友明下関市長、田原望武先生(旧教官)にご臨席いただき、また同窓会から小川会長、上田副会長、岡野前会長、中野元会長、藤岡さん(下関支部)はじめ会員10名が出席しました。

式典では、除幕の後、小川会長が挨拶の中で「農学部学生が17年間、長府の方々に大変お世話になったこと」の御礼を述べ、また山内農学部長と中尾市長からも暖かいご祝詞をいただきました。」

多くの卒業生が長府の「山口大学農学部創設の地」記念碑を訪ねている。中には数回訪ねたという卒業生もいる。この碑の前に立つだけで青春の日々の輝きが鮮やかに蘇ってくるのであろう。

農学部長府校舎跡地に建設された記念碑(下関市長府町)

3. 今後の同窓会組織

平成24(2012)年4月、山口大学と鹿児島大学の獣医学科による共同獣医学部の設置により、旧農学部はふたつの学部に分割された。学部に合わせ、同窓会組織もふたつに分割する案もあり得るが、当面は山口大学農学部・共同獣医学部同窓会(仮称)として従来通りの組織で運営することとしている。長府時代の卒業生の間には、学科を超えた深い交流、友情が築かれており、同期会もしばしば合同で開催されている。小さな同窓会であることの良さやその歴史を今後も大切にしていきたいものである。

注)獣医畜産専門学校の設立の背景と歴史並びに国立大学移管の経緯は、山縣　宏 氏(獣医専3回卒)により「山口獣医学雑誌」37号23-30頁に詳述されていて興味深い。

9 技経会(技術経営研究科)

平成 19(2007)年	技術経営研究科同窓会「技経会」発足 初代会長に田上實氏就任

技術会副会長　福代 和宏

Ⅰ　同窓会の沿革

同窓会会員の特色とも関係するので、本稿ではまず、技術経営研究科の沿革について述べておく。

大学院技術経営研究科は技術経営人材育成を目的として平成 17(2005)年 4 月に開設された専門職大学院である。学生は主として西日本各地の社会人である。

技術経営研究科は、設立当初、宇部教室において教育を実施していたが、北部九州地域における技術経営人材育成のニーズに応えるべく、平成 18(2006)年度には北九州市小倉北区に北九州教室を開設した。さらに翌平成 19(2007)年度には、中国地域全体の人材養成ニーズに応えるため、広島市中区袋町に広島教室を開設した。

平成 22(2010)年度には九州地域の社会人学生の通学の便をはかるため、北九州教室を福岡市博多区博多駅東に移転した。また、広島教室についても、より交通の便の良い場所を求めて広島市中区袋町から中区立町へと移転した。これにより中国・九州地域を広くカバーする、現在の宇部・広島・福岡の 3 教室体制となった。

平成 25(2013)年 10 月からは、教育のグローバル化を図り、宇部教室において全科目英語による講義を開始した。

本研究科で学ぶ社会人学生の年齢層は 20 歳代から 60 歳代までと幅広い。技術と経営の二つの視点から問題解決に取り組む人材を育成するという目的から、学生の業種も特定のものに限られてはいない。製造業を中心としつつ、サービス業、官公庁などに勤める人々も入学している。

第一期生が修了したのは平成 19(2007)年

平成 24 年度修了式典並びに同窓会後の集合写真

3 月のことである。このとき、同窓会組織として「技経会」が設立された。初代会長には第一期生の田上實氏(日立建設株式会社代表取締役社長)が選出された。

平成 25 年 3 月には第二代会長として丸山博氏(平成 21(2009)年度修了生・株式会社キューヘン常務取締役)を迎え、現在に至っている。

「技経会」は、毎年、十数名の修了生を会員として迎えているが、上述の経緯もあって、どの学年を取り上げても、学生の年齢、業種、勤務地、国籍などに他の学部・研究科に見られないような多様性がある。

Ⅱ　活動概要

先に述べた「技経会」会員の多様性の他、会員がかつて学んでいた教室が 3 か所に分かれているということもあり、「技経会」は全体としては緩やかな繋がりを持った組織となっている。

「技経会」会員全員が関わる公式の活動としては毎年 3 月に修了式と同時に開催される総会がある。その他、会員向けサービスとして、メールマガジンの配信が平成 26 年度から始まっている。

それ以外の活動は会員の出身教室ごとに行われている。福岡教室・旧北九州教室出身の会員が経営に関する勉強会を年 4 回程度開催しているのがその一例である。

【第2部】
繋

4

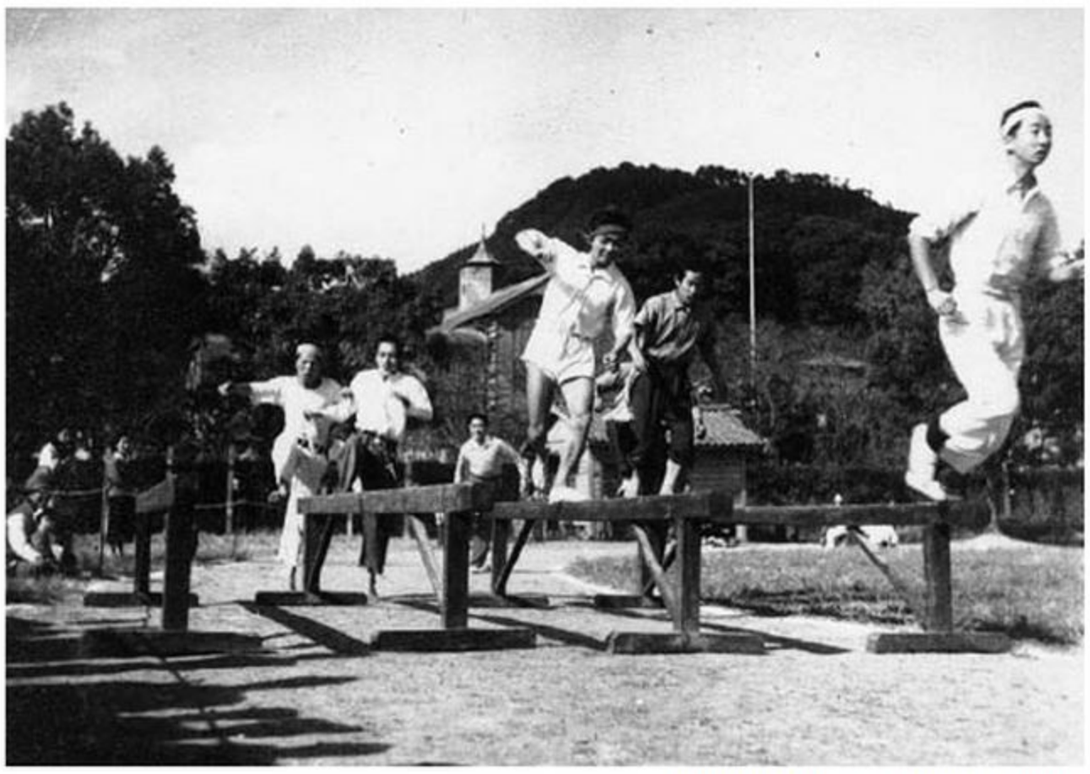
学生生活

1 行事・イベント等

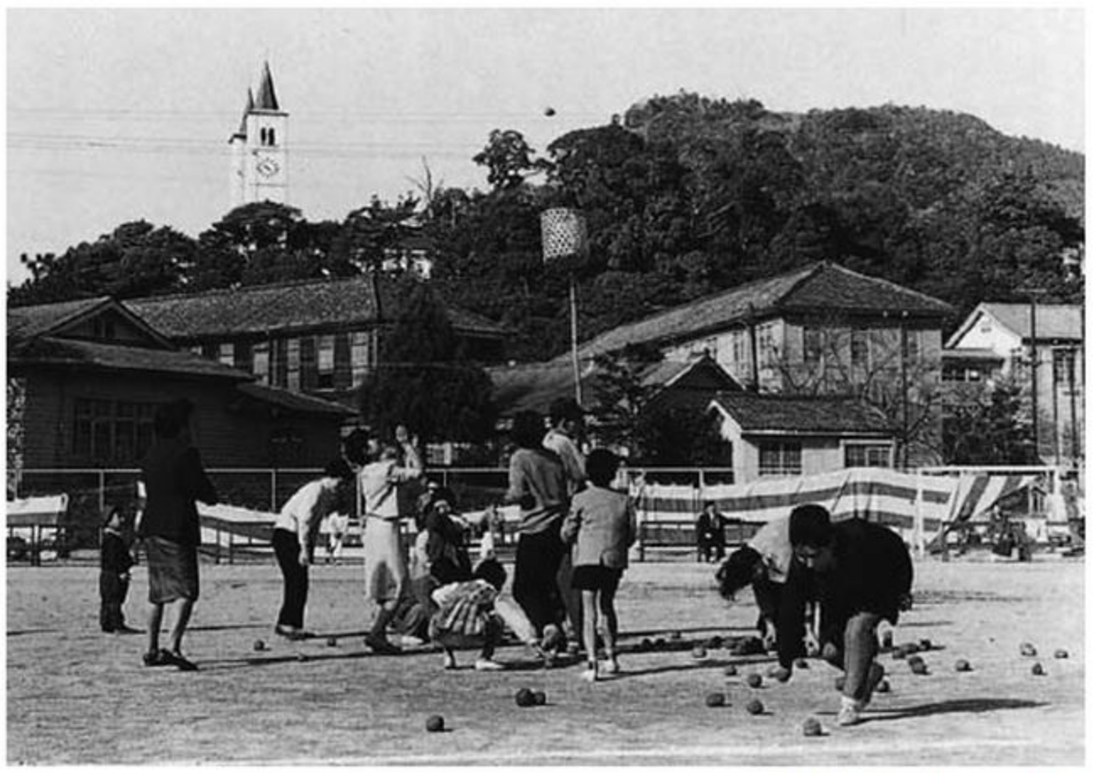
昭和 24 年(1949.7.15)入学式(第 1 回)

平成 11(1999)年　入学式

平成 26(2014)年　入学式



昭和 24(1949)年　開学記念運動会



開学祭風景(亀山キャンパス)

平成 25(2013)年　七夕祭

平成 21(2009)年　オープンキャンパス

平成 24(2012)年　オープンキャンパス（図書館前）

昭和 39(1964)年　大学祭

昭和 41(1966)年　大学祭

平成 20(2008)年　姫山祭

平成 22(2010)年　医学祭

昭和 63(1988)年　常盤祭

平成 25(2013)年　キャンパスてくてくツアー

昭和 28(1953)年　卒業式(第 1 回)

昭和 63(1988)年　卒業式

平成 23(2011)年　卒業式

2 授業・学内外の活動

長府時代の獣医学科授業風景

昭和 30 年代の耳鼻科実習風景(医専)

発足当初の算盤授業風景(経済学部)

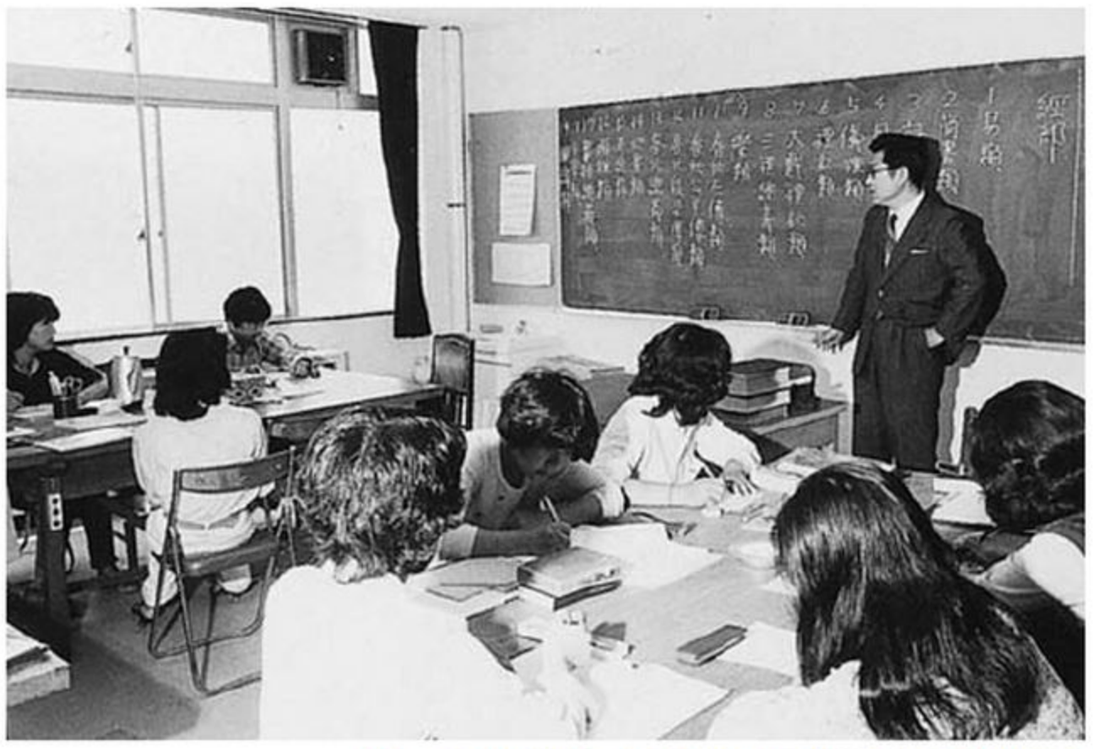
発足当初の実習風景(教育学部)

室積での臨海実習風景(文理学部)

昭和 30(1955)年　工業化学実験風景(工学部)

昭和 50(1975)年　生物学実習風景(理学部)

昭和 40(1965)年頃　地理研究室(教育学部)



昭和 54(1979)年頃　中国語学・中国文学講義風景(人文学部)

測量風景（工学部）

講義風景（共通教育センター）

平成 19（2007）年　機能系実習風景（医学部）

平成 26（2014）年　大学図書館学生協働交流シンポジウム

平成 18（2006）年　コーヒーアワー

平成 19（2007）年　おもしろプロジェクト報告会

平成 20（2008）年　山口大学ブランド日本酒製造「お田植え行事」

平成 25（2013）年　実習風景（医学部）

平成 25（2013）年　Young Scientist Seminar

平成 25（2013）年　工学部学生インドネシア研修

3 体育会・文化会等の活動

五大学競技大会夏季壮行式

昭和 62(1987)年　第 38 回中国五大学学生競技大会

応援団

昭和 63(1988)年　体育系サークル新入生合宿研修（大島青年の家）

平成 23(2011)年　文化会サークルズ・ミーティングキャンプ

考古学部

吹奏楽部

平成 22(2010)年　新入生歓迎フェスティバル

ボート部

ラグビー部

弓道部

洞穴研究会

落研

空手道部

第 1 回管弦楽団定期演奏会

平成 9(1997)年
第 43 回中・四国国立大学連合演奏会

山口大学「学生歌」とメンネルコールの今昔

メンネルコールについて

メンネルコールは、昭和21年1月、教育学部の前身である山口師範学校メンネルコールとしてその呼称が出立した。同年11月、西部合唱コンクールに鶴岡義雄先生の指揮で出場、優秀な成績を収めた。以後、毎年出場。その他各種演奏会に出演してきた。

昭和29年7月8日の山口大学「学生歌」誕生以降は、定期演奏会、巡回演奏会、交歓演奏会のステージ演奏はすべて「学生歌」で開幕した。

昭和47年、メンネルコールは山口大学混声合唱団に衣替えして現在に至る。

現在メンネルコールの名称を引き継いでいるのはOB会である。会員数は250余名で、年間5回前後の巡回演奏を中心に演奏活動を行っている。

山口大学「学生歌」誕生秘話

山口大学「学生歌」は手作り主導で第一歩を踏み出した。

昭和29年度がスタートして間もない頃、大学本部の掲示板に「学生歌」歌詞公募の審査結果が発表されているのを発見！ メンネルコール部長はその足で本部事務室にとび込んだ。

「歌詞のひとつをメンネルコールにいただきたい!」その時の勢いは迫力充分だった。しかし、待ち時間は…長かった。

やがて戻って来られた事務局の方が、「では、これをどうぞ。今後の扱いは、良識をもって…お願いします。いいですね」

部長は鶴岡義雄先生に「作曲について」相談申し込む。先生の指示は「藤井哲雄BIパートリーダーに、編曲もあわせて頼みなさい」とおっしゃった。

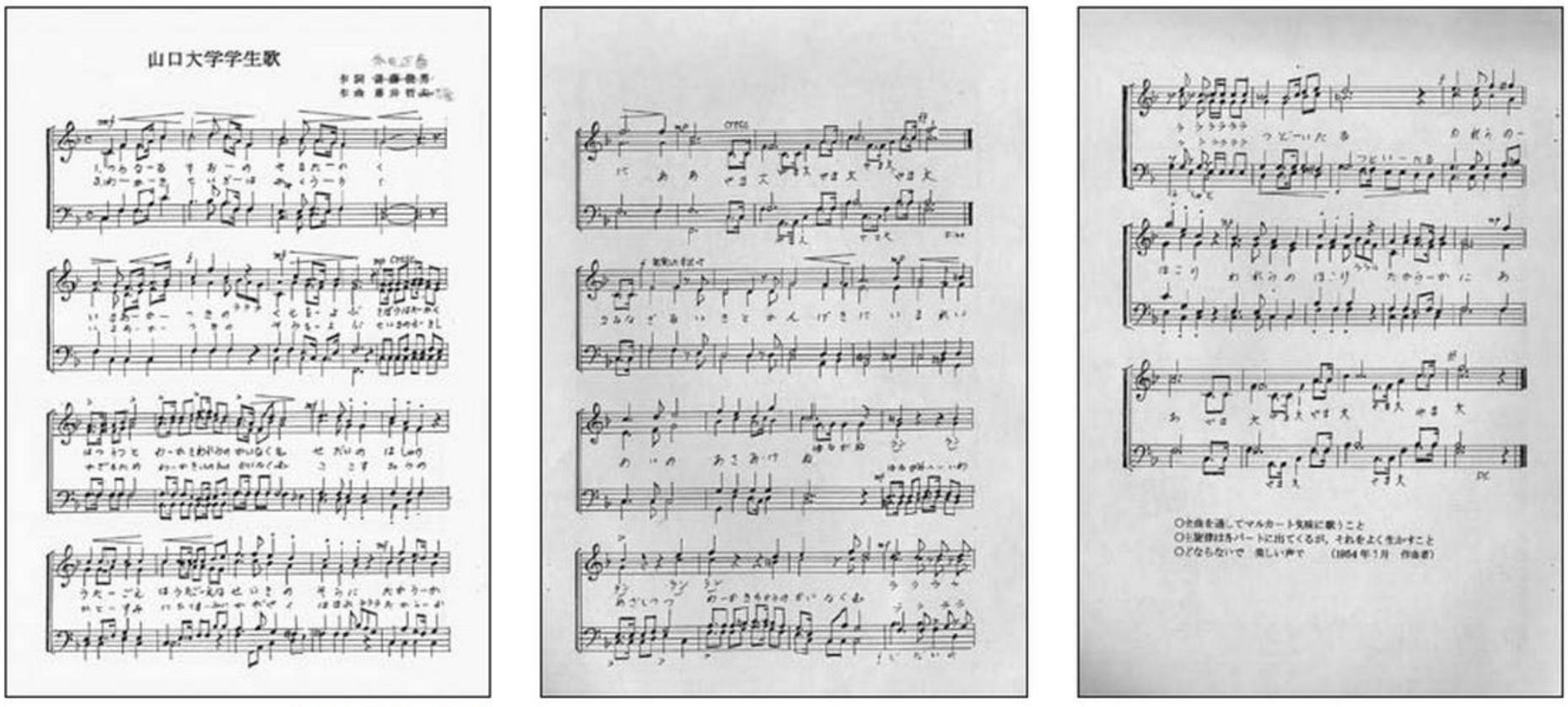
夏休み合宿練習でメンネルコールは「学生歌」を手中に収めた。

その後の山口盆地では、時季を得て木霊する「学生歌」を耳にする時がある。

あてなく歩く山口の　山のよろしさ

山頭火

山口大学学生歌楽譜表紙



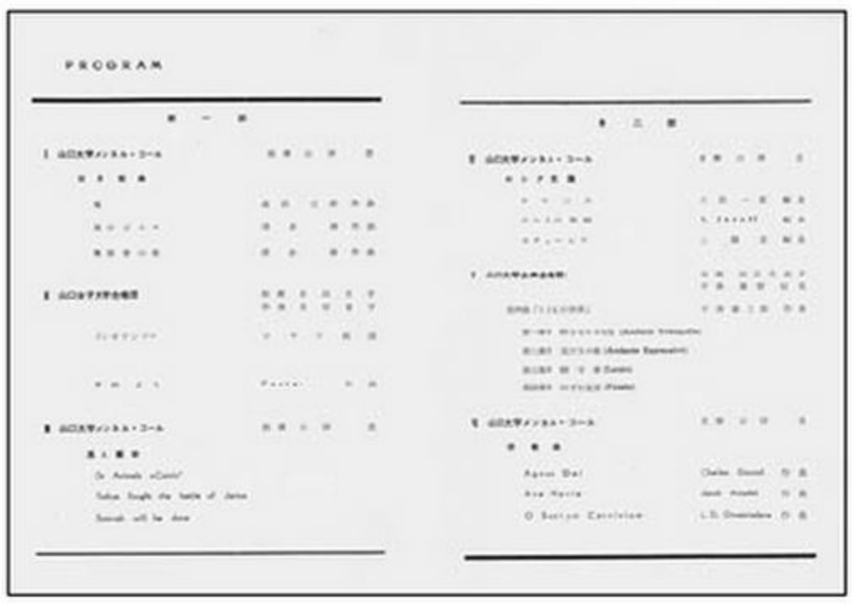
山口大学学生歌楽譜

昭和31(1956)年　メンネルコール第1回定期演奏会賛助出演山大フラウエンコールと

昭和31(1956)年　朝日新聞社主催合唱コンクール全国大会

昭和32(1957)年　西南学院大学グリークラブとの交換演奏会

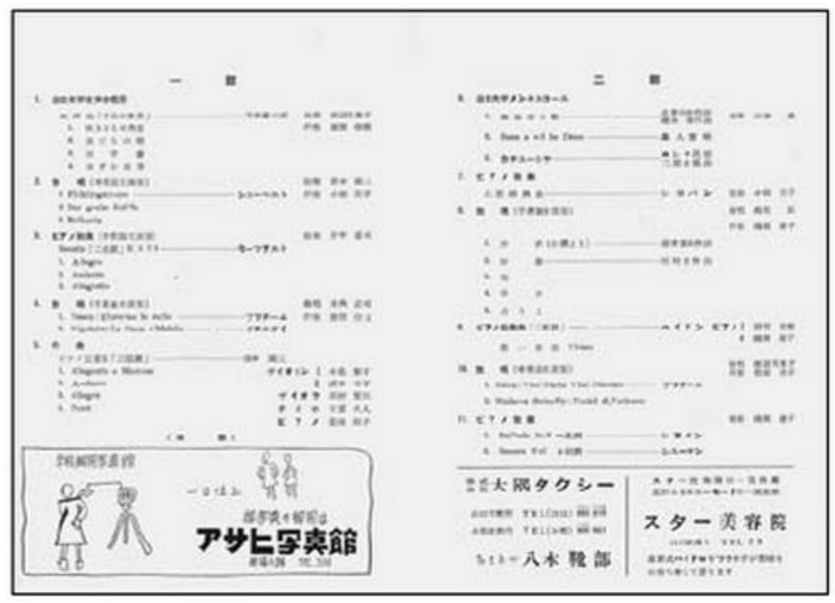
平成20(2008)年　日置女声合唱団結成10周年記念 交歓演奏会の夕べ



昭和31(1956)年
第1回定期演奏会プログラム

昭和29(1954)年　第1回中四国国立大学連合演奏会プログラム

早稲田大学グリークラブ合同演奏会プログラム



昭和31(1956)年
卒業演奏会プログラム

4 学生生活のひとこま

昭和25(1950)年　生物学教室コンパ風景(文理学部時代)

昭和59(1984)年　工学部売店

昭和59(1984)年　医療技術短期大学部ソフトボール

昭和29(1954)年　経済学部第2回卒業記念アルバムより

昭和36(1961)年頃　鳳陽会館学生食堂風景

長府時代の農場にて

昭和35(1960)年頃　農学部長府校舎

YU-PRSS撮影風景

平成4(1992)年　図書館閲覧室

平成9(1997)年　大学会館前庭

平成11(1999)年　雪のキャンパス

平成26(2014)年　教育学部運動会

平成26(2014)年　「トビタテ！留学JAPAN」キャンペーンミュージックビデオ参加

平成26(2014)年　共育の丘

【第3部】

仁

2014年→

いま、そして未来へ

現況と未来展望

1

山口大学のいま、これから

1

山口大学憲章 The Charter of Yamaguchi University

（2007年2月15日制定）

はじめに

山口大学は、1815（文化12）年、長州藩藩士・上田鳳陽によって創設された私塾・山 口講堂を前身とし、明治・大正期の学制を経て、1949（昭和24）年には、平和と繁栄を願い、地域における高等教育および学問研究の中核たる新制大学として創設されました。そして2004（平成16）年、国立大学法人山口大学が設置する国立大学となりました。

いま、新たな大学づくりに踏み出すにあたり、ここに「山口大学憲章」を掲げ、学生・教員・職員の三者が一体となって、理念の共有と目標の実現をめざします。

Ⅰ 基本理念

1「発見し・はぐくみ・かたちにする　知の広場」の創造

私たち山口大学は、21世紀の多様な課題を「発見し・はぐくみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」を創り出します。

私たち山口大学は、この「知の広場」において、自らの役割と実績とを不断に評価しつつ英知の創造をめざします。

2 共同・共育・共有精神の涵養

私たち山口大学は、共に力を合わせ、共に育み合い、共に喜びを分かち合います。この共同・共育・共有の精神を“山大スピリット”として涵養します。

3 公正・平等・友愛の尊重

私たち山口大学は、“山大スピリット”による他者への配慮と自らを律する倫理観のもとに、あらゆる偏見と差別を排し、公正と平等と友愛の精神を尊重します。

Ⅱ 教育の目標

1 専門性と社会性の育成

私たち山口大学は、地域の基幹総合大学として、各学部・研究科の特性を活かし、個性あふれる専門性と社会性に富んだ人材を育みます。

2 自己啓発・自己研鑽・自己管理の徹底

私たち山口大学は、自己啓発・自己研鑽に努め、自己管理能力を身につけた人材を育みます。

3 知識社会に応える能力の醸成

私たち山口大学は、地域社会および国際社会の発展と平和の実現に貢献するために、21世紀の知識社会における課題探求と問題解決の能力を持った人材を育みます。

Ⅲ 研究の目標

1 先進的な研究を社会に還元

私たち山口大学は、基礎的・学術的研究および社会が直面する課題の克服と解決に役立つ研究を重視し、総合大学の特性を活かし、先進的かつ長期的な視野に立った研究を進め、その成果を社会に還元します。

2 学際的な研究体制の構築

私たち山口大学は、人文科学、社会科学、自然科学、生命科学などの学問分野の独自性を尊重しながら、これら諸分野の連携を通して、21世紀の時代にふさわしい学際的な研究体制を構築します。

3 研究活動の透明性と説明責任の遵守

私たち山口大学は、研究者相互の交流を基盤に、山口大学を主体とする共同研究体制を構築します。その研究過程と研究成果は広く社会に発信し、説明責任を果たします。

Ⅳ 私たちの責務

1 新たな価値の創出

私たち山口大学は、人間と人間、人間と自然、人間と科学とが調和する新たな価値の創出をめざします。

2 社会が抱える問題解決への寄与

私たち山口大学は、20世紀の時代が繁栄と豊かさをもたらす一方で、自然環境の破壊や貧困・飢餓・戦争など、多くの社会問題が表出した時代であったことを認識し、21世紀の今日にあっては、これらの矛盾の解決のために英知と勇気を役立てます。

3 地域社会の発展と国際社会への貢献

私たち山口大学は、心豊かな教養人と優れた専門的知識・技術を持った人材を育み、地域社会の発展と国際社会の平和に貢献し、人類の幸福に寄与します。

2

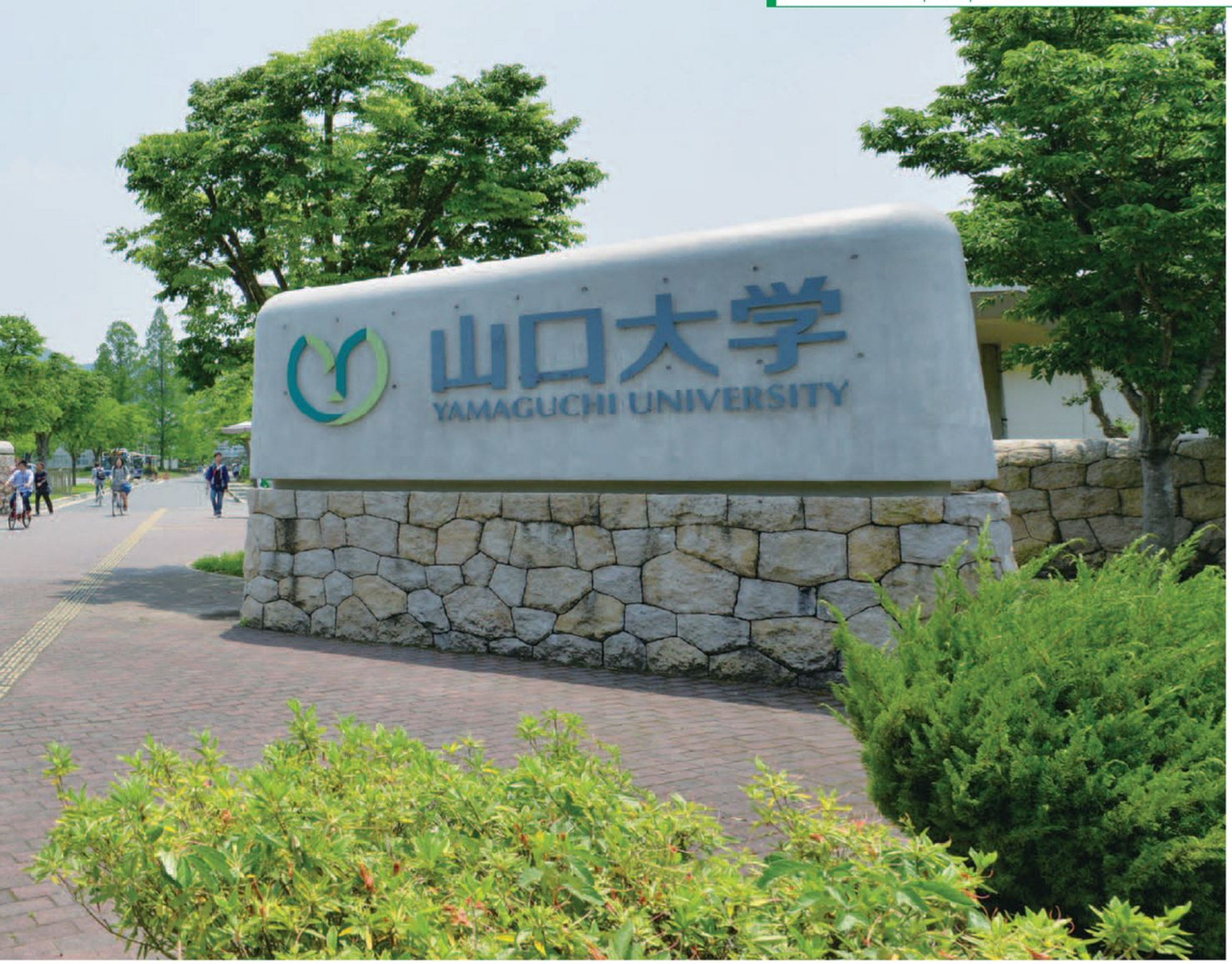
現在の山口大学

吉田キャンパス

吉田キャンパスは、山口市郊外に位置し、法人本部、人文学部、教育学部、経済学部、理学部、農学部、共同獣医学部、大学院人文科学研究科、大学院教育学研究科、大学院経済学研究科、大学院理工学研究科、大学院農学研究科、大学院東アジア研究科、連合獣医学研究科(構成大学 山口大学・鳥取大学・鹿児島大学)、時間学研究所及び関連施設等を有するほか、共通教育を行うための施設を有している。

キャンパスの周囲は、農地と住宅地が混在しているが、宅地開発の進行とともに、量販店や郊外型大型書店などの進出が盛んである。また、人口の増加に伴い中学校、高校が新設され、広域な文教地区となっている。

キャンパス内には、さまざまなパブリックスペースが整備され、学生、教職員、地域住民の交流と憩いの場となっているほか、生涯学習の場としても活用されている。



大賀蓮の池

ビオトープ

大学会館前芝生広場

共育の丘

菖蒲池

遺跡保存公園

敷地南側部分

ポケットパーク

河川公園

小串キャンパス

小串キャンパスは、宇部市の中心市街地に位置し、医学部、大学院医学系研究科及び医学部附属病院と関連施設等を有している。

医学部附属病院は、県内唯一の高度救命救急センターであり、ドクターヘリが常駐する基地病院として県内における救急医療の中心的役割を担っている。

キャンパスの周囲には、宇部市文化会館、宇部市渡辺翁記念会館、新川ふれあいセンター、宇部市立図書館があり、宇部市の文化ゾーンを形成している。

キャンパス内には、敷地に余裕がないため、まとまったパブリックスペースを確保することは困難であるが、外来診療棟前のポケットパークを構内のパブリックスペースとして位置づけ、患者、学生、教職員、地域住民の交流・憩いの場としている。また、敷地と隣接した真締川両岸には宇部市が整備した河川公園がある。

体育館前パーゴラ

講義棟中庭

本館中庭

常盤キャンパス

常盤キャンパスは、宇部市郊外の高台に位置し、工学部、大学院理工学研究科、大学院技術経営研究科及び関連施設等を有している。

キャンパスの周囲には、宇部工業高等専門学校が隣接するほか、宇部地域テクノポリス、宇部臨空頭脳パーク等の産業団地があり、産学公の「学」の中心的な役割を果たしている。

キャンパス内には、教育研究ゾーンの廻りにさまざまなパブリックスペースが整備され、学生、教職員、地域住民の交流と憩いの場となっている。

附属山口小学校

附属山口中学校

附属幼稚園

附属特別支援学校

附属光小学校

附属光中学校

教育学部附属学校園

教育学部附属学校園は、山口市にある白石1丁目地区(附属山口中学校)、白石3丁目地区(附属山口小学校、附属幼稚園)、吉田地区(附属特別支援学校)、及び光市にある光地区(附属光小学校、附属光中学校)からなる。

各々が、地域における幼児・初等・中等教育・特別支援教育に資するほか、山口大学教育学部における教育研究活動等の実践の場となっている。

東京事務所建物外観

CICにおける大学説明会会場

東京事務所

首都圏におけるさまざまな活動の拠点として、平成24(2012)年にCIC（キャンパス・イノベーションセンター東京）に開設された。教育・研究・社会貢献に関する情報の発信・収集、同窓会・中央省庁・企業等との連絡調整、産学公連携に係る連絡調整などにあたっているほか、本学学生による就職活動の拠点として活用されている。

山東大学（中国）

マレーシア工科大学（マレーシア）

ウダヤナ大学（インドネシア）

大葉大学（台湾）

海外オフィス

学術交流協定校との連携協力により、北京師範大学(China)、首都師範大学(China)、山東大学(China)、ウダヤナ大学(Indonesia)、ガジャマダ大学(Indonesia)、大葉大学(Taiwan)、マレーシア工科大学(Malaysia)に海外オフィスを設置し、共同研究拠点、共同授業提供、留学情報の提供を行っている。

国際交流

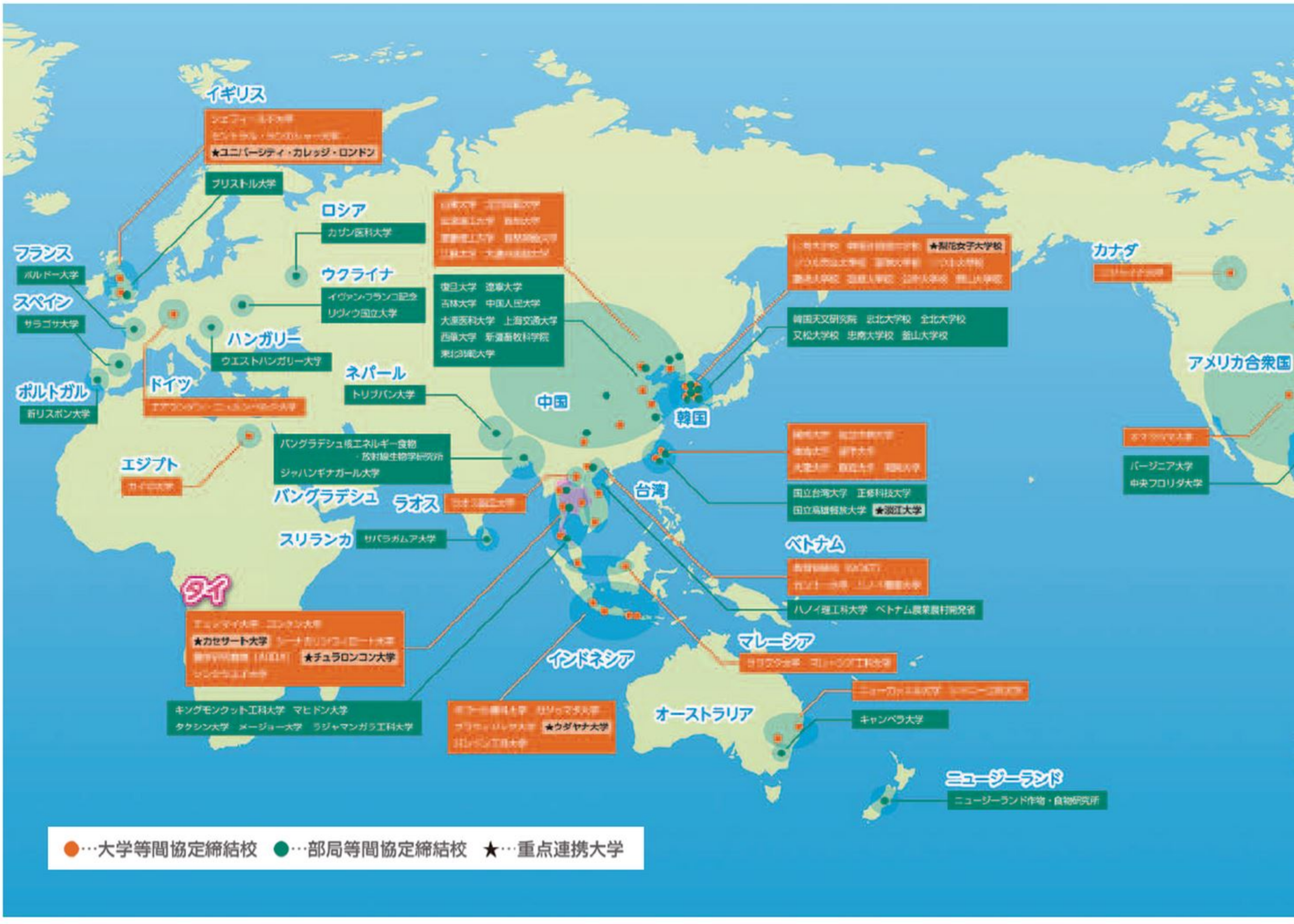
山口大学の本格的な国際交流は、昭和58(1983)年6月に締結した「山口大学と山東大学との学術交流協定」から始まった。平成に入ると、世界各地の大学との大学間・部局間協定が相次ぎ、学術交流協定に基づく交換留学など学生の交流も活発化した。

法人化以降、大学の国際化を一層推進するため平成20(2008)年に「国際戦略本部」を設置した。海外の交流協定校との連携協力によって海外オフィスを開設し、留学生募集や共同研究拠点、共同授業提供などの事業を展開している。

現在(平成26年5月1日)では、世界各地の96機関と交流を行っている。

山東大学との学術交流30周年記念式典

大学等間・部局等間学術交流協定校一覧



書道に挑戦

山口大学留学生ニュースレター

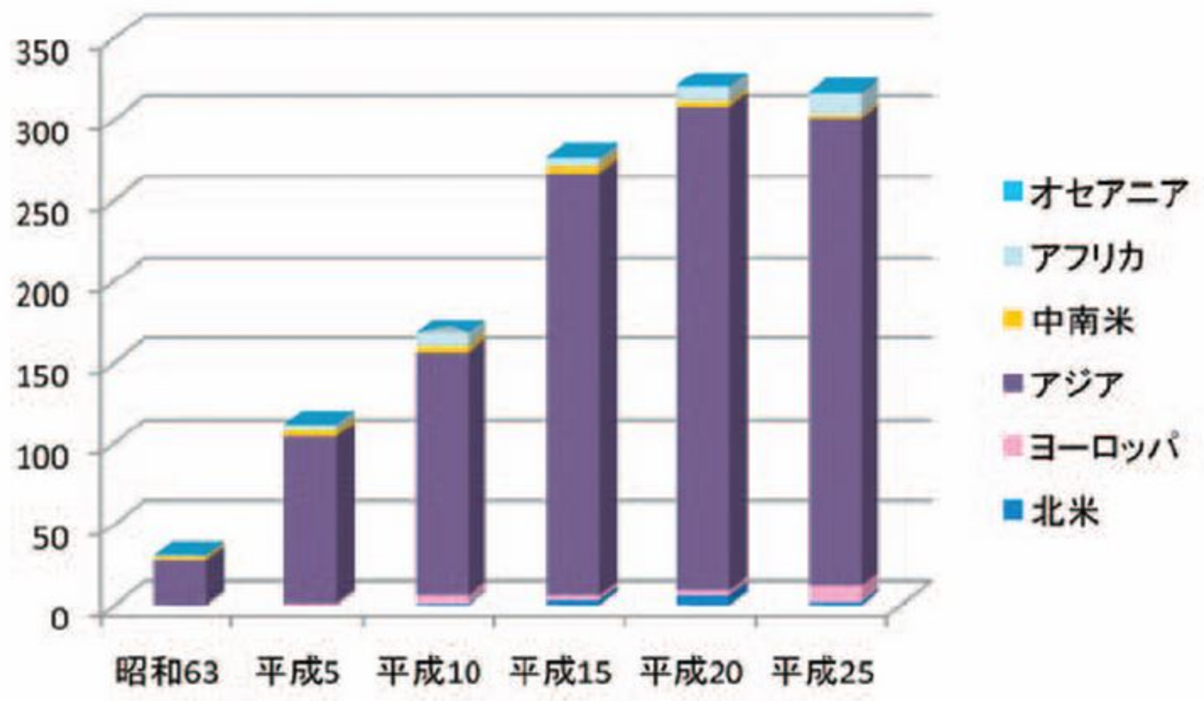
山口大学に留学（交換留学を含む）経験のある学生に、大学の情報を発信するとともに、留学生同士のネットワークを形成することを目的に、平成19（2007）年3月に第1号を創刊し、以降毎年1回発行している。

サマープログラムに参加した海外の学生たち

夏休みに留学生センターが開催する短期留学プログラム。本学では、日本語や日本文化の理解を深めてもらうことを目的としている。最終日には浴衣を着て、『山口七夕ちょうちん祭』を楽しむのが恒例となっている。

外国人留学生

昭和56年に山東大学との間で学生の交換留学が始まった。昭和58年、政府の「留学生10万人計画」を受けて、留学生受入は加速し、本学の留学生数も増加の一途を辿った。現在では、約30ヵ国から300名を超える留学生が学んでいるが、新たに政府が策定した「留学生30万人計画」に沿って、更なる留学生受入を図る予定である。



外国人留学生数の推移

全体の約9割がアジアからの留学生となっている。そのうち、過去最も受け入れ数が多いのは中国出身者。平成22年にインドネシアの2大学に国際連携オフィスを設置したことにより、インドネシアからの留学生も増加した。

国際交流会館

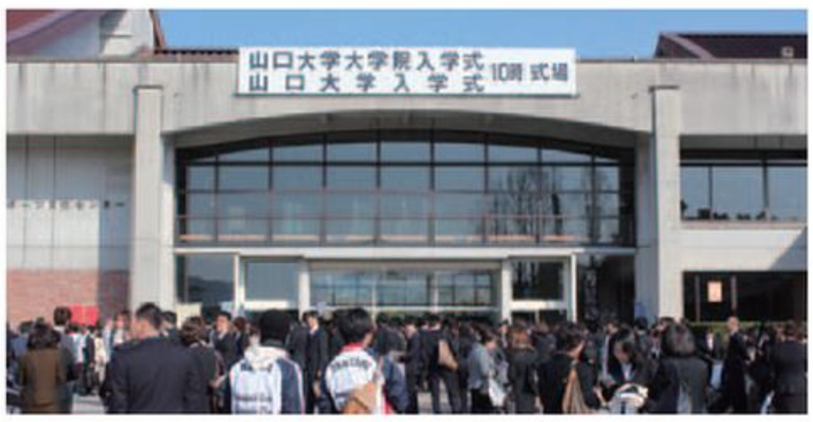
外国人留学生や研究者の受け入れ増加に伴い、受け入れ態勢の整備・充実も図られた。昭和63年、吉田キャンパスに山口国際交流会館が、平成9年に常盤キャンパスに宇部国際交流会館が開設された。また、平成20年には吉田キャンパスに国際交流会館2号館が完成し、本学の留学生用宿舎は、吉田キャンパス71部屋と常盤キャンパス47部屋を合わせ、118部屋となっている。

国際交流会館1号館（吉田キャンパス）

山口大学の1年

【春】

キャンパスの各所で桜の花が咲き始めると、新入生を迎える季節。4月の入学式の後、吉田キャンパスにはフレッシュな笑顔があふれる。オリエンテーションを経て前期授業が開始。クラブやサークル等の紹介を目的とした「新入生歓迎フェスティバル」も開催され、先輩たちのエネルギーを肌で感じながら、新入生は大学生活の第一歩を踏み出す。



入学式

山口大学創立30周年記念植樹の桜

新入生歓迎フェスティバル

部活動体験会

【夏】

7月には吉田キャンパスで寮生を中心とした七夕祭が開催される。神輿行列やステージ企画、模擬店など多様な企画で会場は盛り上がり、市民の方の参加も増えて回を重ねるごとに盛大になった。平成26(2014)年で42回を数える。七夕祭が終わると、学生は前期末試験を経て、8～9月の夏休みを迎える。

8月の夏季休業中に、高校生を対象としたオープンキャンパスを各キャンパスで開催。各学部学科の概要説明を始め、研究室訪問、模擬授業、実習や体験、入試相談、学生生活相談など盛りだくさんの企画で、大学の魅力をアピールする。

七夕祭

オープンキャンパス

【秋】

文化の秋、スポーツの秋はイベントが目白押しである。11月には各キャンパスで大学祭「姫山祭」「医学祭」「常盤祭」が開催される。学生実行委員を中心に趣向を凝らしたステージや模擬店、ゲームなどが行われ、近年では学生が楽しむだけでなく、地域の方との交流の機会にもなっている。また、体育会主催による伝統の学長杯駅伝大会が開催され、各参加チームは沿道の声援を受けながら全力でゴールを目指す。

地域の方を招いて学生ガイドが大学構内を案内する「キャンパスてくてくツアー」が平成24（2012）年10月から始まった。現在では、四季折々にツアーが開催され、大学内に足を踏み入れることの少ない学外の方々に大学を公開する絶好の機会となっている。

附属農場では山口県で開発された酒米「西都の雫」が実り、収穫が行われる。翌春には山口大学ブランド日本酒「長州学舎」として販売される。

医学祭

常盤祭

キャンパスてくてくツアー

姫山祭

学長杯駅伝大会

【冬】

冬になると、キャンパスはスーツ姿の学生が目立つようになる。就職活動、卒論（修論・博論）発表、年度末試験など大学全体が試練の時を迎える。受験生もまた大学入試センター試験や個別学力試験という試練を経て、合格発表を心待ちにする。

3月には学位記授与式、大学院修了式及び卒業式が行われ、卒業生たちはそれぞれの進路へと旅立って行く。

学内業界・企業研究会

雪遊び

合格発表

吉田キャンパス

3

創基200周年に向けて

― 躍動する山口大学 ―

創基200周年記念事業

創基200周年を迎えるにあたり、山口大学では先人達の「志」をこれからの200年に向かって繋ぎ、そして更に発展するために、平成22（2010）年10月に創基200周年記念事業会を設置し、さまざまな記念事業を計画した。主な記念事業は以下のとおりである。

1　山口大学基金の創設
2　記念誌の編纂
3　記念碑の設置
4　記念式典及び記念イベント等の開催

記念事業の主柱である山口大学基金は、世界に貢献する人材を育成し、社会に送り出すこと、並びに社会貢献活動の推進のための安定した教育研究経費の基盤づくりを目的とするものであり，平成26（2014）年4月に創設した。

人材育成の支援として、日本人学生海外派遣および外国人学生の受入れの支援、就職活動の支援、課外活動の支援、経済的な支援などを行うことにしている。

また、記念事業の実施に向け、平成24（2012）年4月から、創基200周年記念募金を開始した。より一層の募金の推進に向け山口大学と関わりのある企業・団体・個人からなる「山口大学創基200周年記念募金推進会」の協力を得ている。

創基200周年記念シンボルマーク、キャッチフレーズ

創基200周年記念事業は、山口大学の200年の歴史を受け継ぎ、伝えるために記念事業のＰＲをイメージしたシンボルマークとキャッチフレーズの制作から始まった。制作にあたり山口大学の学生、教職員及び卒業生に広く呼びかけ、シンボルマーク部門41作品、キャッチフレーズ部門133作品の応募の中から各部門3作品を選び、最優秀賞を創基200周年記念のシンボルマーク及びキャッチフレーズに決定した。（平成22（2010）年12月に表彰式開催）

「志」つなぎ 伝える
二百年

創基200周年
山口大学

シンボルマークについて

三角形は山口大学の「山」の字形をイメージし、200年の歴史と伝統を持ってそびえ立つ大学の姿を表している。また、曲線は山口大学の３本柱を意味して おり、両端が鋭く知的な青色の線は「教育」を、上に向かって伸びる黄色の線は「研究」を、左右を繋ぐ緑色の線は「社会連携」をそれぞれ表している。創基200周年を越えていくに当たり、山口大学が描いている将来像の意味が込められている。

キャッチフレーズについて

山口講堂から山口大学の歴史がスタートし、その「志」は200年を迎えようとする現在まで受け継がれている。この「志」を、これからもつなぎ、伝えていきたいという想いが込められている。

表彰式の様子（3点とも）

主な記念行事など

基幹シンポジウムの開催

創基200周年を広く学内外へ周知し、2015年の創基200周年を共に迎えるために基幹シンポジウムを開催

第1回　「創基200周年 これからの山口大学を語ろう」
平成24（2012）年6月1日（金）　吉田キャンパスほか
基調講演　「山大事始」上田鳳陽から学都山口へ　～いま、なぜ200周年なのか～
纐纈厚（山口大学理事）
パネルディスカッション　200周年とこれからの山口大学
パネリスト　各学部長　病院長

第1回 基幹シンポジウム

第2回　「山口大学の未来について語ろう!!」
平成24（2012）年12月5日（水）　吉田キャンパスほか
学生から見たこれからの山口大学を語る

第3回　「山口大学創基200周年を広く地域に発信し、ともに盛り上げていく」
平成25（2013）年11月30日（土）　常盤キャンパス
特別講演　場所の力　隈研吾氏（建築家）

第3回 基幹シンポジウム

第4回　「地域と共に活きる山口大学」
平成26（2014）年10月4日（土）　吉田キャンパス
特別講演　学祖・上田鳳陽と外郎　福田百合子氏（中原中也記念館名誉館長）
パネルディスカッション　地域とのつながり これからの山口大学は
パネリスト　福田百合子氏　村岡嗣政氏（山口県知事）　岡正朗（山口大学長）

第4回 シンポジウム

フォトコンテスト『写真で残そう! 山大なう』

200周年を迎える山大の”今”をみなさんに伝えよう!これからの100年に向けて残したい山大の“今”を残していこう!

第1回	募集期間　平成23（2011）年10月～平成24（2012）年3月	応募点数	157点
第2回	募集期間　平成24（2012）年8月～平成25（2013）年3月	応募点数	108点
第3回	募集期間　平成26（2014）年1月～5月	応募点数	101点

第2回 フォトコンテスト授賞式

「山口大学創基の地」記念碑の設置

山口大学の淵源にあたる「山口講堂」の跡（山口市中河原）に記念碑を設置。
除幕式　平成26（2014）年3月25日（火）

山口大学創基200周年記念式典

平成27（2015）年5月30日（土）　山口グランドホテル（予定）

刊行物

『山口大学の来た道 1 ～ 5』平成22（2010）年～平成26（2014）年発行
創基200周年記念OB紹介冊子『輝跡』平成25（2013）年11月発行
『創基200周年記念誌』平成26（2014）年12月発行

「山口講堂跡」記念碑除幕式

その他、平成24年3月から、講演会や各種イベントに「創基200周年記念事業」の名称を付し（冠事業）開催

ホームカミングデー

創基200周年を迎えるにあたり、卒業生、在学生、教職員及び地域の方など山口大学にゆかりのある方々との絆を深めるため、卒業生及び地域の方々をキャンパスに歓待するホームカミングデーの開催が平成25（2013）年から始まり、翌年の第2回からは、山口大学同窓会との共催事業として実施している。

第1回　平成25（2013）年11月23日（土）　吉田キャンパス

・記念講演「ビジネス界から見た真のグローバル化」妹尾信夫氏

「“どぼじょ”の挑戦」阿部玲子氏

・キャンパスツアー、ステージ発表、各学部紹介、抽選会、懇親会など

・参加人数　約400名

パネル展示

キャンパスツアー

懇親会

第2回　平成26（2014）年10月4日（土）　吉田キャンパス

テーマ「地域と共に活きる 山口大学」

・特別企画 湯田温泉スリッパ卓球大会in山大

・学生によるキャンパスガイド、ステージ企画、写真展示、各学部紹介、抽選会、懇親会など

・参加人数　約1,400名

スリッパ卓球大会

第3回フォトコンテスト

メンネルコール

キャンパスガイド

懇親会の記念撮影

「長州五傑」記念碑

4

これからの山口大学

「明日の山口大学ビジョン」、「山口大学改革プラン」、そして「明日の山口大学ビジョン2014」へ

山口大学創基200周年記念事業は、ロゴマークとキャッチフレーズの制作から始まりました。これらの制作にあたっては、山口大学の200年の歴史と信頼を現代に受け継ぐ、学生の皆さん、教職員、そして卒業生を対象に広く公募し、選考のうえ、決定しました。

シンボルの三角形のロゴマークは、山口大学の「山」の字形をイメージし、200年の歴史と伝統を持ってそびえ立つ大学の姿を表現しています。また、“「志」つなぎ 伝える 二百年”のキャッチフレーズは、これまでの200年の歴史と時代を、山口大学を支えて頂いた地域社会の皆様とともに振り返り、その「志」と「誇り」をつなぎ、これからの200年をともに歩き、新しい歴史を形作り、そして伝えていくという決意を示しています。

山口大学では、自主的・自律的に大学改革を推進することにより、豊かで持続可能な地域社会の実現に貢献することを目的として、平成20年に「明日の山口大学ビジョン」を策定し、平成26年には、その改革の取組みを加速するため「山口大学改革プラン」を公表しました。

そして、創基200周年に当たる2015年を迎える今日、「明日の山口大学ビジョン2014」を宣言し、その記念すべき第一歩を関係者の皆様とともに踏み出し、山口大学と地域との新しい200年の歴史の起点にしたいと思います。

吉田キャンパス

「明日の山口大学ビジョン」の概要

本学は、国立大学法人化を契機に「山口大学憲章」の起草に着手し、平成19（2007）年2月にこれを制定しました。「山口大学憲章」は、本学の20世紀の活動を踏まえ、21世紀における責務を掲げたものです。

国立大学は法人化に伴い、教育・研究の質の向上と社会への説明責任を果たすことが強く求められるようになりました。そのため、6年毎に中期目標・中期計画を策定し、その達成状況について、第三者機関による評価を受け、結果を公表することが定められています。こうした時代の要請から、各大学は自主性・自律性を備えた運営体制を築き、それぞれの大学の特徴を活かしたオンリーワンの大学として発展しようとしています。

そこで、本学では、「山口大学憲章」の基本理念に基づき、学内外の関係者の意見を踏まえつつ、中期目標期間を見据えながら平成20（2008）年に「明日の山口大学ビジョン」を策定しました。

このビジョンの中では、“創基200周年を超え2020年にキラリと光る大学”としての本学の目指すべき方向について、『教育』『研究』及び『社会連携』のそれぞれの視点から中長期的な展望に立って大学の将来像を提示しています。

常盤キャンパス

「明日の山口大学ビジョン」における取組

平成20（2008）年の「明日の山口大学ビジョン」の策定から6年が経過した平成26（2014）年現在、ビジョンに掲げた内容に関わる主な取組みは、以下のとおりです。

・新しい共通教育カリキュラムの実施（知的財産教育必修化、キャリア教育充実など）
・鹿児島大学との共同獣医学部設置による獣医学教育の充実、国際水準の獣医学教育実施に向けた獣医系4大学連携
・「若手研究者支援制度」創設や「テニュアトラック制度」の導入による研究者養成
・リサーチ・アドミニストレーター（URA）制度の導入による研究支援体制の強化
・時間学研究所が中心となった「日本時間学会」の設立
・『山口大学国際化推進宣言』、海外大学サテライトオフィス設置、重点連携国・大学選定
・先端医療に対応した医療環境を整備するための病院再整備計画の策定
・ドクターヘリの運航による地域救急医療体制の強化
・学長選考方法、学部長選考方法の見直しによる大学のガバナンス改革の推進

これら6年間の取組みを通して、いま、山口大学は創基200周年を迎えようとしています。

小串キャンパス（再開発整備事業イメージ）

「山口大学改革プラン」の概要

平成24（2012）年6月4日、国家戦略会議において、文部科学大臣から「社会の期待に応える教育改革の推進」が示され、平成24（2012）年6月5日、「大学改革実行プラン」が公表されました。我が国の急激な少子高齢化の進行、地域社会の衰退、グローバル化の進展に伴うアジアの新興国の台頭など、厳しい社会情勢のなか、全国の国立大学は改革を実行することが強く求められています。特に地方の国立大学は「地域社会を変革するエンジン」となることに、大きな期待が寄せられています。

平成25（2013）年11月の「国立大学改革プラン」では、山口大学の研究水準、教育成果、産学連携等に関する客観的な根拠資料に基づき、各学部・研究科の社会的役割を再確認する、所謂「ミッションの再定義」を行いました。平成26（2014）年4月、「ミッションの再定義」で明らかとした強みや特色を活かし、大学改革加速期間（平成26年度から平成27年度）に教育研究組織再編及びガバナンス改革等を推進するため、4つの改革の基本戦略からなる「山口大学改革プラン」を策定し、そのなかで、「国際総合科学部」の創設を掲げました。

4つの改革の基本戦略

① ミッションの再定義を踏まえた強み・特色を活かした教育研究の機能強化
② 新学部を核とした全学的なグローバル化の推進と大学独自の学生評価の実施
③ 学部・研究科の壁をなくした柔軟な教育研究組織の構築
④ 外部有識者を活用した大学運営ガバナンスの実質的強化

吉田キャンパス

国際総合科学部・国際総合科学科の創設
（入学定員100名、収容定員400名）

山口大学では、創基200周年を迎える平成27（2015）年4月に、9番目の学部となる「国際総合科学部」を創設します。国際総合科学部は、人文社会科学系及び自然科学系の知識並びに実践的能力を兼ね備えた新しいタイプの人材を養成します。学部の基本設計をディシプリン（専門分野）からアウトカム（養成する人材）に転換し、文理融合型教育を行うとともに、デザイン思考による「課題解決能力」と日本語のみならず英語を駆使した「コミュニケーション能力」を身につけた人材育成を目的としています。

そのため、「短期語学研修」及び「1年間の海外留学」を実施します。「短期語学研修」では、海外留学前の英語の知識・運用力を高めると同時に、異文化に対する感受性及び社会的意識を養い、「1年間の海外留学」では、高度な英語力を修得し、国際感覚及び異文化理解力等を養い、実践的なグローバル化対応能力を涵養します。また、海外留学から帰国後の高年次学生が履修する科目については、大部分を英語で開講します。

4年時には、それまでに修得した知識及び経験を活かした「プロジェクト型課題解決研究」を行い、実社会に存在する課題を解決していきます。1プロジェクト・チームに対して1企業あるいは1地方自治体等が参画し、より実践的な課題解決手法を修得します。

国際総合科学部は、山口県に基盤を置く製造業を中心とする企業のみならず、全国的にも海外事業展開する企業等から要請のある人材を養成していきます。

吉田キャンパス

「明日の山口大学ビジョン2014」の概要
ー地域と共に、時代と共に活きる大学ー

国立大学法人化後10年を経過し、平成27(2015)年は、第2期中期目標期間の最終年度に当たります。同時に、創基200周年を迎えることから、「明日の山口大学ビジョン」を総括し、「山口大学改革プラン」を盛り込んだ「明日の山口大学ビジョン2014」を策定しました。

「明日の山口大学ビジョン2014」は、10年後の2025年の山口大学の姿を、グローバル化を具現した“Diversity University”と規定し、本学が目指すべき方向について示したものです。そこでは、外国人留学生を含む全ての大学人と、地域や産業社会の人々とが、互いの歴史・文化・民族・言語・宗教の違いを超えて、共感・共鳴・協奏できるキャンパスが描かれています。

「教育」では、学生と教職員が一体となり、“共育”する大学をつくっていきます。「課題探究力」や「チャレンジ精神」等の「人間力」を備え、「国際理解力」と「高い専門能力」を持つ人材育成を行い、社会の高い評価を受けるとともに、在学生や卒業生及び留学生の「誇り」と「信頼」を受ける大学を目指します。

「研究」では、専門分野での学問の深化と、分野間の連携・協力で行う協奏的な研究により、人間、社会、自然などの総合的理解を進める研究、21世紀の課題解決を目指す研究、新たな社会価値を創成する研究を推進し、研究の国際化と地域発イノベーション創出を目指します。

「社会連携」では、地域の基幹総合大学として、また、アジア・太平洋圏において独自の特徴を持つ大学に深化することにより、教育・研究の成果を広く社会に提供するとともに、地域社会や国際社会との連携をかたちにして、地域創生の核となることを目指します。

道（吉田キャンバス）

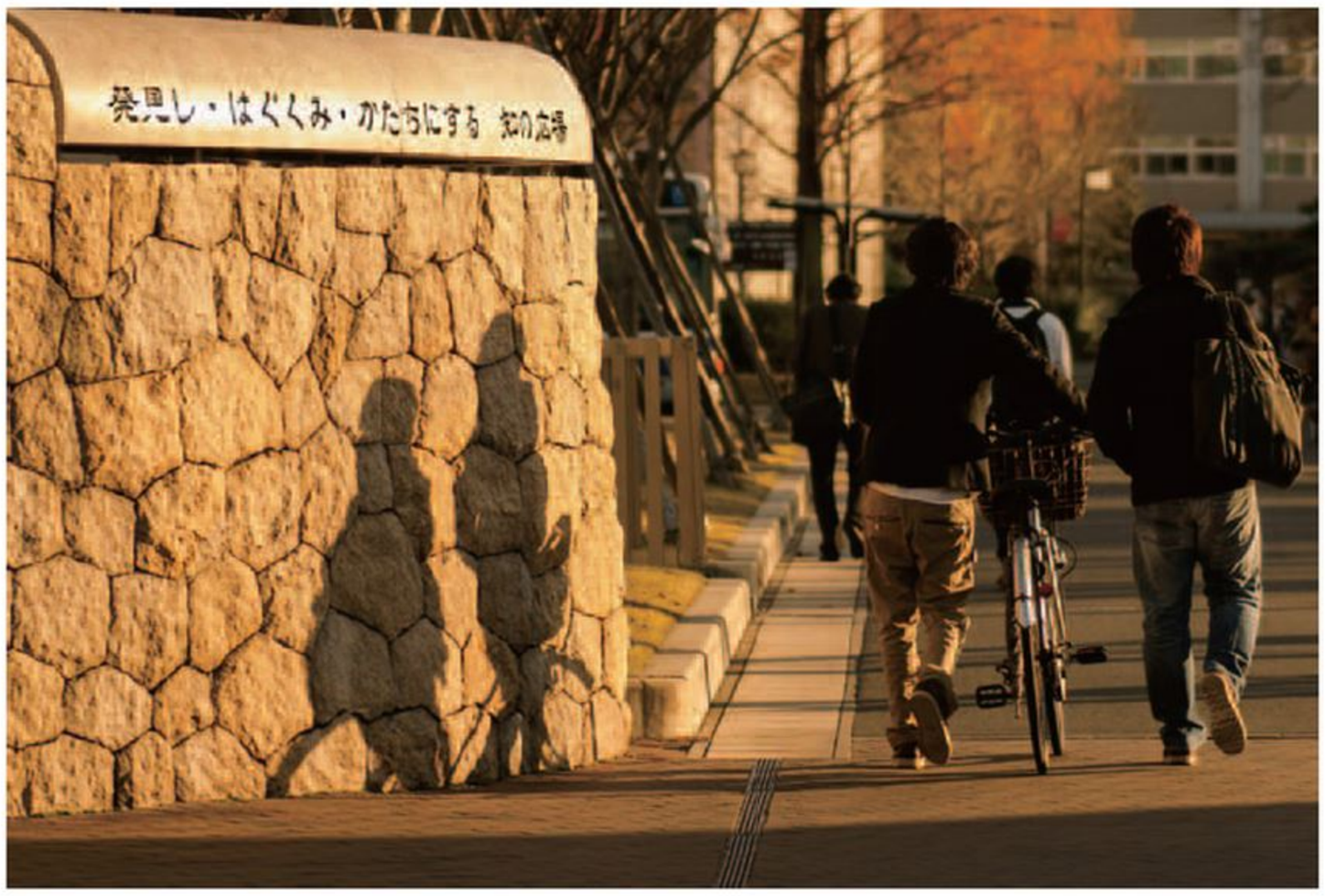
2

写真集「山大なう」

フォトコンテスト「写真で残そう! 山大なう」より

本コンテストは、山口大学創基200周年を記念して、2011年から2014年にかけて3回にわたって開催した。創基200周年を迎える山大の“今”をみなさんに伝えよう! これからの100年に向けて“今”を残していこう! と、山口大学の在学生、教職員、卒業生、関係者に呼び掛けて、後世に残したい山口大学の“今”の写真を募集したところ、第1回目に157点、第2回目に108点、第3回目に101点、合計366点の作品が応募された。

ここでは、多数の応募作品の中から、「道」「建物」「季節」等をテーマに、山口大学の“今”を表現する作品をピックアップして紹介する。



今日の風（吉田キャンパス）

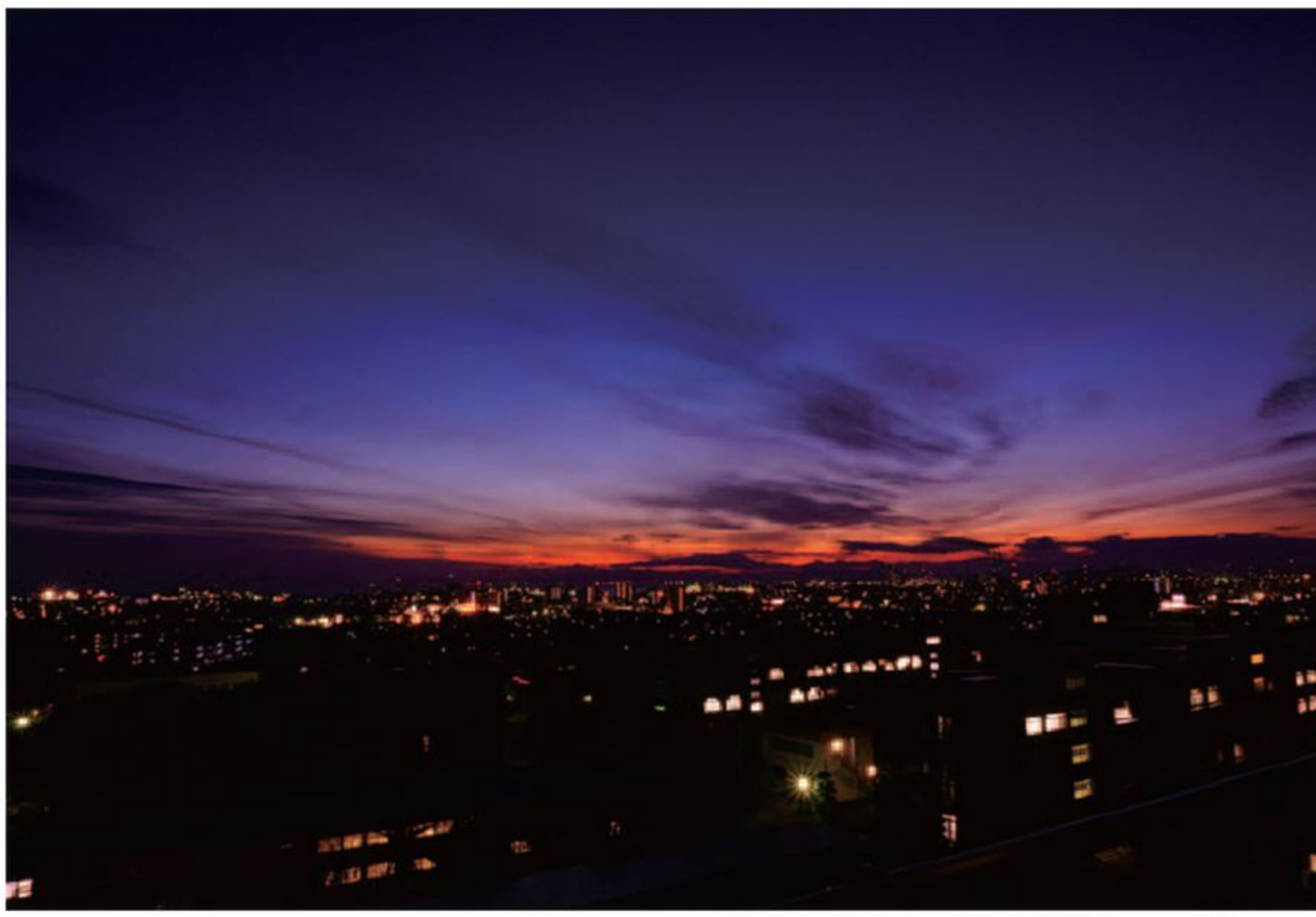
それぞれの放課後（吉田キャンパス）

光の道（吉田キャンパス）

秋冬の「山大」（吉田キャンパス）

僕たちが見てるよ（吉田キャンパス）

夏のある日（吉田キャンパス）



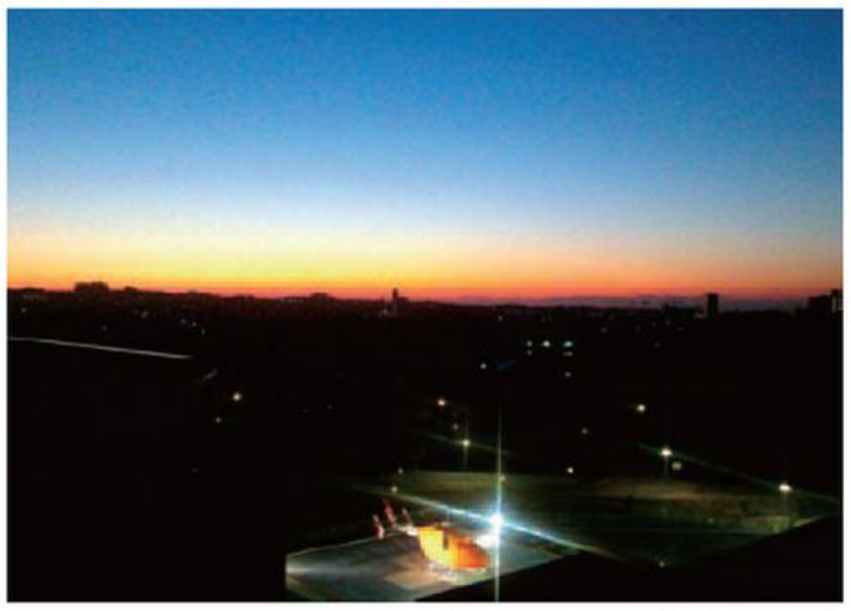
常盤キャンパスから望む昼と夜の境界線（常盤キャンパス）

野球場と東アジア研究科·経済学研究科校舎(吉田キャンパス)

夏の総合研究棟(小串キャンパス)

夜の白翔館(小串キャンパス)

冬の一枚(吉田キャンパス)



明け方の宇部市内とドクターヘリ(小串キャンパス)

夕方のグラウンド(吉田キャンパス)

病棟と外来診療棟(小串キャンパス)

誰もいない放課後（吉田キャンパス）

秋の総研棟（吉田キャンパス）

2012年 常盤キャンパス（常盤キャンパス）

異文化交流（吉田キャンパス）

図書館と桜（吉田キャンパス）

とある風景（吉田キャンパス）

春の夢（常盤キャンパス）

桜のせせらぎ（吉田キャンパス）

大学会館前の桜（吉田キャンパス）

春の風景（吉田キャンパス）

なつのなかにわ（附属光中学校）

一輪のハス（吉田キャンパス）

体育館横の紅葉（吉田キャンパス）

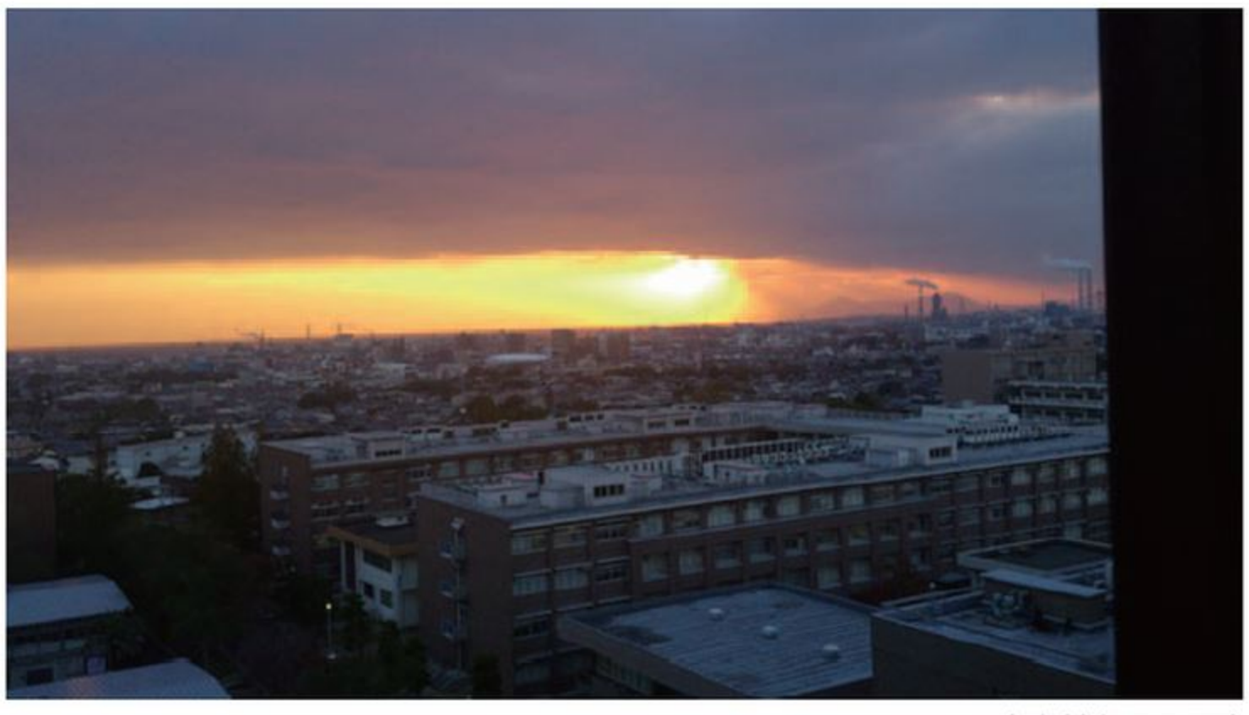
銀杏が映える秋の空（吉田キャンパス）

金色の秋（吉田キャンバス）

真冬の剪定（吉田キャンバス）

雪道（常盤キャンバス）

SnowMan in Gravitation（吉田キャンバス）



初冬（常盤キャンバス）

春へ（吉田キャンバス）

Summer Love（吉田キャンパス）

ドクターヘリ出動2（小串キャンパス）

このまちと（吉田キャンパス）

After the Rain（常盤キャンパス）

木の椅子（吉田キャンパス）

老駒I（吉田キャンバス）

共育の丘の記念プレート（吉田キャンバス）

空飛ぶ自転車（吉田キャンバス）

雪の中の雄姿（小串キャンバス）

猫ちゃん（吉田キャンバス）

架け橋（吉田キャンバス）

スポーツしよう! 体育会（吉田キャンバス）

黄昏のR-B（常盤キャンバス）

ガンバレ!! 国試お見送り風景（小串キャンバス）

成長（常盤キャンバス）

3

学長インタビュー

山口大学のめざすもの

山口大学長 **岡 正朗**

インタビュアー

新井 道子

（エフエム山口アナウンサー／山口大学卒業）

― 山口大学は私の母校でもありまして、今日は、学長であり母校の大先輩でもある岡学長にお話をうかがうということで、たいへんうれしく思っています。学長、今日はたいへんすてきなファッションですが、シャツの胸元についているこのキャラクターは……。

山口大学のキャラクター「ヤマミィ」です。山大をより身近に感じてもらおうと作成されたキャラクターで、さまざまなグッズに登場しています。

― さて、今年4月に山口大学第13代の学長に就任されて、生活は変わられましたか?

以前は外科医としての仕事が主でしたが、それができなくなったということがいちばん大きな変化ですね。そのかわり、吉田キャンパスに移って多くの学生と接するようになりました。今、とても新鮮な気持ちで日々を過ごしています。

― 就任に当たって、県内の市長、町長さんに会われたとか。

はい。県内の首長さんのところにご挨拶に行き、学生を山口県の中で育てたい、市町に飛び出して学習をさせていきたい、とお話ししてきました。山口大学を、「山口県にある大学」ではなくて「山口県の大学」にしたいと思うからです。

―「山口県にある大学」ではなく「山口県の大学」。どう違うのでしょう?

地域の皆さんに、本学が山口県にとって必要な大学だと思っていただくということです。それには地域連携が非常に重要です。また、山口大学の卒業生は地元への就職率が意外にも高くないのですが、卒業後、地元でも力を発揮できる人材を育てたいと思っています。

― 学長は本学の卒業生でもいらっしゃいますが、学生時代はいかがでしたか?

悲惨でしたよ(笑)。私が入学したときは学生運動がたいへん激しい時代で、授業をあまり受けられませんでしたから。しかし社会に対する若者の反発が表に出た時代であり、学生たちに共感する部分もあったと思います。

― 一方、今の学生さんをどのようにお感じになりますか?

「知の広場」という学術講演の場で、1年生に講義をする機会がありました。そのとき、学生のレポートを400枚くらい読んだのですが、たいへん「ピュア」なものを感じました。9割くらいの学生が「自分も一生懸命勉強しなればいけないと思う」とか「人のために役立つ人間になりたい」といったことを書いているのですね。このようなピュアな心をもった学生の白いキャンバスに、4年間でどのような絵を描かせていくか、学長としての責任を強く感じました。

― そのような学生に向けて入学式でおっしゃったのが、「ここで輝け! 君が輝け!」という言葉。とても印象に残りました。

入学式では、「山大スピリット」についてもお話ししました。「山大スピリット」とは「共同・共育・共有の精神」です。あわせて人間力とチャレンジ精神を持つ人材を育てることが本学の使命と考えています。

— 山口大学は、2015年に創基200周年を迎えます。今、どのような想いを抱いていらっしゃいますか?

私自身、学生のときは大学の歴史をよく知りませんでした。しかしいろいろ勉強してみると、長い歴史のある素晴らしい大学だなということを強く感じています。多くの学生からも「誇りをもって学びたい」という言葉が出てきています。「奢り」ではなく、「誇り」。山口大学生であるという誇りを忘れず、成長していってほしいと願っています。

— 創基200周年に向けては、数々の取り組みが進行中ですね。

まず、「ホームカミングデー」というのを始めました。これは卒業生や大学にゆかりのある方をキャンパスにお招きし、学生がお迎えするもので、今年は10月4日(土)に行う予定です。パネルディスカッションのほか、楽しいイベントも予定しています。

また記念事業として「山口大学基金」を創設し、広く寄附を集めています。基金の目的の一つは、経済的に苦しい中で学んでいる学生の支援、もう一つは、山口大学の学生を海外に留学させ、海外からの留学生を山口大学に迎えるための支援です。海外からの「アジアの風」と山口の「維新の風」が混ざり合う、そんなキャンパスができればいいなと思います。

— 新学部の開設など、今後予定されている計画もありますね。

今は大学が変革を求められている時代です。さまざまな国の人たちが日本に来るようになり、宗教や文化などいろいろなものが変わっていく。その中で、大学には新たな役割が求められています。また少子高齢化の中で、広く世界から学生を集めるということも必要になってくるでしょう。当然、大学のグローバル化は避けて

通れません。

そうした変化に対応するため、「国際総合科学部」の新設を計画しています。いま申請中で、許可されれば来年4月からスタートします。

この国際総合科学部の特徴は、学生に1年間の留学を義務づけることです。すでに学生100人以上についての受け入れ先を確保しました。一方で、海外から100人の留学生を受け入れます。この学部で育成したいのは、「課題解決型」人間です。地域での実習や海外での経験を通して学び、海外と日本、企業と他の企業、市町と他の市町を結びつけることができる、コーディネーターのような人材。また科学部としているように、理系の授業も文系の授業も受ける、そういう文理融合型の人材の育成を目指します。これは全国的にも先進的な取り組みで、これによって生まれる人材に、大いに期待を寄せています。山口大学にはこれまでも「東アジア研究科」など、海外を視野にいたさまざまな取り組みを行ってきた歴史があります。その意味でも、山口大学の特徴を最大限に活かせる構想ではないかと私は思っています。

— 山口大学の特徴というお話が出ましたが、なかでも「これが強みだ」と思われるものは何でしょうか?

やはり「総合大学」だということでしょうね。現在8学部9研究科があり、学生数は1万を超え、国立大学法人中、16位ぐらいの規模です。文系から理系まで、いろいろなタイプの先生がいることから、学際的な教育というか、フレキシブルな教育ができます。

一方、大学においては研究もたいへん大事な使命です。たとえば私は医学部ですが、医学の分野だけで研究ができるという時代は、もう終わっていて、工学部や農学部などと一緒に行う研究が重要な位置を占めています。獣医学部のある国立大学は非常に少ない中で、本学には鹿児島大学との共同獣医学部があります。医学部と獣医学部の連携を強くするなかで、いろいろなことができるはずです。このような総合大学の強みを活かしていけば、人材育成と研究、そして地域貢献において、成果を上げることができるはずです。

山口大学は各学部が分散していますが、むしろだからこそ、それぞれの学部が独自性をもって発展してきた、と言うこともできます。

— それでは最後に、岡学長が、学長というお立場から山口大学にかけるお気持ちを伺いたいと思います。漢字一字で表すとすると、何でしょうか?

私は山口大学が大好きなのです。ですから、やはり「愛」、愛情の「愛」ですね。

これからも「山口県の大学」として、学生、卒業生、地域の方など多くの人々に、山口大学の「愛」を伝えていきたいと思います。

— 今後の山口大学に期待しています。

(平成26(2014)年6月4日実施)

創基200周年、
そして、未来へ。

200th
Anniversary
Yamaguchi University

「山口に学問所を」という上田鳳陽の想いに源を発した山口大学の歴史。
江戸、明治、大正、昭和、そして平成まで歩んできた道のりには、常に、高等教育の灯を山口にともそうと、心をくだき、力を注ぐ人々がいた。時代の移り変わりや教育の改革とともに、学問の内容は変遷を重ねてきたが、200年にわたって受け継がれてきた「志」は、いつの時代も変わることなく、さらに遠くを照らしている。今ここから、未来に向かって、地域の基幹総合大学として山口大学の新しい歴史が刻まれる。

資料編

年表

年	主な事項
1719（享保4）	萩藩6代藩主毛利吉元、萩に明倫館を創建（1.12） 創立時、似閑本多数を伝写する（山口県立図書館に現存）
1769（明和6）	上田茂右衛門（鳳陽）、萩藩の下級藩士宮崎猪兵衛在政の三男として生まれる
1779（安永8）	毛利重就、滝鶴台の建白をもとに明倫館の仕法をあらため、文武興隆・人材抜擢をはかる（3）
1800（寛政12）	上田鳳陽、明倫館に入学（11） 9年間在学
1815（文化12）	上田鳳陽、山口講堂設立（4.15） 藩主斉熙、氷上山興隆寺参詣の途中、山口講堂における門弟18名の勉学を視察（4.19）
1816（文化13）	上田鳳陽、萩明倫館に再入学（8）
1840（天保11）	村田清風、明倫館の拡充を藩主に建言
1845（弘化2）	山口講堂を山口講習堂と改称（1）
1848（嘉永元）	村田清風、明倫館再興用掛となる（9）
1849（嘉永2）	明倫館萩江向へ拡張移転（2） 萩南苑の医学所を明倫館に移し、済生堂と改称
1850（嘉永3）	医学所済生堂を好生館と改称、新築落成（6）
1853（嘉永6）	上田茂右衛門（鳳陽）没（85歳）（12.8）
1858（安政5）	萩明倫館より島田清吉・平田源吾の両名を山口講習堂へ教育掛として派遣（8）
1859（安政6）	山口講習堂の稽古方経費を明倫館の経費より支出（1） 明倫館助教山県半蔵を山口講習堂へ派遣して諸事を統率させる（明倫館の管轄下へ組み込まれる）
1860（万延元）	藩の学制改革に伴い、山口講習堂で洋式銃陣の操錬を実施する（1.12） 山口講習堂に練兵場を新設する（8） 山口講習堂を藩政府の直轄とし、その教官は明倫館助教と兼任し、総てを明倫館の学制によることになる（11）

年	主な事項
1861（文久元）	明倫館直轄後初の山口講習堂稽古式（1.12） 山口講習堂を中川原から亀山の東麓（長山）へ拡充・移転（9） 11月より授業開始 明倫館内の好生堂を萩瓦町に新築移転。好生堂あとに博習堂を移す
1863（文久3）	大村益次郎が明倫館兵学寮総官・教授として山田顕義等普門寺塾（別名三兵塾）生に対し士官教育を行う 山口講習堂を山口明倫館と改称。従来の明倫館を萩明倫館に（11.26） 山口講習堂での小学教育を制度化、教諭役高橋真作宅を藩が借り上げ開校。後、山口県師範学校敷地に移転
1864（元治元）	山口明倫館文学寮を本学寮・漢学寮の二部に分ける（7） 萩明倫館内の洋学館博習堂を山口博習堂と合併（7） 山口明倫館の学業・訓練中止（10.25） 山口明倫館兵学寮を萩に移す（11） 山口明倫館廃止（12.12）
1865（慶応元）	一旦廃業となった、山口明倫館文学寮所管の小学舎を再開。山口町奉行の所管とし士庶の別なく入学を許可する（3） 山口明倫館復興（4） 毛利敬親父子、山口明倫館で文武研修の要を訓示（5） 高禄の士の子弟教育のため山口明倫館に学舎を特設（成器塾）（11）
1866（慶応2）	文学寮歩兵塾騎兵塾砲兵塾小学舎諸会定日を定める（1.18） 兵学寮三兵学科塾規則を定める（1.23） 成器塾を拡張しその教育は世子元徳の親裁と定める（3.22） 山口明倫館の経費、年額米2千石と定める（12.8）
1867（慶応3）	諸郡に郷校を設置（4） 郷校を明倫館に附属させる 萩明倫館50周年記念祭を山口明倫館で行う（5.25）
1868（明治元）	鷹司淳丸・壬生胤丸、山口明倫館成器塾で修学（3） 長崎から英語通訳伊藤弥次郎を招き、山口明倫館兵学寮に英学科を新設（6） 明倫館を文学・兵学の2寮にわける

年	主な事項
1869（明治2）	明倫館の小学規則などを制定し学制を改革する（1）
1870（明治3）	中小学規則の公布により萩明倫館を萩中学に、山口明倫館を山口中学と改める（11.13） 諸郡の郷校を小学と改称、山口中学の管轄になる 仏人クローゼにより仏学の講義（8）
1871（明治4）	山口中学に独人ベルリンを雇いドイツ学伝習所を開設する（2.10） 山口中学に外国人教師英人ダルネー夫妻を招請する（11）
1872（明治5）	大学所定中小学規則に準拠し本校学科過程改正案を定める（3） 山口・萩・岩国・豊浦の4変則中学を設立 文部省布達13号をもち従来旧藩の学校は廃止。山口中学は学規改更のため一旦停止する（9）
1873（明治6）	4変則中学を廃し、山口変則小学・萩変則小学を設立
1874（明治7）	山口・岩国に教員試験所を開設 山口教員養成所及び同付属小学を設置 山口・萩両変則小学を鴻城学舎・巴城学舎とする
1875（明治8）	鴻城学舎・巴城学舎を毛利家の私立とする
1877（明治10）	山口県教員養成所を山口県師範学校と改称
1878（明治11）	山口白石に山口栽培試験場開設 鴻城学舎を私立山口中学校、巴城学舎を同萩分校と改称
1880（明治13）	県下を5学区に分け、岩国・徳山・山口・豊浦・萩に県立中学校を設置 山口県、私立学校条例制定
1882（明治15）	山口県教育会設立
1883（明治16）	山口県中学校諸則の制定 農学校通則公布 山口栽培試験場内に農事講習会を開設
1884（明治17）	萩・豊浦・徳山・岩国の4中学校を山口中学校の分校に 山口県師範学校に女子師範学科を設置 防長教育会の設立（毛利元徳らの主唱） 山口栽培試験場内に獣医講習会を開設

年	主な事項
1885（明治18）	山口県師範学校を山口師範学校と改称 農事講習所を廃し、山口農学校開校 獣医学科設置
1886（明治19）	山口師範学校を山口県尋常師範学校と改称 山口中学校を山口高等中学校とし、文部省の所管とする
1889（明治22）	鴻城義塾創設
1890（明治23）	山口農学校を大内村氷上に移転
1894（明治27）	「高等学校令」公布（高等中学校を高等学校に改称・改組） 山口高等中学校を山口高等学校と改称
1895（明治28）	山口農学校を山口県農学校と改称 防長教育会経営の山口学校を尋常中学校に
1898（明治31）	山口県尋常師範学校を、山口県師範学校と改称
1901（明治34）	山口県農業学校を山口県立農業学校と改称
1902（明治35）	私立山口県教育会設立
1905（明治38）	山口高等学校を山口高等商業学校に改称 防長女子教育会の創立
1910（明治43）	県立農業学校を小郡に移転
1912（明治45）	山口県教育会、私立防長教育博物館を設置
1914（大正3）	県立室積工業学校を廃し、山口県室積師範学校創設（4） 山口県師範学校を山口県山口師範学校と改称（4）
1915（大正4）	山口県山口師範学校に農業教員養成所を附設（4）
1916（大正5）	山口高等商業学校に支那貿易講習科設置（4）
1917（大正6）	山口高等商業学校東亜経済研究会発足（2） 機関誌「東亜経済研究」創刊（5）
1918（大正7）	支那貿易講習科を支那貿易科と改称
1919（大正8）	官立山口高等学校を創設（4）

年	主な事項
1920(大正9)	山口高等学校を山口糸米に新築移転(9) 山口県山口師範学校を山口県師範学校、山口県室積師範学校を山口県女子師範学校と改称(4) 山口県女子師範学校に山口県家事裁縫科教員養成所を併設(4) 山口県立農業学校に山口県農業教員養成所を附設(6)
1921(大正10)	山口県農業教員養成所を山口県立実業補習学校農業科教員養成所と改称(4) 山口県女子師範学校に山口県立女子実業補習学校教員養成所を併置(4)
1923(大正12)	山口県立農業学校を山口県立小郡農業学校と改称(4)
1933(昭和8)	山口高等商業学校東亜経済研究所発足(4)
1935(昭和10)	山口県立実業補習学校農業科教員養成所を山口県立青年学校教員養成所と改称(4) 山口県立女子実業補習学校教員養成所を山口県立女子青年学校教員養成所と改称(4)
1939(昭和14)	官立宇部高等工業学校設置(5) 山口県立小郡農業学校に第二部獣医科を設置(4) 山口県立女子青年学校教員養成所を防府市に移転(10)
1940(昭和15)	官立宇部高等工業学校を常盤台新校舎に移転(4)
1941(昭和16)	山口県立青年学校教員養成所を防府市に移転、女子部と併合(4)
1943(昭和18)	山口師範学校が官立となる(4)
1944(昭和19)	山口県立山口高等獣医学校を小郡に設置(1) 官立宇部高等工業学校を官立宇部工業専門学校と改称(4) 山口県立医学専門学校を設立(4) 官立山口青年師範学校の創設(防府市)(2) 山口高等商業学校を山口経済専門学校と改称(4)
1945(昭和20)	山口県立山口高等獣医学校を山口県立山口獣医畜産専門学校と改称(3)
1946(昭和21)	食糧危機のため、山口高等学校の夏季休暇を40日間延長する(9)

年	主な事項
1947(昭和22)	山口県立医科大学の設置が許可され、予科の開設(6)
1948(昭和23)	山口県立山口獣医畜産専門学校が下関市長府に移転(12)
1949(昭和24)	山口大学発足 (文理・教育・附属学校・経済・工学・農学・附属図書館)(5.31) 初代学長松山基範着任(6.1) 本部仮事務室を経済学部内に設置(7.12) 第1回入学式(7.15) 山口大学学則制定(8.24) 開学式挙行(於経済学部講堂)(11.5)
1950(昭和25)	「山口大学学報」第1号発刊(2.21) 山口高等学校廃止(3.31) 開学記念式(於経済学部講堂)(6.1) 開学記念祭(11.2-12) 山口市主催、山口大学後援の学都祭挙行(12.1-5)
1951(昭和26)	山口師範学校・山口青年師範学校・山口経済専門学校・宇部工業専門学校廃止(3.31)
1952(昭和27)	山口獣医畜産専門学校廃止(3.31) 農学部附属農場開場(11.1)
1953(昭和28)	第1回卒業式(於経済学部講堂 3.28) 教育学部附属防府高等学校廃止(3.31) 大学本部を経済学部構内から新道庁舎に移転(6.26) 初の学長選挙により松山基範氏学長就任(7.1) 農学部附属家畜病院設置(8.1) 工業短期大学部併設(機械科・工業化学科)(8.1) 学生健康相談所開設(教育学部時雍寮内)(9.11) 学生相談室開設(経済学部校内)(11.16)
1954(昭和29)	経済学専攻科・経済学部高等学校商業教員養成課程設置(4.1) 創立5周年記念祭(6.1-3) 文理学部が山口市糸米から後河原に移転 (8.27) 湯川秀樹博士学術講演(12.30)
1955(昭和30)	教育学部時雍寮1棟焼失(2.28)
1957(昭和32)	教育学部光分校廃止(3.31)
1958(昭和33)	故松山基範学長大学葬(2.4)

年	主な事項
1958（昭和33）	工学部電気工学科・工学専攻科設置（4.1） 工学専攻科設置（機械工学専攻、鉱山学専攻、工業化学専攻、土木工学専攻）（4.1） 田中晃学長就任（6.14）
1959（昭和34）	農学専攻科（農学専攻・獣医学専攻）設置（4.1）
1960（昭和35）	教育学部防府分校廃止（3.31） 鈴木大拙公開講演会（教育学部講堂）（10.21）
1962（昭和37）	工学専攻科に電気工学専攻科設置（4.1） 市川禎治学長就任（6.14）
1963（昭和38）	工学部生産機械工学科設置（4.1）
1964（昭和39）	山口県立医科大学を移管して医学部設置（4.1） 教育学部教育専攻科設置（4.1） 工学部鉱山学科を資源工学科と改称（4.1） 第162回評議会において平川地区に統合移転を決定（9.9）
1965（昭和40）	第1回山口大学名誉教授称号授与式（3.23） 工業短期大学部電気科増設（4.1） 経済学部創立60周年記念式（於経済学部講堂）（12.10）
1966（昭和41）	文理学部を改組して教養部設置（4.1） 大学院工学研究科設置（4.1） 工学専攻科廃止（4.1） 教育学部養護学校教員養成課程設置（4.1） 教育学部附属幼稚園設置（4.1） 工業短期大学部土木科増設（4.1） 統合移転用地買収完了（4.30） 農学部移転完了（10.25）
1967（昭和42）	教養部移転完了（3.31） 農学部農芸化学科設置（4.1） 大学院医学研究科設置（4.1） 大学院工学研究科生産機械工学専攻設置（4.1） 医学部附属病院設置（6.1） 医学部附属看護学校、医学部附属衛生検査技術学校設置（6.1） 吉田遺跡調査団発足（6.8）
1968（昭和43）	福利厚生施設として白石荘開設（2.15） 山口県立医科大学・大学院廃止（3.31） 文理学部移転完了（10.24） 事務局、学生部移転完了（11.2）

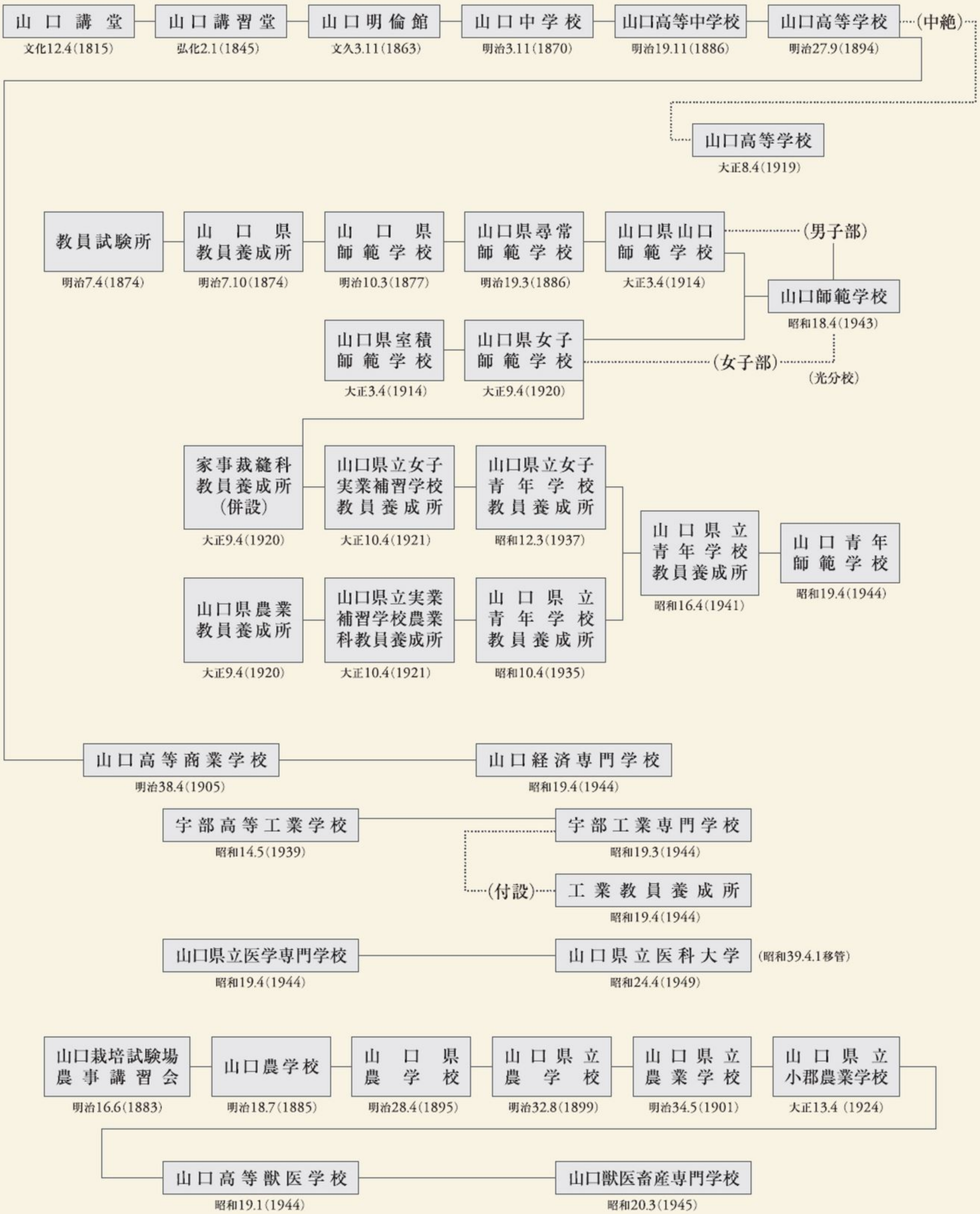
年	主な事項
1969（昭和44）	農学専攻科廃止（3.31） 工学部化学工学科設置（4.1） 大学院農学研究科（農学専攻、獣医学専攻）設置（4.1） 工業短期大学部学科制となる（4.1） 「山大広報」第1号発刊（12.15）
1970（昭和45）	附属図書館落成式（3.10） 理学専攻科設置（4.1） 保健管理センター設置（4.17）
1971（昭和46）	一部学生による本学学長室及び事務局長室占拠（2.23-3.21） 大学院農学研究科農芸化学専攻設置（4.1） 力武一郎学長就任（4.1） （吉田地区）放射性同位元素総合実験室設置（4.13）
1972（昭和47）	山口大学電子計算機室設置（3.14） 文学専攻科設置（4.1） 教育学部移転完了（8.4）
1973（昭和48）	経済学部移転完了（1.13） 中村正二郎学長就任（4.1） 山口大学統合移転記念式挙行（11.18）
1974（昭和49）	工業短期大学部情報処理工学科増設（4.1） 医学部創立30周年記念式（於渡辺翁記念館）（11.22）
1975（昭和50）	教育学部幼稚園教員養成課程設置（4.1） 工学部電子工学科設置（4.1） 大学院経済学研究科（経済学専攻）設置（4.1） 教員養成百周年記念式典（10.19）
1976（昭和51）	大学院工学研究科化学工学専攻設置（4.1）
1977（昭和52）	埋蔵文化財資料館竣工（3.28） 経済学部国際経済学科設置（4.1） 故中村正二郎学長大学葬（12.19）
1978（昭和53）	小西俊造学長就任（3.1） 文理学部を改組して、人文学部、理学部設置（6.17）
1979（昭和54）	大学院工学研究科電子工学専攻設置（4.1） 教育学部附属養護学校設置（4.1） 山口大学創立30周年記念式典（於経済学部大講義室）（6.1） 医療技術短期大学部設置（10.1）
1980（昭和55）	山口大学標章（シンボルマーク）制定（4）

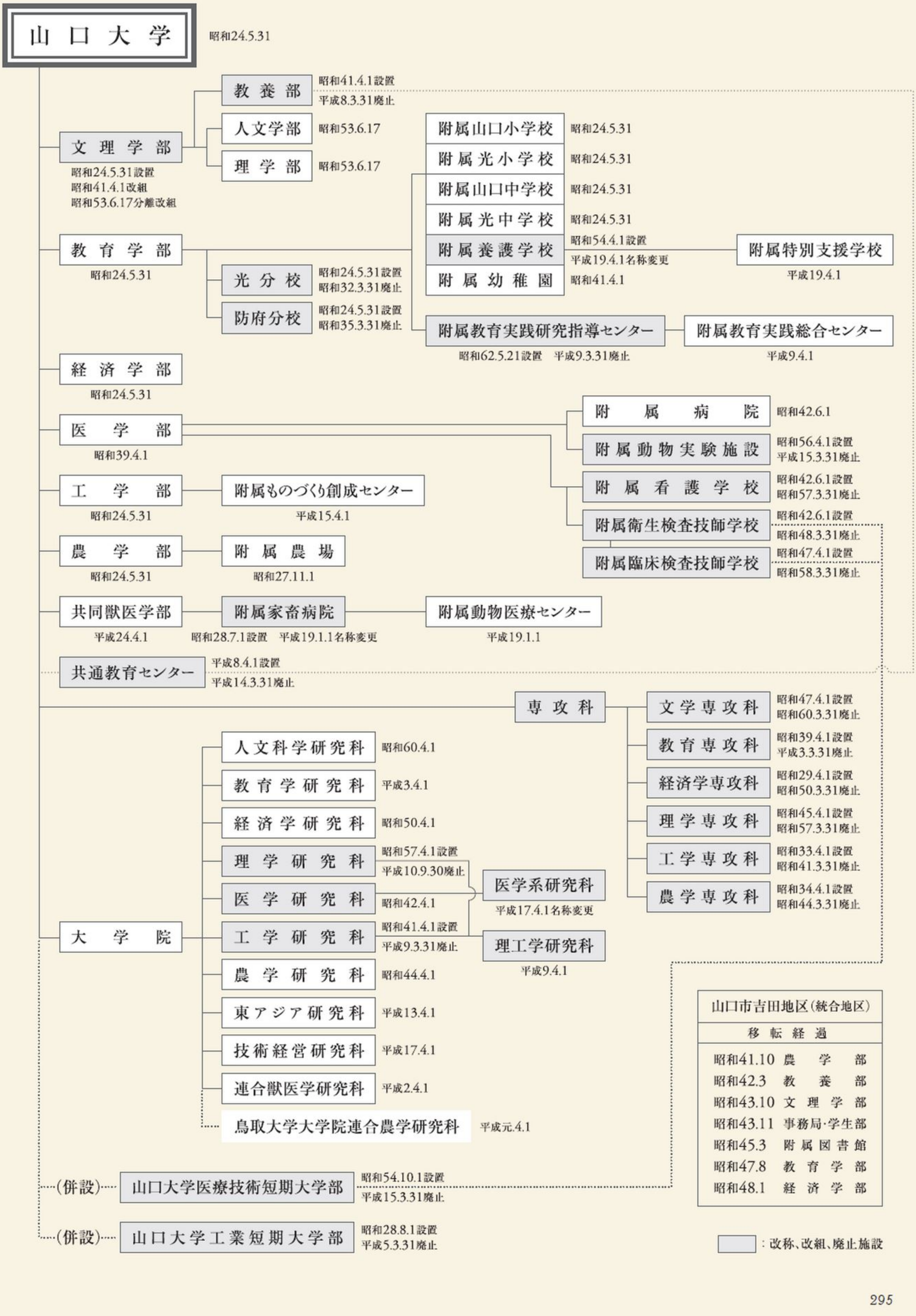
年	主な事項
1980（昭和55）	経済学部経済法学科設置（4.1） 工学部建設工学科設置（4.1）
1981（昭和56）	医学部附属動物実験施設設置（4.1） 情報処理センター設置（7.28） 山東大学から初の交換留学生来学（12.23）
1982（昭和57）	医学部附属看護学校廃止（3.31） 理学専攻科廃止（3.31） 電子計算機室廃止（3.31） 大学院理学研究科設置（4.1） 山口大学30年史発行（12.1）
1983（昭和58）	医学部附属臨床検査技師学校廃止（3.31） 山口大学と山東大学との学術交流協定締結（6.2） 工業短期大学部創立30周年記念碑除幕式並びに記念植樹（8.1）
1984（昭和59）	大学院工学研究科建設工学専攻設置（4.1） 粟屋和彦学長就任（5.16） 医学部創立40周年記念式典（9.23）
1985（昭和60）	文理学部廃止（3.31） 大学会館設置（4.1） 第1回大学院人文科学研究科入学式（4.25）
1986（昭和61）	旧制山口高等中学校創設100周年記念会（大学会館）（9.10）
1988（昭和63）	国際交流会館設置（4.1）
1989（平成元）	教育学部総合文化教育課程設置（4.1） 鳥取大学大学院連合農学研究科に参加（4.1） 山口大学創立40周年記念巡回講演会（11.7-29萩市、下関市、岩国市、宇部市、山口市）
1990（平成2）	大学院農学研究科獣医学専攻廃止（3.31） 大学院連合獣医学研究科設置（4.1） 三分一政男学長就任（5.16） 工学部全学科及び工業短期大学部、大学院工学研究科を改組（10.1） 工学部の全学科及び工業短期大学部改組（10.1）
1991（平成3）	大学院教育学研究科設置（4.1） 地域共同研究開発センター設置（4.12）
1992（平成4）	機器分析センター設置（4.10）

年	主な事項
1992（平成4）	週休2日制の施行に伴う週5日授業の導入（5.12）
1993（平成5）	工業短期大学部廃止（3.31） 人文社会学科、言語文化学科を設置（4.1） 村上惠学長就任（5.16）
1994（平成6）	遺伝子実験施設設置（6.24） 「医心館」開館記念式（9.14） 医学部創立50周年記念式典（11）
1995（平成7）	理学部の全学科改組（4.1） 総合情報処理センター設置（4.1） 大学院経済学研究科企業経営専攻設置（4.1） 経済学部「商品資料館」竣工記念式（4.26）
1996（平成8）	教養部廃止（3.31） 工学部感性デザイン工学科設置（4.1） 共通教育センター設置（4.1） 廣中平祐学長就任（5.16） 「山口大学おもしろプロジェクト」初の公募開始（9.1） ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー設置（9.10）
1997（平成9）	附属教育実践総合センター設置（4.1） 理学研究科と工学研究科を理工学研究科に改称（4.1） 附属図書館の日曜開館実施（4.1） 第1回大学院理工学研究科入学式（4.21）
1998（平成10）	大学院理工学研究科環境共生工学専攻（博士課程）（独立専攻）設置（4.1）
1999（平成11）	山口大学同窓会連合の結成（1） 山口大学50周年記念誌発行（3） 山口大学創立50周年記念式典（4.23） イコール・パートナーシップ委員会発足（5.11） 第2学生食堂竣工記念式典（12.1）
2000（平成12）	時間学研究所開設（4.1） 医学部保健学科設置（10.1）
2001（平成13）	東アジア研究科新設（4.1） アドミッションセンター設置（4.25） 総合研究棟（吉田）竣工記念式典（11.28）
2002（平成14）	メディア基盤センター、大学教育センター、留学生センター、産学公連携・創業支援機構設置（4.1） 加藤紘学長就任（5.16）

年	主な事項
2003（平成15）	医療技術短期大学部の廃止(3.31)
2003（平成15）	ビジネスインキュベーション施設、総合科学実験センター、知的財産本部、工学部附属ものづくり創成センター、エクステンションセンター設置（4.1）
2004（平成16）	新しいシンボルマーク・シンボルカラーの制定（1.5） 国立大学法人化（4.1） 国際センター（4.1）
2005（平成17）	大学院技術経営研究科（MOT専門職大学院）新設（4.1）
2006（平成18）	「開放授業」開始（4） 長州五傑記念碑除幕式（4.26） 「大学コンソーシアムやまぐち」設置（5.31） 丸本卓哉学長就任（5.16）
2007（平成19）	動物医療センター改称・改修記念式典（1.5） 「山口大学憲章」制定（2.15） 「山口大学まんじゅう」発売（3.2）
2008（平成20）	「明日の山口大学ビジョン」策定（2） 事務局1号館改修（3） 山口大学東亜経済研究所竣工（5.14）
2009（平成21）	山口大学ブランド「純米大吟醸長州学舎」誕生（3.9） 常盤女子寮竣工（3.23）
2010（平成22）	工学部創立70周年記念式典（1.22） 「共育の丘」およびモニュメント「Gravitation」設置（4） 東アジア研究科・経済学研究科棟が設置（5） 放送大学と包括的連携協力に関する協定を締結（11.15）
2011（平成23）	山口県ドクターヘリ運用開始（1.21） 吉田寮1号棟の改修完了（3.29）
2012（平成24）	共同獣医学部創設（4.1） 第1回創基200周年記念基幹シンポジウム開催（6.1） 研究推進戦略室（URA）設置（6.1） 手術支援ロボット「ダヴィンチ」を医学部附属病院に導入（8.29） 山口大学マスコットキャラクター「ヤマミィ」初登場（11.22） 第2回創基200周年記念基幹シンポジウム開催（12.5）
2013（平成25）	第1回山口大学ホームカミングデーを開催（11.23） 第3回創基200周年記念基幹シンポジウム開催（11.30）
2014（平成26）	総合図書館増築・改修竣工記念式典（3.18） 山口講堂跡記念碑除幕式（3.25） 岡正朗学長就任（4.1） 第2回山口大学ホームカミングデーを開催（10.4） 第4回創基200周年基幹シンポジウム開催（10.4）

沿革


山口講堂
文化12.4(1815)
山口講習堂
弘化2.1(1845)
山口明倫館
文久3.11(1863)
山口中学校
明治3.11(1870)
山口高等中学校
明治19.11(1886)
山口高等学校
明治27.9(1894)
(中絶)
山口高等学校
大正8.4(1919)
教員試験所
明治7.4(1874)
山口県教員養成所
明治7.10(1874)
山口県師範学校
明治10.3(1877)
山口県尋常師範学校
明治19.3(1886)
山口県山口師範学校
大正3.4(1914)
(男子部)
山口師範学校
昭和18.4(1943)
(光分校)
山口県室積師範学校
大正3.4(1914)
山口県女子師範学校
大正9.4(1920)
(女子部)
家事裁縫科教員養成所(併設)
大正9.4(1920)
山口県立女子実業補習学校教員養成所
大正10.4(1921)
山口県立女子青年学校教員養成所
昭和12.3(1937)
山口県農業教員養成所
大正9.4(1920)
山口県立実業補習学校農業科教員養成所
大正10.4(1921)
山口県立青年学校教員養成所
昭和10.4(1935)
山口県立青年学校教員養成所
昭和16.4(1941)
山口青年師範学校
昭和19.4(1944)
山口高等商業学校
明治38.4(1905)
山口経済専門学校
昭和19.4(1944)
宇部高等工業学校
昭和14.5(1939)
宇部工業専門学校
昭和19.3(1944)
(付設)
工業教員養成所
昭和19.4(1944)
山口県立医学専門学校
昭和19.4(1944)
山口県立医科大学
(昭和39.4.1移管)
昭和24.4(1949)
山口栽培試験場農事講習会
明治16.6(1883)
山口農学校
明治18.7(1885)
山口県農学校
明治28.4(1895)
山口県立農学校
明治32.8(1899)
山口県立農業学校
明治34.5(1901)
山口県立小郡農業学校
大正13.4 (1924)
山口高等獣医学校
昭和19.1(1944)
山口獣医畜産専門学校
昭和20.3(1945)


山口大学
昭和24.5.31
文理学部
昭和24.5.31設置
昭和41.4.1改組
昭和53.6.17分離改組
教養部
昭和41.4.1設置
平成8.3.31廃止
人文学部
昭和53.6.17
理学部
昭和53.6.17
教育学部
昭和24.5.31
光分校
昭和24.5.31設置
昭和32.3.31廃止
防府分校
昭和24.5.31設置
昭和35.3.31廃止
附属山口小学校
昭和24.5.31
附属光小学校
昭和24.5.31
附属山口中学校
昭和24.5.31
附属光中学校
昭和24.5.31
附属養護学校
昭和54.4.1設置
平成19.4.1名称変更
附属特別支援学校
平成19.4.1
附属幼稚園
昭和41.4.1
附属教育実践研究指導センター
昭和62.5.21設置　平成9.3.31廃止
附属教育実践総合センター
平成9.4.1
経済学部
昭和24.5.31
医学部
昭和39.4.1
附属病院
昭和42.6.1
附属動物実験施設
昭和56.4.1設置
平成15.3.31廃止
附属看護学校
昭和42.6.1設置
昭和57.3.31廃止
附属衛生検査技師学校
昭和42.6.1設置
昭和48.3.31廃止
附属臨床検査技師学校
昭和47.4.1設置
昭和58.3.31廃止
工学部
昭和24.5.31
附属ものづくり創成センター
平成15.4.1
農学部
昭和24.5.31
附属農場
昭和27.11.1
共同獣医学部
平成24.4.1
附属家畜病院
昭和28.7.1設置　平成19.1.1名称変更
附属動物医療センター
平成19.1.1
共通教育センター
平成8.4.1設置
平成14.3.31廃止
専攻科
文学専攻科
昭和47.4.1設置
昭和60.3.31廃止
教育専攻科
昭和39.4.1設置
平成3.3.31廃止
経済学専攻科
昭和29.4.1設置
昭和50.3.31廃止
理学専攻科
昭和45.4.1設置
昭和57.3.31廃止
工学専攻科
昭和33.4.1設置
昭和41.3.31廃止
農学専攻科
昭和34.4.1設置
昭和44.3.31廃止
大学院
人文科学研究科
昭和60.4.1
教育学研究科
平成3.4.1
経済学研究科
昭和50.4.1
理学研究科
昭和57.4.1設置
平成10.9.30廃止
医学研究科
昭和42.4.1
工学研究科
昭和41.4.1設置
平成9.3.31廃止
医学系研究科
平成17.4.1名称変更
理工学研究科
平成9.4.1
農学研究科
昭和44.4.1
東アジア研究科
平成13.4.1
技術経営研究科
平成17.4.1
連合獣医学研究科
平成2.4.1
鳥取大学大学院連合農学研究科
平成元.4.1
(併設)
山口大学医療技術短期大学部
昭和54.10.1設置
平成15.3.31廃止
(併設)
山口大学工業短期大学部
昭和28.8.1設置
平成5.3.31廃止
山口市吉田地区(統合地区)
移転経過
昭和41.10 農学部
昭和42.3 教養部
昭和43.10 文理学部
昭和43.11 事務局・学生部
昭和45.3 附属図書館
昭和47.8 教育学部
昭和48.1 経済学部
：改称、改組、廃止施設

組織

平成26年5月1日現在

- 学長
  - 役員会（学長及び理事5名）
  - 経営協議会
  - 教育研究評議会
- 監事（2名）
- 内部監査室
- 事務局
  - 学生支援部
    - 教育支援課
    - 学生支援課
    - 入試課
  - 学術研究部
    - 研究推進課
    - 産学連携課
  - 情報環境部
    - 学術情報課
    - 情報推進課
  - 企画戦略部
    - 企画・評価課
    - 国際・地域連携課
  - 総務部
    - 総務課
    - 学長室
    - 創基200周年事業推進課
    - 広報課
    - 人事課
  - 財務部
    - 財務課
    - 経理課
    - 契約課
  - 施設環境部
    - 施設企画課
    - 施設整備課
- 学部
  - 人文学部 — 事務部
  - 教育学部 — 事務部
    - 附属教育実践総合センター
    - 附属山口小学校
    - 附属光小学校
    - 附属山口中学校
    - 附属光中学校
    - 附属特別支援学校
    - 附属幼稚園
  - 経済学部 — 事務部
  - 理学部 — 事務部
  - 医学部 — 事務部
    - 附属病院
    - 総務課
    - 経営管理課
    - 学務課
    - 医事課
  - 工学部 — 事務部
    - 附属ものづくり創成センター
    - 総務企画課
    - 技術経営研究科企画事務室
    - 会計課
    - 学務課
  - 農学部 — 事務部
    - 附属農場
  - 共同獣医学部 — 事務部
    - 附属動物医療センター
- 大学院
  - 人文科学研究科
  - 教育学研究科
  - 経済学研究科
  - 医学系研究科
  - 理工学研究科
  - 農学研究科
  - 東アジア研究科
  - 技術経営研究科
  - 連合獣医学研究科（構成大学 山口大学・鳥取大学・鹿児島大学）
- 全学教育研究施設
  - 大学教育機構
    - 大学教育センター
    - アドミッションセンター
    - 学生支援センター
    - 保健管理センター
    - 留学生センター
  - 大学研究推進機構
    - 産学公連携センター
    - 知的財産センター
    - 総合科学実験センター
    - 研究推進戦略部
  - 大学情報機構
    - 図書館
    - メディア基盤センター
    - 埋蔵文化財資料館
  - 時間学研究所
- 大学評価室
- 地域連携推進センター

鳥取大学大学院連合農学研究科（構成大学　鳥取大学・島根大学・山口大学）

歴代学長

初代
松山 基範
昭和24年5月31日 ～
昭和33年1月27日

2代
田中 晃
昭和33年6月14日 ～
昭和37年6月13日

3代
市川 禎治
昭和37年6月14日 ～
昭和44年3月31日

4代
力武 一郎
昭和46年4月1日 ～
昭和48年3月31日

5代
中村 正二郎
昭和48年4月1日 ～
昭和52年12月4日

6代
小西 俊造
昭和53年3月1日 ～
昭和59年3月1日

7代
粟屋 和彦
昭和59年5月16日 ～
平成2年5月15日

8代
三分一 政男
平成2年5月16日 ～
平成5年5月15日

9代
村上 悳
平成5年5月16日 ～
平成8年5月15日

10代
廣中 平祐
平成8年5月16日 ～
平成14年5月15日

11代
加藤 紘
平成14年5月16日 ～
平成18年5月15日

12代
丸本 卓哉
平成18年5月16日 ～
平成26年3月31日

13代
岡 正朗
平成26年4月1日 ～

名誉教授

平成26年4月1日現在

称号授与年月日	氏　名	所　属
昭40.1.19	米澤　直人	文理学部
昭41.4.26	岡崎　虎雄	文理学部
〃	樋口　誠一	工学部
昭43.5.14	松山　英太郎	工学部
昭45.4.7	田中　弘道	教養部
〃	山仲　幸夫	教養部
昭45.5.12	上村　幸次	文理学部
〃	池本　喬	文理学部
〃	濱田　清吉	教育学部
〃	田中　晃	文理学部
昭46.5.11	末兼　敏男	農学部
昭47.5.16	小野　晋	文理学部
〃	白木　不二男	教育学部
〃	星出　兵馬	教育学部
〃	小倉　武雄	教育学部
〃	今川　博	工学部
昭48.4.10	力武　一郎	学長
〃	福島　文人	経済学部
昭48.5.8	波根　治郎	教育学部
〃	石黒　秀雄	農学部
昭49.5.14	高橋　英太郎	文理学部
〃	小池　富男	教育学部
昭49.7.24	城　　温三	工学部
昭49.11.12	小畑　龍雄	文理学部
昭50.5.13	小西　那太郎	文理学部
〃	徳久　正敏	文理学部
〃	山本　武夫	教育学部
〃	水田　巖	教育学部
〃	山口　弘孝	医学部
昭50.6.10	安田　充	経済学部
昭50.2.2	不破勝　敏夫	経済学部
昭51.5.11	坪郷　勉	教育学部
〃	徳光　直	教育学部
〃	時政　文雄	教育学部
〃	片山　正夫	教育学部
〃	秋草　實	経済学部
〃	丹生　治夫	医学部
〃	本庶　正一	医学部
昭52.1.18	加々美　一二三	工業短期大学部
昭52.2.15	三瀬　淳一	医学部
昭52.5.10	亀井　定雄	教育学部
〃	野瀬　善勝	医学部
〃	土井　彌太郎	農学部
〃	森津　孫四郎	農学部
昭52.6.14	松岡　利夫	文理学部
〃	真田　正夫	文理学部
昭53.3.14	林　　良二	医学部
昭53.5.9	田中　常正	教育学部
〃	西脇　良三	教育学部
〃	森　　豊幸	教育学部
〃	小野　忠凞	教育学部
〃	中村　敬三	医学部
〃	村田　淳	工学部
〃	最上　幸夫	工学部
〃	吉松　廣延	教養部
昭54.4.10	下瀬　育郎	文理学部

称号授与年月日	氏　名	所　属
昭54.5.8	友近　琢男	教育学部
〃	胡　　豊四	教育学部
〃	木藤　正典	経済学部
〃	上妻　隆榮	経済学部
〃	八牧　力雄	医学部
〃	柴内　大典	農学部
昭55.5.13	松井　良樹	教育学部
〃	河野　通弘	教育学部
〃	森本　宏	教育学部
〃	藤井　義正	教育学部
〃	濱田　峰夫	経済学部
〃	村川　勝彌	工学部
〃	小田　良助	農学部
〃	湯川　敬夫	農学部
昭56.5.12	吉元　勇	教育学部
昭57.5.25	岡村　義彦	教育学部
〃	伊藤　紫朗	教育学部
〃	肱黒　和俊	経済学部
昭58.5.10	渡邊　眞治	人文学部
〃	林　　隆之	理学部
〃	服部　奨	医学部
〃	戸田　光敬	農学部
〃	中山　清次	農学部
〃	細田　勉	農学部
昭59.3.13	小西　俊造	学長
昭59.5.8	長谷　芳美	理学部
〃	藤田　英輔	医学部
〃	柳下　一愛	農学部
昭60.5.14	中野　安久	人文学部
〃	村田　憲太郎	理学部
〃	谷崎　茂俊	理学部
〃	富阪　武士	理学部
〃	大草　喜太雄	工学部
〃	木脇　祐順	農学部
〃	池田　暢幸	教養部
昭61.5.13	小西　秀勇	教育学部
〃	福田　基一	工学部
〃	苣木　浅彦	工学部
〃	吉本　彰	工学部
〃	久保　敏彦	教養部
〃	藤田　信義	教養部
昭62.5.12	岩城　秀夫	人文学部
〃	服部　碩夫	教育学部
〃	藤崎　康雄	理学部
〃	石上　浩一	医学部
〃	小林　俊策	医学部
〃	萩野　正二	工学部
〃	木村　允	工学部
〃	吉野　隆	工学部
〃	村上　允英	教養部
〃	山本　泰男	教養部
昭63.5.10	弥益　祥純	教育学部
〃	石田　裕	教育学部
〃	時弘　義雄	教育学部
〃	真田　元祐	教育学部
〃	西村　久	経済学部

称号授与年月日	氏　名	所　属
昭63.5.10	鳥越　正	医学部
〃	藤井　雄二郎	工学部
〃	佐伯　節夫	工学部
〃	石橋　功	農学部
平1.5.9	藤本　保太	教育学部
〃	水野　恭之	教育学部
〃	鈴木　重靖	経済学部
〃	林　　謙次郎	理学部
〃	竹本　忠良	医学部
〃	青木　秀夫	医学部
〃	宮地　隆興	医学部
〃	矢田部　俊一	工業短期大学部
平2.5.8	中村　徹	教育学部
〃	安部　一成	経済学部
〃	新中　康弘	理学部
〃	黄　　基雄	医学部
〃	百々榮　徳	医学部
〃	梶返　昭二	工学部
〃	早野　延男	工学部
〃	飴山　實	農学部
〃	渡邉　信生	教養部
平2.6.19	粟屋　和彦	学長
〃	武下　浩	医学部
平3.5.14	三浦　肇	教育学部
〃	杉尾　守	教育学部
〃	小嶋　正己	経済学部
〃	澁谷　五郎	理学部
〃	古野　潤治	医学部
〃	酒徳　治三郎	医学部
〃	大原　資生	工学部
〃	岡嶋　昭	教養部
〃	即席　水雄	教養部
〃	横山　永三	教養部
平4.5.12	木下　謙治	人文学部
〃	水本　精一郎	人文学部
〃	佐藤　吏	教育学部
〃	北川　雪恵	教育学部
〃	倉田　吉喜	理学部
〃	松本　徑夫	理学部
〃	竹尾　和典	医学部
〃	藤原　輝男	工学部
〃	田代　忠一	工学部
平5.1.12	関谷　透	医学部
平5.3.31	藤本　稔	工学部
平5.5.11	大塚　博久	教育学部
〃	堂面　春雄	教育学部
〃	徳冨　正義	教育学部
〃	小林　則子	教育学部
〃	和田　章	教育学部
〃	村上　惠	学長
〃	内野　文彌	医学部
〃	梶井　正	医学部
〃	東　　俊雄	農学部
〃	松本　治康	農学部
〃	中間　碩一郎	教養部
平6.5.10	和田　敏英	人文学部

称号授与年月日	氏　名	所　属
平6.5.10	小川　國治	教育学部
〃	渡邉　敬	教育学部
〃	馬渡　淳一郎	経済学部
〃	中西　敬	医学部
〃	日高　照晃	工学部
〃	佐野　雄二	工学部
〃	畑中　顯和	農学部
〃	小林　邦彦	農学部
〃	加藤　敏郎	教養部
平6.9.13	兼子　俊男	医学部
平7.5.9	武宮　諦	人文学部
〃	八木　充	人文学部
〃	門前　貞三	教育学部
〃	板垣　忠	経済学部
〃	三戸　信人	理学部
〃	千葉　喜彦	理学部
〃	西脇　太郎三衛門	理学部
〃	高橋　學	医学部
〃	中西　弘	工学部
〃	松本　昇	医療技術短期大学部
平8.5.14	亀本　敏雄	経済学部
〃	長　　琢朗	医学部
〃	伴　　隆志	医学部
〃	三分一　政男	学長
〃	松田　好晴	工学部
〃	矢野　宏二	農学部
〃	鹿江　雅光	農学部
〃	古賀　秀男	教養部
〃	熊谷　寛次	教養部
〃	柏原　啓佐	教養部
〃	大田　民男	保健管理センター
平9.5.13	内山　俊彦	人文学部
〃	遠藤　徹	人文学部
〃	中野　良弘	教育学部
〃	小杉　健三	教育学部
〃	貞木　展生	経済学部
〃	永倉　勲	経済学部
〃	麻上　千鳥	医学部
〃	齋藤　隆	工学部
〃	島　　敞史	工学部
〃	井手　明雄	農学部
平10.5.19	関　　一雄	人文学部
〃	小川　全夫	人文学部
〃	十川　真弓	教育学部
〃	道廣　泰倫	経済学部
〃	山田　通夫	医学部
〃	瀧本　昭夫	工学部
〃	富田　眞吾	工学部
〃	西岡　道夫	工学部
平11.5.11	佐野　晴夫	人文学部
〃	石井　勇	人文学部
〃	山本　和之	人文学部
〃	皆川　孝志	教育学部
〃	降矢　順治	教育学部
〃	矢野　弘	教育学部
〃	松吉　定男	経済学部

称号授与年月日	氏　名	所　属
平11.5.11	米澤　充	経済学部
〃	座間　紘一	経済学部
〃	中間　實徳	農学部
〃	山本　きよみ	医療技術短期大学部
平11.7.13	伊藤　治英	医学部
平12.5.9	伊東　斌	教育学部
〃	川口　政宏	教育学部
〃	上村　元子	教育学部
〃	小国　信樹	理学部
〃	中澤　淳	医学部
〃	中澤　晶子	医学部
〃	蛯名　良雄	工学部
〃	平井　隆	工学部
〃	高浪　五男	工学部
〃	土屋　晉	工学部
〃	中尾　光延	工学部
〃	井上　武	農学部
平13.5.8	石井　大	人文学部
〃	秋山　泉	教育学部
〃	増田　正勝	経済学部
〃	原　　哲彦	理学部
〃	加屋野　洋	理学部
〃	江里　健輔	医学部
〃	幡中　憲治	工学部
〃	會田　忠義	工学部
〃	沖田　豪	工学部
〃	末岡　修	工学部
〃	柴田　浩	農学部
平13.11.13	篠崎　文彦	医学部
平14.5.14	畑地　正憲	人文学部
〃	片山　壽男	理学部
〃	三好　哲彦	理学部
〃	山本　惺史	理学部
〃	山岡　郁雄	理学部
〃	徳力　幹彦	農学部
〃	高橋　進	農学部
平14.6.18	廣中　平祐	学長
平14.10.8	唐津　邦利	教育学部
〃	友永　進	医学部
〃	西澤　義矩	工学部
〃	西口　毅	農学部
平15.5.13	松本　正男	人文学部
〃	近藤　喬一	人文学部
〃	林　　恒徳	教育学部
〃	金田　道和	教育学部
〃	及川　順	経済学部
〃	名畑　恒	経済学部
〃	岩田　允夫	理学部
〃	久保田　幸雄	理学部
〃	西村　祐二郎	理学部
〃	中尾　勝實	工学部
〃	水田　義明	工学部
〃	日下　達朗	農学部
〃	足立　収生	農学部
〃	大西　堂文	農学部
平16.5.18	重岡　徹	教育学部

称号授与年月日	氏　名	所　属
平16.5.18	齋藤　正彦	教育学部
〃	横山　省三	教育学部
〃	岡村　豊太郎	教育学部
〃	河合　洋祐	教育学部
〃	平野　充好	経済学部
〃	森松　光紀	医学部
〃	米田　純子	医学部
〃	宮本　政英	工学部
〃	塩月　善晴	工学部
〃	粟井　郁雄	工学部
〃	中岡(田畑)睦雄	工学部
〃	柏木　孝夫	工学部
〃	後藤　誠史	大学院医学研究科
平17.4.1	今田　淳	教育学部
〃	星出　一巳	教育学部
〃	米谷　雅之	経済学部
〃	南　　正義	経済学部
〃	吉村　弘	経済学部
〃	志磨　裕彦	理学部
〃	田澤　輝武	理学部
〃	長谷部　勝彦	理学部
〃	沖田　極	医学部
〃	岩田　隆子	医学部
〃	溝田　忠人	工学部
〃	岡本　健一	工学部
〃	中川　浩二	工学部
〃	梶原　忠彦	農学部
平18.4.1	坂手　恭介	経済学部
〃	岡光　一浩	人文学部
〃	伊豆　大和	人文学部
〃	吉賀　將夫	教育学部
〃	宮崎　擴道	教育学部
〃	中村　幸士郎	教育学部
〃	田代　直人	教育学部
〃	野波　健彦	教育学部
〃	下和田　功	経済学部
〃	飯石　一明	理学部
〃	遠藤　克彦	理学部
〃	福本　哲夫	医学部
〃	河野　俊一	工学部
〃	竹中　俊介	工学部
〃	大佐々　邦久	工学部
〃	山口　静馬	工学部
〃	小倉　興太郎	工学部
〃	池田　攻	工学部
〃	松浦　満	工学部
〃	加藤　昭夫	農学部
〃	谷口　仁	農学部
〃	萬場　光一	大学院連合獣医学研究科
平18.5.16	加藤　紘	学長
〃	河合　伸也	医学部
平19.4.1	靏岡　昭夫	人文学部
〃	田中　晉	人文学部
〃	三好　洋二	教育学部
〃	熊谷　信順	教育学部
〃	堂野　佐俊	教育学部

称号授与年月日	氏　名	所　属
平19.4.1	増田　勉	教育学部
〃	河津　清	教育学部
〃	藤原　貞雄	経済学部
〃	中尾　訓生	経済学部
〃	杉原　美一	大学院理工学研究科
〃	大城　紀代市	大学院理工学研究科
〃	棚田　嘉博	大学院理工学研究科
〃	浮田　正夫	大学院理工学研究科
平20.4.1	奥津　聖	人文学部
〃	岩本　光悦	教育学部
〃	古川　浩	教育学部
〃	来島　浩	教育学部
〃	西山　壯一	農学部
〃	早川　誠而	農学部
〃	石原　得博	大学院医学系研究科
〃	内藤　克輔	大学院医学系研究科
〃	東　　玲子	大学院医学系研究科
〃	佐々木　義明	大学院理工学研究科
〃	井上　透	大学院理工学研究科
〃	濵田　純夫	大学院理工学研究科
〃	大坂　英雄	大学院理工学研究科
平21.4.1	平山　豊	人文学部
〃	添田　建治郎	人文学部
〃	橋本　寛	経済学部
〃	古賀　大三	農学部
〃	甲斐　一成	農学部
〃	早崎　峯夫	農学部
〃	那須　哲之	農学部
〃	福本　陽平	大学院医学系研究科
〃	坂部　武史	大学院医学系研究科
〃	古川　漸	大学院医学系研究科
〃	君波　和雄	大学院理工学研究科
〃	加藤　崇雄	大学院理工学研究科
〃	井上　克司	大学院理工学研究科
〃	福政　修	大学院理工学研究科
〃	中村　安弘	大学院理工学研究科
〃	刈谷　文治	大学情報機構
平21.7.21	塚原　正人	大学院医学系研究科
平22.4.1	村田　秀一	大学院理工学研究科
〃	小嶋　直哉	大学院理工学研究科
〃	尼川　創二	人文学部
〃	小谷　典子	人文学部
〃	外山　英昭	教育学部
〃	森田　俊介	教育学部
〃	長谷川　光圀	経済学部
〃	柳澤　旭	経済学部
〃	松冨　直利	農学部
〃	滝本　晃一	農学部
〃	阿部　憲孝	大学院医学系研究科
〃	神谷　晃	大学院医学系研究科
〃	清　　俊夫	大学院医学系研究科
〃	山田　治	大学院医学系研究科
〃	安藤　良文	大学院理工学研究科
〃	小宮　克弘	大学院理工学研究科
〃	加納　隆	大学院理工学研究科
〃	栗山　憲	大学院理工学研究科

称号授与年月日	氏　名	所　属
平22.4.1	三好　正毅	大学院理工学研究科
〃	和田　憲造	大学院理工学研究科
〃	古川　浩平	大学院理工学研究科
〃	田中　稔	大学院理工学研究科
平22.4.1	酒井　義郎	大学院理工学研究科
〃	平田　牧三	大学教育機構
平23.4.1	豊澤　一	人文学部
〃	池田　幸夫	教育学部
〃	原　　純一郎	大学院理工学研究科
〃	ヒギンズ マイケル レオ	大学院理工学研究科
平24.4.1	丸本　卓哉	学長
〃	西田　輝夫	大学院医学系研究科
〃	瀧口　治	経済学部
〃	吉田　一成	教育学部
〃	中村　友博	人文学部
〃	辻　　正二	人文学部
〃	貞方　昇	教育学部
〃	福田　廣	教育学部
〃	名島　潤慈	教育学部
〃	渡邊　正	教育学部
〃	山田　次郎	教育学部
〃	上杉　信敬	経済学部
〃	進藤　晴夫	農学部
〃	青島　均	大学院医学系研究科
〃	佐々木　功典	大学院医学系研究科
〃	中村　彰治	大学院医学系研究科
〃	芳原　達也	大学院医学系研究科
〃	前川　剛志	大学院医学系研究科
〃	松﨑　益徳	大学院医学系研究科
〃	日野田　裕治	大学院医学系研究科
〃	髙橋　睦夫	大学院医学系研究科
〃	野口　三千彦	大学院医学系研究科
〃	増山　博行	大学院理工学研究科
〃	相原　正樹	大学院理工学研究科
平25.4.1	三池　秀敏	大学院理工学研究科
〃	田中　誠二	人文学部
〃	藤井　大司郎	経済学部
〃	糸原　義人	農学部
〃	松下　一信	農学部
〃	梅田　昭子	大学院医学系研究科
〃	服部　幸夫	大学院医学系研究科
〃	松田　昌子	大学院医学系研究科
〃	河野　道生	大学院医学系研究科
〃	久田見　守	大学院理工学研究科
〃	田頭　昭二	大学院理工学研究科
〃	大石　勉	大学院理工学研究科
〃	田中　正吾	大学院理工学研究科
平26.4.1	西村　順子	教育学部
〃	深田　三夫	農学部
〃	林　　俊春	共同獣医学部
〃	中村　和行	大学院医学系研究科
〃	井上　裕二	大学院医学系研究科
〃	中山　則昭	大学院理工学研究科

山口大学創基200周年記念誌編纂部門委員

編纂部門長

副学長(学術情報担当)	纐　纈　　厚	(平成23年5月27日～平成24年3月31日)
副学長(学術情報担当)	山　内　直　樹	(平成24年4月 1日～)

編纂部門委員

人文学部 准教授	下　嵜　正　利	(平成23年5月27日～)
教育学部 教授	荒　木　一　視	(平成23年5月27日～)
経済学部 教授	木　部　和　昭	(平成23年5月27日～)
理学部 教授	村　上　柳太郎	(平成23年5月27日～)
医学部 教授	中　村　和　行	(平成23年5月27日～平成26年3月31日)
医学部 教授	玉　田　耕　治	(平成26年4月 1日～)
工学部 教授	中　倉　英　雄	(平成23年5月27日～)
農学部 教授	荊　木　康　臣	(平成23年5月27日～)
共同獣医学部 准教授	平　岡　博　子	(平成24年5月 1日～平成24年12月31日)
共同獣医学部 助教	谷　口　雅　康	(平成25年1月 1日～)
医学部附属病院 教授	井　上　裕　二	(平成23年5月27日～平成26年3月31日)
医学部附属病院 教授	谷　澤　幸　生	(平成26年4月 1日～)
東アジア研究科 教授	福　田　隆　眞	(平成23年5月27日～)
技術経営研究科 教授	稲　葉　和　也	(平成23年5月27日～)
大学教育機構 准教授	林　　寛　子	(平成23年5月27日～)
大学研究推進機構 教授	長　畑　　実	(平成23年5月27日～)
情報環境部 部長	酒　井　清　彦	(平成23年5月27日～平成25年3月31日)
情報環境部 部長	石　橋　英　二	(平成25年4月 1日～)
総務部 部長	大　島　敏　行	(平成23年5月27日～平成24年3月31日)
総務部 部長	中　禮　裕　己	(平成24年4月 1日～平成26年3月31日)
総務部 部長	川　畑　廣　史	(平成26年4月 1日～)

あとがき

山口大学創基200周年記念誌は創基200周年記念事業の一貫として企画されたもので、平成23年7月に開催された第1回編集室会議において記念誌編纂基本方針が策定され、同年8月に開催された山口大学創基200周年記念事業企画・実施部会にて基本方針が了承された。その後、平成23年11月には各部局委員と編集室会議構成員を中心とした第1回山口大学創基200周年記念誌編纂部門委員会が開催され、記念誌の編纂方針と編纂スケジュールについて承認された。記念誌は電子版も同時に作成し、平成26年の12月刊行を目指して作業をすることとなった。

記念誌の基本コンセプトは、比較的コンパクトで読み物として面白味があり、加えて、大学史としての体裁も整えることとした。また、タイトルは『「志」つなぎ 伝える 二百年』となり、その構成は視覚的な要素を重視し、図表や写真を多く取り入れることとなった。

記念誌の内容は三部構成となっており、第1部の「志」では本学卒業生である作家の古川薫氏による大学時代の思い出を綴った特別寄稿や、山口講堂の創設から新制大学の誕生までの軌跡をたどっている。歴代学長による座談会では第8代学長から現13代学長の出席のもと、山口大学において200年に亘って受け継がれてきた「志」とは何かを中心に学長時代の苦労話や思い出についても語っていただいた。

第2部の「繋」では学部・大学院や共同利用・共同研究施設の発展について各部局の先生方を中心に、また、同窓会のあゆみでは各部局同窓会の発展等について卒業生の方々に執筆していただいた。なお、校正時には全体としての統一を図るため、ページ数や内容に関して変更をお願いした経緯もあり、この場を借りてご容赦願いたい。

第3部の「伝」では山口大学のこれからをテーマとし、現在の山口大学の姿についてキャンパス内の写真を中心に紹介し、「明日の山口大学ビジョン」をもとに山口大学の目指す将来像を紹介し、さらに、学長インタビューの中で山口大学は何を目指しどこに向かうのかについて岡学長にその思いを語っていただいた。

記念誌の作成に携わる中で、200年前、山口の地において学問を教授し、人材育成の必要性を強く感じた萩藩士、上田鳳陽の思い、そして、その思いを実現すべく藩に学問所の建設を働きかけた努力が実り山口講堂が創設され、今日ある山口大学の礎を築くことになったという歴史の重みを深く感じ取ることができた。また、200年後の今、山口大学に課せられているその使命を考えるとき、地域に貢献する大学としての役割を担うことについてより一層思いを強くした感は否めない。さらに、次年度には新学部である国際総合科学部が設置され、山口大学はグローバル化に対応した人材育成の場としても重要な役割を担うこととなる。これからの山口大学が地域から世界に向け貢献する大学として、さらなる発展を遂げることを期待したい。

記念誌作成にあたり、本来なら資料及び写真を提供していただいた方々のお名前を記して謝意を表すべきであるが、紙面の都合で割愛させていただいた。また、お寄せいただいた写真や原稿の中には編集の都合上掲載できなかったものもある。お詫びするとともに、ご協力に対して深く感謝申し上げる。

最後に、記念誌編纂部門委員会委員および編集室会議構成員各位、執筆していただいた教職員並びに卒業生の皆様方、記念誌のレイアウト等など作成に関わっていただいた大村印刷の記念誌製作チーム各位をはじめとして、記念誌の作成でお世話になったすべての皆様方に対して感謝申し上げる。

平成26年12月吉日

山口大学創基200周年記念誌編纂部門委員会

委員長　山内 直樹

「志」つなぎ 伝える 二百年
山口大学創基200周年記念誌

発行年月　2014年12月
発　　行　国立大学法人 山口大学　〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
編　　集　山口大学創基200周年記念誌編纂部門委員会
企画印刷　大村印刷株式会社　〒747-8588 山口県防府市西仁井令1-21-55

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学